

巻第四

崇光院

○新院 光嚴院。  
 ○陽祿門院 正親町  
 光秀の女秀子。  
 ○花園の上皇のみこ  
 花園院の皇子直仁  
 親王。  
 ○此の御末 花園院  
 の御血統が皇位繼承  
 の望みもなかつたに  
 かく皇太子にお立ち  
 になつたのは望まし  
 く喜ばしい事である  
 ○二條の大臣 藤原  
 良基。  
 ○公賢の大臣 洞院  
 藤原公賢。  
 ○此の事のいそぎ  
 御禰大嘗會の準備。  
 ○にはかに隠れさせ  
 給ひ 南朝正平三年  
 北朝貞和四年十一月  
 崩御。  
 ○物の始め 新帝の  
 御代の始め。  
 ○一院はみこのさま  
 光嚴院が持明院流  
 では花園院の次にお  
 立ちになつたのをい  
 ふ。  
 ○先帝 光明院。

九十八代の御嗣、新院の一の御子にて、御諱興仁と申し奉る。御母は陽祿門院とて、公秀の大臣の御女なり。貞和四年十月に先帝の御譲りを受けさせたまひて、御位に即かせ給ふ。御年十五とかや。やがて花園の上皇のみこぞ春宮に居させ給へる。此の御末の心もとなかりしに、かう定め給へる、いとあらまほしき御事なり。鷹司の大臣のかはり給ひし後は、二條の大臣ぞ關白と聞ゆ。公賢の大臣は、今は太政大臣にぞなり給ふ。やがて御禰大嘗會などあるべしとて、おほやけにも、武家も此の事のいそぎのみにて、今よりはえんくしう、都の内は日頃引きかへて、人々の心ものどやかなるに、花園の上皇にはかに隠れさせ給ひき。常に惱ましうはせさせ給へども、きのふけふとは誰もく思ひかけぬに、時しもこそあれ、物の始めにかかる事のあるをいかならむと、下にさ、めく人も多かりき。一院はみこのさまなりしかば、御服やあるべく思召すに、後伏見院の御事の折、其の儀ありつれば、重ねては有るべからずと、太政大臣などさだめ申させ給ふ。春宮は、又一院の御子になさせ給ひしかば、これも其の儘に坐す。今は昔の新院をば一院と申し奉り、先

○一院 光嚴院。  
 ○芳野殿 後村上夫  
 皇。  
 ○年比といふばかり  
 數年といふ程に月  
 日も経過して。  
 ○まかりちる 離散  
 する。  
 ○めやすく 見苦し  
 からず。  
 ○俊基の辨 藤原種  
 範の子。  
 ○らうくじう 物  
 事に巧者な。  
 ○先帝 後醍醐天皇  
 ○今の上 後村上夫  
 皇。  
 ○よほひ渡りて 戀  
 慕して。  
 ○えもいはず云々  
 譬へやうもない恐ろ  
 しい計畧をして。  
 ○ふて奉る 連れ出  
 す。

帝をぞ新院と申し奉る。すぎさせ給ひし法皇をば萩原院と申し奉りき。猶一院ぞ世の政をせさせ給へば、新院などは、いとどのどやかにて坐す。芳野殿には、かくと聞かせ給ひても、撓まず思召さる、事ありぬべし。今は太山の御住居も年比といふばかりにならせ給へば、心ほそき山風も御耳ならさせ給ふるに、さぶらふ人々もけしからぬ都のてぶりなどを傳へ聞くには、中々かやうの御住居も心やすく思ひなりつ、まかりちるもなかりき。紅葉につけて、折々の御遊びをもせさせ給ひ、うへ人どもに歌などを召しては、御みづからもよませ給ひなどして、めやすくあらまほしけにて過させ給へり。故俊基の辨の御女に辨の内侍と聞えしは、かたちもいとめでたく、心ばへもらうくじう坐しけるに、をさなくて親にもおくれ給ひしかば、先帝殊に哀れなるものに思召して、むつまじう召しつかはせ給ひし、隠れさせ給ひて後は、今の上につかうまつりて給へるを、いかなる玉垂のひまにか見奉りけむ、京なる師直せちによほひ渡りて、玉章の數もかさなりければ、いとめざましき事に思ひて、いらへをだにし給はぬに、思ひ侘びて、今はひたすらにぬすみてるてゆかむと思ひつ、えもいはずむくつけき心がまへをなむしけり。からうじてるて奉るに、道の程にて、正行が召しありて芳野の宮に参るにぞ行きあひける。いとあやふしと見てければ、とめて取りかへして、やがて芳野殿に参りたり。かくと奏し奉れば、上はいみじき者に思召されつ、御氣色よくて、其の儘に内侍をば賜はすべき仰事あるに、正行か



しこまりて奏し奉る。

とても世にながらふべくもあらぬ身にかりの契りをいかでむすばむ

○いかに思召され  
正行が辭退するは  
何故か不審に思召  
された。

○先帝の御墓 後醍  
醐天皇の御陵。

○又の年 正平三年  
○師直が師云々 師  
直の大軍が地も震動  
するばかりに押寄せ  
て来た。

○おきてもうるはし  
弓矢の道の家風も  
傳へ、教訓も嚴正で  
あつただらうか。

○正時 正行の弟。  
○まめやか 忠誠。  
○芳野の上 後村上  
天皇。

上はいかにと思召されしに、後にぞ思召し合はさせ給ひて、いみじう哀れがらせたまひしとかや。十一月ばかりには、又京の師ども河内國にむかはむとて出で立ちたり。正行もさる心がまへどもしつるに、こたびは住吉遠里小野のほとりにていみじう争ひたりしも、正行が軍つよくて、都の兵は引き返しぬ。武家にも今はあなづりにくくや思ひけむ。尊氏が後見なる師直を大將にて、そこばくの兵をひきゐて來るなりと聞えけり。正行はかねてよりのながらへむものとも思はざりしにや、兄弟其の外の者どもを相具して、先づ芳野殿に参り、軍の事ども奏して御いとま聞えつ、又先帝の御墓に詣でまかり申して、今は思ふ事なしとぞ打立ちける。遂に其の年は暮れて、又の年の睦月には、師直が師、地を動かして來れるに、正行が兵は立雙ぶべくもなく僅かなれど、正成が世より弓引く道は又雙ぶかたなき家の風の、今も猶吹きつたへて、おきてもうるはしかりつればにや、百をもて千にかつばかりの勢ひたけて、ともすれば師直が陣破られぬべくあやふきに、とかくうち紛れてしのぐ程、終に正行も正時も同じ様にて失せにけり。正行は二十六とぞ聞えき。父が遺言を違へず、君にもまめやかにつかうまつりしかば、芳野の上もいみじう惜しませ給ひけり。師直は猛き勢ひにつのりて、芳野の上をも京にゐて参らむとて、こなたさまに攻め

○こり集め云々 芳  
野の皇居も名残惜し  
く又これから行くの  
も如何なる處か三種  
種に思ひ亂れて。

○女院 後醍醐天皇  
の後宮新待賢門院。  
○むね／＼しき人  
重だつた人。

○寮の御馬 馬寮に  
飼つてある御馬。  
○我にもあらぬ様  
現心もない有様。  
○賀名生 吉野山中  
天河の奥にある。  
○もとの宮 吉野の  
皇居。  
○つきなく たづき  
なく。不便で。  
○火をさし 放火し  
た。  
○あさみ 嘲ける。  
○芳野の女院 新待  
賢門院。

來るなりと聞ゆれば、隆資の中納言は、上の御前に参りて、車のよし奏し給ひ、やがて爰をもいでさせ給ひ、猶山深く分け入らせ給ふべきにぞ定まりぬ。上も御心のとまるべき御住居にはあらねど、年比といふばかりに住みなれさせ給へば、名残もさすがに思召さる、に、又いかなる住居かはなど、とり集め思召し亂れさせ給ふ。女院、きさいの宮、みこたちなどはあきれまどはさせ給ひて、御心をさめ給ふ人もおはしませず。宮の中もとよりむねむねしき人もなければ、さておはしますべうもなく、なく／＼立出でさせ給ふ。上は寮の御馬に奉れば、内侍璽の御箱などとりてさぶらふ。女院宮々、我にもあらぬ様にて迷ひ出でさせ給へり。夜のほど急がせ給ひ、賀名生といへる處におはしまして、其處に又行宮を造らせ給ひて坐すに、いと心細さ増りて誰も／＼うち歎かせ給ふ。もとの宮は、山里とはいへど、さすがにおもしろき處々も多かりしかば、忍びては行幸などもありて御心ゆく事も侍りし。今の宮はひたすらの奥山といふばかりにて、何のいたり深き事もなき御住居なれば、折々の御遊びさへつきなく思召されつ、いと物さびしけにてぞ過させ給ふ。もとの宮には師直が軍きを参りてどよみつれど、人影もなければ、やがて此の宮に火をさしたるに山風のまぎれに、爰かしこにうつりて、御堂社寺々など残りなく煙となりぬる様、淺ましともいひやらむ方なし。師直が身の末、よき事やはあらむと、時の人あさみあへり。芳野の女院の御方に侍ひける伊賀の局と云へるは、故義貞が兵に篠塚伊賀守



○めやすきもの見  
 苦しからぬ者。  
 ○正儀 正行の弟。  
 ○國々にありし云々  
 諸國に居た南朝の  
 御味方の人々。  
 ○心ゆるび 油断。  
 ○おのがじ、めい  
 めい。  
 ○心をやりて 思ふ  
 存分。  
 ○ない鳥 鳴鳥。  
 ○市女 町に住む女  
 ○いちはやき心 氣  
 早な性質。  
 ○うたへ 訴へ。  
 ○初めこそ云々 初  
 めは直義も心堅くし  
 聴きいれなかつたが  
 後には訴を聽入れて  
 同様に謀った。  
 ○おどり腹 妾腹。

が女になむありける。此の御移ろひの程も、御供にさぶらひけり。をのこをも具せさせ給はず、女どちにて行先もたどしく思召されつ、吉野川にのぞませ給へば、橋の板は一聞ばかりふみ落してありつるにぞ、更に渡らむやうもなきに、此の局松櫻などの枝を引き折りてうち渡しつ、女院人々をも渡し聞えたり。後にぞ上もきかせ給ひて、いとみじうけうぜさせ給ひ、めやすきものや思召されけむ、程へては、正儀の妻にぞなさせ給へり。都には芳野殿も猶深く入らせ給ひ、國々にありし御方人も日にそひて、勢ひ衰へ行くさまなれば、今はさりととも武家にも心ゆるびして、武士どもおのがじ、心をやりて、紅葉の陰には酒をあたゝめ、花の下にはない鳥の聲をかむことをもとめなどしてあるにぞ、都の中もやう／＼事なくなり行きて、市女商人なども身を安うしおきぬべうおほゆるに、又師直は武家の後見にて、世の中の事心にまかせておきてける儘に、いつしか尊氏をさへあなづり聞えて、ねぢけたる事のみ多かりしかば、従ふ者どもも、事にふれて安からず思ひつ、かたへは恨み誇りなどしつるが、何れもむくつけき田舎人のいちはやき心どもにて、何のたよりもなく失はむ事をさへ企てつ、直義にうたへたるに、初めこそ心こはかりつれ、後にはうけ引きて、おなじ事はかり居たり。直冬は尊氏が子なりしかど、おとり腹なればにや、初めよりおとしめ聞えて、むつまじき子のつらにも思はぬを、直義はいとほしがりつ、子になして我が方にぞ置きける。折々弓矢の道にもたづさはらせて、

○其の方もかしこかり 弓矢の道にもす  
 ぐれてゐたから。  
 ○左兵衛督 直義。  
 ○かまへつる 謀つ  
 た事。  
 ○みそかなる云々  
 秘密にしたやうだが  
 ○武藏守 師直。  
 ○心よせの方々 自  
 分の心を寄せる方。  
 ○督が三條の家 三  
 條にある直義の家。  
 ○かすかなるにぞ  
 わびしい家に移り住  
 んだ。  
 ○頭 左馬頭義詮。  
 ○意顯 上杉憲房の  
 子。

試むるに、其の方もかしこかりければ、此の頃は山陰山陽の國々の固めにとて、かしこにぞ差遣はし侍る。左兵衛督がかまへつる事はみそかなるやうなれど早洩れ聞えて、武藏守は弟の河内國に在りけるをも呼びにやりたれば、兵あまたして上りたり。其の外の者も、心よせの方々に参りつどふめり。かかれば京は又さわがしうなれり。されど督が方人は少なくて、武藏守の従ふは多くなむ。尊氏は猶これまでも知らでありけるを、俄に驚きて、まづ督が三條の家に人をやりて、こち渡りぬべくいはせられたれば、やがて参りたり。武藏守は、子なる師夏をも大將になしつ、二手に分れて、東の洞院の尊氏の館を圍みて、鯨波つくとかいふ聲は大空にひゞきたり。爰は内裏にまぢかき程なれば、内にも聞召し驚きて、俄に持明院殿へ行幸なる。上達部など心あわたしう、足を空にて従ひ参り給ふ。いみじう匂りつれど戦はなくて、程なくしづまり侍り。それよりぞ左兵衛督は、世の政をとどめて三條の家にもすまず。錦小路堀川なる處のかすかなるにぞうつろひにけり。よろづ師直が申す旨によりてとぞ聞えし。立ちかはり世の中の事をしたゝめさせむとて、尊氏は子の左馬頭義詮とて鎌倉に在りけるを、急ぎ登るべくいひやりたり。頭は弟の基氏を鎌倉にするて、憲顯といへる者に後見せさせて事行ふべく定め置きて登りぬ。此の度は道の程も心ことに引きつくるひて上るに、都より迎ひの人々は、瀬多の橋の渡りに待ち受けて、そこよりぞ引きつれたり。京に入りける日は、ことさらにきら／＼しきよそひにて、えも



○うつし馬 移鞍即ち唐鞍に換した鞍をおいた馬。  
 ○悦び聞えむ 著京の祝賀を申し述べよう。  
 ○一院 光嚴院。  
 ○おもたしう 面目ある。  
 ○疑ひをはるけむ 疑ひを晴らさう。  
 ○頭をもおろし 剃髪して。  
 ○佐をも 右兵衛佐足利直冬。  
 ○其の國 備後國。

○又の年 貞和六年二月觀應と改元。  
 ○なるふりて 地震があつて。

いはぬうつし馬どもあまた引きつゞけたれば、都人どもは、物見むとて、處せうつどひたり。頓て東の洞院の家に入りぬれば、悦び聞えむとて、きそひ參る人々の馬車は、門の前に隙なく立ちなみたり。一院よりさへ經顯の大納言御使として參りたまへる。いとおもだたしうなむ。左兵衛督は、人の疑ひをはるけむとて、頭をもおろして慧源入道とぞ申し侍る。直冬の右兵衛佐は備後國に在りけるに、師直、佐をも此のついでに亡ほしてむとて、其の國の兵どもにいひ送りければ、俄に二百餘騎の軍を發して打向ふに、佐は思ひかけぬ程にて、從者どもあまた失ひつゞ、其の身もあやふかりしをまぬがれ出でて、船にてぞ筑紫の方に赴き侍り。折しも長月十三夜の月いと明らかなるに、八重の汐路の遙かなる海原に漕ぎ出でたる程、從ふ者もいと心ほそく思へる様にて、歸る浪もうらやましう見やりつ、袖のみぬれ増るにぞ、佐は心ぐるしう思ひて、

梓弓我こそあらめ引きつれて月さへ人に憂きを見せつる

内には大嘗會のこと、去年行はるべく思召されしも、本意なくとまりて、三月にと定めさせ給ひしも、又過ぎ行くにいと心もとなく思召さる。かならず有りぬべき御儀式なれば、武家にも急ぎつゞ、年の内にとぞ定まり侍る。されどおとなくて年も暮れつゞ、又の年の二月には、觀應に改まりぬ。此の年の名よろしからずと申す人侍りしは誠にや、五月二十日頃よりいみじうなるふりて、山も崩れ地も裂さけて、道行く人は倒れ轉びつゞ、

○右兵衛佐 直冬。  
 ○太宰の少貳なるもの頼向。  
 ○方人 味方。  
 ○師泰 師直の弟。

○左馬頭 足利義詮  
 ○武藏守 師直。  
 ○たはやすく 容易に。  
 ○鎧直垂 鎧の下に著る一種の直垂。  
 ○松ぞも たいまつ  
 ○探題 九州探題。國防九州の政務を管する職。  
 ○早馬 早打の乗つた馬。急使の馬。

世は今盡きぬるやと覺ゆばかりなり。内にも院にも、いかならむと思召されつゞ、御占行はせ給へるに、重き御つゞしみの由奏し侍り。右兵衛佐は、去年より筑紫に在りけるに、太宰の少貳なるもの堀になしていつきかしづきつゞ、おのれが館に置きければ、其のわたり國民は残りなく從ひ聞えて、勢ひもいみじうなり侍り。又佐が方人なる三角入道は、石見國にて軍を起しぬと聞えければ、これを滅ほさむとて、水無月末つかた、師泰京を出でて石見かたにぞ赴き侍る。文月初めには美濃國なる土岐の何がしそむきぬると、都に聞えあるに、急ぎ平らぐべしとて、左馬頭みづから出で立ち給ふ。武藏守も兵どもひきゐて從へり。さしもゆゑ、しういひ訃りしかど、たはやすく亡びて二人ばかりからめつゞ、京にて罪に行ふべしとて、ゐて上れり。打立ちにし時は、心もいとあわたゞしかりつれど、歸るさはのどやかによそほしくて、頭は赤地の錦の鎧直垂といふものきたる、いとうるはしき武士姿にて、人がらも若う清けなり。前後に兵ども數を盡して從ひたる、いと頼もしけにぞ見え侍る。暮れはてぬれば、何のあやめもわき難かりしに、松どもともしつれて、宵すぐる程にぞ、洞院の館に入りぬ。やがて内よりは、此の度の悦びとて、參議になさせ給へり。筑紫には今は太宰の大貳もなくて、武家より探題といへるを置きて、西の事をぞした、めさせけり。そこよりの早馬とて、長月の末都に來れり。いかにと問はせたるに、西の國みな右兵衛佐に靡きて、都に心よせの城どもはせめ落されて、國の内いみじう亂れ立



○あさみて 驚き惻  
れて。  
○道譽入道して 道  
譽入道を使として。  
道譽は佐々木高氏。  
○錦小路の入道 入  
道惠源即ち足利直義  
○さりとも云々  
それでもと程かに平  
氣でゐた。  
○はたさし 馬に乗  
つて大將の旗を持つ  
旗手。  
○北の翁のためし  
寒翁の馬の例で吉凶  
何れともわからぬな  
ぞ云つたが。  
○御親なごは 崇光  
天皇の大嘗會及び其  
の前のみそぎ。  
○心に思ふ事 師直  
謀伐をどうかして遂  
げようぞ。  
○四條大納言 隆資

ちぬとぞ告げたりける。人々聞きあさみて、又いかならむと思ひ騒ぎたり。誠に此の度は  
大事なりとて、尊氏みづから下るべきに定まりぬ。師直もまた従へり。やがて道譽入道し  
て、内にかくと奏しければ、御劔御馬を賜はず。御劔は經量取りつぎ給ひ、御馬は康守牽  
きけるを、道譽受けとり奉る。出で立たむ事明日との夜、錦小路の入道いづちともなく  
失せ給ひぬといひ騒ぐに、誰もくやすからぬ事に思ひあへるを、師直のみ、さりともと  
おだしう思ひ居たれば、追ひもとめむともせず打捨てて、人々は急ぎたり。東寺の前打過  
ぐるほど、師直がはたさしなるをのこ、馬より落ちて手などそこなはれぬるにぞ、やがて  
とめてこと人をかはりにはなしけり。北の翁のためしにやといへど、かかる折よからぬ  
事なりと、人々はさ、めきたり。都の固めには義詮をぞ差置きける。かやうの騒ぎに神無  
月も過ぎぬれば、今年も又御禊などはこのびにけり。錦小路の入道は猶弓箭の道すて難く、  
いかで心に思ふ事とけむと、おもふ心深かりければ、さる騒ぎのまぎれに忍びて都を出で  
つゝ、大和の方へ赴きけり。其處にて軍を起さむとはかりけれど、爰なむ芳野殿の御方人  
のみなりしかば、従ひ聞ゆる者のむねくしきもなきにぞ、いかゞはせむと思ひわびて、  
芳野殿にや参らましと思ひよりつゝ、四條大納言につきて、「昔の罪をゆるさせ給ひぬべく  
は、身を捨てても御敵を滅ぼすばかり事をもつかうまつり侍はむ。」と、いみじき詞を盡し  
て歎き申したり。芳野殿には、君も臣もいかゞあらむと定めかねさせ給ふれど、親房の大

○御かうじ 牧助。  
○年歸りて 南朝正  
平六年、北朝親應二  
年。  
○入道 惠源入道足  
利直義。  
○みやこをはからむ  
都を陥れむと計つ  
て。  
○直常 右馬權頭桃  
井直常。  
○はかしくしき者  
一かごの役に立つ位  
の者。  
○引きしぞきたり  
引き退いた。  
○あやしう云々 従  
ふ者が妙に逃げ出し  
て。  
○さうくし 惚々  
し、騒がしい。  
○八幡より 八幡山  
に陣した直義の軍か  
ら。

納言のあながちに申し給ふむねに、君も靡かせ給ひぬれば、御かうじゆるされてこなたに  
つかうまつるべきにぞ定まりける。入道はかく聞きて、いといたうよろこびぬ。年歸りて  
は、いづ方も心のどかなるべきに、いつしかと軍のいそぎのみせらるゝも、又珍らかなる  
世の中ぞかし。陸月初めより、入道みやこをはからむとて、八幡山に上りるけり。直常は  
北の國の固めにてゐたりけるが、入道に心を交して、同じごと都に入るべく急ぎつゝ、老  
いたる駒をしるべに越路の雪をふみわけて、同じ頃坂本に著き侍り。京には去年の立立に  
はかしくしき者はみな従ひ聞えて、人すくななれば堪へがたく思ひて、十五日には、武家  
の人々、西の國へと心がけて落ちたり。直常は其の日ぞ都に入りかはりける。尊氏は去年  
より備後國にありけるに、都より人してかくといはせたりければ、打驚きて歸り上りぬる  
に、道にて京より落ち下る人々にゆき逢ひぬ。やがて其處にて手分けなどして又攻め入る  
にぞ、直常は引きしぞきたり。武家又都の内を守り聞えてあるに、あやしう従ふ者の落ち  
失せつゝ、やうく勢ひの衰へゆくに、せむかたなくて再び都を出でて、西ざまに赴きな  
むとす。かやうにさうくしかりければ、内にも院の御方へ行幸なる。師泰はかかること  
を聞きつけて、石見國より來りぬれば、人々にも西の國まではくだらで、尊氏は師直とと  
もに、津の國のわたりにとゞまり、義詮は丹波路にぞ居たりき。八幡よりはこ、かしこに  
兵をつかはして戦ひをなしけるに、つひには八幡軍打勝ちぬ。負方は其のまゝに、小清水



○人道 惠源人道直義。  
 ○つらなる枝云々 尊氏と直義と兄弟の間柄をいふ。  
 ○あやしき姿 賤しい姿に身のさまをかへて。  
 ○武庫川 攝津國。  
 ○師冬 師直の猶子。  
 ○二條の大臣 藤原良基。  
 ○芳野殿に参りては云々 後村上天皇賀名生にお遷りになつたあきの芳野の皇居其の他寺など放火したこと。  
 ○罪さり處な伊罪の通れようもなく。  
 ○弓矢の道云々 師直は元來武道に携はる筋の人でないのに何特頃から武士になつたか。  
 ○在五中將云々 伊勢物語に出てゐる。

の城に逃げ入りつゝ、誰もく今は限りなりと思ひとりて、此の世の名残惜しむばかりの杯くみかはしたる程、いと心細けなり。八幡にはかくと聞くに、入道もさすがつらなる枝のしたしみも捨てがたく悲しくおほゆるに、淺ましかりし心もうせて、「いとあるまじき事なり、とく都に上り給へ、對面聞えむ。」といひやりたるにぞ、かしこには生き出でたる心地すべし。さらばとて急ぎ上るに、師直は猶うき身の遁れ難きを思ひ侘びて、頭をもおろして、あやしき姿にやつして、人々にうち紛れ從ひ行くに、武庫川の邊にて討ちとむ。師泰そのほかにも師直が類なるは、みな處々にて失はれにけり。此のわたりのみにもあらず、鎌倉にありける師冬といひしも、同じ頃かしこにて亡びてけり。師直は此の年頃ねぢけがましき振舞のみ多くて、二條の大臣の御妹の君をさへ盗み出し奉りたるは、師夏が母上となむ。又芳野殿に参りては、宮をも僧坊をも煙になし奉る様、誠に罪さり處なけに、世の人いひそしりたるもことわりにて、いく程なくかかる事の出で來ぬるも、いとく恐ろしき事に覺え侍る。されど此の人は、弓矢の道などにたづさひぬべきことわりにしもあらぬを、いつれの世よりか、かくはなりけむ。昔の世をいはむには、いとかたじけなき様にぞ侍る。在五中將の狩のつかひにて、伊勢の齋宮に参り給ひしに、夢か現かと聞えさせ給ひし御事によりてなむ、齋宮のうませ給へる御子の御筋なりけりと、承りしは誠にや侍らむ。やうく花の頃にもなりぬれば、芳野の女院は先帝の御陵に詣でさせ給へるに、あ

○宗良親王 後醍醐天皇の皇子、尊澄法親王還俗後宗良親王といはれた。  
 ○ありしにかはらぬ昔の通りの。  
 ○錦の小路の館 直義の家。  
 ○をのこにて云々 生まれたのが男子でさへあるから。あなればはあるなればの響。  
 ○駿河國 駿河國薩埴山で戦つたのである。  
 ○入道は随ひ聞えむ云々 直義は尊氏に随ひ申さうと只管にわびて降参した。  
 ○心地煩ひて 病氣になつて。

りし亂れの後は、坊舎どもも荒れはてて、跡かたもなく成りにたるに、花ばかりはむかしにかはらず咲き出でたるも、いとあはれに思召されて、一ふさ御文の中に入れて、宗良親王の御もとに奉らせ給ふとて、  
 三よし野はみしにもあらずあれにけりあだなる花は猶残れども程へて信濃國より御かへしあり。  
 今見てもおもほゆるかなおくれにし君が御影や花にそふらむ  
 武家の人々は皆都につどひて、昔の家々に歸り住みつゝ、ありしにかはらぬ様なれば、今ぞ都人の心おちるたり。内よりも入道の錦の小路の館に、勸修寺大納言を御使にて、歸り來れるよろこびを聞えさせ給ふ。文月には義詮の北の方、子うみ給ひたりといふに、をのこにてさへあなれば、武家の人々よろこびあひたり。院よりも御使して御製をたまはせき。又此の頃世の中の静かならぬ様なるは、いかなるにかと覺ゆるに、錦の小路の入道は都をはなれて、北の國へ下りて、軍を發すなりといひ出でたり。又いかに亂れ行く世にやとやすからず。尊氏は芳野殿の宣旨を申し下し、急ぎ都を出でて越路に向ひしに、引きたがへて鎌倉にありといふめれば、又そなたさまに鞭を揚げたり。駿河國にて戦ひをなすに、此度は都の軍かししかば、入道は随ひ聞えむとあながちに侘びたるにぞ、やがて伴ひて鎌倉に入りき。程なく心地煩ひて失せぬと聞えしかど、誠には毒を吞ませたるなりとぞ人



○高時に背き云々 北條高時に叛いて兵を擧げてから此のた。  
 ○さまん云々 種のさかしらたつた悪事をたくらんで。  
 ○兵部卿のみこ 護良親王。  
 ○尊良の親王 金崎城陥つて新田義顯と共に自殺された。  
 ○春宮 恆良親王。  
 ○まがくし 忌々しい。いまはしい。  
 ○かたじけなく云々 畏れ多い事だが南朝を欺き奉らうと。  
 ○さり伊なく 所以らぬ振りに見せかけて。  
 ○太政大臣 良基。

申し侍りし。元弘の昔、高時に背きしよりこなたは、常に尊氏にそひるて萬の謀をなしつ、ひたすら世を心にまかせむ事を思ふより、さまんくのさかしらをのみ構へて兵部卿のみこを失ひ奉り、打ちつゝいて尊良の親王は越路にて隠れさせ給ひ、春宮をも成良のみこをも、謀り奉れるは、ことごとく此の入道が心よりなしつる事なれば、天より下させ給ふる災ひは、いかでかまぬがるべき。殊に春宮などには、怪しき御薬を奉りしによりてと聞えしに、其の身も同じさまなりけるも、いとまがくしき事なりき。誠や尊氏は越路におもむかむとする頃、芳野殿と睦まじうなりしとよ。これは此の頃みやこに兵多くもあらざれば、あなたよりか、るひまをうかひ聞ゆる事もやあらむと、心もとなくて、かたじけなくともすかい奉らむとて、使を奉りつゝ、身の罪を歎き申し、又都に行幸をもよほしおはしまさむ事をまめやかに奏しけるに、芳野殿にも、そこひなき謀のおはしますをも、さりけなくもてなさせ給ひて、奏し奉る旨にぞ従はせ給ひけり。されば尊氏は、いとよくはかりおほせしと、心安く思ひてぞ都をば打立ちけり。やがて此の事ひろくなりて、京にかうまつり給ふ人々は、二條の太政大臣を始め、上達部殿上人、五位六位まで残りなく芳野殿へつどひ参りつれば、日頃はいとかすかなる太山の奥の行宮、俄にいまめかしう花やかにて、いろく衣たち重ねたる上人のよそほひには、名におふ山の花の錦もけおされぬべくなむ。今参りたる人々の司くらは、京にてなさせ給ひしなれば、其の儘にては用る

○けぢめ云々 南朝の舊臣と明らかに差別のつくやうに。  
 ○三條坊門の大納言 通冬。  
 ○左の大納言 爲定  
 ○よろこびを加へさせ給ふ 加贈をされた。  
 ○北畠の大納言 親房。  
 ○准后 三后に准じて年官年爵を賜はること。  
 ○置にて 手車で参内退出された。置車は親王攝關其の他に宣旨で許される。  
 ○かたふたがれり 陰陽家の説で天一神の居るさいふ方向に當る。  
 ○事をきたる 簡署にした。  
 ○白馬 正月七日天皇紫宸殿で白馬を御覧になる儀式。  
 ○中の六日 十六日  
 ○津守 住吉の社司  
 ○津守國夏  
 ○けいめい 經營でもてなすこをいふ

させ給はず、ほどにつけつゝ、けぢめわくばかりおとさせ給へり。そが中に三條坊門の大納言と、御子左の大納言とは、もとのまゝにてぞる給ふ。これは兼てより心よせ奉るによりてとぞ聞えし。又もとより仕うまつりし人々は、古き勞の程も思召ししらせ給へば、かかる折ふかき御心も見えぬべく思召しけるにや、殊更によろこびを加へさせ給ふ。北畠の大納言は、准后の宣旨かうむり給ひ輦にて参りまかで給ふ。后の宮の御親なれば、とりわき睦まじう思召さるゝに、唐倭の書に通ひて何事もうるはしうし給へば、ことにうごきなき御後見と思召さるなるべし。年號も京のはとゞめさせ給ひて、正平をなむ用るさせ給へり。年の内はかたふたがれりとて、行幸は春にこそと定めさせ給ふに、程もなく暮れぬ。改まりても都はかいしめりたる様なるに、行宮は引きかへて、新しき年のけはひもこよなくなむ。よろづ事をきたる宮の中なれば、四方拜はありつれど白馬などは御覽せられず、武家よりは御馬砂金、其の外の物をも數々奉りたり。二月中の六日に、賀名生を出でさせ給ふ。御輿うながさせ給ふ程、劔璽の役は、さうぞく正しくて仕うまつる。其の外は上達部、殿上人、衛府のすけまで皆武士めきて出で立ちつゝ、前しりへに隨ひ奉る。いとめづらかなる行幸の御よそひなり。まづ住吉におはしまして、津守の家に入らせ給ふ。やがて住の江殿に渡らせ給はむとて、修理など加へさせ給ひ、國夏をば三位になさせ給へり。宮人どもは我が御神のめいほくなりとて、いみじうけいめいしあへり。御社にも、御馬を牽



かせ給ひ、奉幣の御使を立てらる。爰なむ處もおもしろきわたりなれば、上もさる太山の御目うつしにこよなう思召されつ、浦のかたなど御覽せさせ給ひけるに、松のすがたのたぐひなかりければ上、

言の葉も及ばぬ松の木陰かなむべもこゝろある神やうゑけむ

又人々にも題をさぐりて、百首歌つかうまつるべくのたまはずに、光任の大納言、名所の松といへる事を、

ふりにたる姿とのみやすみの江の老木の松も我をみるらむ

御あそびをもせさせ給ひて、さぶらふ人々にも、おほみき賜はせなどし侍るに、一品の宮の御方より、櫻人のこゝろばへなどつくりて出でさせ給へるを、左の大臣の許に遣はさるべきよし聞えしかば、女房の中に申し給ふ、内の大臣、

こと浦に其の舟よする櫻人あかぬいろをばあす歸りみむ

國量がをかき檜破子ども奉りけるに、八十島の祭のかたを作りたりけるを御覽じて、上の御まへ、

御祓する八十島かけていましめや浪治まれる時は見えけり

此の御製を承りて、國量つかうまつれる、

君が代のあり数なれや御祓する八十島ひろき濱の真砂は

- 御あそび 管絃の御遊び。
- おほみき 大御酒
- 一品の宮 新宣陽門院。
- 櫻人 備馬樂呂の歌「櫻人その舟ちぢめ鳥つ田をさ町つくれる見てかへりこむやそよあすかへりこむやそよや」外一段ある。
- 檜破子 檜の木で造つた破子。破子は食器。
- かたを作り 八十島の祭のさまを畫いたのを。
- 上の御まへ 後村上天皇。

- 御心ゆるびなき 御油断なき警衛で。
- 胡籥 矢を入れて背に負ふ器。
- 右衛門督 北畠親房の子顯能。
- 千種の少將 顯能
- 芳野の上 後村上天皇。
- 准后 北畠親房。
- 中院の中將 具忠
- まがくしき物 正しからぬもの。
- 八幡殿 後村上天皇の皇后。
- 持明院殿 崇光天皇の皇居。
- 内の上 崇光天皇
- 院の御前 光明院
- こまわりに云々 出御ならぬのは道理たゞ見て悲しむ。

二月は閏あり、其の月の半ばには、天王寺に行幸ありて、それより八幡に移らせ給ふ。

道の程、猶御心ゆるびなき御さまにて、人々は胡籥などおひて仕うまつりしかば、武家にも打解けにくくは思ひつれど、さのみはいかゞとて何心なくて居たりけるに、北畠の右衛門督、千種の少將、兵を具して京に入りつ、處々に火をあけたるに、和田、楠なども、桂川を渡して入りつれば、関つくる聲のいとすさまじけにどよみたり。武家にも従者どもひきゐてうちいでぬれど、かなふべうもなく、侍どもは爰かしこにて討たれ、義詮は近江路に下りぬ。芳野の上は、なほ八幡におはしまして、都へは准后、右衛門督ばかりを遣はして事ども掟てさせ給へり。又中院の中將を救使にて、都の内裏に坐す三種の御寶を八幡殿へ渡し奉らる。これは建武の頃、後醍醐院の御方より持明院殿へ渡させ給ひしものにて、まことの御寶にはあらず、いとまがくしき物なりとぞ、世の人申しあひ侍りき。二十七日には、八幡殿より仰事ありて、顯能の右衛門督、持明院殿に参れり。猶兵をも具し聞えたれば、内の上も院の御前も、何事ならむと、いみじう驚かせ給ふ。やがて隆蔭の大納言して、こと方に行幸あるべきとて、御迎への由を奏し奉る。院の宮々は、唯あきれ惑はせ給へる御さまにて、御心もなきやうなれば、出でさせ給ひぬべき御けしきも坐さぬを、ことわりに悲しうさぶらふ人々は見奉りて、一宮の中どよみてなきまどひたり。右衛門督も心ぐるしうは見奉れどつれなしつくりて、御車よせつ、いそがし聞ゆれば、泣



- 本院 光嚴院。
- 新院 光明院。
- 春宮 直仁親王。
- 一つに奉る 一つ御車に御同乗された
- 山の座主 梶井二品親王、尊胤親王。
- 朝餉 朝の供御。
- 後鳥羽院の蟹の苦屋云々 蟹の苦屋は民の産屋であらうか増鏡に「限りあれはさても堪へける身のうさよ民の産屋に軒をならべて。」の御製がある。
- あぢきなく云々 この世をつらく情なく思召された。
- 木魂 樹木の霊。
- 御山 八幡山。
- 尾上 山の峯。
- しづ心なく 靜かに落著いた心なく。
- おほよそ人 凡人で常なみの人。

く泣く出でさせ坐す。本院、新院、内の上、春宮みな一つに奉る。心あわたしき程にて、仕うまつる人も多からず。又山の座主にておはしましたし二品の親王も同じごとおはします。何れも芳野の奥なる賀名生におはしますべきなりとて、南ざまに行幸なる。持明院殿を出でさせ給ひし日は、朝餉の御まうけさへおほつかなかりしかば、院の女房の中より檜破子など奉る。まづ河内におはしまして、其の後ぞ芳野には遷し奉れり。玉の臺の御しつらひは、跡かたなく、太山の里のうちあはぬ御住居は、唯夢かとのみぞ思召さるゝに、後鳥羽院の蟹の苦屋はとのたまはせし昔の御悲しみも、御身の上とのみ思召したる、いといとほしき御様どもなりかし。本院は河内にて御ぐしおろさせたまひき。我が御世も心ならず下りさせ給ひしに、又今の上もかやうなるを御覽するに、いとあぢきなく世を思召さるなるべし。都の内裏はすむ人もなくて、むなしくあれ果てつゝ、木魂やうのものも、やう／＼かたちあらはしぬべき様なれば、いかなる世の末なるらむと、心ある人は打歎くめり。義詮はいみじき勢ひになりて、都に上りたれば、八幡殿の御軍どもは引き退きぬるを、追ひて御山をかこみつ、麓に陣をすゑたるにぞ君の御武者は、唯尾上の行宮をのみ守りあり。君も臣もしづ心なく侘しう思ひて、こと方に行幸をなし奉りてむとて、誰も誰もなき手を出して、戦ひをなしつるにぞ、辛うじて遁れ出でさせ給ふ。君もおほよそ人にまぎれさせ給ひぬべく武士姿にやつさせ給ひて、御馬に奉りたるは、いと／＼かたじけな

- むくつけき事 恐ろしい事。
- 雅賢 三條中納言雅賢。
- 左兵衛督 親康の子康長。
- いちがふ 射かはす。
- 中務の親王 宗良親王。

き御事にこそ。道のほどもいひしらすむくつけき事のみにて、隆資の大納言、雅賢の中納言、其の外の人々も討たれたまひぬ。法性寺左兵衛督のみぞかひ／＼しくつかうまつり給ふ。いちがふる矢は、雨のあしよりもしけかりつれど、君はつゝ、がもおはしますさす、御寶の櫃も事なくて渡らせ給ふるは、まことに神の御恵みのいちじるくぞおほえ侍りき。故義貞義助が子どもは、此の頃又軍をおこして、信濃におはします中務の親王にしたがひ奉りつつ、處々にて戦ひありつれど、尊氏をなたにるたりければ、はか／＼しき事もなくて、程なくをさまり侍るとや。



巻第五

後光嚴院

- 本院 光嚴院。
- 先皇 崇光院。
- 一つ御腹 陽藤門院藤原秀子。
- 廣義門院 後光嚴天皇の御祖母。
- かなしませ 慈しみ愛されて。
- 時光 右大辨日野時光。
- 院々先帝 光嚴院光明院崇光天皇。
- 芳野の上 後村上天皇。
- 二條の大臣 良基
- 公秀 三條公秀。
- 文和 北朝觀應三年九月改元。
- こたび このたび

九十九代の帝は、御諱彌仁と申し奉る。本院の二の皇子にて、先皇一つ御腹の御弟になむおはします。廣義門院いとかなしませ給ひて、時光の辨に預け置かせ給ひしかば、さのみ世の人のかずまへ聞ゆる事も侍らざりき。院々先帝かいつらねて、芳野に遷らせ給ひ、芳野の上又八幡を出でさせ給へる後は、都の内に君とて仰ぎ奉るべきなくて、雲の上人もより處なく、心ほそけなるに、春宮さへおはしませず、唯このみこのみ幽に殊におはしませずをぞ、尋ね出し奉りて、觀應三年八月、俄に御位に即け奉る。御年十五になむおはしませず。神璽も渡らせ給はで御位の事はいかゞあらむと、定め兼ねたる人々も多かりけれど、さてやむべきならずと、武家よりしひて申ししかば、かくは定まらせ給ひけり。關白は二條の大臣にて坐す。公秀の大納言も、今は内の大臣とぞ申し侍る。九月に改まりて年の號も文和とぞ聞えき。先の御代には障り多くて、御禊も大嘗會も行はれざりしをこたびはすみやかに行はせ給へり。上はまだ若う坐すに、院も皆はなれおはしませば、廣義門院に世の政をもしらせ給ふべく、武家には定め申しけれど、女院はいとあるまじう堪へがた

○賀名生には 賀名生に御遷りになつた

○風の便りに 都で後光嚴天皇御即位の事の風聞を御聞きになつて。

○花もひもこきわたし 花も咲きわたす

○花より外に 金葉集行尊僧正「もろ共に哀れと思へ山櫻花より外に知る人ぞなき。」

○しぞく 親族。

○力すくなし 軍勢が少ない。

○座主の宮 後伏見天皇の皇子承胤親王  
○清氏 相摸守細川清氏。

き事にぞのたまはせ侍り。賀名生には盡きせぬ御思ひに沈ませ給へば、月日の過ぐるをもしろし召されず。峯のあらし谷の聲を聞かせ給ひても、兵どもの驚かし奉るにやと、御心をまどはされ、水の流れ鳥の聲などにも、心ほそさのいやまさりて、御袖の乾くひまもなし。さぶらふ人とても多からず。本院の中納言の典侍、新院の新宰相の典侍、先帝の勾當内侍、宮の御方の對の御方、此の外は男どもぞさむらひける。風の便りに都の事を聞かせ給ひても、嬉しうも口惜しうも様々に思し亂るゝに、年かはりても唯御歎きのみは同じ事なり。世は春なれやと思ししるばかり、太山の花もひもときわたしたるを御覽じやらせ給ひても、花より外にと、いと哀れなる御けしきを心ぐるしう見奉りて、中納言の典侍、

かかる世もよしや芳野の山ざくら宿の物とてかざしにもせむ

山名師氏とて、武家のしぞくなるものなむ、此の頃は芳野殿に参りて京を攻むなりと聞えければ、尊氏はまた上りあへず、義詮は力すくなしとて、武家の人々は都を去らむとするに、此の度は行幸をさへ催して、義詮も隨ひ奉る。座主の宮も坐させたり。關のあたにて又思ひかけぬ亂れありて、兵も多く討たれつゝ、行幸につかうまつり給ふ。上達部などあなたこなたを逃げ惑ひ給ひしかば、御輿に参る者もなく、清氏と言へる武士ぞ負ひ奉りてなむ、美濃國垂井におはしまし著きたり。そこなる小島と云ふ處を行宮にておはしませたり。又民安寺といへる寺に遷らせ給ふ。されど京なる師氏もやがて勢ひ衰へて、



○基氏 尊氏の第四子。  
 ○國清 畠山國清。  
 ○賴章 左京大夫仁木賴章。  
 ○己が勢ひ云々 己の軍勢が少ないのを残念に思つて。  
 ○直冬 尊氏の庶長子。  
 ○世の誇り云々 世の誇りを受ける事に遠慮して。  
 ○世のきく耳云々 世間の人が聞いても外聞わるくはあまるまい。  
 ○北の國云々 越前に居た尾張修理大夫高經、越中に居た桃井播磨守直常。  
 ○神南 山崎の西南  
 ○ひえの山 比叡山  
 ○東寺 眞言宗、教王護國寺。京都九條。

己が國に歸り侍るにぞ。又君も臣も都に入らせ給ふめり。次は文和三年と申すなる。春の頃、東の方やうくしづまりぬとて、鎌倉にはさきの如く基氏をすゑて、國清後見して有るべくおきてつゝ、尊氏は都に歸り上りぬ。京には賴章を後見にて事行はせつゝ、義詮は師氏が罪をとひて、播磨の方に下り侍る。師氏はかくと聞くにも、己が勢ひの僅かなるに思ひ侘びて、直冬がこの頃は筑紫にも堪へ難くさすらへるけるを、大將にと思ひよりに迎へとりたり。直冬もさもやとは思ひよれど、親子の中にて争ひをなさむ事は、世の誇りのつゝ、ましくて、まづ芳野殿に参りて宣旨をも蒙らむには、世のきく耳の見苦しき事もあらじとて、あなたに使を奉りたり。芳野殿には如何あらむと人々定め兼ねたるに、上は、「人にさへうきと侘びつる心のうちこそ、いみじう哀れに捨て難けれ。」と宣はするにぞ、事定まりて、こなたに従ひ奉るべき仰事侍りしとかや。さらばとて、直冬は師氏を相具して上りぬれば、北の國なる高經も直常も打出でたり。又の年の睦月に、尊氏は行幸に添ひ奉りて近江路に下りしかば、人々はみな都に入りぬれど、猶心のゆるぶ事もなくて、又立ちわかれ、こゝかしこを守りたるに、義詮は播磨路より引き返して、神南かんなにあり。尊氏はひえの山を下りて、東山にゐたり。又西山にも敵ありしかば、都のうちには、戦のこゑ更に止む時なし。直冬は東寺に籠りつゝ、八幡山崎などには、其の外の人々ゐたり。いつまでかくてあらむと見けるに、やがて直冬も残りの武者も、師ををさめて、國々へぞ歸り侍る。今は都の内も事なくなりしかば、近江路より都の方に行幸なる。こたびはいとよそほしう、武家の人々も引きつくりひて仕うまつれり。やがて土御門殿にぞ入らせ給ふ。上は先帝などの鄙の御住居を心ぐるしう、つねに思召さるゝに、御みづからさへ、ともすれば、都を出でさせ給ひて、物うき御旅に、御心をなやませ給へば、いと安き空なく、思しめし歎かせ給ふ。御あそびなどもかき絶えて、さうくしき紛まぎれに、今年も過ぎぬ。次の年は又改まりて、延文元年とぞ申し侍る。七月久我の大納言の大臣になり給ひ、八月には義詮を三位になさせ給ふ。猶國々は亂りがはしき聞きこえも侍れど、都はことしぞしめやかにて過すさせ給ふ。いつしか延文も二年ふたとせに移れり。芳野の上は、先帝などのかかる太山に年月を送らせ給へるも、いとほしく、又京には今の上のゆるぎなくておはしませば、今は何せむにかとゞめ置き奉らむとて、二月には都に還らせ給ひぬべき御定おんさだめに、御山を出し奉らせ給へり。都の上もいみじうよろこばせ給ひ、御かたぐも、日頃むすほれさせ給へる御思ひもとみにとけゆきて、引きかへたる春に逢はせ給ふ。新院と聞えさせしも、今は上皇と申し奉る。故院のすみ捨てさせ給ひし伏見殿に移らせ給ひておはします。年頃にとゞ荒れまさりて、草のみ高くなりぬるを、御覽じては、よろづ物哀れなるに、むかしの御事も、立ちかへり戀しう思召し出でられたり。先帝をば新院と申し奉る。夢窓國師の御弟子に成らせ給ひて、御飾りをもおろさせ給ひ、伏見の大光明院といへる御寺にいらせ給

○よそほしう 羨ひうるはしく。  
 ○上 後光嚴天皇。  
 ○先帝 崇光院。  
 ○御あそび 管絃の御遊び。  
 ○次の年 北朝文和五年三月延文に改元  
 ○しめやか 靜か。  
 ○芳野の上 後村上天皇。  
 ○先帝 崇光院。  
 ○都の上 後光嚴天皇。  
 ○新院 光明院。  
 ○故院 後伏見院。  
 ○夢窓國師 僧疎石  
 ○御飾りをもおろさせ給ひ 御剃髪になつて。

池の藻屑(巻第五)



○本院 光嚴院。  
 ○背かせ給へ 世を背いて出家された。  
 ○かくてやは この儘にしてはおくまい。

○上のをのこ 殿上人。  
 ○御みづから 後村上天皇御自ら。  
 ○都の上 後光嚴天皇。

○此の道 歌の道。  
 ○爲定 爲道の子。  
 ○延文三つ 延文三年。

○はかなくなり 逝去した。  
 ○又いかに 尊氏の死後世の治亂がいかになりゆぐか。

○あたらしう 惜しく。  
 ○衣笠山 山城國衣笠村。  
 ○新待賢門院 後村上天皇の御生母。

へり。本院は小倉の籠かごにおはしましけるが、後には伏見の奥にぞ住ませ給ふ。何方もうき事しけき世を堪へがたう思召されて、背かせ給へるも、中々めでたくぞ見えさせ給ふ。芳野殿には猶さりととも思召すに、さぶらふ人々も、かくてやはとたのます思ふめり。彌生の頃は、宮の中もいとどやかにて、つれなくにおほいたれば、上のをのこどもに、題を探りて百首歌つかうまつるべくのたまはせて、御みづからもよませ給ふ。

よし野山花も時得て咲きにけり都のつとに今やかざさむ  
 又おなじ時に、

我が代にはさらぬ關路と思はばや明けよとつけて鳥は鳴くとも  
 都の上も此の道をいみじき物に思召して御心をよせ給ひつゝ、去年の水無月に、爲定の

大納言承りて、むかし今の歌どもを撰び集むるなりとぞ聞え侍る。隙ひまゆく駒のとゞめ難くて、又京には延文三つといふめれば、芳野殿には、正平十三の春をぞ迎へさせ給ふ。都には故直義に従二位を贈らせ給へり。卯月の頃より、尊氏心地煩ふなりと聞えつるに、二十九日にははかなくなりたりとて、騒ぎの、しる。武家の人々は更にもいはず、公おほやけにも、いみじき世のかためと思召されしに、又いかにと世をあやぶみたまふるにつけて、いとあたらしう思召されたり。やがて衣笠山の籠なる等持院といへるに送りしかば、後には等持院とぞ申し侍る。同じ頃新待賢門院もかくれさせ給へば、芳野殿いたう思召し歎かせ給

○一つ色に云々 殿上人など皆一様に黒染の喪服を著た。  
 ○山の座主 天台の座主。  
 ○二品の法親王 後伏見院の皇子、光嚴院の皇弟尊胤法親王。

○義興 新田義貞の次子。  
 ○西の國 九州。

○菊池 肥後守菊池武光。  
 ○芳野殿の宮 後醍醐天皇の皇子懷良親王。

○少貳 筑後守頼尙  
 ○佐々木秀詮 道譽人道高氏の孫。

○二條の大殿 良基

ふ。上も諒闇の儀にておはします。上人なども一つ色に黒み渡りたり。いひしらす哀れになむ見え侍る。京には又、山の座主にておはしましし二品の法親王も失せさせ給へれば、いづちも一悲しき事のみにて過ぎ行くに、かうやんごとなき人々の打續き失せぬるは、またいかならむと、世の人もいひあへり。尊氏は従一位左大臣の位を贈らせ給へり。日野の忠光の辨ぞ救使にて参り給へり。義詮は君の御おほえの淺からぬにつけても、いとさきくらす心地して、

歸るべき道しなければ位山登るにつけてぬる、袖かな  
 と奏し給へと聞ゆれば、辨もいと哀れと思ひ給ふめり。十月には、芳野殿の御方人なりし

義興も、武藏國にて失はれぬれば、關の東はみな京にぞ随ひ侍る。西の國には、菊池とての、しき武士なむ、芳野殿の宮を預り奉りつゝ、國々の兵を催し聞ゆれば、いみじき勢ひに怖ぢ聞えて、筑紫のわたりはみな靡きたり。されど少貳などいへる者は、心もとげざりければ、猶争ひは絶えやらで、芳野殿より宮の御供にて下りし上達部も數多討たれ給ひ、武士どもも爰かしこにて亡びつれど、武光は露おそる、心もなく、勢ひ猛くてぞ居たりける。十二月末には、時光の右大辨を救使にて、義詮を征夷將軍になさせ給ふ。佐々木秀詮ぞ宣旨を受取り奉る。つひには有りつべき事なれど、さしあたりてはいといみじき事になむ。同じ月二條の大殿關白をかへさひ申し給へば、九條の經教の大臣ぞ、かはりに給へ



- 年かへり 正平十四年になる。
- 大納言 爲定。
- 頼章 左京大夫仁木頼章。
- 清氏 細川清氏。
- 基氏 義詮の弟。
- 關東管領。
- 國清 高山國清。
- こちたき軍 非常な大軍。
- 武藏守 義詮。
- 芳野の上 後村上天皇。
- 正儀 楠正行の弟。
- 觀心寺 河内國。
- 眞言宗。
- えさらぬ限り やむを得ぬだけ、離れられぬ近臣だけ。
- あかれ 別れ。
- 龍門 紀伊國。
- 赤坂 河内金剛山の南。
- 正武 和田正武。
- 内 後光嚴天皇。
- 守 武藏守義詮。

り。年かへりて二月には、義詮武藏守を兼ねたり。誠や大納言の御預りなりし歌の集は卯月ばかりにや、先づ四季の部を奏したまへり。爲遠ぞ書き給へりと聞き侍る。新千載集とかや申し侍り。同じ年の十月武家の後見なる頼章も失せにしかば、清氏をかはりにはなし侍り。十一月基氏の後見なる國清入道、東よりこちたき軍を催して上りたり。又武藏守も都の兵を相具して、諸共に芳野殿を伺ひ奉らむとて、河内國に下り侍る。芳野の上は此の頃河内の天野と云ふ處におはしますに、其處にて爲忠の中納言奏し給へり。

君すめば峯にも尾にも家居して太山ながらのみやこなりけり

また京より軍どもの競ひ参ると聞えしかば、上は御心苦しう思召されつ、正儀をめし、「いかゞあらむ。」と問はせ給へるに、觀心寺といへる太山に、移らせ給ひぬべく奏し奉れり。さらばとて行幸なるに、人多くはあしかりなむと思召されて、皆とゞめさせ給ひつ、えさらぬ限りつかうまつれり。残りにし人々は、もとの太山に歸るもあり、又京に出づるもありて、おのが様々にあかれぬるも、いと心あわたゞしけなり。次の年の二月より戦ひ始まりて、龍門龍泉などいへる處々に打出づる。芳野殿の御軍は、日にそひて勢ひ衰へざまになりて、赤坂の城も落されしかば、正儀も正武なども金剛山にひそみぬるにぞ、都の軍は勝どきとか、ことごとくしくの、しりて上りはべる。京には上下の人々歡びあひたり。内よりも守が館に御使あり。又寺々社々に、いかめしき御願どもも有りつれば、急ぎ

- 寄せさせ云々 神佛を喜ばす爲に社寺に社寺の領地として寄進し給ふべき國。
- 神職僧綱 神官僧侶の官位。
- 歡びをぞ加へ 官位の昇進。

- 雲の上人 殿上人 上達部も含めいふ。
- 武藏守 義詮。
- 女院の御事 新待賢門院崩御の事。
- 今さらに 後村上天皇の御製。

はたさせ給はむとて、神も佛もうれしと御覽するばかりの心ばへをも顯はしてむと思召され、守が許へ仰せ遣はされしに、今なむ然様に寄せさせ給ふべき國のあきたるもさぶらはぬ由を奏し奉りしかば、さらばとて神職僧綱などに、程につけつ、衣の色改まるばかりの歡びをぞ加へさせ給へり。今は公にも武家にも心をおく方なく、都の中にやうく事なく成りぬるにぞ、上も折々の御遊びをもせさせ給ひ、さぶらふ人々にも、歌めしなどせさせ給ふに、爲明の民部卿、春の月といふ事をつかうまつり給ふ。

かすむ夜の光を花と勻ふにぞ月のかつらの春もしらる、

武家の人々さへ、此の道にたづさひて、はかなくいひ出づる口つきなんども、雲の上人にもをさ／＼劣らず。武藏守の歌とて聞き置きける中に、

さのみやと思ひしかどもほと、ぎす聞くにつけても音はまたれける

芳野殿には女院の御事の後、諒闇にて坐しけるが、今年なむ御服もぬがせ給へり。五月五日菖蒲につけて、大納言に賜はせける。

今さらに音にこそたつれ三年まであやめも知らですぎし悲しさ

御かへし實爲の大納言、

あやめをもしろで過ぎこし程よりもけふこそ更にねをばそへつれ

又住吉に行幸あり。むかしも御覽せしわたりなれば、なつかしう思召されて、御心長閑



○歌講せさせ 歌の披露をせさせられ。

に日ごろおはしましたつ、御まへにて歌講せさせなどせさせ給ふに、左の大臣社頭松といふ事を、

○御子 奉成親王。

千世をまた重ねてちぎれ行幸して二度なる、住よしの松そこにて御子生まれさせ給へりければ、公夏の大納言、

○義長 仁不右京大夫義長。

住吉の松よりすだつ鶴のこゑ千年はけふやはじめなるらむ

○鳥の空音云々 函谷關の故事によつた清少納言の歌の句を取つて人目を忍んだ意にいふ。

七月に芳野殿の御軍、又津國にうち出でたりと聞えしかば、都の兵どもも天王寺のわたりに向ひたり。されどことなる事もなかりしに、猶人々はとまりて京なる義長といへる者を、此のついでに亡ぼしてむとて用意すめり。京にも物の聞えあるに、義長は義詮の後見めきて事行ひつ、兵どもを集めけるに、義詮は鳥の空音をはかる許りの人目の關を越えつ、みそかなる處にぞ忍びてゐたり。義長は聞きあさみて、腹立たしうさへ思へども、せむかたなくて、うとき人には暫し知らせじと、紛らはしつれど、皆しりはてて、誰もあひなしと思ひつ、おのがじ、あかれちるめり。義長も今は世の中あやふく思ひなるにぞ、忍びて伊勢國に下り侍る。義詮はやがて都に歸りぬれば、天王寺なる人々も皆上りつるに、又河内わたりに、事ありといふめれば、心ゆるびなく、慌しうのみ人皆思ひるけり。國清入道は初めより我さかしげに、思ひ立ちぬる事の、いとかなく人笑へなるを、思ひ侘びつ、又東にぞ下り侍る。長月に近衛の大臣左に移り給へば、鷹司の大納言、

○みそか 密か。

○聞きあさみ 聞いて惻れて。

○うさき人 親しからぬ人。

○あひなし 面白からず思つて。

○心ゆるびなく 油断なく。

○人笑へ 人に笑はれる種。

○長月 正平十五年北朝延文五年。

○近衛の大臣 道嗣

○鷹司の大納言 冬通。

○康安 北朝の年號

言、右の大臣になり給ひ、三條の大納言は、内の大臣と聞え侍り。又の年をば康安元年とぞ申しける。今年ぞ珍らかなる事のかぎり見侍りき。六月の末なべての人の堪へ難くすなる暑さはけしきばかりもなく、空かき曇り風ふき出でたるに、寒さのいみじさは三冬にもまさりて、池水などは氷とどつるに、雪はたこほすが如く降り出でたるは、更に聞えさせむかたなくて、皆人あさみたるに、其の頃又大きななるふりて、日々にゆすりみちたり。海かたぶきて陸をひたし、巖われて谷にまるぶといひけむやうに、處々の門は倒れまろび、築地は崩れて、塵灰のたち上るは、煙にぞまがへり。遠き國々には高潮瀾ましに満ち來りつ、渚の蟹の家々は皆取られて、誠にからき目見つるに、人さへあまたそこなはれ侍りき。一日二日隙ありては、またふり出でつ、日頃になりゆけば、都も鄙もすべてさかしき人なきさまにて、こしかた行末又たぐひあらじとぞいひ騒ぎ侍る。八月末には、又いみじうふりて、こたびは野分だちたる風さへいりもみて、空のけしきもいと冷まじけなれば、世は今盡きぬるにやとのみ、誰もく思ひるたり。されど此の後ぞ音なくなりたり。こゝかしこの塔など、またき一つなく、皆そこなはれたるはいと淺まし。取分け芳野殿のしらせ給へる國々なむ、いみじうそこなはれたりと聞ゆるに、天王寺の御堂の淺ましげに成りしをぞ、芳野の上も御心苦しう覺えて、急ぎ造らるべしと、圓海上人とかやに仰事ありて、事行ひ侍るとぞ聞えし。都にも重き御慎みのよしにて、八月十三日より、青

○雪はた云々 雪がまた物をこぼすやうに烈しく降り出た。

○あさみ 呆れ驚く

○大きななる 大地震。

○築地 土崩。

○高潮 津浪。

○一日二日云々 一日二日降り止んで又降り出した。

○野分だちたる 野分めいた風。

○またき一つなく 完全に残つたものは一つもなく。

○しらせ給へ 領地として治められる。

○芳野の上 後村上天皇。

○圓海上人 奈良殿若寺の住僧。

○青蓮院の法親王 尊道法親王。

○青蓮院の法親王



- 聖護院の宮 覺譽法親王。
- 最勝講 五月清涼殿で五日間最勝王經を講ぜられる儀。
- 山 延曆寺。
- 三井寺 園城寺。
- 山科寺 興福寺。
- 時氏 左京大夫山名時氏。政氏の子。
- 秀詮 佐々木秀詮
- 清氏 細川清氏。
- 國清 畠山國清。
- うれはしゆ 憂へてゐるさま。
- 正儀 楠正行の弟
- 武家の方人 足利の味方。
- 有り難きに 困難なので。
- 上 後光嚴天皇。
- 坂本 近江國。
- 修理 修繕。

蓮院の法親王、内にさぶらはせ給ひて、いみじき法ども行はせ給ふ。聖護院の宮も同じごと坐す。又最勝講の、近き頃は絶えにしを、改めて行はせ給へり。山の僧はさらにもいはず、三井寺山科寺などより、尊き僧の限り召されて、日々にたへなる事説き盡すめり。えもいはぬさきらにて、聞く人も涙落すばかりなりけらし。又時氏は美作國に起り、菊池は筑紫にて戦ひをなすなりと、京に聞えつるに、楠も津國に出でしかば、秀詮ゆき向ひたりしもあへなく討たれぬと、京に告げ來りたり。處々亂れぬるよと思ふに、都には武家の後見なりし清氏も背きて、己が國に下りしかば、後は芳野殿にぞ參り侍る。猶關の東こそ靜かならめと、いひるたるに、鎌倉にも國清入道敵になりて伊豆國に在りて、いみじくひしめくなりと、基氏の許より人していはせたるに、武家の人々は、あぢきなくなり行く世にやと、うれはしけなり。芳野殿には、又清氏に仰事ありしかば、正儀も諸共に都に打ち入りぬ。義詮は例のごと、近江路に下りたり。行幸もそなたさまにて、武佐寺といへるに坐す。清氏京には入りつれど、處々より武家の方人どもの上るなりと聞くに、芳野殿の行幸を催さむ事も有り難きに、思ひ侘びて、又河内に下りてゐたりけるが、其の後なむ阿波國にぞ赴き侍る。年の暮に義詮は京に入りしかど、上は猶歸らせ給はぬにぞ、武家より御迎への人奉りなどしければ、さらばとて、出でさせ給ひて、坂本にぞ著かせ給へり。猶京には入らせ給はず。日頃内裏の見苦しうそこなはれてあるを、修理など加へて後、渡

- ことそぎて 簡略であつて。
- うちあはぬ 不揃ひな。
- さうぐしう 寂しく。
- 西園寺 山城國衣笠村、今金剛のある鹿苑寺の土地。太政大臣藤原公經創立。
- よしほみたる 由緒ありけな様。
- 九條の大殿 經教
- 近衛の大殿 道嗣
- 二條の大殿 良基
- 怪しき星 彗星。
- 物のさとし 天の戒めの御つけ。
- 貞治 康安二年九月北朝改元。
- 筑紫の探題云々 九州探題として左京大夫氏經が下つた。
- 御遊び 管絃の御遊び。

らせ給はむとぞ、とまらせ給ひける。其處にて春をも迎へさせ給ふに、行宮のいとことそぎて、うちあはぬ事のみなれば、年の始めの節會なども行はれず、いとさうぐしうぞ、上達部など思しためり。内裏つころはれむ事仰せられしかば、武家にも承りていそぎ立ちしかど、心もとなくて、日數のみ移りければ、今は行宮にも住み侘びさせ給ひて、三月十日あまりには、西園寺の北山の家にぞ遷らせ給ひておはします。此處は古目もあやにつくり立て給ひつゝ、さきく行幸も度々ありつるわたりなれば、その餘波に、猶よしばみたるけはひは、こよなけれど、年頃に荒れはてたるも、いと哀れと御覽じけり。卯月にぞ、もとの内裏修理し果てたりとて、渡らせ給へり。此の頃は九條の大殿、關白にて坐しつるに、近衛の大殿に譲り給ひしも、又かはりて二條の大殿ぞ再びなり給へり、今年は空にも怪しき星出でつゝ、物のさとしなどもしきりなりしかば、重き御愼みのよし、博士どもの奏し申すによりて、年號も貞治にぞ改めさせ給へり。九月に京より筑紫の探題下り侍りしに、宮の御勢ひ猛くて、かしこに住み侘びつゝ、頭をさへおろして都に歸り侍る。今年もいつしか暮れて、貞治も二年になれり。都はうち續き騒がしかりしに、引きかへていと麗かなれば、上も今は花鳥の色音をも、心とめて翫ばせ給ひつゝ、折々の御遊びなどもせまほしう思召さるれど、世の亂れによりて、國々は貧しき民のみにて、籠の煙も幽なるにぞ、萬御心に任せてももてなさせ給はず。うちしめりたる様にてぞ過させ給へり。



- 明けぬる年 正平十九年。
- 大内 大内弘世。
- 義長 仁木義長。
- 心やましう 心中安からず思つて。
- 上 後村上天皇。
- 高經 足利高經。
- 同じ筋 一族。
- よせいと重く 後櫛が確かで。
- ひがこも 非道な事。
- うたへ 訴へ。
- 維摩會 十月十日から七日開興福寺で維摩經を講ずる公事
- 春日のしらせ給ふ 云々 春日社の所領である莊園。
- 時雨ふりにし 古くからの代。
- 入道 道朝入道。
- 長講堂 京都六條西洞院にある。御影堂ともいふ。

明けぬる年の二月には、西園寺の大納言も、内の大臣とぞ申しき。今年は殊更に、都の内も長閑にて、思ふ事なけなり。此の頃は周防國なる大内と云へる武士も、武家に従ひぬべき心みせて、使を上らせたり。又さばかり心こはかりし師氏も、京の方に歸り参れば、伊勢なる義長も、同じごとといひおこせたるにぞ、京には萬代とよばふに、芳野殿には心やましう、今はかくて世を盡すべきにやと、思しなやみて、上もいと本意なく思召されたり。京の後見は、道朝入道とて昔の高經ぞかし。義詮の同じ筋なれば、よせいと重くて、人もやんごとなく思ひ聞ゆるにぞ萬心に任せて取り行ひつ、おのづからひがことも、うちまじりなどすれど、さる勢ひにけおされてうたへ出づる人もなきに、維摩會の御料にて、春日のしらせ給ふなる御莊をさへ召し放ちてければ、時雨ふりにし世より傳はりたる法の會も絶えはてぬるにぞ、奈良の京には、いと珍らかなる事なりとて、おほやけにも武家にも訴へ申しつれば、内にもいみじき事なりとて、御心苦しう思召されるれど、この頃は何事も武家より掟てぬるにぞ、御心のまゝなる事もなくて、音なく過ぎ行くに、春日の宮人などは堪へかねて、二月に神の御櫛きら／＼しう飾りて都へ入れ奉り、入道が家の前に振り捨て奉りたり。武家の人々も驚きたるに、内よりは御使ありて、頓て長講堂へ入れ奉らせ給ふ。藤氏の人々は、大臣達を始め、皆御門をも閉ぢて、淺ましき事に思ひ給へり。かくて後は都の中にも物のさとしなどありて、安からぬ事にぞ、誰も／＼思ひき。其の頃火出で

- 口さがなく 口わらく。
- こゝら 多数の。
- 有りへ難く 有り難く。
- 越國 越前國神山城に據つた。
- 畏まり申し 謹慎した。
- 帝 後光嚴天皇。
- 新院 崇光院。
- 上皇 光明院。
- 上人 野上人。
- 爲明の大納言 權中納言爲藤の子。
- かかる事 光嚴院崩御の事。
- 頓阿法師 俗名二階堂貞宗。和歌四天王の一人。
- 心にくく 奥ゆかしく。
- 面だたしき事 面目を馳した事。

きて入道が家なむ焼けにしかば、「神の御祟りのしるくもあるかな。」とぞ、世の人口さがなくいひあへるもむべなりけるや。入道こゝらの人の恨み負ひける積りにや、都にも有りへ難くて、越國に下り侍りしかば、京より討手の使向ふなりと聞えし程に、いつしか病重くて失せ果てぬ。子なりける義將はいみじう畏まり申ししかば、赦し聞えけるにぞ、後に又上り侍り。光嚴院に坐しし法皇は、去年より丹波國にまし／＼けるが、此の文月に隠れさせ給へり。内にもいみじう思召し歎かせ給ふ。帝新院の御親にて、上皇の御兄に坐せば、いとゞ世の人もおも／＼しう思ひ奉るにぞ、上人などの、御忌に籠らむと申すも、數多ありつれど、御遺言の儘にとて、皆とゞめられて、僧ばかり三人四人侍ひて、御法事なども勤め侍りき。神無月に爲明の大納言失せ給へりと奏したり。内には撰集の事又思召したたせ給ひて、去年の二月に、此の大納言に仰事ありて、資定の辨を奉行になされつ、同じ卯月十六日事始なりしに、今年の四月、四季の部六卷を奏したまへり。勸解由小路の行忠ぞ書き給へりとなむ。まだ御覽じはてさせ給はぬ程に、かかる事のありしかば、口惜しう思召されつ、扱思召しとゞまらせ給ふべきならずとて、頓阿法師にたちつぎてつかうまつるべき詔ありければ、承りていつしかと急ぎつ、奏し侍る。やがて新拾遺とぞ申し侍る。此の聖もいみじき歌人にて、世にも心にくく思はれて、面だたしき事も多く侍り。草庵集とて、みづからの歌を集めたるをりなむ、義詮の許に見せに遣はしたるに、返し侍



○此の道しはらく云  
云 頼阿が和歌の道  
に暫くたづさはらな  
かつた。

○内 後光殿院。

○二條の大殿 良基

○救なれば 良基  
頼阿との贈答の歌は  
新編古今集に載せて  
ある。

○此の人 頼阿法師

○經教の大殿 前々

關白。

○あたらしき程 ま  
た惜しむべき年輩。

○神人 神官。

○歎き申し 歎願し  
訴へる。

○御莊 春日社所領  
の莊園。道朝人達が  
春日社から召し放し  
たのが還附される事  
に定まつた。

○關白 二條良基。

るとて、

あつめける程ぞかしこきわか  
の浦のなみくならぬ玉のかずく  
と聞えければ、こなたより、

歎かずよ人は捨つともわか  
の浦のもくづを玉と君し照らさば

又いかなる折にか、此の道し  
ばらくさし置くこと侍りしに、  
内に聞召して、二條の大殿  
に仰事ありしかば、やがて其  
の御氣色のおもむきをなむ傳  
へおほすとて、御文に、

救なればおもひなすてそ敷  
島の道に物うきこゝろありとも

御かへし、

雲るまで聞えけるかなわか  
の浦のあしまの鶴の音にもたてぬを

かうやうの事あまた侍りしを、  
聞きしらせたまひければ、此  
度も此の人に仰事ありけるな  
り。今年も暮れしかば、次は貞  
治四年とぞ申し侍る。三月一  
條の經教の大殿失せ給へり。

四十九になり給へれば、いま  
だあたらしき程なるをぞ、誰  
もくををしみ奉る。八月春日  
の神人どもの歎き申しつる儘  
に、御莊も返しつけらるべく  
定まりて、御榊も歸らせ給ふ。  
其の日になりては神人どもい  
みじうさうぞきたるに、藤氏  
の君達行き續きて出で給へる、  
いと目もあやなる御よそひど  
もなり。嗣房の辨ぞ、萬の事  
行ひ給ふ。長講堂の南の庭に  
むしを敷きて公卿の御座とす。  
まづ關白殿著かせ給へば、僧  
綱どもはうちかしこまりてさ  
ぶ

○亂聲 笛太鼓鼓で  
奏する音楽。古樂新  
樂林良高麗等ある。  
○石上ふる 太平記  
に「布留の神寶を出  
し奉る。」ある。石  
上は布留の枕詞。  
○覆面 神佛又は供  
物を扱ふ時に息のか  
かるを防ぐ爲に鼻口  
に紙布を覆ふこと。  
○樂所 奏樂所。  
○還城樂 唐樂曲の  
名。乞食調四曲の一  
。關白殿 良基。  
○柳 葉の色目、表  
白裏青。  
○先はおはせ給はず  
前聖の驚躍はさせ  
ない。  
○西園寺の大臣 實  
俊。  
○二條の大納言 良  
基の子師良。  
○直常 桃井播磨守  
○いみじきわざ 掠  
奪。

らふ。大臣達より次々みなつき給へり。左右の樂人どもは、亂聲を奏したるに、石上ふる  
出でさせ給ふ。宮人覆面して、本社の御榊五所の御たま捧け奉りて、南の門を東へ渡らせ  
給へば、樂所よりは還城樂を奏す。赤き衣著たる仕丁は白き杖をもちて御さきを拂ふ。次  
に宮人ども、色々の衣きて次第に引續きたり。其の次關白殿、柳の下襲に絲鞋はきて出で  
給ふ。御隨身などいみじう清けなり。わざと先はおはせ給はず。神の御幸に憚らせ給ふ故  
とかや。引列ねて、公卿殿上人残りなくしたがひ給へり。引きさけて、衆徒國人どもどよ  
みて渡る。又類なき見物にて、武家の人々もさじきども構へたり。怪しき下すなどまで、  
こぞりて拜み奉れり。都の大路は、所せう人々のつどひぬるも、此の年頃の戦ひの聲には  
やうかはりて、いとはれしく珍らかなる様なりき。程なく貞治も五年にぞなり侍り。  
八月に久我の大臣は太政大臣になり給へば、西園寺の大臣は右に移り給ひ、二條の大納言  
ぞ内の大臣になり給ふ。故道朝が子の義將は、此の頃都にるたりけるが、直常を滅ぼさむ  
とて、また越路にぞ下り侍る。長月の頃高麗國よりとて、國王の文を捧けて、唐人來りた  
り。上もいかなる事にかと思召すに、此の國の亂れの年頃になりしかば、盜人とかいへる  
ひたぶる心あるもの、あまた出で來て、いみじう人を惱ましつるに、此の國の中のみにも  
あらず、舟をめぐらして、かしこにも渡りつ、いみじきわざをして、國民を苦しむるな  
りとて告げたりける。高麗人をば、都の内には入れられず、天龍寺に置かせ給ひしが、さ



○年改まり 南朝正  
 平二十二年北朝貞治  
 六年。  
 ○此の大殿 良基。  
 ○百敷 宮中。  
 ○御才もたらひ給へ  
 御才幹も十分に。  
 ○かざあり 氣骨が  
 あつて。  
 ○絶えはてたる事  
 も 中絶した儀式。  
 ○上人 殿上人。  
 ○長講堂 京都六條  
 西洞院にある。長講  
 堂御影堂ともいふ。  
 もとは律宗今は浄土  
 宗。  
 ○導師 法會に多く  
 の僧侶の首班となつ  
 て儀式を行ふ僧。  
 ○中殿 清涼殿。  
 ○關白殿 良基。  
 ○上 後光嚴天皇。  
 ○せちに 切に。  
 ○仰事 救命。  
 ○題を出させ 御歌  
 會の歌題を出され歌  
 の序文を作らせられ  
 れた。

まざまのものを賜はりて、やがて歸させ給ふ。年の末に義詮の子いとけなきを、五位に成させ給ひて、名をも内の上の附けさせ給ふ。義満とぞ申し侍る。二條殿は武家に睦まじうせさせ給へば、此の大殿の取り申させ給ふによりてとぞ、聞え侍る。年改まりて、やぶしわかぬ春の光ののどけさなれど、とりわけて百敷の内は、何事もはえなくしう、萬珍らかなる様なり。帝はた御かたちのめでたき事は更にもいはず、御才もたらひ給へるに、御心ばへもかどありて、折々の儀式なども、むかしに替らず、あらまほしうもてなさせ給ふに、年頃世の亂れによりて、都の外の行幸に度重なりしかば、さやうの騒ぎにうち紛れて、絶えはてたる事どももあるを、口をしう思召されて、廢れたるをも興させ給はむの御志深かりければ、古きに歸る御代とならむ事をぞ、上人なども願はしう思ひ居たり。彌生に長講堂に行幸させ給ひて、御讀經あり。良憲法印慈照僧正御導師にて参る。上達部殿上人あまた仕うまつり給ふ。いみじう尊き御事に侍り。三日まで坐してなむ還らせ給ふ。今年中殿にて、歌講せられむ事を思召したたせ給ひて、人々にも仰せられしに、關白殿きかせ給ひ、此の事は古有りつる事なれど、事にふれて、よからぬ例なんどもあなれば、いかがはあらむと、思ひ悩み給へど、上の一筋に思召しよらせ給ひて、せちにのたまはせつるを、武家さへ此の道に心よせて、うけひき奉りしかば、事なりて、三月二十九日とぞ定めさせ給へり。仰事にて、關白殿題を出させ給ひ、序をもつかうまつらせ給ふ。仲光の辨は

○奉行 ある事務を  
 専ら執り行ふ人。  
 ○殿 二條良基。  
 ○畫のおまし 畫の  
 御座。清涼殿で天子  
 の常におはす所。  
 ○家禮 家人。  
 ○帶刀 春宮坊に所  
 屬した侍衛の士。  
 ○處がらの目うつし  
 場所柄が目につく  
 る感じもちがふ。  
 ○右の大臣 西園寺  
 實俊。  
 ○讀師 御歌會の懷  
 紙短冊を整理し吟詠  
 をする役。  
 ○講師 御歌會の詠  
 歌の下讀をする役。  
 ○かたき文字 漢文  
 ○實遠 季雄の子。  
 ○懷國 親尹の子。  
 ○爲邦 爲冬の子。  
 ○しぞき 退き。  
 ○御製 後光嚴天皇  
 の御製。新編古今集  
 に出てる。  
 ○もこつえ 本の方  
 の枝。

奉行にて事行ひ給ふに、公卿の御座などをば、殿ぞ御覽じ入れて定めさせ給ふ。御しつらひ、いと清けにしなして、畫のおましの上には、御劍御硯の箱を置かれたり。人々の御よそひ、いとさわやかにて、ひきつゞき給ふに、義詮参り給へば、家禮の人はみな庭に下り給へり。帶刀よりつぎ／＼従ふ者は、猛きもの、ふなれど、今日はなよらかなる狩衣姿、あるは直垂など著たるは、さのみ恐ろしうも見えず、あらまほしけなるは、處がらの目うつしならむかし。御前に事始まりしかば、右の大臣は讀師にて、近く侍ひ給ふ、講師は仲光なり。又序をも講ぜらるべしとて、召しありて、時光参り給へり。序はかたき文字どもにて、聞き置く事も侍らねば、歌ばかりを申し侍る。題は花多春友とかや聞え侍り。殿、つかへつ、よはひは老いぬ行末の千とせも花になほや契らむ  
 けふにあふためしを花のさかりにて千代までちぎる行末の春 實 遠  
 我が君の千代のかざしと見るからに今日こそ櫻いろもそひけれ 懷 國  
 八千代へむ君に相生の花のえだは風もならさぬこゝのへの春 爲 邦  
 あまた侍れど、同じ筋なる事に侍れば、うるさくてとゞめ侍る。事果てて講師などしぞきぬれど、猶人々さぶらふ。御けしきにて、殿は講師の座に著かせ給ふ。時光の中納言は、御製の講師つかうまつり給ふ。  
 咲き勻ふ雲の花のもとつえに百代の春を猶やちぎらむ



- 三條大納言 實知
- 宰相中將 忠季の子實綱。
- 兵部卿 兼高の子兼親。
- 右衛門督 利時。
- 成方 綾小路三位
- 宗泰 權中納言宗重の子。
- 又の日 翌日。
- 心ざま云々 心掛けも非難の少ない。
- 氏満をすゑて 鎌倉の管領にして。
- 意願 上杉憲房の子。
- 比叡と奈良 延暦寺と興福寺。
- 第二の日 最勝講の二日。
- 同じ月 八月。
- 二條殿 良基。
- 鷹司の大臣 冬通
- 西園寺 實俊。

其の後御前の御遊び始まる。三條大納言笛、宰相中將和琴、兵部卿筆篋、右衛門督笙、公全琴、拍子は成方の三位宗泰のこと加へて、とり／＼につかうまつり給ふ。いとおもしろき夜の御遊びにて、明るくもしらぬばかりなり。人々は又の日ぞ罷で給ふ。此の日しも天龍寺焼けぬとの、しるにぞ、さればよとうちかたぶく人もありつれど、俄にとゞめさせ給ふべうもなければ、日たけてぞ事ども始めさせ給へり。四月には、鎌倉なる基氏身まかりぬと、京に告げたりければ、武家にはいと淺ましき事と思ひ歎きけり。二十八とかや聞え侍る。心ざまもけしうはあらざりしかば、なべて世にも惜しみあへり。聽て子なりける氏満をすゑて、憲顯後見しつ、關の東をば鎮め侍る。八月に最勝講行はるべしとて、處の僧召されけるに、三井寺は南禪寺の事によりて、此の頃うたへ文をも捧げつれば、此の度はまかづる事もせざりける。比叡と奈良より参りたるに、第二の日なむ、思ひかけぬいさかひ出で来て、衣引きやりぬるのみにあらず、いとらうがはしう争ひたちて、法師原はそこなはれたるも數多ありて、かたみに旬り騒ぐにぞ、そこらつどひ給ふ上達部も、淺ましき事におほいて立ちまよひ給ふ。上は驚かせ給ふ事もなく、いとよく思しのどめさせ給ひて、終りの日まで、ことなくはたさせ給へり。さばかりのどよみに、君達を初め五位六位までも、一人あやまちしたるなきをぞ、珍らかなる事に、後までもいひ侍り。同じ月二條殿は關白を辭し申させ給へば、鷹司の大臣なり給ふ。西園寺の大臣も同じごと辭し

- 三條大納言 公忠
- 例ならぬ様 病氣に罹つて。
- 頼之 細川右馬頭頼之。
- 昔の跡云々 尊氏を等持院に葬つた先例によつて義詮も同所に葬る。
- 送りの人 葬送の人。
- 尊氏の折 尊氏逝去の時從一位左大臣を贈られ義詮天恩に感じて「歸るべき途しなければ位山のほるにつけて濡る、袖かな。」と奏した事。
- 上例ならず云々 後村上天皇御不例。
- 御子 寛成親王。
- 長慶天皇。
- 宮寺内院云々 神
- 社佛閣の領地や天皇
- 上皇の御領地。
- むらい 無禮。

申し給ふにぞ、二條の師良の大臣右に移り給ひ、三條大納言ぞ内の大臣と申しき。皇后宮の御はらからにいまししかば、上もとりわけむつまじう思召さる、によりてとぞ、人申し侍る。此の頃義詮は、例ならぬ様にて、政も堪へ難くしつ、義満のいとけなきに譲りて聞え、頼之といへる者を後見にて、事どもした、めさせたり、義満は左馬頭にぞなり侍る。十二月ばかり、義詮ははかなくなりたり。三十八になりしかば、いまだ盛りの程なるをぞ、惜しう悲しう思ひ給ふ人多かりき。昔の跡を追ひて、等持院に收め侍り。送りの人々は、所せきまで集ひたり。晦日には敕使ありて、左大臣從一位の位を贈らせ給ふに、そのかみ尊氏の折、「上るにつけて。」と奏したりしを思召し出されて、上もいみじうしほたれさせ給ふとや。頼之はをさなき人を育てて世をまつりごつに、夢ばかりのひが事なく、君を敬ひ民をあはれみしかば、此の時ぞ豊かなる世とはなり侍る。又改まりて、次は應安元年と申しき。二月才ある僧を二人、唐土へ遣はさせ給へり。芳野殿には、今年ぞ正平二十三年と聞え侍り。春のはじめより、上例ならず惱ませ給ひて、御心細う思召されけるに、つひにはかなくならせ給ふ。いふかひなく思ひ惑ふ人多し。やがて御子をぞ位に即け奉りて、先帝をば後村上院と申し奉る。京には頼之がはからひにて、宮寺内院などのしらせ給へる處々、武士どものおかしかすめ奉る事をぞ、嚴しく制し聞えし。扱なむ、むら



- 宣下 將軍任命の宣旨の下ること。
- 法師原 延暦寺の衆徒。
- やがて歸らせ 間もなく御輿は、祇園社からお歸りになった。
- 芳野殿 南朝。
- 武藏守 頼之。
- 氏清 山名氏清。
- 内 後光厳天皇。
- 御子の御袴著 皇子緒仁親王始めて袴をめさる、儀式。
- 譲り聞え 御讓位にならうと。
- 先帝 後村上天皇
- 正儀 正行の弟。
- はやりかなる心 血氣にはやる心。
- まめやか云々 真心こめた救説。
- 矢猛心 血氣にはやる心。

いの罪にあたる人も稀になり侍りき。十二月義滿に、征夷將軍の宣下あり。年は十一とぞ聞え侍る。明けぬる四月には、山の衆徒ども、日吉の御輿を内裏にふり捨て奉りて、都の内に火を放たむとし侍りしを、崇永入道といへる武士の、いみじう防ぎしかば、法師原は山に歸り侍りて、御輿をば祇園の社に入れ奉りしも、やがて歸らせ給へり。今年もいとと暮れて、應安も三年になりぬ。芳野殿には改まりて、建徳元年と申し侍る。そなたさまの軍また起り侍りければ、頼之みづから向ひぬるにぞ、程なく治まりて、武藏守は歸り上りつゝ、氏清といへる者をとめて、河内國を守らせ侍り。次の年と春の始めより、内には御子の御袴著の事、思召しいそがせ給ふ。彌生十五日にぞ其の御事あり。二十日には親王になし奉らせ給へり。うち續き御元服の儀もありて、こよなくおとなびさせ給へば、上は嬉しと見奉らせ給ひて、今は世をまつりごたせ給はむにも、うしろめたき事なく思召さるゝにぞ、譲り聞えさせ給はむ事を、ひたすらに急がせ給へり。芳野殿には、先帝の御代過ぎつる正平の頃、正儀参りて、軍をおこして京を攻めむ事を奏し申したりければ、上も御けしきいとよくてあらまほしき事には思召されしかど、はやりかなる心にまかせて、あやまちや有らむと、覺束なく思召されつゝ、なだらかなるさまにもてなさせ給ひて、「とまれかくまれ、其の身の全からむ謀をなして、行末ながく二心なからむこそ、こよなく嬉しからめ。」と、まめやかなる御事どもの多かりしかば、さばかりの矢猛心にも、いみじうあ

- 父 楠正成。
- すかされ奉り なためられ申して。
- 寛成の親王 長慶天皇。
- 筑紫の親王 懷良親王。
- かしこ 唐土。

りがたくなしく覺えて、涙もせきあへぬばかりにてまかで侍り。今年ぞ父が三十三年にもなり侍りしかば、命を限りの戦ひをもなして、手向にもと思ひ立ちたりしに、思ひの外にすかされ奉りて、いたう心も弱りつゝ、軍を出さむ事はとまりて、城を守りてぞるたりける。其の後上もかくれさせ給ひしかば、寛成の親王御位に即かせおはしまして、昔の御掟のまゝに、人々もつかうまつれり。筑紫の親王は、菊池ぞうしる見奉りて、猶御勢ひもいかめしかりければ、京にもあなづりにくくてぞ思ひ奉る。又此の親王は唐土へも使を遣はして、文にも日本國王とかかせ給ひ、かしこより京へ奉る使をも、つくしにてとめて給ひて、やがてかへりごとをもつかはし給へりとなむ。



卷第六

後圓融院

- 崇賢門院 仲子。
- 四辻大納言 贈左大臣藤原兼綱。
- きびは 幼稚。
- 先の帝 後光嚴天皇。
- おりのなむこ 御退位にならうご。
- 伏見殿におはします院 光明院。
- 榮仁親王 崇光院の皇子。
- 頼之 管領細川頼之。
- 今の院の上 後光嚴院。
- 當代 後圓融天皇。
- 伏見殿 光明院。
- 院をもうごく 光明院と後光嚴院との御間柄疎遠に隔たつた。
- 將軍 足利義滿。時に年十三。
- 直常 桃井播磨守

百代の帝は、御諱緒仁と申し奉る。後光嚴帝の一の御子にて、御母は崇賢門院、四辻大納言の御女ぞかし。應安四年禪を受けさせ給ふ。御年十四とかや。猶きびはに坐せばとて、院の御前にて政をさせ給へり。此の頃の關白と申すは、二條師良の大臣にて侍る。先の帝おりのなむとせさせ給へる頃、伏見殿におはします院は榮仁親王を御位に即け奉らまほしくおほしめされて、頼之がもとに仰せ下されしに、今の院の上も、當代の御事を、頼之にとり申すべくこまやかに仰せられたりければ、何れを何れとわきがたかりしに、いかゞ思ひけるにや、かく定まらせ給へば、院は御心おちるさせ給ふに、伏見殿にはいと口をしよう、世をも恨めしくおほしめされて、おのづから院をもうとくおほしめし隔てけるより、いつとなく御中もそはくしうならせ給へり。さるは上の御年ねびさせ給はぬのみにもあらず、將軍とておほやけの固めなるべき人さへ同じ程なる齡なれば、世の中いとうしるめたきをも、頼之よくおもひはかりて、政もすなほなりければ、治まりぬる國々多くなれり。越路なる直常も勢ひ衰へて、かしこの國人は、都になびきたり。此の頃丹波國の民

○左馬頭がり 左馬頭の許に。足利義滿從五位下左馬頭であつた。

○かやうのはなぐしき云々 丹波の人民が將軍に面會するなどは決して出来ない身分だから。

○物かづけ 纏頭を賜はる。

○なりはひに云々 生業にもたよりになる位。

○二條の前の大殿 良基。

○頭は頼之を云々 義滿は管領細川頼之を勸當する事をいひ出したので頼之は仕方なく繁居謹慎してゐた。

ども、根芹をうるはしき籠に入れて、さ、けつ、左馬頭がり來りて門に立てり。下衆などは、心もえず怪しと見けるに、後見なる頼之來り進みて、いといたう悦びつ、館の内によび入れて、頭にもかくときこえければ、やがて對面して、さる鄙の住居に年へける身の、かかる事をさへしりつる事のいみじさを、返すく聞えけるに、かやうのはなぐしきまじらひなど、かけてもすべき身ならねば、たゞ夢の心地して、いひいでむ言葉も、口ごもりつ、わな、くさまながら懐にもたりける歌を、御まへちかくさし置きたり。取りて見るに、

君が代のゆたかにすめる政ながきねぜりの恵みなるべし

よからねど鄙びたる心どもにて、せちに思ひよりけむ、しばしも深き深田に下り立ちて、求め出でけむ程しるく見えて、人々いみじくけうじあへり。杯さし出し、物かづけなどして、此の後なりはひにもたつきあるばかり、町々の田をさへよせられしかば、賤の男どもは、歡びにたへず、涙おし拭ひてまで侍る。この事はいみじき幸ひなるとて、内にも奏し奉りつ、獻芹の慶賀といふ事を行はむとす。上も聞かせ給ひて、めづらかなる事に思召されける。其の日になりては、二條の前の大殿ぞ、御使にて參り給ふ。引きつらねて、上達部殿上人つどひ參り給へり。又いかなる折にか、頭は頼之をかうじの由いひ出でたるに、せむかたなくて籠りたり。したしき人々、さまざまにいさめ聞ゆるにも隨はず。二



○芳野殿 長慶天皇  
 ○さきんくの云々  
 後醍醐後村上二帝が御志成らず遺憾に思召された御宿望を遂げられるのは誠に困難なり。  
 ○筑紫の親王 懐良親王。  
 ○いつまで草 きづたの異名で、何時までと続ける序。  
 ○うんじ 倦ず。いやになる。  
 ○中務の親王 宗良親王。  
 ○御莊云々 石清水八幡に社領として莊園を寄進した。  
 ○氏の御神 足利氏は源氏で八幡を氏神とした。  
 ○芳野の上 長慶天皇。  
 ○熙成 後龜山天皇

條の大殿さへねんごろにはせ給ふ事のありしをも、開き入れぬさまながら、子なりける頼元をぞ、からうじてゆるし聞えつれば、参りたるに、頓て後見すべく定めたり。父は猶いぶせきさまにてるたりけるが、忍びて丹波國に下りて、かすかなる住居をぞとしける。芳野殿は年月の過ぎ行くまゝに、古き宮人どものかくなりぬるにも、御心細う思召さる、につけては、さきんくの口惜しくも過させ給ひし御志をつがせたまはむ事のいとかたくもかなと、思召し歎かせたまふ。筑紫の親王も、いつまで草に、世をうんじたまひつ、秋の頃、中務の親王の御もとに、文奉り給ふとて、

日に添へて遁れむとのみおもふ身にいとゞうき世の事しけきかな

いつしか芳野殿の建徳も、三年の春にもなりしかば、都は應安五年とぞ申し侍る。去年の冬より、石清水の社造らるべきなりと聞きしも、事成りぬれば、武家よりあらたに御莊などよせ奉りたり。氏の御神なれば、殊更に仰ぎ奉るなるべし。芳野殿には、年の名も文中と改めさせ給へり。年歸りて水無月の頃、唐土の帝の使とて、僧二人京に参りたり。嗟峨におかせ給へり。かしこよりの使は、さきんくも参りつれど、筑紫にてとゞめられて、京に到らずと申し侍るにぞ、おほやけにも、武家にも驚きて、いと淺ましき事に思ひ給ふめり。八月に芳野の上は、御弟の熙成と申し奉るに、御位を譲らせ給へり。御位におはします程も、いくばくならぬを、俄にかく定めさせ給へるをぞ、上人もあわたゞしき事に思

○今一度云々 今一度王政を復古して先帝の御業を慰めよう心強く思召された事も月日のたつと共に覺束なくなつてゆくのを悲観されたのであらう。  
 ○氏滿 關東管領足利基氏の子。  
 ○院の御前 後光嚴院。  
 ○二條の前の大殿 良基。  
 ○武藏守 細川頼之  
 ○中將 左近衛中將 足利義滿。  
 ○院の上 後光嚴院

ひ奉れど、今一度と強う思しめされつるすぢの、月日に添へて心もとなくなりゆくにぞ、おほくは世をも思ひ捨てさせ給へるなるべし。やがて御ぐしおろして、光嚴院の法皇の御跡を慕はせ給ふとかや。國々をめぐらせ給はむとて、忍びて芳野を出でさせ給へり。九月には唐土の僧も、都を出でて、國に歸り侍り。義滿は左馬頭をば鎌倉の氏滿にゆづりて、みづからは参議にて左中將になりたり。院の御前、今はのどやかにおはしけるまゝに、歌の道にのみ、御心を入れさせ給ひて、宮人にも十首歌つかうまつらせ給ひ、御みづからもよませ給ふとて、紅葉春にまじはるといへる事を、

染め残す色かあらぬか松がえのみどりをかはす木々のもみぢば

人々もおもひよりつゝ奉りたまふ。夕に紅葉を折るといふ事を、二條の前の大殿、

あかなくに猶かざしてや歸らましかけふも暮せる山のもみぢば

初めて紅葉をみるといふ事を、爲遠の大納言、

おなじえをわくぞとばかり知らるゝや染めあへぬ色の秋のもみぢば

十二月、武藏守再び都に出でて仕ふべしと、義將を使にていひやりたるに、固くいなみ申ししを、しひていざなひ聞えければ、遁れがたく、うち連れて上りぬ。中將まちとりて悦び給へば、別れし春の恨み残すまじうむつましけにて、又後見つかうまつれり。今は相摸守とぞ申し侍る。應安も七年になれり。睦月の末、院の上惱ましくせさせ給へりと聞え



- 内 後圓融天皇。
- こちたき 甚しき
- 幣使 奉幣の爲に神社に参向する敎使
- 上 後圓融天皇。
- うしろめたく 後の事御氣が、りに思召され。
- 歸らせ給ふ 後圓融天皇が上皇の御所から還御になるに。
- 見はてぬ夢 崩御をいふ。
- いちはやき御事 早くも崩御になった事を。
- 中將 足利義滿。
- 山名 山名師氏。
- 赤松 赤松顯則。
- 後村上院の御子 良成親王。
- 征西將軍 西國九州鎮撫を掌る臨時の職。
- 二所ながら 懷良良成の二親王。

ければ、内にも驚かせ給ひて、こちたき御祈りせさせ給ふ。幣使御誦經の使などは、足を空にてまどひ参る。行幸もあり。武家の人々もつどひ参りたり。院も上のまだ若うおはしますを、心ぐるしう、うしろめたく思召されつゝ、よろづの事を聞えさせ給へど、物もおほえさせ給はぬ御様に、いみじとのみ思し入りたるを、ことわりになしう見奉らせ給ふ。限りあれば歸らせたまふにも、いと哀れにぞ御覽じやらせ給ふ。内よりはいかにくと、御使は雨の足よりしけし、終に二十九日にぞ、見はてぬ夢の御かなしみ、誰もくしづみ入らせ給ふ。御位の始めの程は、世の中みだりがはしくて、御心ゆるびなう思召されしに、此の御代よりぞ、世も治まりて民の心もおちるぬるやうなれば、又なき聖の君なりと、あまねく仰ぎ奉りしに、いちはやき御事を、惜しみ奉らぬ人なし。三十七にぞならせ給ふ。内も諒闇とて、おろしこめられぬれば、雲の上人なども、墨染に裏れぬるは、物のえなき春なりき。武家には、今年筑紫の菊池を討たむとて、中將出で立ち給へり。去年よりさる心がまへして、國々の兵召しに遣はしたれば、うち羣れて参りたり。東より上りたる朝房といへる者をとめて、都を守らせ、其の外の處々をも、まもりきびしくすゑたり。三月に都を出でつゝ、山名赤松などいふ者を先に立てて、十萬の師をひきゐりて下り給ふ。筑紫には、建徳の頃、芳野殿より、後村上院の御子征西將軍にて下らせ給ひ、懷良親王の御子にならせ給へば、二所ながら菊池が館に坐す。こたびも御子の將軍の宮を大將

- 鑿鼓 戦ひの相圖に用ゐる太鼓。
- 師氏 山名時氏の子師氏。
- 顯則 赤松則村の孫顯則。
- しぞきたり 退きたり。
- 御心地そこなはれ給ひ云々 御病氣になられてその御全快までは。
- 都の人云々 九州の人々が都方の人に欺かれて皆足利方に随つた。
- 始めこそ云々 陣伏を勧められて始めのうちは如何しようかと思踏したが遂にそれもさうかと思惑して。
- しるよしして 所領として。
- 都に歸り 義滿が都に凱旋した。

軍にし奉りて、手分けなどしけり。都の軍も海山二手に分れて、旌旗天を掠め、鑿鼓波にひゞきて、競ひ到れり。宮の御方は、武教を大將にて、長門國にうち出でて戦ひしに、京の方なる師氏は打負けぬるにやと見えけれど、赤松は勢ひいみじけにて出で來れり。菊池また危しと見えけるに、宮は錦の御旗日にひらめきて、山陰より出でさせ給へば、從ひ奉る猛男どもの勇み進みたる有様に、師氏顯則が陣、みな亂れて引きしぞきたり。宮の御方の人々は、ほこらしけなりけれど、宮すこし御心地そこなはれ給ひしかば、つくろはせ給はむ程は、引入りて宰府にぞ、人々もるたり。其の後も處々に戦ひもありつれど、はかばかしき事もなかりけるに、國民どもの、都の人にかされて、そなたさまに隨ひ参りしかば、こなたの勢ひうすくなり行くやうなるにぞ、菊池も今は戦はむ事もよしなしとて、城に籠りけり。都方にはしひて滅ぼさむとも思はず、「執ねき仇かたきにしもあらぬを、心とけて従はむには、國をもめし放たておきなむ。」と、こまやかなる文して、いひやりけるに、始めこそいかにせむとやすらひつれ、遂にさもやと思ひ弱りて、幼き子を中將の方に参らせて、隨ひぬべきけしき見せたりければ、事なくて治まりき。菊池は其のまゝ筑後肥後國をしるよしして、其の外の國々をば、人々に分ち給ふとて、日向を伊東、筑前肥前を少貳、豊後を大友、長門豊前を大内と定め置き、神無月にぞ都に歸り入り給ふ。其の後はいづこの國民も、心を傾けて、武家の掟に従ひつゝ、都につどひ参り、治まれる世をぞ



○永和 北朝應安八年二月改元。此の年五月南朝文中三年天授改元。  
 ○中將 足利義滿。  
 ○院の御はて 後光嚴院の御一周年。  
 ○主基 大嘗會の時天皇が御親祭になる西の祭場。  
 ○備中國松山 大嘗會の神饌とする穀を奉るに卜定された國郡。  
 ○十返りの花 松は千年に十度花咲く云つて祝賀の意にいふ。  
 ○四辻殿 兼綱。  
 ○關白殿 師良。  
 ○致仕の表 辭表。  
 ○九條の右の大臣 藤原忠基。  
 ○二條殿二人 良基師良の三人。  
 ○九條殿 經教。  
 ○近衛殿 道嗣。  
 ○鷹司殿 冬通。

ことぶきける。又元を改めて、永和と申し侍る。四月に中將内に参り給ふ。院の御はても過ぎて、世の中色あらたまりしかば、大嘗會をも行はせ給ひぬべう奏し給へるに、内にもよろこばせ給ひて、あるべき事ども、おきてのたまはせたり。十月豊の御被ありて、十一月にぞ大嘗會とて、忠光の大納言主基方屏風の御歌つかうまつり給ふ。備中國松山、十返りの花咲きぬらしまつ山の梢をたかみつもる白雪  
 世の中さわがしかりしによりて、年を越えて音なかりし事の今年ぞおこなはれぬるを、公にも武家にもうれしき事におほいたり。此の頃中將の家に、君達集まりて、歌よみ給へるに、四辻殿、

みな人の心もみがけ玉鉾のみちあるときと曇りなき世に  
 爲遠の大納言は、内に百首歌奉るとて、

末遠く猶こそあふけ敷鳥の道よりひろき君のめぐみを

上は撰集の事おほしめしよりて、六月の頃、此の大納言に敕ありしとかや。十二月、關白殿致仕の表奉り給ひけるにより、九條の右の大臣、左に轉りて關白せさせ給ふ。二條殿の御弟師繼の大納言は右の大臣にて、近衛の大納言ぞ、内の大臣と申し侍る。此の時前の關白と申しましては、二條殿二人、九條殿、近衛殿、鷹司殿五人まで致仕の大臣坐しけり。芳野殿には、又年の名も改めさせ給ふ。次の年をば天授二年と申せば、京には永和

○直冬 足利右兵衛佐直冬。  
 ○探題 九州の探題九州の鎮撫裁判士貢から外使の應接も掌る役。  
 ○犬追物 馬場を竹垣で圍つて犬を放ち走らせて騎射する武技。  
 ○殿作り やかたを建てること。  
 ○中將 足利義滿。  
 ○司召 在京の諸官を任命する式で京官除目も秋除目もいふ。  
 ○こたびも云々 此の度も前に惜れた心から。  
 ○さし加へむ 加勢しようこ。  
 ○子一つ 子の刻の一點。  
 ○人わろき 人前でさまりのわるい。

二つにぞなり侍る。正月、さきの御代に唐土へつかはしつる僧、かへり参りて、かしこの帝にまみえて、詩をも作りかはしたりとぞ申し侍り。此のころ直冬は、石見國に在りけるが、昔のあやまちを悔い思ひて、京に隨はむといひおこせたりければ、ゆるし聞えて、其の國にぞ置けり。又の年高麗百濟とかやいふ國より使來りつれど、京まではまうです、筑紫にて、探題に逢ひてぞ歸りける。次は永和四年と申しき。三月、武家には犬追物といふ事なむ催し侍る。これは往昔、鎌倉なる頼朝の大將など、あまたたびせさせつる事にて、武士の翫びなる事なれど、近き世には絶えはてたりしを、こたび興しけるとなむ、いみじうけうある事とぞ人申し侍る。同じ月、室町なる處に清らなる殿作りして、中將移ろひ給へば、やがて室町殿とぞいふめり。秋の司召には右大將になされき。冬の頃、紀路河内路などに、芳野殿の軍起りたりとて、京より氏春を遣はしけるに、さきくもかやうにうち出づる事はたびくありつれど、さのみ心こはきふしもなく治まりぬれば、こたびもさる心ならひに、何ばかりの事かあらむと、あなづり聞えて、思ひの外に打負けぬれば、又都よりさし加へむとて、兵あまたおこせて城を圍ませはべるに、城のつはもの、此度はこなたよりいでて、子一つばかり、忍びて陣の中にいりつ、夜深き松の風にきほひて、関作の聲の、いとすさまじきに、火をさへさしつれば、思ひかけぬ事に心地まどひ、唯物にぞあたる。からうじて身を遁れぬるも、人わろき様なり。芳野殿の方はいとく引返して、



○したりがほ 得意な顔つき。  
 ○大將 右大將義満  
 ○早馬 早打の乗つて馳せる馬。  
 ○おもひやすらひ ためらふ。  
 ○まめご云々 信じられなかつたのにいよゝ事實と確かになつた。  
 ○さきの人々 前回の人々、氏春以下の人々をいふ。  
 ○思ひよる方こみ 策謀が常人と異なつて。  
 ○腫へる氣色云々 少しも都方に降参した様子がない。  
 ○伊さ くやしき。  
 ○いかにも云々 敵方が困り果てる位のうきめを見せてやらうと。

明け行く空には音もなし。京の方には口惜しうもはかられぬると心やましくて、今一度と心をおこして、戦ひをなさむと用意しけるに、城の兵どもは、如何思へるにや、夜にかくて、まぎれ出でつ、芳野殿にぞ参り侍る。京の方にはしたりがほに、勝ちえたる様してかへり参りたり。大將も氣色いとよくて、みな召し出でつ、物賜はむとしける程、又河内より楠出でたりとて、早馬きたれり。京なる人々は、信じ難くて、おもひやすらひけるに、二日三日の中に、まめごととぞなり果てたるにぞ、大將もやすからず思ひて、みづからうち出で給ひしを、頼之あながちにとゞめ申しけるによりてなむ、さきの人々のみ向へり。十二月より、千劍破の城をかこみて、攻め戦はむとしけるに、正儀は謀いみじき者なりければ、思ひよる方ことにて、やがて年頃の罪を詫びつ、武家に隨はむ事を、人していはせければ、都の兵どもは、京に告げてこそとて、云ひやりたるに、おほやけにも武家にも、いとよき事なりとて、關のあなた西の海のはてまでも、告げやりなどして、よろこびにたへぬ様なりき。正儀は此の日頃に、戦ひをなさむ心がまへどもいみじくして、ゆめ隨へる氣色もなきやうなるにぞ、京の方には、欺かれぬる事の妬さいはむ方なくて、身を捨ててもと思ひなりつ、城に近づきよれど、又いかなる謀やあらむと危きに、煙も絶えつ、人音もせざりつれば、なほくあやしくて、進み難く、唯いたづらにまもりけるが、いかにもく佗しと思ふばかりの目見せてむとて、粟などを城の中に運び入る、道に

○朝け夕け云々 朝夕の食事のたまりもない様。  
 ○空事 虚事。  
 ○ほかけ 火影。  
 ○てうじつめけ 點じつめけた。  
 ○さは云々 さては城の兵が逃けてゆく追ひうたむも由なし 追撃するのまつまらぬ。  
 ○康暦 北朝永和五年三月改元。  
 ○義理 山名時氏の子。  
 ○氏清 義理の弟。  
 ○氏満 足利基氏の子。  
 ○能意 上杉憲顯の子。  
 ○まほなる人 まじめな人。善い人。  
 ○頼之 細川頼之。  
 ○事のたがひめ 行きがちがひの事があつて、義満の左右の臣下に嫉まれて讒言されたのである。

こなたより人をすゑて、きびしく守らせつ、朝け夕けのたつきなからむ様に構へたり。かかれば正儀もたはぶねにくく思ひて、例の空事かまへ出でたり。和泉の方なる山に人をやりて、篝を焼かむ事をいひあはせつ、城よりも兵ども忍びて出でつ、近き山に篝火あまた焼かせて、金剛山にわけ上るやうに見せけるに、ほかけいと多く、てうじつめけたり、圍み居つる者どもは、「さは城の兵落ちぬなり。」と、ひしめきける程に、また和泉の方にも、数々にともしぬるを見て、「大和路を越え行くなめれ、追ひうたむも由なし。」といひるたり。篝火ともしたる者どもは、峯傳ひして、とく城の中に歸り参れり。猶深くはからむとて、旗をも捨て置きければ、京の兵は露疑ふ心なく、よろこび合ひつ、歸り参りぬ。次は康暦元年とぞ申しき。睦月に義理氏清は、紀路なる軍どもを亡ほして、城をも落し侍り。きさらぎの頃、鎌倉の氏満は、敵になりて都を攻めむ事を思ひはかりける。後見なりし能意も失せにしかば、弟の憲春ぞ事行ひけるが、いみじうあるまじき事と、諫めぬるをも聞き入れて、ひたすらに思ひよれば、憲春せむ方なく思ひ餘りて、自害して失せぬるにぞ、氏満も驚きて、わろき心をも改めて、まほなる人にぞなり侍る。後見には憲春が弟の憲方をなむす忍けり。閏四月十日あまり、都の内いみじう物騒がしくて、室町殿に兵あまた参るにぞ、内にも公卿上人さぶらひて、御輿をさへよそひて、待めくものは、御門を固めたり。されどことくしき事にはあらで、武家の後見なる頼之、事のたがひめありて、



○横さまの罪 寃罪  
 ○一つ門 一族。  
 ○かしらをもおろして 剃髪して。  
 ○義將 斯波高經の子。  
 ○九條の關白殿 忠基。  
 ○二條の大臣 左大臣師嗣。  
 ○大將 足利義滿。  
 ○うしろめたき心 後々らしい心。不安に思ふような心持。  
 ○はづがむ 事實を曲げていふ。  
 ○故院の御七廻り 後光厳の御七周年。  
 ○法華懺法 法華を誦して罪障を懺悔する佛事。  
 ○先の聲 警蹕の聲。  
 ○准后 三宮に准じ年官年爵を賜はつた人、二條良基。  
 ○華鬘 佛前の戸張につける裝飾。

横さまの罪にあたり。武家より使を遣はしつ、一つ門うち具して阿波國に下るべし。』  
 といはせたり。頼之はあぢきなき世を見る事の悔しくて、うち涙ぐみたるに、使もいと哀れとぞみける。其のま、にかしらをもおろして、なくく下りぬ。義將なむ後見にはなり侍る。九條の關白殿も、致仕の表奉り給へば、二條の大臣かはりになり給ふ。大將は猶怒りにたへずやありけむ、頼之入道を失ひてむと、思ひより給へり。されど此の人は昔よりうしろめたき心つかふ事もなくて、世をまつりごつ程も、うちほ、ゆがむ事露ばかりもなかりしかば、終は心もとけて、罪をもゆるしつ、四國の總管といへるにぞなし給へり。  
 又の年陸月の末、内には故院の御七廻りにあたらせ給へば、御佛事あるべく仰せられて、急がせ給ふ。法華懺法といふ事行はせ給へり。仁壽殿にて此の事あり。二十九日より七日が程せさせ給ふ。その日になりては、公卿殿上人處せくつどひ給ひて、陣のあたりは、人しけう立ちまよひ、馬車は道もさりあへず。たてつゝけたり。大將も参り給ふ。今日は殊更に心づかひして、直衣指貫のいろあひはなやかなるに、容もうるはしくけだかくて、近衛の大將などいはむに、にけなからず、隨身どもは烏帽子に色々の狩衣きて、先の聲ことごとしう追ひたり。又杵太刀などの役人にや、こきうすきさまの狩衣姿あまたいみじうさうぞきたり。女房臺盤所の御簾あけて入れ奉る。又准后参らせ給ふとて、人々はしりちがふ。議定所八間をとりはらひて、御しつらひあり。はた華鬘を掛け渡して、佛の御飾

○上 後醍醐天皇。  
 ○母屋 寢殿の中央の間、廂の内側。  
 ○地下 昇殿を聽されない者。  
 ○伶人 奏樂の人。  
 ○時なりて 定め時刻になつて。  
 ○今参 新参。  
 ○盤涉調 十二律の一調子。五音の羽にあたる。  
 ○准后 二條良基。  
 ○宗明樂 舞のない盤涉調の樂。  
 ○追風 衣袖などの動くによつて起る風。  
 ○行道 列をなして佛像又は佛堂をめぐる歩く儀式。

りなどは、いひやらむかたなく、かゝやかしけなり。北の方の御簾の内に、上の御座をまうけらる。母屋のみすにそひて、公卿の御座あり。南の方を僧達の座とす。東の簀子は、臺上の樂人の座なり。此の前の庭に假廂をしつらひて、地下の伶人ぞさぶらふ。時なりていでさせ給へば、准后大將は、北の方の横座に著き給ふ。藤中納言と別當とは、西の方につき給ふ。處もせばしとて、僧達あまたも召されず。良憲僧正、長聖法印、房淳法印、良壽僧都、教圓僧都、忠兼僧都ばかりなり。臺上の樂人には、帥の大納言笛、今出川大納言琵琶、民部卿笙、室町宰相笛、宰相中將箏、楊梅の少將筆篋、此の外もあまたも侍りしかど、こまかにしり侍らず。琴はみすの内に加賀の局、今参の局なりき。みな座につき給ひて後、頭の中將参りて、御座の間の御簾なかば巻きあぐるに、盤涉調の物のね、いみじう吹きいだす。衣冠束帯直衣なる上人ども、かねの花籠に、花々の葩を盛りてもて参り、まづ佛の御前におく。又上の御前のは、左中辨持て参りたるを、准后御手をかけておかる。又准后よりつき、人々の御前に置きわたし、僧達の前にも置きたり。總禮の樂は宗明樂なり。つきくいとおもしろし。敬禮には准后大將、其の次みな禮拜あり。む月の末の程なれば、ほころびわたる梅の匂ひに、名香の薫もそひて、御簾の追風もいひしらすなつかしけなり。行道あり。准后みすをか、け給へば、上出御し給ふ。數珠と花とをもたせ給ひて、御經の段遊ばす。准后大將中納言別當みな花をもち、僧にまじりてめぐり給ふ。あ



○さうぞきて 裝束を著けて。  
 ○あかれ 別れる。  
 ○結願 満願。法會の豫定の日數が終ること。  
 ○御葩 散華。法會の時に撒き散らす紙製の花びら。  
 ○薄様 鳥の子紙の薄く漉いたもの。  
 ○初夜 戌の刻。  
 ○おしこり 集まり込みあふ。  
 ○らうがはし 亂れがはしい。騒がしい。  
 ○御ざうし 御曹司公達の部屋住居。  
 ○御まな 眞菜始めといつて小兒幼時の儀式。魚を含め食はせること。  
 ○檜破子 檜物作りのわりご。  
 ○火取 薰爐。  
 ○三具足 佛前の花瓶燭臺香爐。

はれ尊き御事に侍りき。事果てぬれば、明方ちかうなり侍るに、大將はつねの御所に召されて、みき賜はり給ふ。典侍内侍など、梅櫻の色々を折り盡したる衣ども、匂ひやかにさうぞきてさぶらひ給ふ。あけはててぞ、皆あかれ給へり。日々に尊き事の限りなるに、二月五日は御結願なり。今日は大将御葩奉れ給ふ。白がねこがね、又繪の葩うちませて、二百枚いと清けにしなされたり。薄様を敷きて、うち亂れの箱にもらる。古后の宮、女御などの御方より参らせ給へるには、かざり葩とて、馬車いろ／＼の物の形を作られしをこそ、またなき事にいひつるを、こたびのはさまことなる物かなと人申し侍り。今夜は雨すゞしうそ、ぎて、絲竹の音もしめやかなり。應安の例とて、まづ初夜行はれて後ぞ、上は出でさせ給ふ。女房達はいろ／＼の衣をかづきて、夜ごとに東の廂に二十人ばかりおしこりてゐけるに、其の外さま／＼の衣かづき、葩をあらそひとるもいとらうがはし。若き殿上人などは、花籠もちて参るも、とられじと心づかひしつるいとをかし。ほの／＼と明け行く空の霞のひま／＼、通ひくる風に、きほひがほなる物の音は、又なく身に入りて、そ／＼寒き程なり。よろづ大將のさたなりければ、さき／＼のよりは事加へて、いかめしき事となむ聞え侍る。大將の許より供御奉らる。此の頃御ざうしにてありしかば、今日はじめて御まな召さる、によりてとぞ、いろ／＼の檜破子、うすやう、火取けふそくなどなり。又さま／＼の寶物奉れ給ふ。こがねづくりの御劔、御小袖、金欄、白がねの三具足、

○かうのへそ 香色の卷子か。へそは續んだ糸を結びつけて球にしたもの。  
 ○あちあらそひ 分ち争ひ。  
 ○御子 御出家あつて周尊と云はれた。  
 ○室町殿 義満。  
 ○鹿苑院 洛外衣笠村。金閣がある。  
 ○春日の御櫛云々 貞治三年春日の御櫛を京都に入れたのが奈良へ歸られた。  
 ○よなき心 よくない心。悪心。  
 ○永徳元年 北朝康暦三年二月改元。

唐畫みふく、御前の分なり。准后の御前には、白がねの香爐、ほんにすゑて、色々の小袖なり。萬里小路中納言、藤中納言、新藤中納言、別當、冷泉の三位、みな小袖どもかづけ給ふ、女房達には御かうのへそ、色々の小袖あまたかさね、又うつくしき葩、人々こひ申し侍るによりて遣はし給ふ。別當中納言のかづき給ひし小袖どもをば、御湯殿の末にて、女官どもに賜ひしかば、あちあらそひてひしめきたり。いみじうもし給へりとて、人々ほめ聞えたり。水無月には光明院の上皇隠れさせ給へり。御子も法親王にておはしまししかど、さきだたせ給へば、此の御嗣ぎのおはしまさぬも、あへなき御事になむ。室町殿には、鹿苑院寶幢寺など建てられ侍る。十二月春日の御櫛かへらせ給ふ。藤氏の君達みな送り奉り給へり。久しう都におはしまして、内の上の御國讓の儀式なども延びぬる事は、此の御事によりて、藤氏の君達のつかうまつりにくくし給へればなむ、たゆたはせ給ひしなりとぞ、人は申し侍る。此の年の事にや侍らむ。此の國の僧如搖といへるが唐土にわたりて、胡惟庸とて彼の國の大臣なりし人に、むつまじうなれり。其の惟庸はよなき心ある人にて、國王を傾け奉らむとはかりつ、如搖を語らひて、日本の本の人千人をよばせて、おのれが許に隠しおきつ、行幸を催しけるに、帝おはしまさむとしける時、告げ知らせ奉る人ありければ、此の事かくれなくなりて、惟庸は失はれ、如搖は流されけりとなむ。その後は海つらに船を置いて、日の本の人をよせじと、守り侍りけるとや。又改まりて永



- 芳野殿 後龜山天皇
- 弘和元年 南朝天授七年二月改元。
- 室町の大將 足利義滿。
- 大きおとゞ 太政大臣二條良基。
- めやすき世 見苦しくない世。
- 中務の宮 宗良親王。
- のほらせ給ひ 宗良親王は、信濃から芳野へ御出でになつた。
- 翁さび 年寄りじみて。
- うへ 後龜山天皇
- 世をそむかせ 御出家遊ばされて。
- 氏清 山名氏清。

徳元年といふめれば、芳野殿にも改めさせ給ひて、弘和元年と申し侍り。三月に室町殿に行幸あり。庭に花の木あまた植ゑられしかば、さかりを御覽せさせむとて、催されけるとなむ。文月に二條の良基の大臣、太政大臣になり給へり。今出川殿内大臣を辭し申し給へば、室町の大將かはりにはなり給へり。大きおとゞは、武家にしたしうせさせ給へば、世の政をもいひ合はせて、した、め給へるによりて、公私睦まじく、めやすき世にぞ侍る。芳野殿にはつれづれに思しけるまゝに、五百番の歌合せさせ給ふとて、よませ給へる、今こそあれすむべき世々の都鳥今ゆく末の事やとはまし

中務の宮ものほらせ給ひて芳野殿におはします。此の頃千首歌奉らせ給ふとて、更衣の心を、親王、

かへすとも人などがめそ翁さびことしばかりの花染のそで  
うへは心えがたくおほしめしけるに、やがて信濃に歸らせたまふ道にて、世をそむかせ給へりときこえければ、ありし花染の袖をおほしめしあはさせ給ひて、芳野殿より仰せられ侍りし、

わするなよ木曾の麻衣やつるともなれし芳野の花染の袖

撰集の事おほしめしよらせ給ひしに、今年事なりて、十二月に長親の大將奏し給へり。新葉集と申しき。こなたの弘和も、都の永徳も二とせの春に成りぬ。正月、氏清は河内國

- はかゞしきも しつかりとした確かな者。
- 人目のかれまさる いや／＼人目も遠ざかつて。
- 念じ 堪へ。
- 上 後龜山天皇。
- 撰集の事 後圓融天皇永和元年藤原爲遠に致して新後拾遺集を撰ばせられ、爲冬の子爲重代つて撰成り奏覽した。
- 二條のおほき大臣 太政大臣良基。
- 室町殿 足利義滿
- さき／＼のは 尊氏及び義詮のは死後左大臣を贈られた。
- 内 後圓融天皇。

に下りて、芳野殿の軍を破りて、赤坂の城堪へすなり侍り。さるは正儀も病ありて失せにしかば、楠が氏族どものはかゞしきもなくなりしにぞ、和泉國も紀伊國も、みな京の方になびき侍る。かかれば芳野殿には、世の中いかゝあらむと案じさせ給へり。いとゞしく人目のかれまさるやうに思召されて、御心細きを念じつ、過させ給ふ。いかなる折にか、上のよませ給ふ、

さびしさも聞きなればとなくさめて思ひも入れぬ松風の聲

いとあはれなる御有様に侍る。京には過ぎつる永和のはじめ、爲遠の大納言承り給ひし撰集の事、いつしかとおほしめししに、去年の八月末の七日に、大納言にはかにうせたまへりと、奏し申ししによりて、同じ霜月に、爲重の中納言を召されて、相續ぎてつかうまつるべく仰言侍り。さまざまもかやうの折は、綸旨を賜はず事侍るを、こたび中納言は御前にて、敕を承り給へるによりて、綸旨は賜はり侍らずとなむ。ことし彌生に、四季六卷を奏し奉り給ふ。序は二條のおほき大臣書き給へり。室町殿は左大臣になり給へば、實時の大納言内大臣になりたまふ。武家には大臣になりたまふ事も、昔より例おほからぬ事に、さき／＼のは、贈らせ給へるばかりなりしに、こたびはいとはなやかにぞなりまさり給ふめり。藏人所の別當にも、此の人をなさせ給へり。卯月には牛車さへそひたる。目もあやなる事にぞ、都人ども申し侍る。内には世をしらせ給ふ程もいくばくならず、御齡も



○處せきも云々 帝位におはして萬事窮屈なのをうるさく思召されて。

さかりにおはしませど、御身の處せきもむつかしうおほしめさるれば、おりるさせ給ひて御幸も御心にまかせてせさせ給はむと、おほしより給ひけるとや。

○通陽門院 殿子。  
○三條の内の大臣 藤原公忠。

卷第七

後小松院

○先帝 後圓融院。  
○二條のおほきおほいまうち君 二條の大臣良基。  
○室町の大殿 義満  
○院の別當 院の廳の長官。  
○高御座にて云々 御讓位の儀式の時正殿の玉座である故實典例も二條良基が傳へ知つて居られた。  
○おもたし 面目ある御事。  
○事ある時 何か公事儀式のある時。  
○雲の位 禁中に列なる公卿殿上人。  
○踏歌 正月十六日年始の祝詞を歌ひ舞はしめられた公事。  
○きびは 幼稚。

百一代の帝は、御諱幹仁と申し奉る。後圓融院の一の皇子にて、御母通陽門院は、三條の内の大臣の御女なり。永徳二つの年卯月に、御年六つにて、先帝の御禪りを受けさせおはします。二條のおほきおほいまうち君攝政させ給ふ。世の政は先帝、院の内にて、執り行はせ給へり。室町の大殿は院の別當かね給ひき。同じ年の十二月、御國讓の式行はれ侍る。高御座にてあむなる事も、おほき大臣傳へさせ給へりとなむ。近き頃は世の中みだりがはしくて、古き例など傳へしる人なかりける。此の大殿よく知り聞え給ひて、光明院より當代まで五代の御師にならせ給へる。いとおもたしき御事に侍り。ざえなども廣くおはしまして、著し給へる書もまきく侍りとかや。武家よりも重く思ひ奉りて、事とある時は古き例をも、此の二條殿にぞ尋ね給へり。年返りて永徳も三年と申す。春の初めより世の中あらたまりぬる程みえて、雲の庭の御けはひも、いときらくしう、星の位も數そひ給へる様なるは、むべしも千代の始めとぞ知られ侍る。今年踏歌あるべしとて、處々今よりいとにぎはしきに、其の夜は室町殿辨つとめ給ふ。上もきびはに坐せば、い



○竹川 備馬樂呂の歌。  
 ○淳和院は皇族方の御學問所、榮學院は在原氏子弟の學問所別當はその長官。官位の高い人が兼ねる。  
 ○准三后 大皇太后皇太后皇后の三后に准じて年官年爵を賜はるること。  
 ○あるじ方 義滿。  
 ○三條の大殿 公忠。  
 ○女院 通陽門院。  
 ○内 後醍醐天皇。  
 ○またくま、のほり 完成した。  
 ○至徳元年 北朝永徳四年二月改元。  
 ○元中元年 南朝弘和四年四月改元。  
 ○野老 蔓草。食用に供す。  
 ○國栖 吉野附近の土民。

みじうめで聞えさせ給へり。更け行くまゝに風寒くて、霞むともなき御階の下には、かざしの綿も雪に紛ひつゝ、月の光もえんなるに、竹川の聲いとおもしろし。院きさいの宮などをめぐりぬれば、明け果ててぞまかで侍る。室町殿をば榮學院淳和院の別當にて、源氏の長者になされき。これは鳥羽院の定めにて、代々久我の家になり給へる事と聞き侍るを、此の後は武家よりなり給へるとなむ。六月には准三后の宣旨蒙り給ふ。神無月の頃、室町殿に行幸あり、先の御代にもありつることなれど、此の度は殊に引きつくるはせ給へり。あるじ方にも、今はおもくしうなり給へれば、いとゞはえある様にもてなさせ給ふめり。十二月に、三條の大殿はかなくなり給ひぬ。女院の御親にまませば、内にも睦まじき御なからひにて、いやましに榮えたまはむに、口をしき御事と女院はあかず思召されき。先の御代に救ありし撰集は、此の頃またくと、のほりしかば、中納言奏し奉り給ひけるに、院御覽じて、御心に叶はずや思召されけむ、重ねて奏覽あるべきにぞ定まり侍る。又改めて至徳元年と申せば、芳野殿には、元中元年とかへさせ給へり。今はいとゞ事問ひ参る人もなく、幽なる御住居も、年のへぬるまゝに、其のわたりの山賤どももおのづから面馴れ参らせて、我が君ともてあがめつゝ、藏野老などほり出でて奉り、國栖等は若菜をぞつみて参らせつるも、處につけたる貢めきて、いとあはれに御覽す。京には爲重の中納言の奏し給へる集、こたひは難なしとて納まり侍る。新後拾遺とぞ申しき。至徳は三年に

○嘉慶元年 北朝至徳四年八月改元。  
 ○攝政殿 良基。  
 ○室町殿 義滿。  
 ○近衛の右の大殿 兼嗣。  
 ○儀同三司 准大臣の通稱。  
 ○徳大寺の大臣 藤原實時。  
 ○大殿 良基。  
 ○淺ましきこゝ 薨去をいふ。  
 ○こころの御齡 死んでも惜しからぬ御年。良基享年六十九。  
 ○御はて 四十九日の中陰の終り。  
 ○昔の御かはり 父良基の代り。  
 ○玉津島 紀伊にある。

て改まり侍り、此の程は公にも武家にも、事なく過させ給ひて、嘉慶元年にぞなり侍る。睦月に上御元服させ給ひて、攝政殿室町殿参り給へり。其の後二條殿は攝政をも太政大臣をもかへし奉れ給ふ。近衛の右の大殿攝政し給へり。三月攝政殿の御父近衛殿うせ給へり。冬の頃善成の大納言を、儀同三司になさせ給ふ。これは順徳院の御後にて、ざえなどもいみじかりければ、源氏物語の抄をもせられし人にて坐す。又の年彌生に攝政もはかなくならせ給ふ。去年今年うちつゞき淺ましき事を、近衛殿の人々は歎き給へり。やがて二條のおほきおとゞ攝政し給ふべき御定めになりて歸らせ給ひぬ。かやうにて四度まで出で給へるも、いとめでたき御事なりかし。室町殿左大臣を辭し申し給ふによりて、徳大寺の大臣左に轉り給ひ、具通の大納言は右の大臣に、經嗣の大納言は内大臣になり給ふ。此の頃大納言は、二條の大殿の御子に侍りしを、一條の前の關白殿養ひ給へりとなむ。此の頃大殿は惱ましうし給ひて、内などへもかきたえて参り給はず、引籠りて坐せば、上も覺束なく思召されつゝ、御使しけう参り通へり。武家にもいかならむと心を惑はし給へるに、六月には終に淺ましきことと云ひ騒ぐにぞ、内にも驚かせ給ふ。ことわりの御齡には侍れど、上の若うおはしませば、あらまほしき御後見なりしをと、をしみ聞ゆる人多かりき。御はても過ぎぬれば、御子の師嗣の大臣をぞ、關白になさせ給へり。昔の御かはりと思召さるなるべし。五月に室町殿、玉津島に詣で給ふ。上達部殿上人あまた従ひ参り給へば、



○受領 國司。  
 ○あるじ 櫻鷹。  
 ○龍頭鶴首 貴顯の御座船又は俗人が乗つて奏樂する船。一隻は龍の頭一隻は鶴の首を彫刻した飾船。  
 ○くだ物 菓子。副食物。  
 ○たけたち 身長。  
 ○生薬云々 不老不死の薬を求めに蓬萊の島に來たさいふ傳説の秦の徐福のやうな心持がした。  
 ○出でほえ云々 出しても喝采を博するやうな傑作も詠ぜられなかつたか。  
 ○康應 北朝嘉慶三年二月改元。  
 ○西園寺の大臣 公宗の子實俊。  
 ○時の人 時めいた人。

事廣ごりていかめしき御有様なり。又富士の山をも見むとて、關の東へ赴き給へり。古よりたぐひなくいひおきつるもことわりにて、人々いとめづらかにおほえたり。やがて駿河國の受領なる泰範といへる者、あるじこまやかにして、舟どもよそひつゝ、むかへ聞えたり。龍頭鶴首になすらへて、目もあやにしなしつる中に、くだ物酒などしなしく積みて、清けなる童のたけだちもひとしきをえりて、綾錦色々のさうぞくうるはしくいで立たせ、棹さし楫とりも、いとなまめかしけなり。人々いみじう興じ給ひ、みな此の舟に乗りて浦浦傳ひ行く程、生薬もとめむとて蓬が島たづねけむ唐人の心地するに、舟の樂どもは波の音にもてはやされ、いとめづらしく聞き渡し給ふ。歌などもありぬべき折なれど、こよなき氣色に中々けおされて、出でばえするばかりのふしもありがたくやありけむ、人々は口ごもりてのみおはしつるに、室町の大臣、

きのふまで富士の高ねと見し雪の袖にもうつる田子のうら波  
 あら玉の春をば康應と申しき。去年人多くなくなりて、都の内哀れなる處々侍り。西園寺の大臣もかくれ給ふ。此の大臣は建武のころほひ、むくつけき心もちて、失はれ給ひし公宗の大納言の御子にて、さる物うきまぎれに生まれ給へるを、北の方めのとなど、とかくまぎらはし匿しつゝ、過しけるが、後醍醐院南の山にいらせ給ひて、武家のはからひなる世となりけるより、宮仕にたち出で給へるに、いと時の人にて、大臣にさへなり給へば、

○明德元年 北朝康應二年三月改元。  
 ○御八講 法華經八卷を八座に論議する法事。  
 ○等持院殿 尊氏。  
 ○關白殿 師嗣。  
 ○主の大臣 義滿。  
 ○武士だつもの 武士らしい者。  
 ○心ゆるび 油斷。  
 ○かしこまり 勤當。  
 ○頼之 細川頼之。  
 ○義將 斯波義將。  
 ○頼元 頼之の子。  
 ○うけ引きたるさま 承諾した様子。  
 ○あいぎやうなくなりて 興さめてつまらなくなつて。  
 ○今は何せむに云々 今は何のために宇治へゆく必要があらうか。  
 ○今は何せむに云々 今は何のために宇治へゆく必要があらうか。

父君の面おこすばかりなるも、いみじき御宿世にぞ侍る。又明德元年にうつり侍り、室町の大御八講し給ふ。等持院殿の三十三年にあたり侍るによりてとなむ。處々より尊き僧の限り召しよせ給ふ。關白殿、公卿、殿上人、皆出で給へり。主の大臣も客人達も、今日をはれと心づかひし給ふほどしるくて、御装束目もかやくばかりなり。あるじの座の傍には、武士だつもの太刀帯びて三四人さぶらひ、赤松の某は、御門を守りてさぶらふめるは、さすがに心ゆるびなき様なり。今年山名時熙氏幸といへる者、室町殿のかしこまりを蒙りて、同じ筋なる氏清満幸などを、討手の使に遣はし給へば、いととく靜まりて、時熙氏幸は、いづ地ともなく失せ侍れば、室町殿の兵はかへり参りぬ。次の年は阿波國にありける頼之入道召しによりて上りたり。又政にも預るべきなりとて、義將にかはりて、頼元ご後見に定まり侍り。神無月に、山名氏清は、室町殿に宇治の紅葉御覽せさせむと用意しければ、大臣も歡びて、かならずと契り給うける。折しも時熙氏幸は、去年の罪をゆるされむ事を、せちに歎き申しけるに、大臣も心よわりて、「氏清などにもいひあはせてこそ。」とてうけ引きたるさまし給ひつゝ、急ぎ宇治に渡り給ふ。満幸はいつしかもれ聞きてければ、氏清にかうくの事ありと告げたり。氏清は和泉國を賜はりて住みけるが、けふはあるじがたにて、殊更に心遣ひしつゝ、淀のわたりまで來りける。満幸が使にあひ侍りて、事の由聞きつるより、いと淺ましうあいぎやうなくなりて、「今は何せむにか宇治にもまか



○物すさまじし伊殺  
風景。  
○めし放ち 官に没  
收して。  
○ひたぶる心 一徹  
なる心、はやり氣。  
○むくつけき心がま  
へ 恐ろしい企圖。  
○人々を集へて 人  
を集めて。  
○年のいそぎ 舊年  
を送り新年を迎へる  
準備。  
○内 後小松天皇。  
○まうち君達 大臣  
たち。  
○大臣 義満。  
○手を盡しつる人々  
力を盡して戦つた  
人々。  
○しりたる國々 領  
地としてた國々。  
○園牧 莊園や牧場  
○類廣く 氏族が多  
い。

らむ。」とて、俄に病ありといはせつ、又ひき返しぬ。大臣は興ある事に覺えて、例の人  
人誘ひておはしたるに、思ひの外に人影もなく、物すさまじけなれば、心にさは思ひ給へ  
ど、さらぬがほにてとく歸り給ふ。此の頃滿幸は、出雲國に居けるが、そこに院の御領と  
てあるを、みだりがはしく掠め奉りければ、武家より、出雲國をめし放ちて、京にもすま  
せじとしけり。心憂く思ひて、和泉國に下りはべり。氏清はたゞにも心よからず思ひみる  
に、いとゞしく怒りひたぶる心をさめ難くて、諸共にむくつけき心がまへをぞし侍る。此  
の滿幸は甥にて婿なりければ、氏清もとりわきむつまじう思ひけり。やがて兵を催して、  
和泉路丹波路より、京に攻め入らむとぞしける。武家にも人々を集へて、爰かしこ防ぐべ  
き用意しけり、時熙氏幸は、武家の方に隨ひき。うち續き靜かなりし都の内も、又騒がし  
くなりて、年のいそぎをもせず、處々の争ひの聲、いとまびすしきにぞ、内にもしづ心  
なくおほしめさるれば、君達などはつどひさぶらひ給ひ、まうち君達は、御門をぞ守るめ  
り。入りみだる戦ひに、京の方危く見えければ、大臣もみづから打ちいでむと、旗をす、  
め給ひしに、辛うじて、京の方うち勝ちたり。氏清は内野にて滅び、滿幸は逃げ走り侍る  
にぞ、又の年は事なくて、上下の人うらゝなる春を迎へ侍り。室町殿には去年の戦ひに手  
を盡しつる人々に、氏清がしりたる國々處々の園牧などを、ほど／＼につけて、分ち給へ  
り。此の氏清は、類廣く立ちならびて時めきしかば、世の覺えもこよなくて、領じつる國

○養理 山名時氏の子。  
○楠正勝 正儀の子  
○はからむとて 殺  
さうと企てて。  
○芳野殿 後龜山天  
皇。  
○をさなき程云々  
細川頼之は義満の幼  
年から育てあつた人  
だから。  
○其の夜 葬送の夜  
○後のわざ 死後供  
養の法事。  
○五山 京都五山、  
天龍寺相國寺建仁寺  
東福寺萬壽寺。  
○十利 五山の次に  
位する寺格の等持院  
臨川寺等の十寺。  
○御齋會 正月八日  
から大極殿で最勝王  
經を講ぜられた儀式  
○都の上 後小松天  
皇。

十一まで侍りければ、日本の國の中、六が一をしりたりとて、六分一殿とぞ人は申し侍  
る。大内義弘は、紀伊國和泉國を賜はりけるが、紀路に氏清が兄なる義理るたりければ、  
これを亡ほさむとしけるに、いつしか城をもあけて逃げ失せ侍り。又畠山基國といへる者  
は、河内國を賜はりて住みつゝ、千劍破の城を攻め侍るに、楠正勝はかなひ難く思ひて、  
城を出でて十津川の方へ忍びてぞ赴き侍り。弟なる正元は、室町殿をはからむとて都の中  
に隠ろへて居たりけれど、程なく顯はれて失はれ侍りき。芳野殿には、頼もしき人ひとり  
なきさまになりゆくにぞ、いと哀れにて、物うき月日を送らせ給ふ。二月に頼之入道身ま  
かり侍る。室町殿はをさなき程に生し立てける人なれば、人よりことになつかしう思ひ聞  
え給ひて、其の夜もみづから送り給ひ、後のわざをも懇にとぶらひ給へり。又相國寺をも  
建てられしが、年を経て事なりつゝ、今年八月に供養し給ふ。君達あまた参り給へば、い  
とよそほしきに見見なる頼元、侍所の基國など、華やかにさうぞきて従ひ奉る。導師は明  
應なり。五山十利などいへる處々よりも、僧達出で給へり。御齋會になすらふばかりの有  
様なりとぞ聞え侍る。今は世の中思ふ事なきにつけても、都の上は、三種の御寶の渡らせ  
給はぬ事のみ、御心苦しう思召しなやませ給ひ、いかにもして、芳野殿とむつまじうなら  
せ給ひて、神璽などをものまゝに、都に還し奉らまほしう思しめされて、つかうまつ  
る人々にも、うち／＼宣ひあはさせ給ふに、關白殿はことわりにも思召されぬさまにて、



- 上 後小松天皇。
- 御夢のさとし 御夢想。
- 室町の大臣 義満
- 何のいたりもなく 何の趣もなく。
- 黒木 皮を削らぬ材木。
- 上人 殿上人。
- こなたの上 後龜山天皇。
- 住みわび給ふ 住み悩んで居られた。
- 博士ども召され 天文博士達を召されて吉目を定めさせられた。
- えらせ給へり 御選定になった。
- 幣使 奉幣使。
- 事なくて 無事に
- 關白殿 師嗣。

いさめ奉り給へば、上も思召しのどめけるに、御夢のさとしなども有りけるにぞ、ひたすら思召したたせ給ひて、室町の大臣に仰言侍りしに、大臣も従ひ奉り給へば、内には大内義弘を召されて、四位の少將になさせられつゝ、こまやかなる仰言にて、芳野殿に遣はさせ給へり。義弘は駒うち早めて、芳野山にまうでつ。けに山かさなれる御住居の物さびしけなるに、行宮は何のいたりもなく、かりそめに黒木もてつくれるも、年月にこよなうふりわたるいと哀れなり。又さぶらふ人々の家るなども、ことの外に荒れ増りたるを見渡し、かやうの山里に何心して年月を経させ給ひけむと、思ひやるにもいとかなしう、涙もかきくらすばかりなるを、ためらひて、行宮に参りつゝ、上人につきて、事の由を奏し奉る、こなたの上はいかにせましと思召し亂れさせ給ひて、人々にもいかゞなど仰せられけるに、誰もく住みわび給へる程なれば、都の方の戀しさに、なびかせ給はむ事をぞ、すめ奏し奉る。さらばとて、上は北畠顯教して、返り事を仰せくだされしかば、義弘いといたう畏まりて、返すく御山を出でさせ給はむ事の定めをしつゝ、まかで侍り。京にはいつしかと待ち坐しつるに、御使歸り上りて、しかく奏し奉りければ、内にも御氣色よくて、博士ども召されて、日を定めさせ給ひ、御迎への人々をもえらせ給へり。基信の中將をば、幣使にて伊勢に遣はし給へり。神寶の事なくて都に入らせ給はむ事を、神に祈らせ給へるになむ。十月二十五日よき日なりとて、御迎への人奉れ給ふ。關白殿御子の大

- えびすの衣 戎衣武裝。
- 腹巻 鎧の一種。胴丸の類で腹に巻いて背で合はす様にしたるもの。
- 立田 大和國立田歌枕。
- 御山 吉野山。
- 宮達 皇子女の方。
- 逍遙 氣任せにあちこち歩くこと。
- かやうの折云々 此の様な機会も容易にまたと有るまいと思はれて。
- あいなき 何の風情も趣もない。
- 冬景春華 和漢朗詠集に十月江南天氣好、可憐冬景似春華。
- 元暦の昔 後鳥羽天皇の時。

納言參議兼宣、武家よりは頼元義則義弘なり。芳野の上は、二十八日御山を出でさせたまふ。關白殿は御よそひうるはしく直衣にて、其の外の公卿殿上人どものみやつこなどは、皆ことくしうえびすの衣きて前しりへに隨ひ奉れり。名和修理亮といふものは、帶劍の役にて、御輿にそひ奉る。義弘もさうぞくの下に、腹巻といふ物を著て、引きさがりてぞつかうまつりける。まづ奈良の京に坐し、立田などをも御覽す。むかし後村上院は、世のみだりがはしきに催されて、おのづから處々の行幸も侍りしに、近き世となりては、御山より外の行幸もなかりければ、いと珍らしう御覽じ渡すに、女御の御方宮達などは、まして處々の逍遙に行きもやらせ給はず。京の方なる人々は、はやくと急がし聞ゆれど、こなたはかやうの折も、又ありがたう思召されるれば、こゝかしこに滞られ給ふ。神無月も末つかたなれば、紅葉も散り過ぎて、野山もあいなき程なり。たつ田川にて、上、立田川うかぶ紅葉の行末はながれとまると事あらじな

空晴れて日影もあたゝかなれば、「冬景春華に似たり。」などうちすし給ひて、閏十月にぞ都にいらせ給ふ。其の日は殊に引きつくりはせ給ひて、内の行幸ばかりの御儀式にて、御引直衣なり。御輿仕丁などさへ、内より奉り給へば、いと華やかなる見ものにて、都人どもは立ちなみて拜み奉る。夜に入りてぞ、嵯峨に著かせ給ひ、大覺寺に坐す。内よりも敕使あり。五日にぞ三種の御寶は、大覺寺殿より内裏に渡らせ給ひける。元暦の昔、内侍



○關白殿 師嗣。  
 ○事なく内にいらせ給ふ 無事に内裏へお入りになつた。  
 ○代は四嗣 後醍醐後村上長慶後龜山の四代。  
 ○節會 朝廷で定まつた公事ある日の集まり。  
 ○年の名云々 年號も別々で。  
 ○かたみに云々 互に心打解けず氣を置いてゐた。  
 ○院 後龜山院。  
 ○徳大寺殿 實時。  
 ○室町殿 義満左大臣なる。  
 ○院の上 後圓融院 明徳四年四月崩御。  
 ○泉涌寺 洛東今熊野町。城内に泉山月輪の十二殿がある。  
 ○政も止められ 天下廢朝になつた。

所の、西の海よりかへらせ給へる例をひかせ給へりとかや。日野の中納言を大納言になされて、事どもした、むべく定めさせ給ふ。關白殿もつかうまつり給ひ、君達もあまたおはします。道の程もいみじき御よそひにて、事なく内にいらせ給へば、此の時ぞ誠に四つの一の御代となりぬるを、公私よろこびあひたり。大覺寺殿には尊號奉らせ給ひ、後龜山院と申し奉る。後醍醐院延元の頃より、年五十餘り、代は四嗣まで、芳野におはしまして、折々の節會なども、都にかはらず行はせ給ひしかば、まづ二流れにたち分れて、年の名もかた／＼にて、國々の民すらもかたみに心置きあひけるに、今なむ八隅の外までも一つの光を仰ぎぬれば、都は一しほ時めきたる様なり。院は暫し大覺寺におはしましけるが、後には小倉山の麓に、幽なる所を下して住ませたまへば、小倉殿とぞ時の人は申し侍り。徳大寺殿左大臣辭し申し給ふによりて、室町殿再びなり給ひつ。此の頃百濟わたりより使詣で來りて、交はりを結ばむ事を申ししかば、室町殿許し給へり。院の上、日頃重く惱みわたらせ給ひければ、御祈り處々にせさせ給ひ、行幸も有りけるに、次の年の卯月に隠れさせ給ふ。内に思し歎かせ給へる事限りなし。やがて泉涌寺に納め奉る。君達など御送りし給へば、室町殿も仕うまつり給へり。内には政も止められ、たれこめさせ給ひて、御つれ／＼なれば、子規の聲も一しほ哀れに聞召されぬ。かやうの折にや侍らむ、雅縁の中納言、

過ぎぬるか山ほと、ぎす一聲のおほつかなきも晴れぬ雲居に

○かへさひ申し 返し申して辭任をいふ  
 ○義將 斯波義將。  
 ○應永元年 明徳五年七月改元。  
 ○一條殿 經嗣。  
 ○徳大寺殿 實時。  
 ○善成 源善成。  
 ○室町殿の若君 義満の子義持。  
 ○色ゆるされ 禁色を聽される。高貴又は極位に紛らはしい色は臣下の袍に禁ぜられたが、寵遇を以て許される。  
 ○はらあしき事 不平の事。  
 ○白馬云々 白馬の節會が執り行はれるといふので。  
 ○加階 官位陞任。  
 ○太政大臣 義満。  
 ○様かへ給ふ 剃髪された。  
 ○室町の入道 義満

院は後圓融院とぞ申し奉る。室町の大臣は、又左大臣かへさひ申し給へり。長月には伊勢に詣で給ふ。此の頃は義將再び後見しけり。又の年は改めて應永元年と申しき。水無月一條殿左大臣になり給ひ、徳大寺殿はおほきおととぞ申し侍る。善成をも内の大臣になさせ給ふ。關白殿かはり給ひて、一條殿なり給ひぬ。年の暮に、室町殿の若君九つに成り給ふを元服せさせて、五位の中將と申し、色ゆるされて殿上し給へり。内には室町の大臣を、太政大臣になさむとおほしめされけるに、武家には例も稀なる事とて、かたぶき申す人も侍りけるを、室町には聞き給ひて、心よからず思ひて、はらあしき事をさへいひ出で給へば、内にも怖ぢ聞えさせ給ひて、いととく宣旨下り侍り。今出川殿は右大臣を御子の大納言に譲り給ふ。内の大臣も又かはり給ひて、花山院ぞなり給へり。應永も二つの春になり侍れば、内には白馬わたるとて、大きおとと内辨つとめ給ふ。卯月の頃、室町へ行幸あり、例の君達あまたさぶらひ給ふ。あるじ方に仕うまつる人々は、程につけつ、加階などして悦びあへり。太政大臣致仕の表奉り給へば、久我の具通の大臣ぞかはりになり給へり。室町殿は靜かなる住居をと思ひより給ひて、にはかに様かへ給ふ。又善成の大臣も、世をのがれ給へり。そのかみ逃けうせたりし満幸は、此の頃からめられて失はれ侍る。年替りての長月、室町の入道は、ひえの山に上りたまふに、處せきよそひは、院の御幸にも



○むかしの掟をも  
以前の構造規模。  
○事なりしかば  
修理落成したから。

○御子の中納言 義  
持。

○北山 山城國衣笠  
村鹿苑寺。

○義弘 大内義弘。

○次の年 應永五年  
正月崇光院崩御。

○故院 後圓融院。

○内の御方さま 後  
小松天皇の方々御  
仲らひ睦まじからぬ  
をいふ。

○親王達 崇光院の  
皇子達。

○小倉殿 後龜山院

○ありし御山 曾て  
行在になつてゐた芳  
野山の寂しきにはは  
りなく。

をさくおとらずと人々あさみあへる。其の後三井寺にも詣で給へりしに、道意僧正よみて送り給ふ、

法の舟爰をとまりと定めけむ神の誓ひはけふの爲かも

又の年の彌生に、室町の中將は中納言になり給へり。名をも義持となむ申し侍り。古より北山に侍りける西園寺の家は、いつよりか住む人もなくなりて、荒れはてたりけるを、室町の入道、西園寺の方に申しこひて、自の住所にせむとて修理をさせ、むかしの掟をも改めて、爰かしこ作りそへなどして、玉金をちりばめて、えもいはぬ清らを盡し給ふ。此の頃事なりしかば、遷ろひ給へり。室町は御子の中納言に譲りて、入道は北山にのみ居給へば、北山殿と申し侍り。殿作りのいみじかりければ、人は金閣とぞ申しき。又筑紫には少貳菊池など、軍を起し侍ると聞えければ、義弘打向ひて、すみやかに平らぎ侍る。次の年のはじめには、崇光院の法皇隠れさせ給ひぬと、内に奏したり。此の院は故院の御位の頃、思はずなる事によりて、世の中を恨めしく思召されつゝ、内の御方さまには、睦まじき事も坐さざりければ、親王達もより處なく思召し歎かせ給ふめり。小倉殿には、いとしう眺めがちにて過させ給ふるに、たまさかにも、都人の事問ひ参るもなく、ありし御山にもかはらせ給ふ事なくて、いづこもおなじとうち侘びさせ給ふ。秋の夕ぐれに、思ひやる人だにあれな住み馴れぬさが野の秋の露はいかにと

○二條殿 師嗣。  
○北山の入道 義滿  
○一條殿 經嗣。  
○氏滿 基氏の子。  
○關白殿 二條師嗣  
○火をさし 放火。  
○基國 畠山基國。  
○其の子は罪を詫び  
義弘の長子持世は  
父と共に戦死し、次  
子持盛は義滿に降服  
○歸りし年 應永七  
年。

○直冬 尊氏の庶子  
○九條の大臣 近衛  
直嗣。  
○日野資國の御女  
名は資子。  
○たゞならぬ云々  
懐妊されて甲第へ退  
出なさつた。

○またしき云々 ま  
た御産期には遠い今  
から非常な御祈りな  
ごなされた。

二條殿の御子道忠と申ししを、満基と改めさせ給ひしは、北山の入道名の字を譲り給へりとなむ。一條殿關白辭し申し給へば、又二條殿へ關白宣旨もて参りたり。鎌倉の氏滿もうせ侍り。太郎なる子の滿兼は、父が家を傳へて、鎌倉にをり、次郎は滿直とて、陸奥にぞ住ませ侍る。應永も六と申す卯月のころ、關白殿御病によりて世をそむかせ給ふ。又一條殿に關白の宣旨くだり侍り。夏の頃内には、人々に五十首歌つかうまつるべくのたまはせければ、奉るとて堯孝法印、朝の夏の月といへる事を、

月も猶のこる砌の朝ぎよめ夏さへ霜をはらふとぞみる

霜降月に、義弘堺の浦にありて、京に背くよしなりければ、北山の入道は、八幡にうち出でて、兵どもを和泉國に遣はし侍るに、義弘は猛き武士にて、劍の光もするどければ、京の軍も勢ひいみじくて、其のわたりの家に火をさしたりけるにぞ、たへずなりつゝ、義弘は基國と云ふ者の子なりける者にうたれ、其の子は罪を詫びしかば、ゆるし聞えて軍を收めつゝ、みな京に上りぬ。歸りし年の彌生に直冬も身まかり、九條の大臣もはかなくなり給へり。内には女院后やんごとなき御かたぐ、あまたさぶらひ給へり。御子もおはしまさぬに、日野資國の御女を、資教の御子になして奉り給ひし女御ぞ、取りわきて時めきたまひけるが、たゞならぬ御事にてまかでさせ給へば、上もいとうれしと思召されて、まだしきにこちたき御祈りどもせさせ給へり。何事なすともなくて、今年も暮れつゝ、應永も



○末の二日 二十二日。  
 ○入道 足利義満。  
 ○九つの陌 一條から九條までの意で京都全市をさす。  
 ○おたしき心 落著いた心。  
 ○女御 資子。  
 ○みけしきあり 御産氣づかれて。  
 ○御はかせ 御佩劔。  
 ○御産養 雲膳を供へて生兒の成長を祝する儀式。  
 ○御遊び 管絃の御遊び。  
 ○儲の君 皇太子。  
 ○日吉 比叡。  
 ○法華八講 法華經八卷を八座に分けて讀誦供養する法事。  
 ○室町の大納言 義持。  
 ○勘文 陰陽寮で物事の吉凶を占考して奏聞する文書。  
 ○入道 足利義満。

八年になりぬ。二月末の二日子の時ばかり。内裏に火出できたりとて、人々走り騒ぎて、うち消さむとしける程に、あら／＼しき風吹きまよひて、焰飛びちりつ、爰かしこに移りてせむ方なけなり。いそぎ御輿を寄せて行幸なし奉り。入道の北山の館に入らせ給ふ。煙は大空に立ち覆ひて、日の光も隠れつ、九つの陌も分ちがたし。すべて内裏は一所残らず焼け失せたる。いと淺ましき事に、誰も／＼思召さる。猶人々の家々にも移りて、うとましう焼きもて行くさまいはむかたなし。たま／＼煙の下に残りぬる家ども、見苦しきにそこなはれ侍り。久しうかかる事もおはしまさざりしに、いかなる世にやと、上は思召し歎かせ給ふ。北山の入道は、おたしき心おはしければ、動きもなく居給へり。やよひの末には、女御みけしきありて惱ませ給ひしに、やがて男御子生まれさせ給ふ。上は御心おちるさせ給ひて、いととく御はかせ奉れ給ふ。處々の御産養など處せき様なれど、五夜七夜なども、内々の儀式ばかりにて、御遊びはなし。世の中さう／＼しき折なりとて、よろづ慎ませ給へり。女御の御方の人々は、うたがひなき儲の君なりとて、今よりいみじうかしづき奉り給ふ。此の月義持の中納言を、大納言になさせ給へり。五月日吉に、法華八講といふ事侍りければ、北山の入道、室町の大納言詣で給ふ。君達もひき續きておはします。又年かはりて、睦月には、彗星といふ物出でけりとて、陰陽師めされて、御占の事仰せ下されしに、重き御つゝしみのよし、勘文奉れり。北山の入道は、去年唐土の帝に書

○北山の館 洛外衣笠村北山の麓の鹿苑寺。  
 ○室町の大納言 義持。  
 ○上 後小松天皇。  
 ○頭おろし 剃髪。  
 ○堯孝僧都 頼阿の孫。  
 ○我も三代 我が仕へたのは後光嚴、後圓融、後小松の三代。  
 ○人も三代 堯孝僧都の仕へたのは我が足利氏の三代。  
 ○内 内裏。  
 ○題を探り 詩歌の會で各人別々に題をきめて作るをいふ。  
 ○上人 殿上人。  
 ○内にも覺束なき云 帝も歌道の不分明な事を雅縁に御尋ねになつて。

を奉りて、金器などあまたおくりたまひしに、二月には、あなたよりも使來り侍り。やがて歸しつかはしつるに、九月にもまた参れり。此の度はさ、け物あり。かしこの曆などなり。入道は北山の館にて、使にも對面しつ、いたうもてなさせ給へりとかや。十一月には、室町の大納言のさたにて、内裏も作られつ、上も渡らせ給ひけり。此のよろこびにとて、大納言は從一位になさせ給へり。又の年北山の入道の御弟なる滿詮の中納言とていまししを、大納言になされけるに、いつしか頭おろし給へり。此の頃は世の中しめやかなりければ、入道の北山の家に、人々あつまりて、歌讀み侍りけるに、堯孝僧都、  
 我までは三代につかへて玉津島かひある神の恵みをぞしる  
 とあるを見給ひて、「三代になりぬる事は、我が身も同例にこそ。」とて、主の入道、  
 我も三代人も三代まで馴れきつ、共にぞみがく玉津島姫  
 應永十一といへる年は、事なく過ぎて、十二年とぞ申し侍る。九月十三夜、内には人々に題を探りて、歌つかうまつるべくのたまはせけるに、月に寄する往事といへる事を、後三條の大臣、  
 昔みし螢のかけは何ならずわが世の月ぞ空にかたぶく  
 雅縁の中納言は、いみじき歌人にておはしければ、上人なども、此の人を師にてまなび給ひ、内にも覺束なき事尋ねさせ給ひて、いと睦まじう思召されけるに、日頃煩ひ給へり



○玉津島の社 紀伊國和歌浦にある。  
○白波 盜賊。こゝは明國の沙門島を掠したことをいふ。

○むくつけきわざ 恐ろしい所爲、掠奪をいふ。

○關白殿 經嗣。  
○かなしうしつる 鍾愛した。

○童殿上 禁中の作法見習のために貴人の子供が殿上に奉仕すること。

○しづ心 落ちついた心。  
○さておはします 其の儘御滞在あつた

○いたりふかく云々 趣味幽玄で由縁ある様に造つて。  
○披講 歌會に詠歌を讀み上げて披講すること。

とて、久しく内へも参り給はねば、君も心もとなく思召されつゝ、玉津島の社に願をさへ立てさせ給へば、程へていさゝか心地おこたりぬるよし聞召されて、内より仰せられはべる。

月もはやや、出でぬべき光かな晴れ行く方の空にまかせて御返し中納言、

いまぞ知る君の光に霧晴れてまた身をてらす月を見むとは

又十三年と申しき。此の頃壹岐對馬とかやいへる國々の白波どもは、唐土によりて、むくつけきわざし侍りとて、かしの帝より告げ給ひしかば、北山の入道の計らひにて、其の國々の掟をも正しくし給ひけるにぞ、程なく平らかなり侍り。扱後に唐土の帝より、書をもそへて、さまざまの送物侍りとかや。次の年も過ぎて十五年にぞなりぬ。春の頃北山の館に行幸あり。關白殿も参らせ給へり。入道はいとかなしうしつる末の子に義嗣とてありけるを、童殿上などをせさせつゝ、今日もあるじかたにてさぶらはせり。先の日おはしましし時は、内裏の焼けぬるまぎれなりければ、しづ心も坐さざりしを、こたひは御心とゞめて、かたゞ御覽ぜられつゝ、十日餘りさておはします。日々にさまざまの御遊びあり。處もはたおもしろきわたりなるに、家居のさまもいたりふかくゆるづきて、清らなる事は、似る處なくしなされつれば、見處多く思召されぬ。歌の披講ありしに、御製

○大納言 義持。  
○一人 攝政關白  
○下にさゝめくひ そかに喰し合ふ。  
○近衛の大臣 藤原忠嗣。  
○内にて初冠 内裏で元服の式をした。  
○世をそむかせ云々 義滿出家してもなほ北山に居て大將軍の政務を執つた。  
○言ひ置き給ふ事 遺言。  
○うらみ人 親しからぬ人。  
○義將 斯波義將。  
○此の入道 義將。  
○故人道の七々日 義滿の四十九日の法事。

の次に主の入道、其の次は義嗣、さて關白殿なり。いと珍らかなる事に侍り。入道は此の義嗣をのみ、世にあらむと思ひ給ふにや、義持をばうとくしく思ひ隔て給へり。さてなむ大納言も、心とけても思ひ給はず、心やましけにて、行幸にもつかうまつり給はず、京にとゞまり給へり。今より義嗣をば、一人の上を立て、世にも重く用ゐられむ事を、入道は思ひ給へど、いと淺ましう世にうけひかぬ事なりとぞ、人々は下にさゝめくめり。關白殿もかはり給ひて、近衛の大臣ぞなり給ふ。卯月に義嗣、内にて初冠し給ふ。親王達に准ふばかりのよそほひなりとぞ聞え侍る。此の頃入道は重く惱み給へりけるが、五月の初めにはかなくなり給へり。五十一にて侍りとぞ。内よりは太上天皇の尊號を贈らせ給ふとて、宣旨もて参りたるに、義持かたくいなみ申してかへし奉り給ふ。世をそむかせ給ひし後も、北山にて、萬の事定めければ、四十餘りの年月、世を心に任せ給へりとなむ。こと言ひ置き給ふ事もなかりければ、室町殿には、兵あまたつどひて、御門などを守り給ひければ、いかなる事の出で來れるにやと、うとき人はいと騒ぎあへり。前の後見なりし義將今は入道なりけり。子なる義重は今の後見なりしかば、うちつれて室町の家になぶらひつゝ、世の中の事どもおきてければ、一つ門みな参りたり。此の入道のゆるぎなく後見つる政をなしけるにぞ、おのづから、室町の御方重々しくなりて、人々も心おちる侍りけり。かかれば京は又しめやかに侍る。六月末つかた故入道の七々日も過ぎぬれ



○消息宣下 口宣案に消息を添へて宣下すること。  
 ○室町殿 義持。  
 ○關白殿 經嗣。  
 ○二條の内の大臣 藤原忠嗣。  
 ○持氏 足利持氏父に嗣いで關東管領になった。  
 ○義淳 細川義重の子。  
 ○昔の例 義滿が二條良基の子道忠に名の一字を譲つて滿基と改めさせたこと。  
 ○内の大臣 義持。  
 ○一條殿 經嗣。  
 ○前の關白殿の御叔 父前の關白道忠(即ち滿基)の父經嗣と今の關白經嗣とは兄弟である。  
 ○尹繩 參議高基の子。飛騨の國司となり後龜山院の密旨によつて兵を集め、城陥つて死す。

ば、内よりは消息宣下にて、征夷將軍になさせ給ふ。御使の少外記良賢、義持の許に参りたりこれは前に有りつる事に侍れど、此の度入道の御事によりて官をとき給ひしかば、今又復任にや、唐土の帝より、室町殿に書を送りて、入道の御事をとぶらはせ給ふ。又祭文といふ物を作りて、恭獻王とぞ諡せさせ給へりとなむ。關白殿又かはり給ひて、二條の内の大臣左にうつりて、關白になり給ふ。次は十六年と申しき。室町殿、卯月に内の大臣になり給へり。鎌倉の滿兼もなくなりければ、子なる持氏をたてて、憲定後見して、關の東の事は、鎌倉にて萬計らひ侍り。今年室町の大臣は、三條坊門なる處に、殿作りして遷ろひ給ふ。此の頃の後見は、義淳とぞ申し侍る。又の年北山の義嗣を中納言になさせ給ふ。關白殿の御子二條の基教と申ししを、持基と改めさせ給へり。昔の例にて、義持の字を譲り聞え給ひぬ。此の御なからひ、今も猶うとからず聞えかはし給ふるに、關白殿は病がちに坐せば、行末うしろめたく思しめされて、此の若君の御事をも、内の大臣にねんごろに聞えつけ給ひしにこそ。扱いく程なくて、淺ましうならせ給ふ。大臣もいとあへなき事に思ひたまへり。又一條殿ぞ關白せさせ給ふ。これは前の關白殿の御叔父にまし／＼ければ、何方もさがりがたき御あはひどもに侍る。應永も十八年の秋の頃、飛騨國を平らけむとて、兵を遣はし侍り。彼處の尹繩といへるは、國司にて有りけれど、武家に從はで居給ひけるゆゑ、罪をとひ侍るなり。處はしもいふかひなき片田舎にて、浮世の事もしらぬ様な

○北山の中納言 足利義嗣。  
 ○氏憲 上杉朝宗の子。  
 ○一つねざし 一族  
 ○門の分れ云々 氏憲は上杉氏でも大懸家、憲定は上杉氏の山内家である。  
 ○春日の藤の末葉ぞかし 藤原氏の子孫上杉氏は勸修寺内大臣藤原高藤から出てゐる。  
 ○中務の親王云々 建長四年後醍醐天皇の皇子宗尊親王に從つて鎌倉に下つた。  
 ○山の内扇が谷 上杉氏の一族。  
 ○内の若宮 女御日野資子の御腹で實仁親王と申す。  
 ○きしろひ 互に競つて憎み争ふ。

りければ、民どももいとゞしうあきれまどひつゝ、いかにせましと、恐れ騒ぎたるばかりなれば、心こはき事もなく、やがて靜まり侍り。年の暮には、北山の中納言、又大納言になり給ふ。鎌倉には後見なりし憲定はうせて、氏憲といふ者がはりになり侍る。何れも一つねざしにて、睦まじかるべきあはひなれど、門の分れぬれば、おのづからくね／＼しき事うち交りて、此の氏憲は、憲定が子の憲基などとは中よからず。かたみにそむき／＼なるにぞ、世の中如何あらむと、心あるどちは打歎き侍り。此の人々は上杉とて、其の始めはやんごとなく、春日の藤の末葉ぞかし。そのかみ中務の親王、鎌倉に下らせ給ひしきざみ、御供にてさぶらひしを、やがてかしこにとゞまり侍るなり。又尊氏の母、實は此の筋なりければ、近き世にはいとゞよせおもくて、時に逢ひつゝ、門も廣くなり侍りとなむ。後は山の内扇が谷などいひて、いかめしき勢ひに侍り。内の若宮は、いつしかおとなしくならせ給へば、上は御元服の事思しよりつゝ、何くれ御心遣ひせさせ給ふ。霜月の末、まづ親王の宣旨あり。うちついで、御元服をもせさせ奉らせ給へり。御母女御も、今は后の宮とぞ申し侍る。外には御子達もおはしまさねば、いとゞやんごとなく立ちならぶ人なくて坐す。上は我が御世も、末になりたりと、思召さるゝにつけても、きさいの宮の御方におも／＼しき人のなきを、あかぬる事におほしめしけり。されどきしろひ聞ゆべき御子も、又おはしまさぬをぞ、うしろやすく思しめさせ給ふとかや。



卷第八

稱光院

○先帝 後小松天皇  
 ○一條殿 經嗣。  
 ○政をしたらせたまふ院宣の政治をなされた。  
 ○坊門の大臣 義持  
 ○院の別當 院の廳の長官。  
 ○滿元 細川頼元の子。  
 ○世の中改まりて御讓位になつて新帝の御代になつて。  
 ○上のまた云々 新帝稱光天皇まだ御幼年故禁中の有様も別に變つた事もない。  
 ○院 後小松院。  
 ○鳥のつかさ 鳥司禁中で時を奏する人鶏人。  
 ○浪の音云々 國家太平國民殷富なのをいふ。

百二代の帝は、御諱實仁と申し奉る。先帝の一の御子にて、御母女御も、後には光範門院など聞えさす。日野の資國の御女なるを、資教の大納言御子になして奉り給へしなり。上は應永十九年八月、御位に即かせ給ふ。御年十二にならせ給へり。關白は先のまゝに、一條殿させ給ふ。先帝をば尊號の御さたにて、後小松院と申し奉れり。さきくの御例にて、院ぞ猶政をしらせたまふ。坊門の大臣を、院の別當になされ、兵仗など賜はせつるに、又氏の長者にも成り給へり。私の後見には、滿元を定めたり。世の中改まりても、上のまだきびにはおはしませば、院の御おきてのまゝにて、内わたりなど、かはるけぢめもなし。院はいと心やすくならせ給ひて、折々の御遊びをも、御心にまかせて、今めかしくあらまほしくて、過ぎせたまふ。しめやかなる曉の御ねざめに、ひとりごたせたまへる、此のころは鳥のつかさも告げたえて我とおどろくあかつきの夢

此の頃ぞ、浪の音も八島の外にをさまり、煙の色は千里の末にあらはれて、外つ國までも貢物をさ、け來れるにぞ、百敷の内もむかしに歸る御有様にて、折々の御儀式をも、う

○むくつけきひしめき 物恐ろしい騒亂  
 ○日吉 日枝神社。  
 ○公も武家も 朝廷も是利將軍家も。

○北山の大納言 足利義嗣。  
 ○入道 義滿。  
 ○坊門の家 義持の家。  
 ○親しき御中 義持義嗣兄弟の中らひ。  
 ○氏憲 鎌倉の執事犬懸家上杉氏憲入道して禪秀といふ。  
 ○憲基 山内家上杉憲定の子。  
 ○持氏 關東管領足利持氏。

しなはせ給はず、今めかしき御事のみなり。さきくの様、むくつけきひしめきなどもなく、年々も靜かに移り行きつ、應永二十二年と申す秋の頃は、義持の大臣、日吉春日などに詣でて、御神樂奉れ給ふ。廣橋の大納言を始め、あまた扈從し給へり。今は公も武家もひとつに立ちまじりて、睦まじう聞えかはし給へば、末が末までも、くねくしき事なく、下は上に靡き、上は下にたすけられて、めやすき世にぞ侍る。長月には、新嘗會の伊勢使あり。神無月は河原の御祓、霜月大嘗會も事なくて行はせ給へり。かやうにはえはえしう過ぎ行くには、月日さへいとく暮れぬるやうにて、とりわけ惜しまるれど、あら玉の空の色は、又殊更なり。いと賑はしく、何方も思ふことなけなるに、北山の大納言は、昔入道のいまし世より、うとくしくし給へる名残に、今も猶坊門の家には、むつび給はず。親しき御中なれど、心の隔てこよなくて、入道失せ給へるこなたは、よろづ引きかへたる世を、あぢきなく、心やましく思ひ給ひけるが、遂にあるまじき心つかひて、義持の大臣を滅ぼさむ事を圖りつ、忍びて國々に人を遣はして、兵を集めたまふるに、鎌倉なる氏憲入道も随ひつ、もろともに世を亂さむとしけり。されど本意違ひて、世の聞えあるにより、せむ方なく、義嗣は頭おろして、いつちともなく逃げ失せたり。鎌倉の後見も、今は憲基なり。氏憲入道は、たのまずおもひ居ければ、いかで心とけてむとて、やがて軍を起したるにぞ、かしこなる持氏も憲基も、堪へ難く覺えしかば、鎌倉を出



- 奉範 今川奉範。
- 入道 犬懸家上杉氏憲入道禰秀。
- 憲基 山内家上杉憲基。
- かうぶり 元服。
- 北山の大納言 義嗣。
- 非違の使 檢非違使。
- 方人 身方。加擔した人。
- 滿詮 義滿の弟。
- 延文の古事 延文三年尊氏逝去して左大臣を贈られた時義詮が「歸るべき途しなれば位山のほるにつけて濡る、袖かな。」と奏聞した事。
- 九條の大臣 滿教
- 昨 神に奉る供物

でて、こゝかしこに忍びるけり。鎌倉には、入道が掟のまゝに、持仲とて持氏が弟をぞすゑける。持氏は駿河國なる泰範がもとに在りて、そこより都に人をのほして、兵を賜はらむと、うたへ申しけり。京にも聞き過し難くて、急ぎつゝ者ども遣はすべう思ひかまへたり。又の年の春の初め、都の軍、霞とともにたな引き入りければ、鎌倉山の兵かなひがたくて、入道も持仲も自害しつゝ、残りの者は、みなちりなくにうせ侍る。さてなむ持氏も憲基も、再び鎌倉に歸りすみけり。此の持氏は京にてかうぶりもせさせつゝ、義持の字をも賜ひしかば、かたみにむつまじう思ひかはしたりとなむ。義持の御子も、十一になり給へば、年の内に元服の事ありて、義量とぞ申し侍る。中將とて殿上をもゆるされ給へり。又の年睦月に、北山の大納言、みそかなる處にかくろへてありと聞えければ、内より非違の使して召しに遣はしたるに、すみやかにて参れり。相國寺の中におかれけるが、やがて自害せさせたまへり。其の方人どもあまた失はれば、五月には滿詮入道身まかりたるに、内より左大臣贈らせ給ふ宣旨あるに、延文の古事をもとり集め思ひいでて、御子の義運僧正、

くらの山跡はむかしにかへれどもかへらぬ道ぞ今もかなしき

これは坊門の大臣のしそくなるべし。一條の關白大臣もうせ給へば、九條の大臣、左にうつり給へるにぞ、關白の宣旨あり。二十六年二月には、内に釋奠行はせ給ふ。昨など

- 關白殿 滿教。
- 坊門 義持。
- 徳大寺 公俊。
- 二條の大納言 持基。
- 大饗 大臣に任ぜられた時公卿以下を其の邸に招いて饗應する公事。
- 院の上 後小松院
- 前の左大臣 滿教

奉るなるも、例の事なるべし。文武の帝より絶えせぬもいみじく、唐人のかしこき影は、誠に聖の御代の光とも仰ぐめり。關白殿左大臣辭し申させ給へば、坊門にも内大臣返し奉れ給ふ。御かはりには、西園寺の大納言、徳大寺は左になり給ひ、二條の大納言、右の大臣と申しき。みなとりなくよろこび加へ給ふ。大饗なども、この折はいとゞはえありて、おもしろき事多くなむ。院の上永き日のつれづれに、おほしめされければ、御前にて歌講せられけるに、庭松契久といふ事を、前の左大臣、

松のはの露やつもりて玉敷の庭にもちよのかすやそふらむ  
爲尹の大納言、

かけ高き御垣の松にみえてけり千代にもこえむ君がゆくする

又いかなる時にか、此の大納言三十首歌奉れ給ふ中に、故郷の寒草といへる事を、

しをれ臥すまがきの霜の下萩や音せぬ風の秋のふる里

上も返すく誦し給へりとなむ。雅縁の中納言をば、常に御前に召されつゝ、此の道の事などいひかはさせ給へりけるに、禁中竹といふ事をよみて奉るとて、

むかし思ふ心をはせ河竹のみよにあひぬる身はふりぬとも

院の御前、

九重や庭の河竹かはらねば代々のあとあるしるべとぞ思ふ



○御心をやりつ、御心を慰めて。  
 ○徳大寺の大臣 左大臣公俊。  
 ○二條殿 右大臣持基。  
 ○西園寺 實永。  
 ○鹿苑院入道の十あまり三廻り 義滿入道の十三年忌。  
 ○坊門の大臣 義持。  
 ○例ならぬさま 病氣に罹つたのをいふ。  
 ○鞭をあぐめり 使が鞭を揚げて急ぐを見受けられる。  
 ○御修法 病氣平癒の加持祈禱をすること。  
 ○陰陽師 陰陽寮に属して卜筮などを掌る役。  
 ○巫 神の口寄せなどをする少女。  
 ○物おほゆるもなきさま 現心もない有様。  
 ○まがくしき事 不吉の事。  
 ○さかしら 謔言。

かやうの事に御心をやりつ、過ぎせ給へば、今しもあらまほしき御事なり。またのとし徳大寺の大臣は太政大臣になさせ給ふ。二條殿は左に轉り給ひ、西園寺は右にて、三條の大納言ぞ、内大臣になり給ふ。一條の兼良大納言は、右大將かね給へり。此の大納言は、故經嗣の大臣の御子にいましけりとなむ。五月には、鹿苑院入道の十あまり三廻りなりければ、坊門の家には、佛事といかめしうし給へり。雅縁の大納言は、同じ程の齡にて、年頃馴れむつび給ひし事の、忘れ難く覺いて、墓所の寺に詣で給ひ、思ひつゞけ給ふ、相生の陰の朽木とおくれるて十年あまりはなに残るらむ

秋の頃坊門の大臣は、例ならぬさまにて日ごろ經給へば、武家の人々は、うときもしたしきも、心をまどはして、さわぎの、しりたり。公よりも御使ひまなく参り、上達部殿上人なども、しばく御とぶらひにもし給へば、門の前は馬車處せうたちなびたり。伊勢を始め奉り處々の御幣使、山々寺々の御誦經の使は、かなたこなたに、鞭をあぐめり。館の内には、御修法の僧達つどひ参り、陰陽師 巫などは、祭祓とさまぐにの、しり満ちたるに、つゆ驗もなければ、いかゝあらむと、殿の中の人々は、物おほゆるもなきさまなり。はてはいとまがくしき事出で来て、俊經の辨、陰陽の定棟、藥師の高天など搦められにけり。呪詛のこと侍るなりとて、此の人々は讃岐國に流されき。「何の恨みにさるまさなき事をばすべき、人のさかしらなめり。」と、さ、めく人も侍るに、其の後しも病怠り給

○ありつる云々の呪詛の事の餘波。  
 ○御簡けづられ殿上人罪を犯す名を記してある殿上の簡を削つて昇殿を停止される。  
 ○内 稱光天皇。  
 ○院 後小松院。  
 ○朝拜 正月一日辰刻天皇大極殿に出御あつて羣臣の拜賀を受けられる儀式。  
 ○朝覲 天皇が太上天皇皇太后を拜される儀式。新年の恆例と踐祚即位元服後に行はれる臨時のさある。  
 ○白馬 正月七日白馬を天覽ある儀式。  
 ○踏歌 正月十四日十五日十六日公事として宮中で行はれた舞踏。  
 ○一條の大臣 兼良  
 ○准后 三宮に准じて年官年爵を賜はること。  
 ○兄の大臣 義持。

へり。猶ありつる事のなごりしづかならで、武家にしたしう参り通ひし人々、あまた侍りけるを、みな御簡けづられて、ひき籠り給へり。いと淺ましう、また何事の出でまうでくるにやと内にも院にも安からず思召されしかど、此の後事はもなく、人々もほどへては、赦されて参り給へり。次は二十八年と申し、睦月朔日は、義持の大臣朝拜とて、内に参り給ひ、院にも詣で給ふ。去年のなやみの後、今日初めて、歩行もし給へりとや。院も珍らしがらせ給ひて、とゞめて御物語聞えさせたまふ。二日は、朝覲の行幸あり。大臣達を始め、残りなく、仕うまつり給へる御よそひ、いときらくしけなり。内は清らにさうぞかせ給へるも、限りなうめでたきに、拜し奉らせ給へる御様の、なまめかしうさかりにと、のほらせ給ふを、院はいとうつくしと、御覽じつ、うち笑まれさせ給へり。君達をも心こともてなさせ給ふ。例ある事に、こと加へて珍らしき様にしなさせ給へり。うち續き、白馬踏歌などにて、いづこも今めかしき事多し。鎌倉の持氏は、京に使を上らせて、三位しつる歡びをも、又義持の心地さわやぎ給へることぶきをも聞えたり。秋の初めには、一條の大臣内の大臣になされき。大炊の御門の大臣うせ給へる御かはりとぞ聞えし。此の頃山の座主にていますかりける青蓮院の義圓とて、大僧正になり給ひ准後の宣旨かうぶり給へるは、義持のおとゞの兄弟にて侍り。内にもやんごとなく思召され、武家の人々も心よせ聞ゆれば、世の覺えも殊更なり。兄の大臣は、常にもかしこに詣でて、いと睦まじく思



○弓も袋に 武器の用もない天下太平。  
 ○和歌の浦云々 和歌の道にたづさはる  
 ○又の年 應永二十九年。  
 ○院 後小松院。  
 ○陪從 管絃を奏する地下の樂人。  
 ○人がら云々 舞人陪從の人柄も缺點なく完全な人を選ばれた。  
 ○はしりの雜色 走使の下部。  
 ○かはらか 小柄で美し。  
 ○等持院 洛外衣笠村。尊氏の頭があり足利氏の廟所。  
 ○法華八講 法華經八卷を八座に分けて讀誦供養する法事。  
 ○關白殿 滿教。  
 ○物かげ 纏頭を賜はる。

ひかはし給へり。今は世の中のどかなるにことつけて、公にも武家にも、さまざまに心をやりて遊びたはぶれつゝ、誠に弓も袋にいる、ばかりなれば、猛しといひけむ心もゆるびて、武士すら、いとまある折々は、和歌の浦によりて玉拾ふわざをなむしけるも、いとうなる世にぞはべる。又の年の卯月、義持、院に参り給へば、猿樂せさせてみさせ給へり。いと興ある事にぞ人申し侍りし。長月八幡に院の御幸あり。坊門の大臣、其の外の君達あまた仕うまつり給ふ。舞人陪從も、殊に調へられたり。人がらも口をしからずひとしきをえらせ給ひ、さうぞくもことに花やかにて、はしりの雜色などまで、いとかはらかなり。いみじき見物にぞ侍りし。此の頃はか様のめでたき事のみ、何方にも多くて、去りにし頃は、坊門の北方伊勢に詣で給へば、又霜月には、義量の中將初めて八幡に参り給へり。とて、武家の人は更にもいはず、大宮人さへかいつらねて、悦び聞えに渡り給へる、いはれなくしき事なりき。又等持院にては、法華八講あり、これも坊門よりし給へるなり。寺々の僧達集ひ参れり。關白殿、上達部、殿上人、例の如おはします。事果てぬれば、僧達樂人など皆物かげ渡したるを、下人などはいといみじき事に思へり。又こと君達の殿殿にも、さりぬべき御法事ども、處々にてさせ給へば、参り通ふ君達もいそがはしけなるに、樂人などはた時に逢ひたりと思へる様も、したりがほなり。さるは恐ろしけなりし戦ひの鼓の聲よりも、打鳴らす鐘の音は、こよなう心もすみて、尊さもたぐひなくなむ。

○程よりは云々 年の程よりは大人らしく。  
 ○腰のべたるやう 曲つた腰を延したやうに安樂になつて。  
 ○心ゆく様 満足する様。  
 ○關送り 京都の人伊勢参宮するのを逢坂の關まで見送ること。  
 ○かざりおろし 剃髮すること。  
 ○一切經 佛敎の經律論の經典の總稱、すべて七千餘卷。大藏經。  
 ○義將 斯波義將。  
 ○滿元 細川頼元の子。頼之の孫。  
 ○範政 今川泰範の子。  
 ○歌を番ひ 歌合をして。  
 ○判の詞云々 歌合の左右の優劣を批判して給はれど。

いつしか應永も三十年と申しし二月、義持の大臣は、征夷將軍を義量に譲り給ひ、室町の館にする給ふ。今年十七にぞ物し給へり。されど程よりはおとなび給へば、後見どもとり持ちて、公につかうまつり、世の政をも行ふべく定めたり。父大臣は腰のべたるやうにて、心にまかせつるありきなどもしけうし給へり。武家の人々の家々にも渡り給ひ、後には寺々君達などの御許までも詣でて、心ゆく様なる遊びも絶えず、琴笛の聲もひまなく聞き渡して、思ふ事なく過し給へるも、いとめでたき有様なりかし。三月に伊勢にまうづとも、北の方をさへ具し聞えて出でたち給へる、處せき勢ひなれば、關送りなど、いかめしきひゞきに、人々あまた参り給へり。歸り給ひし後、やがて等持寺にてかざりおろし給ふ。さきくの人にはなやみなどにことつけて様替へつる、いとあはれなる事も多かりしに、これは唯世の中心やすくてあらむと思すのみなれば、うれはしきふしなどまじらず、後の世さへ頼もしけなるは、めでたくこそは覺え侍れ、七月に高麗の國の僧、一切經もて渡りたり。此の事は過ぎし頃、武家の後見なりし義將が望み申ししによりてとぞ聞えし、冬の頃にや滿元、嵯峨野なる頼之が墓所に詣で侍りけるに、折しも雪のふりければ、思はずよ花をかたみのさかの山ゆきに跡とふ千代の古道  
 武家さへ今はかやうの事を口なれぬるも、けに治まれる世のしるしになむ。又駿河國に侍りける範政といへる者は、歌を番ひて、判の詞をしるしつけ給はるべく、雅縁の中納言



○又の年 應永三十一年。

○入道大臣 義持。

○くぜち 口舌。言

ひ争ふこと。争論。

○相國寺 臨濟宗相

國寺派の本山。京都

五山の二。

○子規はまた云々

子規はまた聞かれさ

うもないけれど。

○こちたく 甚しく

此の世の物さも見

えず 極樂浄土の心

地がする。

○樂所 奏樂所。

○斧の柄云々 昔の

王質の故事によつて

時のたつも知らず歸

るを忘れて物に興ず

るにいふ。

の許に申したりければ、かきてつかはし給ふとて、

よしあしを和歌のうら波たどるまに風のつてさへ遠ざかりつ、

といひやり給へりければ、かしこより、

よしあしを君しわかずばかきたむる言のは草のかひやなからむ

又の年は春より、都の入道大臣と鎌倉の持氏との御中に、くぜち出で來にけりとて、世の人やすからすいひあつかひけれど、跡なし事にてや侍りけむ、又心とけてむつまじうなり給へり。卯月に後龜山院隠れさせ給ひぬ。御子達などの心細くて残らせ給へる、いと哀れなる御有様なり。院のおはします御世だに、とぶらひ聞ゆる人もなかりしかば、いとゞしき蓬生に、詠め侘び給ふめり。此の月後小松院は、相國寺に御幸あり。子規はまだ心もとなき程なれど、若葉の梢はいひしらす懐かしくて、うち靡く風の色さへみどりなるに、こほる、露もいと涼しけなり。御堂のさまもこちたく清らにて、殊更にみがき調へられたる佛の御かざりなどはしも、此の世の物とも見えす、いみじうたふときなり。君達のかなよよかなる狩衣姿などにて、庭に立ちまよひ給へるは、木の間に残れる遅櫻よりも、見處おほく花やかに、にほひ多かりき。空さへ快く晴れて、日影もしづかなるに、樂所の物の音は、雲るを響かし、君達の舞の姿は、鬼神もめでぬべう、いみじうおもしろく、又妙なる御法の聲も、そゞろに涙もとゞまらず、尊き事の限りなりかし。むべ斧の柄もくだいつべ

○こしざし かげけ  
物に賜はる巻絹。腰  
にさして退出する。  
○中將 義量。  
○御心のきたる 御  
満足の有様は近頃數  
代の天子様にはむつ  
かしい事であつた。  
○九條殿 滿教。  
○二條の大臣 持基  
○一條の大臣 兼良  
○院の二の宮 後小  
松の第二皇子、小川  
宮と申す。  
○おりあさせ云々  
この皇子は後小松院  
が御讓位後御出生に  
なつた故に。  
○盛りに云々 また  
壯年にさへ滿たぬ。  
○もこよふ 足立た  
ず腹這ひゆく。  
○女御 日野資國の  
女資子。院號は光範  
門院。  
○功德のかた 現在  
未來の善果を得べき  
佛道の善行を積むこ  
と。

く、暮れ行く程を惜しまれて、人々の心をも置き處なけなり。事果てぬれば、僧達みな物賜ひ、樂人もこしざしなど賜はせたり。今日の御まうけは、義量のきたにて、になう仕うまつれ給ふ。入道は斯様の折にもまかで給はず、よろづを譲り聞えたる様なれば、中將のみ御供にもつかうまつり給へり。いといたうのゝしりて、宵うちすぐる程にぞかへらせおはします。今は處々の御幸もしげく、御心のきたる御有様ぞ、近き世には有り難く物せさせ給へり。又九條殿關白を辭し申させ給へば、二條の大臣ならせたまひ、一條の大臣は右に、洞院の大納言は、内の大臣とぞ聞えき。次の年の二月に、院の二の宮隠れさせたまへり。おりるさせ給ひて後さし出で給へりしかば、とりわきかなしうし奉らせ給ひしを、いと本意なくさうぐしく思召し歎かせ給ふ。同じ程義量も身まかり給へり。十九になり給へば盛りにだにたらぬ程なるを、世の中をしみあへり。ましてたらちねの心の闇、晴るよなけにて、入道はもこよふばかりの様も、ことわりにいとほしけなり。いづ方も袖の春雨ひまもなく、花の盛りも今年ばかりはといふべくかいしめりて、物哀れなる春なり。ちかき頃は、いづちも物思ひなく、めでたくあらまほしき事のみにて、院には去年、女御も内の上の御母上にいませばとて、准后の宣旨かうぶらせ給ひ、同じ日に院號奉りて、女院など申ししは、いと思ふ様な御事なりしに、今年は引きかへたるも、常ならぬ世のさまに侍り。此の後はありしやうに、はえぐしき御幸もなく、しめやかなる御さまにて、功



○赤松持貞 赤松貞範の孫。滿祐は又從兄弟。  
 ○知るよししける處 領地。  
 ○己が國 播磨白旗城。  
 ○後見だつ人 後見役さもいふべき人。  
 ○後に訴へ出でたる人々 土岐佐々木などいふ。  
 ○よ、よし、よし。  
 ○今は兵どもして今に及んでは直に軍勢を出して持貞を滅ぼさうと。

徳のかたにす、ませ給ひつ、四月には院にて御八講行はせ給ふ。後圓融院などの御爲にと、御心よせ給へり。今日はことさらに、雲の上人もあまた集ひ参り給ふ。古より大臣達の家にてせらる、だに、公務の日なりとも、いとまを申してさぶらふべしと、いひおかれし事なれば、院の内にてせさせ給ふ事に、誰かは残り給ふべき。處せきまでさぶらひ給へば、いとやんごとなきわざなりき。かやうのいとまにて暮れつ、應永も三十四とぞかぞへ侍る。今年都の内騒がしき事出できたれり、赤松持貞とか、武家に仕へて時めきけるものあり。もとの根ざしは賤しからねど、今はひたぶるの武士なりければ、志やねぢけたりけむ、同じ筋なる滿祐と云へる者など、つねに中よからざりしが、後には知るよししける處をも、持貞に侵し掠められければ、安からずおもひて、武家の方へうたへいでたりけれど、はかなくしき定めもなく、日頃になりぬるにぞ、滿祐はこうじて、己が國に歸りつ、城に籠りたり。京にはめざましき事なりとて、討手の使を遣はし侍る。されど滿祐は初めより語りひ置ける人々ありて、土岐佐々木などいふ者どもは、持貞を失ひて滿祐をたすけむ事を、せちに訴へ申しけり。いづちもく猛き心どもにまかせて、よい加ふることもなく、情たゞしき事などもしらず、いちはやき心の、むくつけさぞせむかたなき。室町の家には、後見だつ人より集ひて、此の事いかあらむと、とりくくに思ひあつかひつ、定めかねたり。かかれれば後に訴へ出でたる人々は、しそんじつとおもひて「よ、今は

○そのがやち 各日  
 ○まけじ魂云々 人  
 に負けまいと競ひた  
 つ心で又敵に對する  
 用意計畫をした。  
 ○下す 下衆。身分  
 卑しいもの。  
 ○正長元年 應永三  
 十五年四月改元。  
 ○ありし思ひ 子の  
 義量の先立ちて死ん  
 だ悲しみ。  
 ○大臣 義持。  
 ○限りの様なりし程  
 臨終に迫つた時に  
 ○何れにまれ 兄弟  
 の誰かを將軍の世つ  
 ぎに立てようか。  
 ○青蓮院の僧正 義  
 圓。  
 ○髪おほして 蓄髮  
 還俗して。  
 ○大塔の宮 後醍醐  
 天皇の皇子護良親王  
 ○陣の座の宣下 禁  
 中で任官位位の公事  
 の時諸卿が陣の座に  
 列座して任官の宣旨  
 の下る儀式。  
 ○小除目 臨時の任  
 官位位の式。

兵どもして、持貞を滅ぼしなむ。」と、おのがどちいひ合はせつ、用意すめり。持貞もまけじ魂に、さる心がまへどもしあへり。さてなむ世の中静かならぬけはひのしるくて、日頃のどやかなりし心ならひに、何ばかりならぬ事をさへ下すどもなどは、ことごとくしういひ騒ぎしかば、公私またいかならむと、怖れをの、きたり。室町の家には聞きつけて、いみじうおどろきつ、やがて人をつかはして、持貞に自害せさせ、滿祐をばゆるし聞ゆるなりとて、討手の人々をも呼びにやりけるにぞ、やうく事静まりければ、滿祐も又上りぬ。次は年の名もかはりて、正長元年とぞ申しき。正月に義持の大臣身まかり給ひぬ。ありし思ひの後、北の方さへなくなり給ひければ、いとあぢきなく思ひ歎きつ、世の政もすさみたるさまに、よろづ物うくてはれくしうもてなし給ふ事もなく過ぎ給ひき。又家を繼ぐべき御子もなかりければ、大臣の限りの様なりし程に、いひ置き給へるにしたがひて、兄弟の法師にいます御方々を、何れにまれす奉るべしとて、後見なる人々はからひつ、八幡の御前にて、御鬘を取りたりしに、青蓮院の僧正あたり給ひければ、そなたに案内聞ゆるにぞ、ふたたび髪おほして、室町に入り給へり。昔は山の座主などの、世に立歸り給ふ事は、例もなきことに侍るを、近き世には、大塔の宮などよりこなた、珍らかに、人申し侍らすなむ。内には陣の座の宣下ありて、小除目行はれつ、名をも、義宣と附けさせ給ひ、五位にて左馬頭にぞなさせ給へり。三十五になり給ふとかや。大僧



○しはぶきやみ 咳の病。  
 ○儀同三司 准大臣  
 ○椎柴の袖 後拾遺集「これをたにかたみさおもふ都には葉かへやしつる椎柴の袖」  
 ○内の上 稱光天皇  
 ○浅ましう云々 崩御をいふ。  
 ○院の思し入りたる云々 父後小松上皇の御痛悼も一通りならず。  
 ○二の宮云々 第二皇子小川宮薨去の時はまた一の宮稱光天皇がおはしますから慰め給られる事もあつたが。  
 ○女院 稱光天皇御生母光範門院資子。

正と申しし人の、朱の衣になりかへり給へる、末の世の有様とて、類なけなる事なれど、今はさる方に花やかなりかし。今年またしはぶきやみとかやいひてこゝらの人失せ行くめり。女院の御父なりし資國の大臣も、身まかり給へば、うちより左大臣贈らせ給ふ。敕使の宣命よみたるなど、いとおもだしく、悲しき事とりあつめたり。又同じ兄弟の大納言も、今は儀同三司など聞えし、それも此の頃なくなり給ひ、鷹司の右の大殿、徳大寺のおほきおとゞ、うちつゞき失せ給へば、世の中いとあわたゞしく、こなたかなたに哀れなる鐘の音して、處々椎柴の袖ども多くなりぬる。いとうたてありて覺ゆるに、文月の頃は、内の上御心地例ならずおはしますとて、人々みな参りこみ給ふ。山の座主何くれの僧、召しに遣はし御祈りしさわぐ。社々の幣使は足を空にてまどひ参る。祭祓御修法など、數をつくさせ給へど、よろづかひなくて、月の末には浅ましう聞えさせむ方なき御事に、上人達みな心をまどはして、思ひ沉みたり。院の思し入りたるさまもおろかならず、二の宮の御事の折は、内のおはしませばと思召しわく方ありて、思召されしさへ暮れまどはれ給ひしに、今は御事かはりなるべき宮達もなく、此の御かたみに御覽すべき皇子もおはしませねば、世の中の事、とりあつめたる御歎きに臥ししづませ給へり。女院もおなじこと思しこがれさせ給ふ。御年も三十にだにたらせ給はず、殊にあやしき法行はせ給ふなりとて、常に御精進がちにつゝしみおはしましつゝ、女御御息所など、やんごとなき御方々もさぶ

○伏見の宮 貞成親王。  
 ○院もさもやこ 後小松院も伏見宮の御子彦仁親王を御位にと思ひつかれた。  
 ○數まへられ 人なみに數へられる。  
 ○伏見殿 崇光院の皇子榮仁親王の御子貞成親王。  
 ○院 崇光院。  
 ○南の山云々 正平七年崇光院は光嚴光明兩院と共し吉野賀名生に幽せられ、同十二年京都に還幸になつた。  
 ○あなたに定まり 後圓融即位に定まつた。  
 ○物にもがなや 源氏物語の引歌に「取りかへす物にもがなや世の中をありしながらのわが身と思へば。」

らひ給へど、御心留めて御覽じ入る事もなく、御宿直にまうのほり給ふ事も、絶えてせさせ給はざりしかば、何方にも皇子などのさたもなく、後の御嗣おはしまさぬをぞ、大臣達も武家にも、心苦しき事に打歎きたり。さてあるべきならねば、武家より伏見の宮の御子を御位につけ奉らせ給ひぬべく奏し奉れり。院もさもやと思召しよらせ給ひてうけ引かせ給ふ。やがてあなたに仰せつかはすべく、定めさせ給へり。其の頃世に數まへられ給はぬ古宮なむ、伏見殿とて崇光院の御後にぞおはします。院は南の山を出でさせ給ひしより、爰に住ませ給うけるが、御子達もおはしませば、我が御すくせの口をしう思召さるゝに、御子をだに今一度思ふ様にもと思召されつゝ、後圓融院の御位の頃、武家にもほめかさせ給ふ事もおはしませられど、いとかひなくて、あなたに定まり給ひしかば、世をうしと思召しては、「物にもがなや」とかこたれ給ふ。

いつまでか里の名におふ吳竹の伏見にのみや我が世盡さむ

今はつれづれにのみおはしませば、題を探りて、歌などよませ給ふとて、鷹狩の心を、

御狩せしかりばの跡も今は世にあはれかたの雪のふる道  
 同じ時御子、さわらびを、

山賤の時ぞともなきすさびにもをりはわすれぬ春の早蕨

院はいと哀れと御覽じけり。程なく院も隠れさせ給へば、いと幽かみかにのみなりまさり給



- さしのぞく人 御訪問申し上げる人。
- あざりたつ人 阿闍梨のやうな人。
- 優婆塞 佛門に入つてゐる俗人。優婆塞の宮は源氏物語の人物。
- さまかへさせ給ふ 御剃髪になる。
- 御子 貞成親王。
- 無品親王 鼓位のない親王。
- 父宮 榮仁親王。
- 先帝の云々 先帝稱光天皇が目をそむけて疎んぜられた。
- 上の御心云々 帝の御心を和伊られた。
- 御行ひ 佛道の勤行。
- いわけなき 幼稚な。
- 此の宮 入道の宮 貞成親王。

へり。榮仁とも申し奉りて、親王の宣旨かうぶらせ給へて坐せど、百敷のまじらひなどは、おもひ絶え給ひつゝ、世かはり時移り行くまゝに、いとゞしく心細う詠めさせ給ふ。たまさかにさしのぞく人もなく、昔物語めきて、あざりだつ人の時々参り通へるにぞ法文のかたき處々ことわらせて、きかせ給へり。御子などもおはしませば、しばしは優婆塞の宮の御たぐひにて過させ給ひけれど、伏見の山を渡るかりがねを聞かせ給ひても、この世をかりとおほし召しはなれつゝ、遂にさまかへさせ給ふとて、

あらましの心の末はそれながらおもはぬ山にすみ染の袖

後小松院はかかる事を聞かせ給ふに、いとほしう思召されて、やがて御子をも無品親王になさせ給へり。又父宮も失せ給ひければ、此の御領なる處々をも、人にかすめとられなどさせ給ひて、有るかなきかに成り行くにぞ、いとゞ物さびしき事のみにて、引き入りつゝ、今は御望みなどは絶え果てたる御様なりけるに、いかなる事のがひめにや、先帝の御目をそばめさせ給ふ事あるによりて、親王はいと侘しう思召しつゝ、とみに御髪おろし給ひてけり。さてなむ上の御心もなごめさせ給ひけり。親王は其の後より、いよゝゝ御身をふようなりと思しめされて、一筋に御行ひをのみせさせ給ふ。御子達のいわけなきを御覽するにも、行末心ぐるしう思召しけるに、おもひかけぬ御事によりて此の宮の御子、御位に即かせ給ふなりとて、世尊寺の行豊、こなたに参りたまひ、武家の奏しつる事をも、

- うれしきせ 嬉しい場合。
- 宮司 中宮職の諸官をいふが、こゝでは親王家の諸官。
- むね／＼しき 重たつた者。
- うちあはぬ 御即位になるに相應しない貧しい御有様。
- 小松の帝 光孝天皇。
- 満家 幕府の管領 高山満家人道通瑞。
- 満祐 赤松満祐。
- 二條の大殿 持基。
- 院 後小松院。
- 持國 満家の子。
- 坊 皇太子。
- 先帝の御事 稱光天皇御の御事。

こま／＼と入道の宮に申させ給ひて、都にいらせ給ふべく、催し聞えたり。宮は唯夢かとはばかりまどはせ給ひて、うれしきせにも御涙はこほれけり。年頃に人々もまかぢりて、宮司などのむね／＼しきもなく、うちあはぬ御さまをぞ、宮ははしたなく侘しう思す。行豊も哀れに見奉りつゝ、小松の帝のふるきためしを思ひ出でられ侍る。又の日は武家の後見なる満家入道、兵共四五百人相具して、いかめしきよそひにて、御迎へに参りたり。目のまへに引きかへたる御さいはひを、世の人もいみじう思ひ奉れり。まづ東山なる若王子に入らせ給ふ、満祐も者ども具して参りつゝ、御とのる仕うまつれり。やがて武家より、二條の大殿につきて、院に奏し奉る。院の御子になし奉り給ふなりとて、又院に渡し奉らせ給ふ。今日は公卿殿上人あまたつかうまつりて、いといたう引きつくるはれたり。道の程は満家持國御供に従ひ奉る。程もなく御位につかせ給へるにぞ、武家にも萬代とぞことぶきあひけり。此の御事は先帝の御惱みおもらせ給へる頃、坊とて定まり給へるも坐さざりければ、武家のとり申しけるによりて、かくさだまらせ給ひけり。文月十二日に、院にいらひ給ひて、御禪りを受けさせ給へる後、二十日にぞ先帝の御事侍りとかや。



卷第九

後花園院

- 御母 敷政門院幸子。
- 經有 庭田經有。
- 坊 東宮坊。
- 關白大臣 二條持基。
- 榮仁親王 後花園天皇の御祖父。
- 小倉殿 後龜山院の御子。良泰親王。
- あいなき事 わけもない事。つまらぬ事。
- 北畠 伊勢の國司北畠顯康の子滿雅。
- あへず 堪へられず。
- 勸修寺 山城國醍醐村。眞言宗。
- 義宣の左馬頭 義持の弟。名を義教と改む。

百三代の帝は、御諱彦仁と申し奉り、無品貞成親王の御子にて、御母は經有少將の御女ぞかし。正長元年七月高倉殿にて親王にならせ給ひ、又坊に居させ給ふ。先帝の皇子になり奉り、後小松院の宣命にて、劔璽を渡し聞えさせたまひ、御禪りを受けさせ坐す。御年十に成らせ給へば、關白大臣は攝政し給ひぬ。八月に高倉殿より土御門の内裏に遷らせおはします。今は先帝をば、稱光院と申し奉り、榮仁親王をば大通院と申し侍る。あらまほしき御さいはひをぞ、世の人は目もあやに見奉る。かかる事を聞き給ひて、小倉殿にはうらやましくや思召されけむ、あいなき事をかまへ出で給ひければ、嵯峨にも住み難くなりて、みそかに伊勢に下り給ひ、國司なる北畠の家にいましけるが、京より土岐興安と云ふ兵を討手に遣はしければ、戦ひをなしつるにあへず打負け給ひ、北畠の某も討たれぬ。小倉殿は罪を詫び給ひければ、又京にゐて奉りて、もとの嵯峨に置き奉る。此の度は人を居ゑて、武家より厳しく守りけるとぞ聞えし。其の御子をば勸修寺の門跡の御弟子になし奉れり年返りては永享元年とぞ申し侍る。義宣の左馬頭は、室町の館にて元服し給ふ。内

- 義淳 斯波義重の子。
- 攝政殿 二條持基
- 一條殿 兼良。
- 近衛殿 房嗣。
- 大將 近衛大將。
- 三年 永享三年。
- 院 後小松院。
- 御ぐしおろさせ給へり 御剃髪になつた。
- 上 後花園天皇。
- きびは 幼くかわく。
- 先帝の御事 稱光天皇崩御の事。
- むつかしう うるさく。
- 御行ひ 佛道の勤行。
- あやしき歌の聖 不思議はゞの歌の名人。
- こころさ 常に言ひ馴れてゐる口ぐせ

よりは御使して征夷將軍の宣下あり。又名をも義教と改め給ふ。頼て内に参り給へば、三位にて、大納言になさせ給へり。此の頃後見は又義淳ぞしける。攝政殿左大臣を返し奉り給へば、一條殿御かはりになり給ひ、近衛殿は右に久我の大納言は内大臣に成り給ふ。義教は大將と申し侍り。九月には御位ゆづりの儀式侍りき。又二年に移りぬ。今年は御禊大嘗會にて、いと今めかしう過ぎ行きて、三年にぞなり侍り。三月に院は御ぐしおろさせ給へり。世の中替りても、上のきびはにおはしませば、政も院の中にてさせ給ひけれど、先帝の御事の後萬むつかしう思召されて、のどやかに御行ひをもせさせたまはむとて、かくそむかせ給へけり。此の後はひたすら法の道に入らせ給ひつゝ、淨土の法文など聞召しけるついでに、嵯峨の奥に往生院といふ寺のあるよし、人の申しければ、

みな人の往きて生まるゝ舎こそうき世のさかの西にありけれ

あやしき歌の聖におはしまして、人々にも召され、御みづからも常のことぐさにせさせ給ふ。古御位におはしましける時、義仁法親王<sup>よしか</sup>の尾よりまかで給ひて、内裏近き處にやどりつゝ、夜もすがら琵琶を弾じ給ひけるを、はるかに聞かせ給ひて仰事あり、

弓はりのなかばの月の影よりも猶すみまさる四つの緒の聲

とりあへず御返し奉れ給ふ、

雲の上の半ばの月にひかれてや四つの緒までも聲はすむらむ



○次四年 永享四年  
 ○攝政殿 攝政二條持基太政大臣に轉ず  
 ○御かうぶり云々 御加冠の役を勤め奉るため。  
 ○一條の大臣 左大臣一條兼良攝政。  
 ○室町殿 義教。  
 ○雅世 飛鳥井雅世雅縁の子。  
 ○堯孝 頼阿の曾孫  
 ○範政 今川範政。  
 ○けいめい 經營の音轉。營み設けること。  
 ○見るはまされる山の姿 富士山を實際見るさ、かねて聞いて想像したよりも更に優つて立派な山の姿。  
 ○室町の大臣 義教  
 ○ふみ分けし 續古今集「踏み分けし昔は夢か宇津の山あさこも見えぬ葛のした道。」  
 ○二條の大臣 持基

此の親王は後光嚴院の御兄弟とぞ聞えはべる。年の暮に義教の大將は室町の家繕ひて渡り給ふ。次四年ぞかし。攝政殿今はおほき大臣と申し侍る。明けむ年は上の御元服あるべければ、御かうぶり加へ奉るべき爲、兼てよりかくはなさせ給へりとなむ。八月には、攝政替り給ひて、一條の大臣なり給ふ。室町殿は内の大臣にぞなり給へる。長月には富士の山見むとて、東さまにおはしけり。上達部殿上人三四人さそひ給へり。武士のあまた御供に參る。昔の跡を追ひて、和歌浦をも見給ひ、それよりぞ駿河國にいたり給ふ。宇都山浮島原處々見めぐり給へり。雅世の中納言堯孝法印などおはしき。爰なる國の守範政は、歌の道にも志ありて、雅縁の訴へにも行き通ひければ、中納言をも睦まじう思ひ聞えて、いたうけいめいしつ、御まうけ細やかにしたり。人々も見るはまされる山の姿に、とりの言の葉の色を顯はし給ふ。室町の大臣、

見ずばいかに思ひしるべき言の葉も及ばぬふじとかねて聞きしもとのたまへば、範政、

君がみむけふのためにやむかしより積りはじめし富士の白雪  
 中納言は、いにしへ雅經の、「ふみ分けし昔は夢か。」とよみし事を思ひ出でて、  
 昔だに昔といひしうつの山こえてぞ忍ぶ葛の細道  
 攝政又かはり給ひて、二條の大臣成り給ふ。室町には大臣の拜賀あり。鷹司の大納言を

○こしよ 風從。  
 ○持之 細川滿元の子。  
 ○五年 永享五年。  
 ○上 後花園天皇。  
 ○二條の攝政 持基  
 ○北山の入道 義滿  
 ○院の上 後小松院  
 ○山 延曆寺。  
 ○仕うまつり給ふ 風從された。  
 ○木枯にふきあはす 云々 源氏物語帯木「木枯に吹きあはすめる笛の音を引留むべき言の葉ぞなき。」  
 ○おほさなぶら 大殿油で大殿にまぼす油の燈。  
 ○披講 詩歌の會で詩歌を讀みあゆること。  
 ○内の御前 後花園天皇。

始め、あまたこしよし給ふ。年の暮に、此の大臣を殿上の別當、院の大別當といふものになされて、氏の長者もむかしのまゝに、牛車さへゆるさせ給ふ。いときら／＼しき事に侍る。此の頃は持之後見しけり。又五年と申し正月、上は御かうぶりの事あり。院の御元服のためしを引かせ給うて、二條の攝政殿室町の大納言給ふ。今より攝政殿は關白殿になり給ひぬ。又唐土の使來りて、帝の書を室町に奉る。「日本國王義教。」と書かれたり。これは北山の入道の代よりかやうには侍るとかや。此の頃院の上例ならず坐すとして、御藥の事など侍りしに、神無月にははかなくならせ給ふ。今年ぞ五十七に坐す。御心掬もあまねくおはしませば、上人などもとひ聞えぬなし。次々の年は事もなくて、永享も七年とぞなり侍る。又山に事ありて、衆徒共、日吉の御輿を京に入れ奉るなりと聞えしかば、室町の大臣は武士を遣はして、山を攻めむとし侍るにぞ、都の内いとらうがはしかりき。又の年は信濃路などには、亂れありといふめれど、都のかたはいと長閑にぞ暮れ侍る。次の年には、義教の館に行幸あり。關白大臣を始め残りなく仕うまつり給ふ。神無月の末つかたなれば、木々の梢ははれて、庭の面に散り残る木の葉は、錦を散るばかりなるも、今日のみまうけにやと見ゆるに、松より通ふ木枯に、ふきあはすめる物の音は、雲居を響かしてそゞろ寒き程なり。夜に入りぬれば、おほとなぶら參りて歌の披講あり。内の御前、松色映池といふ事をよませ給ふ、



○ずんながら云々  
順次に下に及んだ様  
であるが。  
○星月夜 鎌倉山の  
枕詞。月光ならぬ劍  
光の目立ってきらめ  
くを戯れ云った。  
○憲實 執事上杉憲  
實。  
○比干 殷紂王を諫  
めた賢人。  
○子胥 楚の人伍奢  
の子吳王夫差に仕へ  
謀せられて自殺した  
兄。紂王を諫め用ひ  
られずして去つた。  
○基氏より四嗣 基  
氏満満翁持氏の四  
代。  
○良少將 良峯宗貞  
出家して通昭といふ  
○昔の衣 通昭「昔  
人は花の衣になりぬ  
なり昔の衣と乾きた  
にせよ。」  
○一條殿 兼良。

影うつす汀の松のおなじ枝に八千代をかくる池のさゞ波

ずんながらめれど、同じ筋なる事はうるさくてとゞめ侍る。年かはりて、秋のころ、鎌倉には星月夜ならぬ劍の光けざやかにて、弓の弦音絶えまなくなりつゝ、そのひゞき都にさへおよびて、こゝら兵をさしむけ侍る。かしこなる持氏は、ねぢけたる心もたりて、ひが事多かりければ、後見の憲實は、比干が昔思ひやるばかりの心づかひしけるにぞ、おのづから耳に逆ふ事のみにて、吳王の子胥を厭ひけむさま成りしかば、終に微子去りて、殷の代の傾きけむやうにて、又の年は、持氏も子なりける義久も亡び侍る。觀應の古基氏より四嗣まで相續き、百年に近き年月やんごとなくて、人々にもかしづかれつゝ、るけるに、今なむ絶え果てぬるも、さりぬべき宿世にこそ侍らめ。又憲實をば京にも類なきものに思ひて、鎌倉にすゑて、元の儘に事行はせむとしけれど、憲實は良少將の跡を慕ひて、人々は花の袂に立歸るにも、おのればかりは昔の衣にやつれて、後には修行者の様しつゝ、國を廻りけるとや。此の程大内山には、言葉の花色々を選び集めさせ給はむとて、雅世の中納言に仰言侍りければ、去年四季を奏し置きたまひしが、今年ぞ残りなくかへし奉れ給ふ。序をば、一條殿書き給へり。新續古今和歌集とぞ召され侍る。初め此の集の事定めさせ給ひて堯孝僧都を和歌所の開闢といふものになさるゝ由、仰せられければ、よみて奉り給ふ、

猶まもれ和歌のうら波かかる世にあへるや道の神も嬉しき

○あらぬさま云々  
全く異なつた様子に  
變装して。  
○滿祐 赤松滿祐。  
○大臣 義教。  
○うらなきさま 二  
心なきさま。  
○こゆるぎの急ぎ  
小餘綾は相模國の地  
名で、こゆるぎの磯  
と云つて急々に言ひ  
かけたのである。  
○ゆくりなく云々  
偶然義教薨去といふ  
事を言ひ騒いだ。  
○きえかへり 消え  
入るほごに思ふ、内  
心憤怒で死に入る心  
地がしたが外面は何  
事もないやうな風を  
した。  
○おのが國 播磨。  
○火をけちたる 火  
を消した様子。

いつしか永享も十二と申しき。東の方には、ありし亂れの猶残りて、孤子を助けて、漢

室を起さむとする者侍りければ、又都より軍あまた到りける。次の年嘉吉元年と申すに、城も落ちつゝ、こゝらの人亡びぬ。故持氏が子供は、あらぬさまにやつして、逃げ出でけれども、終にからめられて京に上りたるに、道にて失はれ侍るとなむ。今年暑さの例よりもまされるとて、都人どもも侘びあへるに、滿祐と云ふ者室町に参りて、「此の頃遺水掬びて涼しき流れ侍るを御覽せさせむ。」と、せちにきこえければ、大臣も暑さにかみたる處なれば、「いと嬉しき事なり。」とて、何心なく坐したり。人々もあまた遊び参る。滿祐はいたう歡びて、うらなきさまにもてなしつゝ、猿樂など催して見せ奉れば、大臣も人々もいみじう興じて、酒もたけなはなるに、あるじ方には兔のかしら、烏の首よりも、珍らしからむ御肴もとめ出でむとて、こゆるぎの急ぎあへるほど、ゆくりなくあへなき事なりといひ騒ぐめり。御供に参りつる者どもはあきれまどひ、おのがじ、散り亂れたるに、かつそこなはれぬるも有りけるとなむ。君達もおはしましけるが、からうじてまぬかれ出で給へるさま、淺ましともいへばおろかなり。滿祐はいといたう恨むる事ありて、下の思ひのきえかへりぬるに、上はつれなくもてなしつゝ、かくたばかり聞えけるとぞ。やがて氏族どもうち具して、大臣の首をも取りもたせつゝ、おのが國に下りはべる。室町には火をけちたる



- 内 後花園天皇。
- 後のわざ 葬送禮
- いふかひなく 意氣地なく。
- 論旨 教旨を受け
- 陣の宣下 大臣以下陣の座に著いて宣旨の下ること。
- 北野の御事 菅原道真が貶謫されたのも延喜元年辛酉の年である。
- 内外の宮 内宮ミ外宮。
- みそかなる事 秘密な事。
- 芳野殿の御かた 南朝の身方。
- 鎌子 藤原鎌足。
- 形代 祭祀の時神體として据ゑるもの

さまにて音もなくかいしめりて、誰もくあけぬ夜の闇にまどへる心地しけり。内にもいみじう驚かせ給ふ。後見なる者どもは、なくく後のわざをも營みけるに、内よりは太政大臣贈らせ給へり。室町には義勝とて、故義教の子の八つに成りけるをすゑて家を繼がせむと、後見ども定めて、内にも奏しけり。又都にはそこばくの軍を催して、播磨國に遣はしつゝ、満祐が籠りける城を圍ませけるに、いふかひなく日數のへければ、内より論旨をさへ賜はせて、満祐を討たむ事を仰せ下されけるにぞ、兵どもも心を起して戦ひをいたしければ、満祐も討たれて残る者もなくなりてき。満祐が首をば京にゐて來りければ、内には陣の宣下ありて、檢非違使に仰せつゝ、大路を渡され侍る。今年は辛酉の年なりとかや。昔より此の年はゆゝしき事あなりとて、さきくの帝は、年の名をも改められて慎ませ給ひしとなむ。かけまくも賢き北野の御事さへ、此の年にはべるとぞ承りし。つぎは嘉吉二年ぞかし。此の頃はいかなることの有りけるにや。伊勢の國主なる北畠は、内外の宮の神人どもと、中惡しくなりけるが、みそかなる事にもあらざりけるにや、都にも聞き付けて、武家より人を遣はして、方々制しけるによりて、また睦まじうなれりとぞ。此の北畠の家は、往昔より芳野殿の御かたなりければ、近き世にもつやく武家になびく事もせざりけるが、此の後ぞまめやかに隨ひけりとなむ。同じ月多武峯と云ふ處に、鎌子の大臣の形代とてありけるが、淺ましき様になりたりと聞えけり。此の事はいみじき世の大事

- 二條の大臣 持基
- 大炊の御門の大臣 信宗。
- 今年 嘉吉二年。
- 御五十日 御生誕から五十日目の御儀式。
- およすけ 早く智慧づく。
- 上 後花園天皇。
- 怠らせ給ふ 御病氣御平癒になつた。
- 二條の大殿 持基
- 御佛名 十二月十九日から三日開禁中で佛名經を讀誦して罪障懺悔する公事。
- 荷前の使 年末に十段八葉に幣帛を奉られる使。
- あえか いたいけな弱々しい。
- さやうの筋にて云 義勝落馬が原因で薨去したさもいふ
- 持國 畠山滿家の子。

なりとて、藤氏の君達は、取分け慎み給ひ、二條の大臣告文といふもの作りて、をさめ給へり。内には大炊の御門の大臣の奉れ給ひし女御いと時におはしけるが、今年男御子生まれ給ひければ、上は悦び聞えさせ給ひて、とく参り給はむ事を急がし給ひければ、御五十日も過ぎて参り給ひぬ。若宮のうつくしけにおよすけ給ひぬるを、上にもゆゝしきまでに思召されつゝ、いみじうかしづき奉らせ給ふ。此の頃内には例ならぬさまになやませ給へば、御修法の僧召しなどして、上達部も夜晝さぶらひ給ひしに、ほどなく怠らせ給ひぬ。十一月には義勝かうぶりし給ふとて、二條の大殿三條の中將を、室町の館にそうし申されつ。君達もつどひ参り給へり。内よりは俊秀の辨を御使にて、冠直衣を賜はせたり。また征夷將軍の宣下あり。五位にて中將をも兼ね給ふ。次の日は人々参りて、ことぶき聞えさす。年の末には内わたりも、御佛名荷前の使何くれと事繁く暮れ行きしも、年かへりて朔日より昨日にかはりて、物事珍らしき様なるに、参座の人々の袖の薰も、いつしか梅の匂ひに立ちまじり、通へる風もいと懐かしけなり。今年、春より世の中も長閑なりしかば、人々の心ものびらかなりけるに、文月には、室町の義勝失せ給ひぬと聞えたり。まだをさなかりつれど、武士の道なればとて弓射る事、馬に乗るわざをも習はし侍るに、いとさとくはありつれど、あえかなる程にてたへずやありけむ、さやうの筋にてそこなはれ給ふなりとぞ、人はいひあへり。やがて左の大臣の位を贈らせ給へり。室町には後見なる持



○内 内裏。  
 ○局町 宮中で局の多く連なつてゐる處  
 ○あかれて 離れ別れて。  
 ○夜の御殿 主上の御寢所。  
 ○こものみやつこ 主殿寮の下司。又衛門府に屬する門部とて宮門警衛を掌るものもいふ。  
 ○おほくしく 覺束ない。  
 ○さかしき人 氣丈な強い人。  
 ○腰輿 手輿。  
 ○芳野殿の若宮 後龜山院の御孫僧空因の子尊秀王。  
 ○有光 日野資教の子従一位權大納言。入道して祐光といふ。  
 ○山 延暦寺。

國など計らひ聞えて、義勝の弟なる義成とて、八つになりぬるを居ゑて、又なくかしづくめり。長月二十三日といへる夜、内にはむくつけき事侍り。盗人とかいひしらす恐ろしきものども参りて、一手は局町に攻め入りて火を放ちたり。人々は皆あかれて、上も夜の御殿に入らせおはしませば、宿直にさぶらふ上人許りにて、いとしめやかなる程に、俄にかかる事のあるをば如何はせむ。とものみやつこなどは、弓引くかたなどもおほくしく、かひくしき者にもあらざりければ、たゞおぢをの、きつ、さかしき人も侍らざりき。上は辛うじてまぬがれ出でさせ給ひ、忍びて近衛殿に行幸なる。内侍所の御櫃をば、東の御門を守りて居たりける武士ども取り出し奉る。神璽と寶劍をば盗みて出で奉りしが、寶劍は清水寺の邊に捨て置きたりける。後にぞ内に入らせ給ふ。夜も明け果てて、はしたなき程なれど、上は御車にて内裏に歸らせ給ひ、又晝つかた改めて、近衛殿に行幸ある。こたびは腰輿にて忍びやかなる御さまなり。これは下司共の入りたちて、みだりがはしければ、處々穢れぬるを清められむほど、かしこに坐すなるべし。怪しの者どもは、其の儘比叡山に登れり。昔の芳野殿の若宮、萬壽寺の僧にていまししを、とり奉りて、又世を亂らむと思ひ立ちて、かやうにふるまふになむ。日野の一品なりし有光入道は、此の事に心をかはして、せさせつるなりと聞えければ、子なりける宰相資親も諸共に、武家の方にとられて失はれにけり。山に籠り居ける者どもを攻めむとて、武士ども數多かしこに上りけ

○又の年 嘉吉四年二月文安と改元。  
 ○義成 足利義政のはじめの名。  
 ○持國 高山持國。  
 ○嘉吉の亂れ 赤松満祐の義教を弑した亂。  
 ○見あさみ 見てその意外なのに驚きあされる。  
 ○心あるごち 物の辨へある人だら。  
 ○侍所 鎌倉室町幕府の役所の一。武備を掌り非違を檢し罪を決罰する役所。  
 ○芳野殿の宮 義有王。  
 ○山にて失せ給ひし宮 尊秀王。  
 ○二條の大殿 持基  
 ○近衛殿 房嗣。  
 ○一條の大臣 兼良  
 ○きしろひ 軋轢して。  
 ○たいくしき事 あるまじき事だ。

るに、衆徒も同じごと打出でて、猛なる勢ひを見せければ、萬壽寺の宮を始め奉り皆亡び失せ侍り。かう打續きて世の中さうくしく、ものさとしなども有りければ、年號も改めて、又の年は文安元年にぞなされき。春の初め室町の義成は、持國入道が家におもむきける。其の日になりては、大路にも處々に武士共立ちなみて守り聞えたるは、ありつる嘉吉の亂れに懲りにたるめり。三月には都の内、大豆小豆など雨かとはかり空より降りけり。いとく珍らしと見あさみつるに、よき事にしもあらじと、心あるどちはさ、めきけり。夏のころは都の東西の商人ども、争ひをなして訴へ申したりけるに、西の京負けければ、口をしき事に思ひて、北野の社に籠りけるを、侍所なる武士ども、兵を遣はして搦めさせむとしければ、やがて御社に火を揚げけるにぞ、西の京の家どもも皆焼け失せ侍る。いと淺ましき事ぞかし。又芳野殿の宮とて、三井寺におはしましけるは、去年山にて失せ給ひし宮の御はらからなりけるが、それをもとり参らせて、芳野に居ゑ奉りつ、大和路紀路などの民ども、君とあがめ奉りて、昔の御跡を起さむ事を思ひ立ちけり、神璽も其處に坐すなりとぞ聞え侍る。立ちかはりみだりがはしき事もやと、都にもしづ心なく思召さる、に、今年もいち早く暮れぬ。次の年には二條の大殿うせ給ひければ、關白は何方にかはと思召されて、上も定めかねさせ給へる程に、近衛殿と一條の大臣とかたみにきしろひ給ひて、いとあひなき事に成りしかば、内にもたいくしき事なりと思召さる、に、猶



- 勝元 細川持之の子。
- 一條の大臣 兼良
- 關白大臣 房嗣。
- 後普光園院殿 二條良基の諡號。
- 御むまご 一條兼良の父經嗣は二條良基の子で一條房經の養子となった。
- 四年 文安四年。
- 弓場始め 主上弓場殿に出御になつて賭弓を天覽あること又歳首又は弓場新造の時初めて射を試みる儀式。
- 畠山 畠山持國。
- 紀路 紀伊北山。
- 三井寺より云々 義有王。

いやましに、いどみかはして、かなたこなたより、武家の方に申させ給ふに、後見なる持國、「此の事は武家の計らひ申すべきにあらず、何方にも上の御心にこそ侍らめ。」と聞ゆるにぞ、内よりは近衛殿に宣旨下り侍る。時房の大納言内大臣になり給ふ。武家の後見もかはりて、勝元とぞ申しき。又の年一條の大臣は、太政大臣にて、御座も關白大臣より上に著き給ふ。後普光園院殿の御むまごに坐して、萬のざえ賢く、書どもあまたつり集め給ひ、今の世にも傳はり侍れば、誰もしろし召したる事になむ。北の政所は宣俊の中納言の御女にて、教房の大納言を生み給へり。御次郎にて冬良と申すは、顯郷の治部卿の御女の腹にいましき。時房の大臣は、内大臣を洞院の大納言に譲りたまふ。この大納言も才有る人にて、公の御爲かひなくしき人なりとぞ聞え侍る。四年六月には一條殿關白に成り給ひて、近衛殿はかはり給へり。こたびのは、内の御心と定めさせ給ふにもあらず。一條殿いかにもして關白に成らむと思ひ給へど、御心もてなりたまふべきならねば、此の頃世は、武家の計らひなるをと思召して、義成の母君にまめやかにうれへ申し給へばなむ、武家のとり申すによりて、すみやかに成り給へりしとぞ。十一月内の御弓場始めも過ぎぬれば、武家にも同じ事催して、をのことも集ひつゝ、いみじう興じて、酔ひに乗じたる様も、したり顔なりかし。此の室町に仕うまつれる畠山が従者どもは、紀路なる芳野殿の軍を破りて、三井寺より盗まれておはしし宮をも討ち奉りしとて、御首をさへ京にもて参りたり。

- 誠や さて。
- 伏見殿 崇光院の御孫貞成親王。後花園天皇の御父。後崇光院と號せらる。
- 御封 御封戸。親王以下の官職勳功等に應じて賜はる民戸。
- 御母御息所 貞成親王の妃、後花園天皇の御母。
- 父君の少將 經有の御息所。貞常親王の御息所。
- 重有の御女云々 重有の女に御通ひになつて若君御出生あつた。
- さやうの御事云々 二の宮も御出生なく。
- さうくし 寂しく。
- 折にふれ云々 折につけて伺候させられる女房もある様子が皇子も御出生なく。
- 伏見殿 貞成親王
- 覺束なからず 疎遠ならず。

誠や伏見殿は、今年太上天皇の尊號賜はらせ給ふ。いととくあるべき事にて、此の日頃あなたよりさへ奏せさせ給ふ事も侍りしかども、上の御心に任せたる世にしもあらねば、滯らせ給へるに、今年ぞ御封など加はらせ給へる、いとめでたき御様なり。御母御息所をも同じ様にて、今は敷政門院と申し給へる。此の父君の少將さへ、左大臣贈らせ給ふ。上の御兄弟の貞常と申し奉るも、親王の宣旨を蒙り、内の御節會などにも出でさせ給へば、いと思ふさまなる御榮えに侍る。御息所は教季の大臣の御女にて、御子達もおはしますに、又重有の御女にも住み給ひて、若君とうで給ひしかば、後には三位してき。すべてはららにいと多く數そひ給へるを、内には聞かせ給ひて、羨ましう思召さる。中宮も一の皇子の後、さやうの御事もなく、さうくしう思召さるゝに、折にふれて御覽じいる、御かたがたも、とりくくにさぶらひ給ふめれど、外にはさる御事もなければ、いよく中宮ぞやんごとなき方の御思ひはまさり給へり。伏見殿には、今は思ふ事なき御有様にて、内よりも覺束なからず御使はゆき通へど、何方もかぎりある御身にて、御對面などの有りがたきをぞ、御年の積りぬるにそへて、いとあかぬ事に思されければ、雪のあした、鳥柴に雉子をつけて、内に奉らせ給ふとて、

御狩せし代々のむかしにたち歸れかた野の鳥も君を待つなり  
と奏せさせ給へば、内より御返し、



みかりせしよ、のためしをしるべにて交野の鳥の跡をたづねむ

これは此の頃の事には侍らず、永享の始めの事に侍れど、さきには忘れて申さずなりしかば、今爰にとうでけるなり。又の年は例よりも寒さも早う消えて、野山の雪も残りなくなりぬるにぞ、百敷のうちはいとゞうら、かにて、御簾のひまゝ通ひ來る梅の匂ひに、そこはかとなく、昔の事も思召し出づる程なれば、伏見殿のいと戀しう思召されて、久しう御對面もなきに、あなたよりもさらぬ別れの心と、常にのたまはせたるも、心苦しう思召されければ、さやうのかたにことつけて、野山の氣色をも御覽せむとて、行幸もあるべう思召し立たせたまひ、武家にも仰せられければ、やがて用意しあへり。伏見殿には聞かせ給ひて、いと嬉しく待ちおはさうす。その日になりては、上といみじう心けさうし、ひき繕ひて出でさせ給ふ。公卿殿上人は、色々の花を折り盡したる裝束どもいと清けにて、我人に劣らむやはといとみかはし給へるけはひはしも、又なくきら／＼しけなり。武士どもさへ思ひ／＼の直垂さわやかにて、つかうまつれり。院には珍らしき行幸に、何わざをかと御心の限り盡させ給へば、御まうけどもいと清らにて、人々も皆醉ひを重ね給へり。昔今の御物語細やかになり行くに、歸らせ給はむ御心地もし給はねど、都の外の行幸なれば、日敷を重ねておはしまさむもつ、ましう、世の聞えを思召さる、にぞ、院もあかす思召せど、さのみはえとゞめさせ給はず。かたみに御醉ひなきをかごとにて、御袖の氣色も

○宮司 上皇の御所の諸役人。  
 ○加磨 位階昇進。  
 ○御胸あく 心がせいせいする。  
 ○寶徳 文安六年七月改元。  
 ○かうはん 堀飯。獻飯振舞。室町時代膳部を將軍に獻ずること。その儀式を掌る者を堀飯奉行といふ。  
 ○勝元 細川勝元。  
 ○義就 畠山持國の子。  
 ○おほやけ人 公卿殿上人など。  
 ○關白大臣 一條兼良。  
 ○將軍に云々 義成を將軍にされた。  
 ○享徳 寶徳四年七月改元。  
 ○久我の大臣 源清通。  
 ○父大臣 一條兼良  
 ○忠仁公 藤原良房  
 ○すがやか 滞なく

たゞならずなむ。宮司ども加磨などすめり。院は今ぞ誠に御胸あく心地せさせたまふらむかし。次の年をば、寶徳元年とぞ申しき。卯月に室町の義成元服の事あり。さき／＼は二條殿など渡らせ給ひしに、此度は、勝元その氏族のものなどぞ、事ども勤め侍り。親通の宰相を敕使にて御太刀を賜はらせけるに、こなたよりも、黄金、御劍、御馬をぞ奉る。宰相にも劍馬など贈物あり。今日のわうばんは、勝元が沙汰にて、次の日は義就なり。いづれもいかめしう仕うまつれり。おほやけ人も武家の者どもも、悦び聞えつどひ参れり。關白大臣は處せき御ほどなれば、まうで給はず。やがて將軍になさせ給ふ。外記官務宣旨もて参りければ、定親といふ者受取りて、祿どもかづけたり。八月には義成内にまるれり。いと花やかにさうぞきたる、わかう清けなり。勝元をはじめ、猛き者ども、色々の直垂著て、車のまへしりへに隨ひたる、いとたのもしけなり。又後見もかはりて、もとの持國入道ぞなり侍る。寶徳は三年にてかはりき。此の程は公私いとしめやかにしてくれて、享徳元年になり侍る。一條殿は太政大臣を久我の大臣に譲り給へば、三條殿もかはり給ひて、一條の大納言ぞ内大臣と申しき。父大臣は次の年關白をとゞめ給ひて、准三后の宣旨あり。隨身兵仗などの御定めは、忠仁公の御例とぞ聞え侍る。いとおもだ、しき御事なりかし。二條殿ぞ關白に成らせ給ふ。室町の義成はすがやかに上りて、今は一品しつ、名をも義政とあらため給ひけるが、又の年は古き跡を認めて、氏の長者にさへ成り給へり。打續



- おろ／＼ 不十分ながら。
- 義就政長 義就は實子、政長は養子。
- 徳本人道 持國刺髪して徳本といふ。
- じちの子 實子。
- 室町 將軍義政。
- 御教書 將軍からの命令書。
- 山名持豊 時熙の子。刺髪して宗全といふ。
- さはとて それではといて。
- なめけ 無禮。
- かうじ 勘當。
- 成氏 足利持氏の第四子。鎌倉の管領。
- 康正 享徳四年七月改元。
- 西園寺の大臣 公名。
- 洞院の大臣 實熙。
- 一條殿 教房。

き世も治まりて、都も鄙も豊かなる時を得けるに、又いと淺ましき事ぞ起り侍る。これは公などのしろしめす事にもあらねば、爰にいふべく侍らねど、おろ／＼申し侍るなり。同じき三年の夏の頃、武家の後見などしける畠山持國入道が子供に、義就政長とて有りけるが、かたみに家を嗣がむ事を争ひ侍るに、父の徳本入道、じちの子義就をいつくしみて、政長はまゝ子なりとて、こよなう惡みつゝ、事にふれてはしたなくもてなしけり。はては室町に申して、政長を失ふべき御教書といふ物をさへ賜はれり。さるに勝元は政長をいたはりつゝ、己が家にあらせき。又山名持豊入道も勝元は婿なりければ、同じ事心をかはして有りけるが、やがて従者どもして、徳本が家を焼かせけるに、入道は逃けて、建仁寺の内にご隠ろひ住み侍り。義就は河内路に赴きぬ。さはとて政長に家を繼がせて、勝元計らひつゝ、室町に仕うまつらせしかば、先に賜ひし御教書も取り返されき。義政は此の事なめけなりとて、宗全をかうじの由いひ出で給ひたるにぞ、勝元様々にとり申して、宗全をば但馬國に遣はしたり。子なりける教豊は事なくて都に候ひき。鎌倉さへ又亂れて、昔の持氏が子なる成氏と、上杉などいへる者、方々にたち別れて、戦ひの絶間なくぞなりはべ。いととく年の名も改まりて、又康正元年にぞなさせ給ふ。おほきおとゝ又かはり給ひて、西園寺の大臣なり給ふ。洞院の大臣は左に、一條殿は右に移りたまへば、近衛の大納言は内の大臣になり給ひ、義政は大將と聞えき。大饗などあなたこなた打續きて、君達は

- 伏見殿の院 後花園天皇の御父貞成親王、即ち後崇光院。
- 長祿 康正三年九月改元。
- 洞院の大臣 左大臣藤原實熙。
- おさなしう 大人らしく。
- 石見某 石見雅助。
- ずさ 従者。
- うけはり 承知する。
- ゐて参りたり 持つて参つた。
- 南の帝の御傳へ 南朝の帝の御統。
- 政則 赤松義則の孫性存の子。
- なから 半分。
- 二條のおほき大臣 持通。
- 又の年 長祿四年十二月寛正に改元。

いまめかしきよそひどもにて、参りまかんで給へば、都の内は馬車の音絶えやらす、賑はしき事のみにて、年も暮れつゝ、又立歸りぬる八月には、伏見殿の院隠れさせ給ひき。御年は八十に五つもやあまらせ給ふらむ。ながう坐ししかば、嬉しき世にも逢はせ給へりしぞかし。後崇光院とぞ申し侍るめり。次をば長祿元年とや申すなり。卯月に、洞院の大臣は位をかへし聞えて世をそむき給ひ、東山に住み給ふ。御子の公致は心ほそけに思すめり。内の若宮はいとおとなしうならせ給へば、いつしか親王になし奉らせ給へり。二年七月には、室町の義政を内大臣になさせ給ふ。此の頃三條實量の大官の許に仕うまつりける石見某とかや云へる者は、昔の赤松がずさなりけるが、赤松の家の絶えぬるを常に歎きわたりて、大臣に申すやう、「此の家を發させ給はむには、芳野に渡らせ給ふ神嘔を、とり返して奉らむ。」と申しければ、大臣もうけはり給ひぬるにぞ、石見は心しれるどちいひあはせて、たばかりけるが、やがてゐて参りたり。芳野に帝とて坐しけるも、此の時討たれさせ給ひて、南の帝の御傳へは残りなくならせ給へるとぞ。神璽をば内に奉りければ、此のよろこびに室町より赤松の家を起して、政則のいとけなきに、加賀國をなからばかり賜はせたり。宗全も又都にるたりけるが、始めより此の事心よくも思はざりければ、石見をも密かに失はせけりとかや。二條のおほき大臣は、關白をば一條の教房の大臣に譲り給ふ。次の春、義政はあらたに殿作りして、花の亭となづけられき。又の年は寛正のはじめにな



○かしこまり 勘當  
○うての使 討手の使。

○政知 足利義教の第三子。關東管領成氏を討たんとしたが鎌倉に入るを得ず伊豆北條に居た。刺越公方と云ふ。

○近衛の大臣 房嗣

○教基 房嗣の子。右大臣。

○まめやかに苦しう 眞に苦しくなられた。

○處せう 仰山におもおもしろく。

○はかなき御事 薨去をいふ。

○一條の大臣 教房

む。過ぎつる頃事々しう騒がれたりし義就は、其の後都に歸りて、政長にも睦ましうなりつゝ、諸共に室町に仕うまつりてゐたりけるが、また義政の大臣のかしこまりを蒙りて、再び河内に下りしかば、京より政長をうての使にてつかはしけるにぞ、あなたさまには、處々にて戦ひありと聞え侍る。又の年義政のはらからなる政知を、關の東に遣はしたり。日頃かしのみだりがはしくのみなりまさりければ、國々の掟をも正しくして鎌倉を守るべき定めなりしが、いかゞしつるにか、此の人は伊豆に住み侍りしとぞ、誠や、さきに本意なくて關白をもやめられ給ひし近衛の大臣は太政大臣になりたまへり。此の頃内の大臣は、徳大寺の公有久我の通尙など、かはるゝなり給ひぬ。三年四月には河内國なる義就が軍猛なりとて、都より兵多く下りしかば、義就打負けて、城ども落され侍り。猶残りなく責め亡ほしてむとて、とかくものしける程、秋にもなりぬ。都の内も夕かぜの身にしむ頃は、おしなべて物悲しきに、近衛殿には教基の大臣心地煩ひたまひて、ふしがちに坐しけるが、八月にはまめやかに苦しうし給ひければ、大父殿御はらからの殿原、御心をまどはして、御祈りども處せうの、しり騒ぎつるに、つゆ驗なく、はかなき御事なりければ、殿の内どよみて、いとあわたゞしきに、大殿は其の儘におきも上り給はぬにぞ、さぶらふ人々もいと哀れに見奉りて、袖の露おき添へたり。されど餘所目には御せうとの君達數多<sup>おほし</sup>坐せば、いと頼もしけにぞ見え侍り。次の年一條の大臣表奉りて、關白かへし給

○二條殿 持通。  
○御座の定め 公儀の席に於ける座席順  
○一條殿の御父 教房の父兼良。  
○ありしやう云々 これまでのやうには思つてゐない。  
○まさなき事 よからぬ事。  
○方人 身方。  
○猿樂 戯に演ずる滑稽な所作。後傳じて音楽歌舞の備はつた演藝になつた。  
○高きいやしき 高貴の人も下賤の人も  
○糺 洛外下鴨村の南。加茂高野二川の合する所。  
○室町の大臣 義政  
○かへさ 歸途。  
○ささし 物事の前兆となるべき神佛のお告げ。  
○しづ心 落著いた心。安心。

ひければ、又二條殿に宣言あり。此の後御座の定めありて、三條の實量の大員は、一條の教房の大臣の上なるべく仰言ありけるに、一條殿の御父大殿しひて奏し申したまふによりて、教房の大臣は上につき給へりとなむ。去年より河内に在りける軍どもは、終に都の方うち勝ちて、義就は高野山に上りけるが、そこにもたへずやありけむ、芳野の奥に入りけるにぞ、今はとて政長も京に歸り参りぬ。宗全は勝元をもありしやうに睦まじう思ひたらす、いつとなくかたみに、そはしくなりゆきて、まさなき事多く侍り。宗全は義就をかひくしき者なりとて、我が方人にせまほしくて、みそかに人などつかはしけりとぞ。また寛正も五年にぞなり侍る。近き世には猿樂とて、古のたぐひにはあらず、あやしの舞のさまに侍るを、高きいやしき翫びつ、興じけるが、此の頃も糺のわたりにて、さる事あんなりと聞えしかば、上達部殿上人武家の兵どもまでも、こぞりて物見侍り。棧敷どもことごとしうしつらひて、室町の大臣も日々にわたりて見給へば、武士どももつどひ参りつゝ、酒酌みかはして思ふ事なけなり。かへさには勝元政長などが家に立寄り給へれば、さまさまに御まうけつかうまつれり。かやうにいまめかしく遊びなどにて過ぎ行くには、千代をふるともあく世あるまじけれど、大方の世はさとしなど打續き、公わたくししづ心なきやうなるにぞ、上はいと疾くおりさせ給はむ事をのみ、思召されけるとなむ。



卷第十

後土御門院

- 嘉樂門院 信子。
- らうくしう 巧者で。
- 上人 殿上人。
- 二條の大殿 持通
- 院の別當 後花園
- 上皇の院の廳の長官
- 處せからで 御退
- 位の後は御幸も窮屈
- でなく思ふ儘で。
- 上の親王ミ云々
- 後土御門天皇がまだ
- 親王ミ申した頃から
- 唯ならぬ事 懷妊
- をいふ。
- いみじきにも云々
- 大それた御めでた
- い事であるが一方で
- は又容易ならぬさて
- 御はかし 御佩刀
- 珍らしき云々 御
- 安産といひ男みこ
- いひ御めでたい事が
- 御希望の通りなのを

百あまり四つに當り給ふ御嗣は御諱成仁と申し奉る。後花園院の一の宮にて、御母嘉樂門院は、大炊御門信宗の大臣の御女におはします。寛正五つと申しし七月御位ゆりの事侍る。御年二十に三つばかりやあまらせ給へる。いと盛りに勻ひやかなる御容にて、御心ばへもらうくしう、愛敬づきて、なだらかにおはしませば、上人などもいとう思ひつき奉りて、まだ皇子におはしましたし時より、心よせ奉る人多くなむ。猶二條の大殿ぞ關白せさせ給ふ。院の別當は室町の義政なり。今は心安く御幸も處せからでと思召されき。内には重賢の大納言の御女、上の親王と聞えさせし程より、典侍にてさぶらひ給ひしを、容のいとめでたくおはしまししかば、御心とめて御覽じふれけるが、唯ならぬ事さへそひて、父の大納言はいみじきにも、かつはゆ、しくて御祈り數々に思ひ至らぬ事なくせさせ給ふ。神無月末にいたく惱み給ふ事もなく、皇子生まれ給へり。男にさへ坐せば、人々の心ども置き處なけなり。内に奏しつれば、いみじう嬉しと思しめされつ、いととく御はかしもて参れり。院にも珍らしき御事の思ふやうなるを、返すくよるこばせ給ひ

- 産養 産養を供へ
- て出産を祝する儀式
- 又親族から贈物をし
- てこれを祝ふこと。
- 御湯殿 産湯を浴
- びさせ奉る儀式。
- 御遊び 管絃の御
- 遊び。
- 准后 三后に准じ
- て年官年爵を賜はる
- こと。
- 室町の上 義政の
- 妻。
- 大臣 義政。
- 内 後土御門天皇
- 院 後花園上皇。
- 今出川の方さま
- 義政の弟義親。
- くつしぬる 氣が
- 晴れない。
- さりとも云々 所
- れでも後嗣としての
- 義親を廢することも
- あるまい。
- かやうのきざみ
- かかる場合。
- 同じうは云々 同
- じくは若君を立てて
- 何の物思ひもなく見
- 奉りたし。

て、いつしかと御産養の事をさへおぼしまうけけり。其の程の御けはひ聞えさせむ方なし。御代の始まりにも、かかる事のうちそひぬるを、誰もくもてはやしつ、御湯殿より五夜七夜の御遊びおもしろきに、内侍などのかへり参りて、奏しけるを聞かせ給ひて、内にもいとゆかしうせさせ給へり。此の頃義政は准后の宣旨かうぶり給ふ。御子のなきを心苦しう思ひ給ひて、御弟の義尋とて淨土寺に居給ひしを、迎へて御子になしつ、義親と申して、左馬頭になし給ひ、今出川なる處に住ませて、勝元を後見に定めたり。室町には政長を後見にする侍る。又の年室町の上若君をうみ給ひ、大臣も珍らしがりて、いつきかしづき思ふ様おろかならず。内、院よりも御とぶらひあり。公卿、殿上人、武家の人々も、さまざまの産養いかめしうもてつ々けつ、こちたき世のひきなるを、聞き給ふ今出川の方さまには、胸いたくつくしぬるに、勝元などはさりとともぞ思ひ居けり。かやうのきざみにこそ、昔より人の心も見えて、けしからぬ事も出で来るならひなれば、又いかさまにかと心やましう思ふ人もあれど、さし當りては、思ふ様なる宿世のいみじきをぞ聞えあへり。大臣もいでや心うき世にもあるかなと、とりかへさまほしう思ひ給へど、人の見思ふらむ事のつ、まじさに、多くは思ひけち給ふ。北の方はともかくも思ひわくとしはなけれど、さし過ぎたる老御達などの若君のゆかしきまでに見え給へるを、同じうは思ふくまなくとも見奉らばやなどつきしろひさ、めくを聞き給ふに、自ら心も亂れて、



○宗全入道 山名持豊。  
 ○慮えける 時を待て勢力ある。  
 ○心づきなく 氣にくはず。  
 ○文正 寛正七年二月改元。  
 ○二條の大殿 持通。  
 ○あらし 豫期した事。  
 ○大納言 義親。  
 ○せちに云々 切に調停し諒めた。  
 ○大臣 義政。  
 ○歎き 歎願する。  
 ○應仁 文正二年三月改元。  
 ○やくにて 仕事として。  
 ○らうがはしき 亂りがはしい。

世の譏<sup>そし</sup>りをも包みあへ給はずやありけむ、みそかに宗全入道を召して、若君の御事をねんごろに聞えつけ給へりしに、入道は、此の頃勝元が今出川の後見して慮えけるを、なまねたく思ひけるをりなれば、若君の後見して勝元をおしけたむの心つきて、速かにうけがひけり、勝元が方には、いと心づきなくむすほれたる様にて、今年も暮れぬ。次は文正元年とかや、二條の大殿の御子政嗣の大納言と聞えし、今は右の大臣になり給ひ、内のおとゞには西園寺の實遠なり給ふ。今出川の義親も大納言と申しき。去年のあらしは、今年ぞもて出でて、ひがこと多く成り行きつ、室町には事のたがひめ有りて、今出川に心置き給へるさまなれば、大納言は勝元が家に入り給ふを、勝光の大納言は、室町にも親しきあはひなりければ、せちに言葉ませ給へるにぞ、大臣も心とけて、大納言又今出川に歸りいましき。此の程宗全が歎き申すによりて、義就も都にのほりぬれば、政長は心うく思ふにぞ、いよく勝元に睦<sup>なご</sup>み聞えける。年返りは應仁に改まり侍る。春の始めより世の中静かならで、都の大路には、武士共行き歸り弓弦うちならし、馬に水飼ひなどするをやくにて、大宮人の節會參賀などに出で立ち給へる道の程も、うたて煩はしき事のみにて、苦しき事におほいたるに、内をも院をも、俄に室町の館に行幸なし奉る。いとらうがはしき程にて、何の御よそひもなく、人々は心も空にて、仕うまつり給ふ。宗全入道が心もて、かやうにはしつるなり。又今出川の大納言をも室町にわたし聞えて、勝元政長を止ほして

むと思ひよりけれど、大臣も大納言も受け引かぬさまにて、大納言は勝元に「政長を見はなちてよ。」と諫め聞えたり。かかれれば、勝元は世の危きを思ひてひき籠りけり。政長は義就と争ひをなしけるに、政長うち負けければ、勝元は心やましう、顧みせざる事を口をしう思ひて、ひたぶる心動きしかば、頓て國々にいひやりて、えもいはぬ軍どもを催し侍るに、雲霞の兵棚引きて上りたり。宗全も同じごと召しに遣はしつれば、こゝら競ひ参りたるは、數へやらむ方なし。内、院などはさる騒がしきわたりにおはします。いと忝<sup>かたじけな</sup>しとて、大臣なども還らせ給へぬべく催して、御車御輿など用意しけるにぞ、内も院も二十日には還らせ給ふ。武士どもは何のよき事と思へるにや。日毎に挑みの、しりたり。都ぞ春の錦といひけむ柳櫻は色なくて、外山の霞も立ちかへりつ、飛火の煙は尾上の花を覆ひたるばかりにて、武士どもの鎧直垂といふ物も、色あへは同じ錦なれど、なつかしき匂ひもなく、いとけ恐ろしきに、えもいはず鋭き太刀かたなの光は、秋の霜よりもまづ身はひえて覺え侍る。五月には關白もかはり給ひて、一條殿の父大殿ぞなり給ふ。猶ひしめきの絶間なくて、室町の館をば、宗全が方なる義直と云ふ者守り居けるを、勝元兵共して追ひ討たせつ、おのれ守り聞えたるに、義政はたを賜ひて、宗全を討つべく聞えつけ給ふ。勝元は東の方に、宗全は西にありて、更に戦ひ止む時なく成り行くにぞ、こなたかなたより、處々を焼かせければ、人々の家は更にもいはず、寺々社々さへのこるまじけなり。丸



○御垣守 禁中の諸門を警固する衛士。  
 ○衛士 軍團から上番した衛士府の兵士  
 ○あくがれ出で 心もそらに迷ひ出て。  
 ○このる申し 禁中宿直の者夜中自分の姓名を申し上ぐる。  
 ○上臥 禁中の宿直  
 ○内の御事 内裏の御事。  
 ○なめけ 無禮。  
 ○時なりぬ 定めの時刻になつた。  
 ○ふりはへたる 一筋になした事。  
 ○つかうまつり 御供仕る。  
 ○光嚴院云々 元弘三年高時亡び官軍京都を恢復し光嚴院廢位のこをいふ。  
 ○室町の大匠 義政の思ひうんじて 思ひ備みて。  
 ○烽火三月、故郷の文云々 杜甫の春望の詩の句「烽火連三月家書抵萬金」によつた。  
 ○ごよみ 騒動。

重の宮の内は、御垣守衛士などもあくがれ出でつゝ、箒さす人もなく、とのる申しの聲も絶えて、宵曉のけはひはしも、いひしらす物すぎ様なれば、上臥しける人々も堪へがたけに覺えたり。武家にも内の御事の心もとなくて、かかる折は賤しき者どもの近付き参りて、なめけなる事もあんなれば、室町に渡し奉り心安く守り聞えむと思ひて、内にも奏しつゝ、御迎への人々奉れたり。上は春風のあらましかりしも忘れ給はぬに、立歸り秋の嵐の、御心をみだりけるよと思召さるゝに、ともかくも思ひわかぬ御程なれど、荒々しき者共の外の方にて、時なりぬと催し聞えたるも、いとむくつけう思召されて出でさせ坐す。院の御幸もあり。女院、女御殿、宮々もひき續けて坐せば、内侍は暎の御箱御劔など取りてさぶらふ。ふりはへたる事にて、人々をも召しあへ給はず、はつかに聞きつけ給へるのみぞつかうまつり給ふ。久我の通尙の大臣、西園寺の實遠、九條の政基の大納言、鷹司の政平の中納言、日野の政光の辨、柳原の廣光、烏丸の冬光ばかりぞ参り給へり。昔光嚴院などの六波羅に行幸ありけむ様にやと、思召されていみじき御氣色どもなるを、室町の大匠も心苦しう、あぢきなく思ひ聞え給ふ。義視も世の中思ひうんじて、忍びつゝ、伊勢の方に下り給ひぬ。又の年も同じさまにて、烽火三月につらなりしかば、此のどよみに催されけるにや、國々みな亂れ立ちたりといふめれば、都に侍りける者どもも、故郷の文をば、萬の金にもかふるばかりに思ひぬべし。勝元は義視をも京に迎へたりけれど、大臣

○心ゆかぬ云々 義政の不滿な様子。  
 ○兄弟の中 義政義視兄弟。  
 ○室町の上 義政の妻。  
 ○文明の元 應仁三年四月改元。  
 ○さがりがたき節會 行はざるべからざる節會。  
 ○さうくし 寂し  
 ○いぶせう 氣が晴れず。  
 ○法の御つとめ 佛道の御勤行。  
 ○つらね歌 連歌。  
 ○こもに出でてもかこたれず 言葉に出して歌くこも出來ない。

の心ゆかぬ様なりければ、やがて比えの山にあらせけるを、宗全又己が陣の内に迎へとりて、私の主とかしづきぬるにぞ、いつとなく、兄弟の中も隔て多くなれり。此の義視の北の方は、室町の上の妹にいましければ、何方にも睦まじかるべき仲らひの、はかなき一ふしにて、かく亂れそめて、普き世の愁へとなりぬ。今年もらうがはしくて暮れつゝ、又文明の元とぞ申しき。内、院は其の儘に室町に坐せば、朝拜に参る人も僅かなるに、さがりがたき節會をさへとゞめられて、いとさうくしけなり。いつしか百千鳥の囀るころにもなりぬれど、御物思ひは改まるとしもなく、いぶせうのみ思召されき。院の上はひたすらに世をそむき捨てさせ給へど、法の御つとめさへ、御心の儘ならず、まして御遊びなどはかき絶えたるにぞ、いとゞ御つれづれに坐せば、靜かなる宵の程などは、人々御前に召しつゝ、つらね歌とりづくに、つかうまつらせ給ふとて、

こぎわか、れゆく／＼船のあときえて  
 といへるに、院の上、  
 又、  
 わたるもかなしあだし世の中

身をすればこもに出でてもかこたれず  
 とあるに、内の上、



○さるさまに云々  
前生望んで居た通りに攝津介に任ずる事を書きつけて。

○後の事 葬送。

○一條殿 兼良。

○はしたなく 情なく。

○百の司の人々 百官。

○桃咲く谷 武陵の桃源で、世さかけ離れた山境をいふ。

○上 後土御門天皇

○院 後花園院。

○御心のいさまなく 御心の休む暇なく

○はつかに落ちさま 僅かに逃げ

○女院 嘉樂門院。

○心をさめたる人 心の落著いた人。

とにもかくにも憂きは世の中

など仰せらるゝを、ゆにさぞ思さるらむと、人々もいとほしう見奉るに、次の年もなほなほ亂れて、八島の外へ潮さへ、都のうちにもちくるにやと覺ゆるばかりなるに、此の頃のどよみには、勝元打負けぬるにや、従者なる安富元綱といへる者は、兄弟同じ様に討たれぬと聞えけり。勝元は哀れにも口惜しう思ひつゝ、日頃攝津介を望み申したりし事を思ひ出でて、なき影にも嬉しやと見むとて、さるさまにおもむけつる事書き付けて、おくに、もしほ草かくとはたれかしら露の消えしにつけてぬる、袖かな

鹿苑院にて後の事をもせさせけり。七月には、一條殿關白をも、二條の政嗣の大臣に譲り給ふ。年頃の亂りがはしさに、昔より傳へ給へし御寶物どもも卷々の書なども、皆散り失せて、すゞろなる事のみなりければ、さぶらふ人もまかで散りつゝ、いかめしかりし勢ひも衰へ行きしかば、いとはしたなく、思されて、今は都の中へ給はむ事も難き様にて、京をも忍び出で給へど、さすがに鳥の音きかぬ山路までは、えわけ入り給はず、奈良の京にいと幽にてぞおはします。御子の教房の大臣は、兵庫の方に赴きたまひ、御孫の房家の君は、舟にて土佐國に渡り給へり。かかれば百の司の人々も、心々にあくがれ出でつゝ、桃咲く谷を尋ね入り給へるさま、淺ましとも聞えさせむ方なし。上はかやうなるにつけても、世や盡きぬらむと思召し歎かせ給へるに、うちそへて院さへなやましうせさせ

○うちあはぬ行宮

○はる、世なく 氣

○年ばかりぬ 文

○日頃だに云々 平

○生でも宮中はひつそ

○りしてゐるに況して

○今年は新年の様子も

○なくあいそがない。

○院の御事 院の御

○葬儀。

○奏服 喪服。

○御忌に籠れる 御

○喪に服して籠る。

○上人 殿上人。

○上 後土御門天皇

○次の年 文明五年

○たづきなく よる

○べなく。

給へば、いと御心のいとまなくて、はつかに落ちとまれる僧達召しつゝ、加持参りさわぐ。師走には終に隠れさせ給ひぬ。女院を始め参らせて、誰もく心をさめたる人なく、ゆゝしげに泣きまどへり。上もいたう思しくづほれて、さりともと思召されし頼みもむなしく、再び院に歸らせ給ふ事なく、かううちあはぬ行宮に世を思召し侘びつゝ、すぐさせ給ひし御事を、返すくはるゝ世なく思ひ亂れさせ給へり。御年五十二にや物し給ひき。武家にもいと口惜しき事にうち歎きたり。おしなべてしづみ入りつゝ、月日のすぐるも知らぬ様なるに、いととく年はかはりぬ。日頃だにあるをまして今年は改まりぬるけぢめもなく、宮の中かいひそみぬるに、外はまた戦ひの街とのみなれる、いとすさまじけなり。院の御事は、とかくして睦月二十日餘りに、悲田院といへるに送り奉る。かかるみだれの折なればとて、道の程は、武士ども數多して守り奉れり。何れも鎧直垂などいへる物の上に、素服を著たるも、さすがに哀れなり。君達なども多からず、忍びたる御様なり。義政の大臣も歩にて御送りし給ふ。風うちふきて寒返りつゝ、霞みかねたる空なれど、有明の月は涙に曇りて朧なる曉方、人々はなくく歸り給ひぬ。御忌に籠れる上人などは、鐘の音にも心細さの數そひて、物思ひの花のみ咲きまさる春なれば、上もいとたへがたく住みうくせさせ給へど、内裏に歸らせ給はむ事も、御心の儘ならねば、いつとなき御思ひの中に又一年ぞ移り侍る、此の程は勝元が軍勝ちえたりと勇みあへるに、宗全が方なりし者の、



○あかれぬべうおほえ 別れ散つてしまふだらうと思はれた  
 ○其の人ならぬ者ども 其の地位にあるべからぬ賤しい者ども  
 ○室町の若君 義政の子  
 ○義統 斯波義達の子  
 ○二條の關白 關白兼左大臣二條政嗣  
 ○鷹司殿 政平  
 ○一條殿の御ぞう 一條兼良の御一族  
 ○歸らせ云々 奈良から京に歸ることを勧められた  
 ○おほき大臣 兼良  
 ○武藏野の草のゆかり さいふにつけた修飾の語で意義はない。ゆかりを言ひたてるべき關係のある人があるからと  
 ○みかの原 山城泉川の北岸

こなたに参るも有りと聞えし。次の年のやよひに、宗全は失せにしかば、そなたさまの者どもは、たづきなく思ひけるに、又勝元も身まかりぬ。此の七年が程たゆみなかりし争ひの、終にまさる方もなくて、諸共に失せにしかば、今は國々の兵もあかれぬべうおほゆるに、猶残り居て、同じ事いどみかはせるにぞ、いつとなく、君の光も幽になりて、武家の勢ひさへ衰へ行きつ、其の人ならぬ者どもなり出でて、處えがほにふるまふも、いとたへがたき事多き世なりかし。年の暮には室町の若君元服して、義尚と申し、中將になさせ給へば、父大臣は將軍を譲り給ふ。後見は政長なりけるが、七日ばかりありて、義統にぞかはり侍る。次はいととく暮れて、文明も七年にや。七月に二條の關白殿は、左大臣を九條の政基の大臣に譲り給ひ、鷹司殿は右に轉り給ふ。近衛の政家の大納言とて、昔の教基の大臣の御弟にいましし、こたび内大臣にাগり給へり。何方も大饗などは、音もなくて過ぎ侍り。かうとりくくに成りかはり給へるにつけても、一條殿の御ぞうの坐さぬを、内にも君達もあかぬ事に思召されて、歸らせ給ひぬべく御消息聞え給へど、おほき大臣はいつしか世をも背き給ひければ、今は心安くい立ついそぎをもし侍らむとのみ聞え給へり。されどそこにのみも坐さず。五月の頃よりは、山の東美濃國に、武藏野の草のゆかりかこつべき故ありとて、そなたさまにむきておはしけり。みかの原をすぎ給ふに、かぞふれば明日は五月のみかの原けふまつならの都いでつ、

○岩がねのさほり いはほの上の通路。

○志のかた 志した土地。  
 ○禪利 禪寺。  
 ○うちあはぬことなく 整ひそろはぬ事なく。  
 ○ゆかりたつ人 親戚縁故ある人。  
 ○すたく 集まる。  
 ○無下 むやみに。  
 ○道行ぶり 途中。  
 ○後光嚴院云々 文和二年南朝の軍京都を攻め細川清氏後光嚴院を奉じて美濃に逃げたことをいふ。

行く先は打續く亂れに、新たなる關共の有りけるを、とかく紛らはして越え給ふとて、さもこそはうき世の旅にさすらはめ道さまたけの關なとゞめそ  
 岩がねのとほり、習はぬ道どもを踏みわけておはしけるが、行手なれば、石山にまうで給へり。

さわぎたつ世にも動かぬ石山はけに逢ひ難き誓ひなりけり  
 坂本を過ぎて船に乗り給ふに、  
 さゞ波やけふを日吉の船出せむ追風おくれ唐崎の松  
 やがて志のかたにおはしつきしかば、そこなる人々はいたう珍らしがりて、おろかならずもてなし聞えつ、正法寺といへる禪利の内に、新しく清けなる處の、さ、やかなるに坐すべくおきてたり。鄙の住居といへど、うちあはぬことなく、いとゆるしくしきに、ましてゆかりだつ人のすだくわたりなれば、いみじう心やすく思ひて、しばしはおはしけれど、何處もみだりがはしき折なれば、無下に日數を重ねむも、あひなしと思ひて、又立出でつ、道行ぶりに、こ、かしこの古き跡をも見めぐりたまへり。垂井と云ふ處の民安寺とて、そのかみ後光嚴院の、南の軍におそはれさせ給ひて、爰に行幸させ給へりし時、御手づから植ゑさせ給ふべしと聞えし松の、今は老木にてあるを見給ひて、  
 世におほふ君が御影にたぐふらし民安かれと植ゑし若松



○すまびて 甚しく荒れて。

○つぎめて 翌朝。

○塵の世 濁世。浮世。

○それはた云々 その書物もまた戦亂の爲に佚亡してしまつたのを口惜しく思はれた。

○末の世云々 亂世には容れられない程の才學。

○北野 菅原道真をいふ。

○まろ 我。おのれ。

○延喜の帝 醍醐天皇。

○李唐 隋を亡ぼした唐の天子は李氏であるからいふ。

○さばかり云々 我を管公と同じほごに尊ぶだらうか。

○むつかしき 煩さい。

○君達も數そひ 子息たつちも多くなれば、

○心ゆるび 油斷。

○又の年 文明八年

○九條殿 政基。

○よせ重く うしろたてがあり信任されて。

○政長 畠山政長。

○公の御掟 朝廷の御命令。

○上 後土御門天皇

○むすほはれて 心晴れないで。

○らうがはしき 亂りがはしき。

○待つ事もなく 望みをかけ期待される事もなく。

○時を感じ 杜甫春野の詩の句に「感時花濺淚、恨別鳥驚心」

○御思ひのつま 御物思の種。

○次の年 文明十一年。

猶處々ありき給ひて、近江國なる新宮の馬場とかやいへる處に、泊り給ひしに、夜一夜雨風すまびて、物すまじき様なりければ、ねられ給はず、つとめて急ぎ出で給ふとて、

憶得三生石上縁 一庵風雨夜無眠 今朝更下山前路 老樹雲深哭杜鵑

日頃ありてこそ、又奈良に歸り給ふ。今は唯塵の世の事は、かけても耳にふれ給はず、書どもをのみ友としたまへど、それはた昔の餘波なくなりぬるをぞ、口惜しう思し歎き給ふ。末の世には餘るばかりの才おはしける人なりとて、人にも普く用ゐられ給ひ、みづからもこよなき心驕りし給ひつゝ、常に北野の御事をさへ、かろめ奉るやうに聞え給ひて、「まろは北野に勝れたる事三つあり。あなたは世にいましし時、右の大臣なり。我は左なり。こなたはやんごとなき家に生まれ、かなたは人がら尊からず。又才のほどをいはむには、此の國は延喜の帝の頃ほひ、唐土は唐の代の季までぞかし、われは延喜の後、李唐の末、數多の世の事を知りき。されど後の世の人、我をばさばかりに尊まむやは。」とて、うちめき給へりとや。あまりなる御事に侍り。さは虚事にもや侍らむ。終に文明十三年と申しし卯月に失せ給ひき。御年八十とか聞え侍り。御次郎なりし冬良の君をば、都にとめ奉り給ひし、後には氏の長者にもなり給へり。土佐に渡り給ひし房家の君は、かしこにていみじうさかえ給ひて、國民どもは一條殿とて、やんごとなく思ひ聞えたるにぞ、むつかしき都の御住居よりは、中々うしろやすく思されき。程へて後、君達も數そひ給ひしか

ば、一方をば京なる冬良のおとゞ養ひ給ひて、房通の君などぞ申し侍りし。猶都は心ゆるびなき様にて、今年も過ぎ侍り。又の年は九條殿に關白の宣旨下りけるに、左の大臣かへし奉り給ひしかば、日野の勝光の大臣なり給ふ。これはさやうにあがり給ふ事がらしもあらねど、室町の義尚には母かたの御伯父なりければ、よせ重くて、かくはなりのほり給へりとや。また年かはりては、有りつる軍どもも、今は都の内にもたへがたきにや、己が國々に下り侍り。義視は美濃國に赴き給ふ。武家の後見もかはりて、政長ぞし侍る。此の頃はやうく都もしめやかにぬれど、猶國々の亂りがはしきはいやまさりつゝ、公の御掟にも隨ひ奉らぬ様なりければ、武家の人々もせむ方なくて、思ひ歎きける。上はをどし室町の家も焼けにしかば、北小路の家に渡らせ給ひて坐しければ、むすほはれてのみ過ぎたまへるに、此の頃都の外なる處々のらうがはしきを聞かせ給ひても、御胸潰れて思召されけるにぞ、待つ事もなく思し捨てつる春さへ、又廻り來けるに、時を感じてはと、花鳥の色音も中々御思ひのつまなりかし。文月には又そこもいぶせき煙のまぎれに、そこなはれたりければ、俄に聖壽寺に行幸なりて、暫しおはしけるが、又政資の侍従の一條の館を、内裏になさせ給ふ。いとゞ御心も空にて、御思ひの絶間なきを、いとかたじけなき事にぞ、人々も見奉る。君達なども事にふれて、堪へがたく苦しき事のみあるを、歎き渡り給ふに、次の年は引きかへて、春より長閑なる様なりければ、人々の司位をも、品



○近衛殿 政家。  
 ○女院 後土御門天皇の御母嘉樂門院。  
 ○内 主上。  
 ○時の人 時に遭つて勢力ある人。  
 ○内の若宮 皇子。  
 ○御かうぶり 御元服。  
 ○渡らせ給ひし内裏を御出ましになつた折。  
 ○仕うまつる人々 供奉の人々。  
 ○大臣 義政。  
 ○北山の家 義満の建てた北山の金閣。  
 ○榊尾云々 茶をいふ。  
 ○心おちる 心落ちついた。  
 ○ありしにかはりて これまでの戦亂の時と異つて靜かに落著いた年の永くあれかしこ。

品に改めさせ給ふ。關白には近衛殿なりたまひ、三條の公敦の大臣は右にあらりて、大炊の御門の信量の内大臣になさせ給ふ。此の殿は三條の實量の大臣の御次郎にていましけるを、宗信の大臣御子になし聞え給へば、女院には御兄弟のつらにて、内にもとりわけ睦まじう思召され、いと時の人にぞ坐す。内の若宮の御かうぶりの事、今年こそと思召され、上も御心遣ひせさせ給ふ。十二月十三日、義政の小川の家にて此の事侍り。おなじ二十日には、親王になし奉らせ給ふ。此の程ぞ上も土御門の内裏に還らせ給ひぬ。渡らせ給ひし折は、何の御儀式もなかりしかど、こたみは忍びやかなる様なれど、仕うまつる人々も、よそひども清けなり。されどきら／＼しき様にはあらず、騒がしかりし餘波なれば、萬憚らせ給へり。室町には義尙世をまつりごちたまへば、大臣は東山に殿作り清らにして住み給ふ。昔の北山の家にも、をさ／＼劣るまじう、みがき調へられたればとて、今のをば銀閣とぞ申すめり。古代の寫繪、調度やうの物を好み集めつ、榊尾につみ出でたる春の若草の薰もえならぬなどを愛でては、唐土の鳳凰山にも分け入りて、求めまほしき様なり。次の春は内にも日頃いぶせう思召しつる御心も、いつしかはれ／＼しうなりて、いとどしう珍らかなる百敷の庭の御けはひなり。はた國々は、やすけなき様に聞召さるれど、都の内にあらむよりはと思召しかへしつ、數々御遊びをもせさせ給へば、さぶらふ人々も、今はと心おちるたるにぞ、ありしにかはりて永くもがなと思へる月日の、中々とゞめ

○教季の大臣云々 教季は左大臣に轉じたのである。  
 ○久我の大臣 源通博。  
 ○又の年 文明十四年。  
 ○公の節會 朝廷で節目の他公事ある日の儀式。  
 ○關白殿 藤原政家。  
 ○はか／＼しくも 確かに記憶もしない。  
 ○内 後土御門天皇。  
 ○さやうの方云々 詩歌の方面にも相應な出来る人を選んだ。  
 ○物の音云々 管絃の遊びをした。

難くて、又の春に移りぬ。内には朔日よりさまざまの御儀式どもに引きつれて、参り給ふ大宮人のいとまなけなるも、めでたき様に、うかりし昔のどよみは音もなし。此のころ今出川の教季の大臣はかはり給ひて、西園寺の實遠ぞ、右の大臣になり給へり。徳大寺の大臣公有の御子は實淳とて内大臣になり給ひ、久我の大臣は太政大臣にあがりたまひけるが、又の年の神無月には失せ給へり。君達は嗣通豊通など聞えし。此の外にも數多おはしけりとや。次は文明も十あまり五つにや侍る。春のはじめ、室町の家にも人々集ひて、歌よみ詩作りなどし給ふ。公の節會なども過ぎていとまある程なりければ、關白殿さへ渡り給へり。あるじ方にもいたう心づかひしつ、御しつらひも世の常ならず、珍らしきまにと好み調へられたり。から歌は皆絶句なり。雪中鶯といへる事を、大殿、  
 春元灑雪未吹晴 更刷金衣正月鶯 後是東風送寒去 花中百轉管絃聲  
 又山家の梯といへるを、中院の通秀、  
 茅屋蕭條一徑微 古梯幾尺向柴扉 蒼苔路嶮無人過 唯看斜陽樵士歸  
 數多侍れど、はか／＼しくも覺え侍らず。歌もおほ／＼しく侍れば申しがたし。内よりも御歌を賜はせたりと聞え侍れど、それさへ忘れ侍りき。式部卿の親王も、御子の中務の宮も渡らせ給へり。武家の人々も、さやうの方につきなからぬをばえり出でたり。夜に入りぬれば、物の音どもかき合はせぬるに、塙の鶯も聲くはへぬべく、いと面白し。明け行く



○あかれ給へり 故り別れた。  
 ○一品 従一位をいふ。一品は親王に限る位。  
 ○鷹司殿 政平。  
 ○かしらおろし給ふ 剃髪なされた。  
 ○ざえ 才能。  
 ○世のかため云々 將軍として天下を治めるに十分であつて不安な事がない。  
 ○拜賀 任官叙位の御禮を申し上げる事  
 ○大宮人 宮中に仕へてゐる人。  
 ○東山の入道大臣 義政。  
 ○あかね處なく 物足らぬ處なく。  
 ○さうぞく 裝束。  
 ○政元 細川政元。  
 ○大將 義尚。  
 ○けさう 化粧。  
 ○こよなう云々 此の上なく故ありけに奥ゆかしい様子。  
 ○一條殿 兼良。

程に、人々あかれ給へり。義尚はいつしかとなりのほりて、三月には一品し給ひしに、次の年例の如く氏の長者になされき。又數をへて十七年と申すなる。今は鷹司殿關白にていましけるに、太政大臣にさへなり給へり。中院の大納言をば内大臣になされしに、三日ばかりありて返し奉り給へば、花山院の政長の大納言ぞなり給ふ。夏の頃東山の義政の大臣は、かしらおろし給へり。義尚はまだ若けれど、萬のざえを具して、心ばへもまめやかなれば、世のかためと言はむにもたらひて、うしろめたきことなきをぞ、公にも頼もしう思召されけり。八月に大將になり給ひぬれば、拜賀などあるべく思ひ給へど、さはる事のみにて空しく暮れつゝ、次の春も過ぎ行きて、七月にぞし給ふ。さきづの例を引くなりとはいへど、や、立ちますばかりのよそほひにて、大宮人などもあまた従ひ給へり、ことなる見物にて、道もさりあへぬまで人々つどひたり。東山の入道大臣も棧敷にて見給ふ。かたちなどもさかりにと、のひて、あかね處なく、さうぞくさへ清らを盡したるは、いと勻ひ多き心地して、見る人涙落しつゝ、父大臣何事を思ひ給ふらむと、いみじけにいひあへり。政元とて昔の勝元が子なりける、今は武家の後見なりければ、今日もはなやかにさうぞきて従ひけり。大將、内に參り給へば、上もいたくけさうしひき繕ひて坐す。拜し奉り給ふ用意もてなし、こよなうゆるづきて心にくきさまし給へり。まこと一條殿の御子冬良の大納言は、内大臣になり給ひぬ。此の人ぞ御家をも繼ぎ給へり。次は年號も改まりて

○長享 文明十九年七月改元。  
 ○室町の大將 義尚  
 ○内外の宮人 内外の神官等。  
 ○うるせく うるさくの誤りたらう。  
 ○豊の宮人 外宮の宮人。  
 ○いさかたじけなき 御事 甚だ勿體ない事。  
 ○又の年 長享二年  
 ○誓ひは同じ云々 風雅集「かたそぎの千木は内外にかはれども誓ひは同じ伊勢の神風。」  
 ○かうむくつけき心云々 かやうに恐ろしい心を持った。  
 ○延徳 長享三年八月改元。  
 ○大將 義尚。  
 ○慶び聞えに 鉸任の拜賀。奏慶。  
 ○父の大臣 義政。  
 ○妹さ春 夫婦。  
 ○はれ惑ひ 失心し惑ひ。

長享の始めになむ。今年室町の大將は、近江國なるつはもの佐々木高頼が背きたるを討たむとて、秋の末かしこに赴き給ひしかば、高頼は甲賀といへる山に隠るへ入りけるに、又うち出づる事もこそとて、釣の里と云ふ處に留まり給へり。此の頃伊勢國には、内外の宮人ども争ふ事侍りしに、日を経てうるせく成りにしかば、國司なる北畠の人々制し聞えけれど、豊の宮人ども隨はぬさまなりしゆゑ、北畠の家より兵を遣はしければ、内の宮人もうち出でていどみ争ひけるに、豊の宮人うち負けて、武則とかいへる者、宮の中をさへ穢し奉りて、其の身も亡びぬ。氏族なる者も處々にて討たれ侍り。此のどよみに宮も焼けぬる、いとかたじけなき御事になむ。又の年は五十鈴川のわたりに事ありて、こたみは豊の神人どもうち勝ちければ、内の宮人共はにけ失せ侍る。されど宮の中は、何の恙も坐さぬをぞ、いみじきことに思ひ侍り。昔の人は、誓ひは同じとさへいひけるを、末の世とて宮人すらかうむくつけき心もたりけることと、都にも聞かせ給ひて、めざましう思召されき。次は長享もとゞめられて、延徳元年とぞ申し侍る。大將は猶近江にいましけるが、去年の秋、内より御使して内大臣になさせ給ひしに、其の慶び聞えにも上りあへ給はで、ことし彌生の末の六日に、かしこにて失せ給へり。父の大臣の沈み入り給へるさまいはむ方なし。片田舎に年月を経給ふさへ、覺束なくのみ歎き渡り給ひしに、果てはかく憂き事に成り行きぬる悔しさは、妹と春の中よりまさりて、聲をだにきかで別れし思ひに、ほれ



○入道大臣 義政。  
 ○めいほく 面目。  
 ○物やみ 病氣。  
 ○同じ事贈らせ 同様に太政大臣を追贈された。  
 ○一品の位 従一位をいふ。  
 ○政知 足利義教の子、義政の弟、義視の兄。堀越公方といふ。長子茶々丸に就さる。  
 ○明應 延徳四年七月改元。  
 ○一條殿 冬良。  
 ○義就 畠山持國の子。  
 ○義豊を討たむ 畠山持國の養子政長と實子義就と不和で義就の子義豊また政長の驕横を懸んだ、將軍義隆政長を助けて義豊を討った。

惑ひ給へり。家を繼ぐべき御子もなければ、いかゞはせむと思ひ侘びて昔の義視の美濃國にいましけるに、消息ありて、「上り給へ。」と催したるに、やがて坐しけれど、今は世をも背き給へるさまなれば、其の御子の義植といへるを、大臣の御子になし聞えたり。内よりは義尙に太政大臣を贈らせ給ふ。入道大臣はめいほくあるにつけても、いと涙の隙なけにくれまどひつ、月日の行くもしらぬ様なりけるが、又の年の春の始めには、物やみとなりて、終にはかなく成り給ふ。これにも同じ事贈らせ給へり。義植はすみやかに將軍の宣下あり。義視入道は再び花の春にあふ心地して、世をしりつ、めでたき榮えなりしに、次の春は去年入道大臣の失せたまひし同じ日にしも身まかり給ふ。いと怪しき事に侍り。又太政大臣一品の位を贈らせ給へり。同じ兄弟なりし政知とて、伊豆國にいまししも、卯月には失せ給ひぬ。打續きあわたゞしきさまにて、都も鄙も涙ほしあへぬばかりなり。又明應の初めにぞなり侍る。今年も室町には軍どもを従へて、義植みづから近江國に下り給へば、都の護りひまあるやうにて、あやしの者ども街に行きかひして、人々の家をも窺ひつ、煩はしき事のみ有りけるにぞ。關白大臣なども心苦しう思いて、上にも奏し給へば、頓て宣親の中納言を敕使にて近江に遣はし給ひ、義植歸り上りて、都を鎮めぬべく仰せ下されしかば驚きかしこまりて急ぎ歸り給ふ。今は一條殿ぞ關白と申し、次の年は太政大臣になり給へり。三月には義植又河内の方に打出でて、昔の義就が子の義豊を討た

○政元 細川政元。  
 ○義興 大内義興。  
 ○義通 十一代將軍後義澄と改む。  
 ○こたみは云々 此の度は義通を將軍にするこは御許しなり難く。  
 ○ひたぶる云々 一國に歎願するので。  
 ○又の年 明應三年十二月。  
 ○宣下 將軍に任ずる宣旨の下ること。  
 ○さうしきさま 物寂しいさま。  
 ○いさあたらしき云 如何にも惜しむべき死ぬには若い御年輪。  
 ○一條殿 冬良。  
 ○いみじうなるふり 大地震があつて

むとしける程に、後見なる政元は敵になりて、義植を惱まし聞えけるにぞ、政長も討たれければ、義植は政元が従者なるもの家に押籠め置きたり。されど日頃ありて忍び出でつ、爰彼處に隠るへけるが、後にぞ周防國なる義興といへるが許に居たりける。京には故政知が子の義通とて、伊豆國に在りつるを迎へて、室町に居るつ、政元後見しけるが、内にも奏して將軍になさむ事を望み申したり。内にはさきの義植も其の儘にてあれば、こたみは、ゆるしにくう思召されけれど、さるさかなき心どもにて、何のいたりもなく、ひたぶるに愁へ申す事を聞きいれさせ給はずば、いかなるあやまちをか引きいでむと、むくつけう思しなりて、又の年の十二月ばかり、終に宣下侍りき。此の程には有りし文明の頃ほひなどのやうに物恐ろしき戦ひの聲は、閑遠に侍れど、四方の國々の亂れにことつけて、民のみつぎもたえなれば、いつとなう都はものさびて、昔の倂もなく、さうさうしきさまにて、次々の年はくれぬ。明應も六つと申しき。二條の尙基のおとと申すは、政嗣の大臣の御子にいまし、今年内大臣に成り給ひ、又關白の宣旨をかうぶりておはしけるに、神無月には失せ給へる、いとあたらしき程の御齡なるを、内にも惜しませ給ふ。一條殿ぞ御かはりにはるさせ給へり。又の年の水無月には、いみじうなるふりて、いづくも侘しけなる事多かりき。都の内も人の家どもそこなはれつ、物騒がしう暮れはてて、いつしか八とせとぞ申し、此の頃九條の政基の大臣の御子は、尙經とて、八月に内



○宮も云々 皇子も御成人遊ばしたから  
 ○浅ましうならせ給ひ 崩御をいふ。  
 ○御位の程も 御在位中も。  
 ○御はうぶり 御葬送。  
 ○黒戸 黒戸の御所 禁中清涼殿の北、瀧口の戸の西にある御所。  
 ○泉涌寺 洛外今熊野。眞言宗。教願所。後の山に歴代の山陵が多くある。  
 ○こゝ女御 其の他の女御。  
 ○まは 揃ひまゝのつて。

大臣になされき。久我の通豊も今は右の大臣とぞ申し侍る。内には宮もねびさせ給へば、讓らせ給はむ事を思召しけれど、世の中のらうがはしさに、たゆたはせ給ひけるが、次の年の秋、上はもの心細う思しなりて、くだ物などをも御覽じ入る、事もなく、寢れさせ給へば、世といと定めなきを思召して讓り聞えさせ給ひ、さて御心のどかに坐すべう、上人なども思ひけるに、九月には浅ましうならせ給ひぬ。御位の程も、内裏さへ定まらず。爰彼處に遷らせ給ひて、やすけなく思召し歎かせ給ひしに、御はうぶりのいとなみをも、取りもちて仕うまつる人なく、哀れなる御事にて、月を越えつ、黒戸に坐させたり。十一月にぞ泉涌寺にゐて奉りける。其の程の御様更に聞えさせやらむやうなくぞ侍る。御子達もとりにく生まれ出で給ひ、教秀の御女も女御にてさぶらひ給ひしに、男御子女御子おはします。こと女御の御腹にも生まれ給ひぬ。いづれも御かたちのまほにうつくしけにおはしましけるとぞ。

卷第十一

後柏原院

○先帝 後土御門天皇。  
 ○御母 贈皇太后源朝子。  
 ○小御所 禁中清涼殿の東北の宮殿。昔時幕府使臣などに謁見のあつた御殿。  
 ○教秀の御女 勳修寺教秀の女藤子。  
 ○こゝ御方々 其の外の御方々。  
 ○かたみに云々 互に競争し合つて。  
 ○朝ぎよめ 朝の掃除。  
 ○件のみやつこ 主殿寮の下司。  
 ○老いさらほへる 年を取つて瘦せ衰へた人。  
 ○しはぶき云々 咳をしがちである。  
 ○文龜 明應十年二月改元。  
 ○九條殿 尙經。  
 ○先帝の御はて 後土御門院の御一周年

百五代の帝は、御諱勝仁と申し奉る。先帝の一の皇子にて、御母も今は准后と申す。後には院號ありて、蒼玉門院とぞ聞え侍り。明慶九年十月二十五日御年三十七にて御位に即かせ給ふ。神璽など渡らせ給へば、小御所に移らせ坐す。これは日頃は北の對の屋に住ませ給ひし故ぞかし。坊城の教秀の御女はやうより女御にてさぶらひ給ひしかば、いつしかと皇子も生まれ給へり。又新典侍とて、雅行の大納言の御女も皇子うみ奉り給ひき。高倉の永繼中納言の御女も参り給ひて、掌侍にぞ成り給へり。後にはこと御方々も参り給ひて、皇子達も數多坐ししかたみにいどみかはし給へば、内わたりなども、今めかしうはえある事もありぬべき世の、猶あやしう亂れ立ちぬる程にて、此の御代にも、國々の貢物ども運び來る馬車の音も絶えにしかば、何となく宮の中も神さびて、朝ぎよめする伴のみやつこなども、若やかに容よきもなく、老いさらほへるのみぞ、しはぶきがちにて纒かにさぶらひき。次は年號も改まりて、文龜とぞ申し侍る。關白もかはり給へば、九條殿なりたまふ。西園寺の公藤の大納言をば内大臣になされき。侍従大納言は先帝の御はてまで、



○袖の色云々 喪服を脱がれなかつた。  
 ○東山の御寺 泉涌寺。  
 ○雲龍院 律宗。京都今熊野町。聖皇草創。

袖の色もかへ給はざりけるが、御忌日には東山の御寺に詣でて、御陵拜み奉り給ふに、  
 佛はこゝもかしこも立ちそひてけぶりの跡の野邊ぞ身にしむ  
 又雲龍院にて、

○開白 法會の初日  
 ○供養 佛法僧の三寶又は死者の靈などに物を供へて廻向すること。  
 ○結縁 衆生が佛道を修行する爲に先づ佛法僧に縁を結ぶこと。

それならぬ袖をぞしほる墨染の黒戸の御戸は見しよながらに  
 伏見の御寺にも参り給へば、來しかたの事ども思ひ出でられて、  
 山の色の縁のほらと契りしははかなき秋をとふしぐれかな

○こゝら云々 數多集まつた人々も今は死んだ人が多くなつた。

如法念佛はれし供養の日、俗なるせんしなる結縁にとてこゝらつどひたりしも、なきが  
 多くもなりぬるよとおほいて、  
 なき人を佛の御名にかぞへ入れてけふの御法よさらになしき  
 上も此の御はてに、あみだの御名を上におきて、よませ給ふとて、  
 ながむれば千々の思ひも何ならでこの一きはを月はしるらむ  
 むら雲のはれくもる月のしばしだに光隠る、おもひやはなき  
 あけぬ夜の夢の中よりめぐりきぬ去年見し月の今の面かけ  
 身をすればなべての秋の涙かはいかにやどさむ袖の月かけ  
 玉のうてな蓮のうへに住みかへてとことにはこそ月も見らるめ

○まほ 正しく完全に。  
 ○御ふだをも云々 殿上の日給簡を除かれたといふので、位を褫奪されたの意。  
 ○周防 山口の大内義興にたよつてゐた。  
 ○ごよみ 騒動。  
 ○さやらの御料 大嘗會などの御費用。  
 ○ふよう 事の叶はないこと。  
 ○ごもかうも啓し給ふ事もなく、ごうごもかうごも御返答申し上げる事なく。  
 ○先帝も三年云々 後土御門院の御三周年になつた。  
 ○觀經 觀無量壽經

ふたよまで名高き秋の月も見つその世の光世にのこさばや

侍従大納言ぞ此の返し仕うまつり給へりと聞えしかど、歌はまほにも聞き置き侍らざり  
 き。今年義植は御ふだをもけづらせ給へり。猶周防にありて、西の國の兵を従へつ、都  
 に上らむとするなりと聞えはべる。此の頃武家の後見なる政元は、都近き處々を平らけ  
 れば、京にはものすさまじきごよみのなきをぞ、内にも悦ばせ給ふ。室町の義通は、又の  
 年名をも義澄と改めつ、今は中將ばかりにて、内に参り給へば、上は大嘗會など有るべ  
 き事どものたまはせつるに、武家の勢ひも衰へつ、さやらの御料をも、調じて奉らむ事  
 のふようなるを、心苦しう覺いて、ごもかうも啓し給ふ事もなく、かしこまりたる様にて  
 まかで給へば、上も心元なう思召されき。秋にも成りしかば、いよくとり集め、物哀れ  
 なる事多きに、今は先帝も三年にならせ給ふぞかすと、昔の事さへ立歸り戀しう思ひ出で  
 させ給ふに、式部卿の宮の御夢に、先帝の御製とて、  
 數々の花のかをりの中にしもみになる事も何か歎かむ  
 とありし句の上に置きて、觀經の文字を題にて、三十一首の歌を人々にすゝめ給ひけると  
 て、宮、無量諸天作天妓樂といふ事を、

のこりなく此の世の夢もさめぬべし花のかをりの絲竹の聲  
 心性三千といへるを、内の御製、



○つぎめて 早朝。  
 ○般舟院 深草に建立。文明三年伏見に移す。天台以下四宗兼學。  
 ○なき跡の三年 先帝の御三周年。  
 ○千年ふる寺 千年の年を経た古寺。  
 ○先帝 後土御門天皇。

○四十八願 無量壽經に説かれた阿彌陀の誓願四十八。  
 ○思召しなすらへ云 御思ひ比べられる御年齢で、先帝御四十八歳の御宸影をいふ。

大ひえや千々のさかひも目のまへに見るに上なき道をしるかな  
 侍従大納言と申すは、三條の實隆とて唐倭の才を具し給ひけるが、取分け歌の道なむかしこかりければ、常に上の御前に召されて、諸共によませ給ふ。此の大納言長月の二十五日泉涌寺に参るとて、つとめて急ぎ起き給ひける程、霧渡れる空の氣色も何となく物哀れなりければ、先帝の御代には、今日は必ず御連歌とて、召され侍りし事を思ひ出でて、朝霧にいそぎたちてもありし世のつかふる道と思はましかば  
 御墓を拜み給ふとて、  
 つれなくも朽ち残りける我が袖を思ふも野べの露ぞこほる、  
 なほそれよりも般舟院に詣で給へば、隨行念佛の日の程なりけり。聽聞所におはしけるが、去年まではねんごろに語らひし僧の、今年はなくなりぬる事を思ひ出で給ひて、  
 なき跡の三年や千年ふる寺の門もつるのあらずなりぬる  
 先帝の御影拜み奉りたまふに、四十八願に思召しなすらへける御齡の程をおもひ給ふるにも、哀れにもかしこくもおほえ給へば、  
 移しおく花の姿はおとろへぬよはひを見るも我ぞかなしき  
 其の日しも大納言の局をはじめ、女房達數多まり給へりしに、歸さには伴ひ奉り給ふとて、道の程にて、

○永正 文龜四年二月改元。  
 ○なりはひ 生活の業。

○蒼生 人民。  
 ○朝夕夕の煙 朝夕の飯炊く煙。  
 ○人わろき事 外聞の悪い、人の前氣恥かしい事。  
 ○餒其の中にあり 論語衛靈公篇「子曰君子謀道不謀食、耕也、鋤在其中矣、學也、稼在其中矣。」  
 ○岩のうっほ 岩の洞。  
 ○藏町 倉庫のならんだ町。  
 ○司位 官職位階。  
 ○埋れいたく 心甚しく鬱屈して。  
 ○上 後柏原天皇。  
 ○歌の聖 歌道の達人。  
 ○治めしる 天下を統治する。

残し置きて花と思はむ恵みにも誰かはもれむ誰もなつかし

年かはりては、永正の初めになむ。今年はなりはひも頼みなくて、蒼生の家居は、朝け夕けの煙もたえぬるばかりなれば、いふかぎりなう人わろき事どもにて、都も鄙も侘びあへり。餒其の中に有りといふなるは、聖の御代にもためしある事なれば、此の年頃は、いづくも弓箭の道にのみおり立ちて、野山はみな戦ひの場となりぬるより、里人どもは岩のうっほなどを求めて、隠家としつれば、籬の小田は、春來ても耕さむ事もせず、秋待ち出でても刈り運ぶべうもなくなりつ、藏町はいたづらに物ふりたる有様にて、尊き人々さへ堪ふべくもなく、司位をもかへして都の外にさすらへ給ふにぞ、内に仕うまつる君達なども多からず、内にも折々の御節會などたえんくにて、御心のく事もなく、埋れいたくて過させ給ふ。上はいみじき歌の聖に坐せば、唯これにのみ御心をよせつ、翫ばせ給へり。よませ給ふ御歌も數多侍りとぞ。何れの折にか、旅の心を思ひ續けさせ給ふ、暮れぬともとまりはこ、ぞ隅田川鳥を都のしる人にして  
 又思ひをのぶるといふ事を、

治めしる我が代いかにぞ波風の八十島かけて行くこゝろかな  
 ほどくしに思ふ事なき世とやみむ上も惠ます下も靡かぞ  
 いつしか永正も三年と申しし秋、春日の御山の木ども數多枯れたりと奏しければ、内に



○こちたくして事々しくして。  
 ○一條の入道太政大臣 兼良。  
 ○御子達數多云々 御子達數多生み給へるをいふ。  
 ○侍従大納言 三條實隆。  
 ○九條の關白大臣の上 九條尚經の妻。  
 ○内の女御 後柏原天皇の女御藤子。  
 ○政元 細川政元共の臣下に弑せられたる者等のはからひで。  
 ○亂れの中に云々 政元の養子澄之政元の次子澄元と不和で遂に家臣等に攻められ嵐山の城陥つて自殺したのをいふ。  
 ○前の將軍 義種。  
 ○義興 大内義興。

も家々にも聞召し驚きたり。又の年の三月に、義澄は此の御社に詣でて、神の御恵みを慰め奉るばかり捧物どもこちたくして、又神樂をも奏でさせたり。七日まで籠り坐しき。卯月には鷹司の兼助の大臣は右に上り給ふ。これは政平の大臣の御子にて、母君は一條の入道太政大臣の御女にいましければ、冬良の大臣の御甥ぞかし、同じ時、三條の實香の大臣は、内の大臣に成り給へり。此の御女は伏見殿の中務の宮の御息所にならせ給ひて、後は御子達數多とうで給へり。侍従大納言も一つ流れの御末にや、これも君達あまた持ち給へり。男にては公條とて、甘露寺元長の御婿にていましき。また公順とて禪師の君もあり。御女一所は九條の關白大臣の上にて、植通の君を初め數多く生み給へり。今一所は正親町の實胤の北の方にて公敏の母上になむ。此の人々の母君は、坊城の教秀の御女にて、内の女御の御はらかなれば、何方も離れぬ御あはひどもにて、内にも一しほ睦まじう思召されたり。此の程室町のわたりには、後見なる政元失はれたりとて、又ひしめき出でたり。政元は子のなかりければ、すさどもの沙汰にて、九條の關白殿の君達を一所申し賜はりて澄之など聞えしかば、やんごとなき御身の、武士にならせ給ひて鎧など奉りたるさへ心苦しげなるに、さる亂れの中に失せさせ給へる、いとく口惜しき御宿世に侍り。又の年前の將軍は、義興かしづき聞えて、國々の兵を帥あつ、都に登りたり。今の義澄は近江の方にしごき給ふ。六月には義種内に參り給へば、再び將軍になされき。義興は此の度

○心づくし云々 氣をもむばかりで。  
 ○神遷し 遷宮。神靈を新築の宮に移し納めること。  
 ○侍従大納言 三條西實隆。  
 ○内の上 主上。  
 ○徳大寺の大臣 實淳。  
 ○世を背き給ふ 出家された。  
 ○一つ御ぞう 御一族。  
 ○ごまり給へる 夫に死別れて生き残られたもの。  
 ○いとほし 痛はしく哀れに。  
 ○今の將軍 義種。  
 ○近衛殿 尚通。

の賞に三位して、武家の後見にぞ定まり侍る。内には義種の勢ひ猛なりしかば、此の儘に治まりて、都の空も豊かなりと思召されつ、御ひとりごとにて、  
 治めしる時世は文に和ぐも弓にたけきもおなじこゝろに  
 など仰せられしかど、思ひの外に靜かなる事なく、御心づくしのみにて、今年もくれぬ。次の春は春日の宮造られて、神遷しありとて、藏人なるものを敕使にてつかはさせ給ふ。君達もあまた詣で給へる。此の折侍従大納言、  
 春日山ひかりのどけみあたらしき年まち得たる宮づくりかも  
 又内の上、  
 御注連繩ながき世かけて言の葉の道は絶えせぬ手向なるらむ  
 永正八年なりし春、徳大寺の大臣は世を背き給へり。をとゞしよりはおほきおとゞなりしに、皆返し奉りて、靜かに籠り給へり。七十に三つばかり足らぬ程とぞ聞えし。御子も公胤とていまそかりけり。法師にても三三人坐しき。此の八月には前の將軍なりし義澄も失せ給へり。北の方は永俊の御女にて、昔の義政の北の方一つ御ぞうなり。いみじう心細けにて、とまり給へるも哀れなるに、御子も二所やおはしけむ、後見聞ゆる者もなく、いとほしげにさすらひ給へしを、後にぞ今の將軍尋ねとりて子になし給ひしかば、又榮え給へり。永正もいとく十一年に移りぬ。去年の冬關白もかはり給ひて、近衛殿になりけ



○鷹司殿 兼輔。  
○房通 一條冬良の子。

○こまわりの御齡 薨去あつても相當な御老年。

○すぎく、次々。  
○よみぢも云々 薨去された政基は子孫の繁昌で此の世に心残りなく冥途も安らかに成佛されたらう。

○侍従大納言 三條西實隆。

るが、又鷹司殿に譲りて尙通の大臣は太政大臣と申しき。一條の冬良の大臣もはかなく成り給へば、土佐より登り給ひし房通は大將などにてさぶらひ給ふ。三條の實香の大臣右に上り給へば、御かはりには正親町の實望なり給ひしも、やがて二條の尹房の大將に譲り給ふ。此の大將の上は、九條の尙經の大臣の御女にて、種通のひとつ御腹の妹ぞかし。末には君達も出で坐しけるとや。十三年と申しし卯月に、九條の政基の大臣隠れ給ひぬ。ことわりの御齡にて、御子うまごの殿原、すぎくやんごとなくなると給へば、あかぬことなく、よみぢも安くやと、世の人いみじけに云ひあへり。まことや侍従大納言と聞えしも、内大臣になりたまひぬ。政爲の中納言は、此の年頃播磨國細川の莊といへる處におはしけり。そのかみ母君も爰にて失せ給へりとて、墓所も侍りければ、詣で給ひて、うかりつる彌生の空を慕ひ來ぬこけの下にも我やまちけむ。又都にて語りひし人の、其のわたりに有りと聞き給ひて遣はしける文のおくに、今ぞしる此の山ぶみにめぐり逢ひて世々の契りの淺からぬとは、老いの友都にだにもまれなれやなほおもひしる山陰はうし、あなたよりかへし、

淺からぬ中のちぎりに立歸りおなじ都と思はましかば  
山陰になぐさむ程の友ばかりみやこわすれむ心ならめや

其の後都に登らむとて母君の墓にまかりて申し給ふ、

又とはむ草のはらとも頼まねばこれさへ老いの末ぞかなしき

三條の大臣は、此の頃内大臣かへし給へるとてよみ給ふ、

別れても又色まさる折もあらば立ちまふ藤を花ぞめの袖

なんど申し給ふ程に、終に四月には廬山寺にて御ぐしおろし給ひき。六十には三つもや餘り給へる、この折に、

黒髪のかかぬ事なし今は身のをはり亂れぬ願ひばかりぞ

夏衣すゞしき道の門出してはちすの上に心をぞおく

故郷にたち歸るともとがむなよ錦にまさる墨染の袖

此の歌どもは後まで嵯峨の寺にはべりとぞ。八月には先帝の十餘り七廻りの御佛事、般舟院にて行はせ給ふ。公卿殿上人つどひ参れり。親王達も渡らせ給へり。處々の僧數多召されて、いたう尊き事あるに、宮達を初めつぎく捧物さ、けてめぐり給ふ。三條の入道大臣も詣で給ひ、事どもとりもちて仕うまつり給ひける。此の御寺は先帝の御影のありけるが、其の上に御製あり。その御言の葉に、

わがよはひ彌陀の誓ひの其の數にあへるを時とうつす佛

此の文字をかしらに置きて、入道三十一首歌つかうまつり給ふ。其のはじめに、

○三條の大臣 實隆  
○廬山寺 京都北之邊町。天慶中慈慧大師草創。興願金剛院といひ後廬山天台講寺と稱した。  
○先帝の十餘り七廻り 後土御門院の御十七年忌法事。  
○般舟院 康和年中深草に建立し安樂行院といひ、文明三年伏見に移し般舟三昧院と云ふ。天台眞言律淨土の四宗兼學。  
○めぐり給ふ 行道する、經を誦しながら佛座佛堂を廻る。  
○三條の入道大臣 實隆。  
○彌陀の誓ひ 先帝御四十八歳の時の御宸影で彌陀四十八誓願の數に當る意。



○次々は云々 三十  
一首の次々は長いか  
ら省略する意。  
○菜つみ云々 釋迦  
成道の苦行をいふ。  
○法のむしろ 佛事  
の席。

○春に移りぬ 永正  
十四年の春さなつた  
○小朝拜 新年百官  
参賀の儀式をいふ。  
○關白殿 兼輔。  
○三條の實香 時に  
右大臣。

○めしうざつ人  
召入らしき人、側に  
侍せしめて召使ふ人  
で侍妾なぞをいふ。  
○さり／＼に云々  
それ／＼に何れも上  
品な御様子をぞれと  
區別なく一様に御慈  
愛になつた。  
○うるせく 麗はし  
く巧に。  
○中堂 延暦寺の根  
本中堂。

わりなしや昔も同じ秋ぞとは思ふにあまる袖の夕露  
次々は長き事にてとゞめはべる。上は内にて此の御法事の有様、はるかに思ひやらせ給ひ  
つゝ、いと物哀れに詠めさせ給へり。

法の道は心の中に勤めなむ菜つみ水くむわざならずとも  
えにしあれば法のむしろに敷島の道の光も佛ならずや

今年はかやうにて暮れつゝ、又春に移りぬ。朔日の小朝拜には、關白殿さはりありて参  
り給はず。三條の實香の大臣上首にて事行ひ給へり。内の一の宮はいととく御かうぶりも  
し給ひて、今は親王にておはします。御息所にては賢房の御女いましき。さならぬめしう  
どだつ人も、あまたさぶらはせ給へど、御子などは、まだ生まれ給はず。心もとなき御ほ  
どなりかし。内の二の宮は新興侍の腹なり。法親王にて御室におはします。三の宮は、一  
の宮の一つ御腹にて、座主の宮とぞ申し侍る。四の宮は掌侍ぞうみ奉り給へる。五つの宮  
は二の宮の一つ御腹になむ。とり／＼になまめかしき御様どもを、上は何れをもわく方な  
く、かなしと思召されき。此の宮達も敷島の道などうるせくせさせ給へば、御まへにても  
つかうまつり給ふ。月の頃うへは人々に歌召されけるついでに、よませ給ふ、  
月のすむ同じ雲居の身をすれば心のくまや人に見ゆらむ

又の年は比えの山に、中堂の供養侍り。室町の義植詣でたまへば、君達もしたひ参り給

○つぎさうぞく 婦  
人外出の装ひ。市女  
笠を被り小袖の袴を  
折り挿んだ姿。  
○關白殿は右云々  
二條尹房關白で右大  
臣を兼ねてゐた。  
○義興 大内義興。  
○高國 民部小輔政  
春の子。細川政元の  
養子。  
○澄元 讃岐守義春  
の子。細川政元の養  
子。  
○方人 身方。  
○大永 永正十八年  
八月改元。  
○年頃御心に云々  
後柏原天皇明應九年  
御踐祚から二十二年  
大嘗會がなかつたの  
である。  
○三條の入道おとゞ  
三條西實隆。  
○且越 施主。  
○こたみの御料 大  
嘗會の御費用。

ふ。此の頃都の中も事なき様なりければ、結縁の爲とて、處せう集ひたり。あやしの賤、  
山賤の女子どもさへ、つほさうぞくにてうち羣れたる、らうがはしき程なり。君達は物恐  
ろしけなりし武士のけはひも忘れ給はねば、やうかはりて中々珍らしと見渡し給へり。  
今は關白に二條の尹房の大臣ぞかし。花山院の政長の大臣は太政大臣と聞えし。三條の實  
香の大臣は左にて、關白殿は右にいましけれど、御座はおほき大臣の上につかせ給へり。  
大炊御門經名の大納言をば、内大臣になし給へり。中御門の大納言は一品して准大臣とぞ  
聞えし。これは義植奏し給へるによりてとぞ。武家の後見なりし義興は國に歸り、其の外  
の者どもも皆おのが國々に赴きけり。義植は又の年氏の長者になさせ給へり。かくて治ま  
りけるにやと見れど、此の頃は失せにし政元が子とて養ひ置ける高國澄元などいへる者ど  
も、かたみに挑みかはして安からぬ事のみなりしに、次の年には澄元なくなりたり。さ  
れども其の方人など、なほ處々に残りるけり。又の年は大永にぞなりぬ。春の末より、  
御國讓の儀式行はるべしとて、都はいみじう今めかしけなり。此の御事は上も年頃御心に  
かけて、思召し渡れど、うち續きぬる世の亂れに、公も武家も勢ひはつかに成り行きて、  
御心に任せぬやうなりけるを、三條の入道おとゞは、たぐひなき事に思ひ歎きて、本願寺  
といへるは、且越など多くて勻ひあるさまなりければ、此の入道かたらひとりて、様々の  
詞をつくして、たばかり聞え給ひしにぞ、此の寺よりこたみの御料を調べて奉りければ、



○門跡 法親王を住職とする寺。  
 ○心まつかへを云々 自分の心から官を辭して。  
 ○弟なるは 幼名龜王丸、十二代將軍義晴。  
 ○さすらひて 身を寄せる處なく漂泊して。  
 ○かうぶり 元服。  
 ○關白殿 藤原尹房關白を兼ねて右大臣から左大臣に昇つた。  
 ○大炊御門の大臣 藤原經名。  
 ○徳大寺の大臣 公胤。  
 ○春の初めの御儀式 朝廷の新年の御儀式。

事なくてとけ行はせ給へり。此の賞にとて、門跡になすらふさまにぞ定めさせ給ひぬ。又寛正のころほひまでは、武家とてきらくしき勢ひなりしも、應仁のこなたは、日にそひて淺ましう成りはてつゝ、今は残れる匂ひもなく、すゞろはしき事のみやまさりけるにぞ、義植は心とつかへをもかへして、都を出でつゝ、暫しは丹波路にありけるが、後に淡路の國に住み給へり。昔の義澄が子とて、幼き二人ばかりありけるを養ひ給ひしが、一人をばるて下り給へり。弟なるはさすらひて播磨の方におはしける。此の頃に迎へ取りつゝ、高國が計らひにて、室町にすゑたり。十一とぞ聞えし。冬の頃かうぶりせさせつれば、又將軍の宣旨下りぬ。高國後見して事行ひ侍り。關白殿も今は左の大臣にて、大炊御門の大臣は右に轉り、徳大寺の公胤の大納言ぞ、内の大臣と聞えき。次は事なく暮れて、三年と申し彌生に、徳大寺の大臣左になり給ひ、近衛の種家の大納言、右の大臣になり給ふ。尚通の大臣の御子ぞかし。今の徳大寺の公胤の御妹は、尚通の大臣の上にて、此の種家の大臣を初め、數多うみ給へり。一人は時通とて久我の通言の大臣の御子になし聞え給ふ。此の大臣の北の方もおなじ公胤の御妹にいましければ、皆へだてぬ御仲らひに侍り。卯月ばかり淡路の義植も失せ給ひしと聞えし。伴ひ給ひし御子ぞ、猶かしこに居給ひて、後には御子なども侍りとぞ、次もとく過ぎて五年に移りき。春の初めの御儀式は例のことなるに、それさへ今年は省かせ給ひて、けしきばかりなり。あまねき春の光は、昔に變らぬ長

○むかしを忍ぶつま 往事を追憶する種。  
 ○なえほみたる 衣服の著ふるして柔かくなつた。  
 ○おのがぢち 各自自分の仲間ごうし。  
 ○近衛殿 種家。  
 ○父大臣 尚通。  
 ○こちたき世のひまき 甚しく世間の評判し騒ぐこと。  
 ○處せき様ならで 重々しい仰山な事なく。  
 ○やつして 微行して。  
 ○柳陰より外 新古今集西行の歌「道のべの清水流る、柳かひしほしめてこそ立ちまじりつれ。」によつていふ。  
 ○こしやう 扈從。  
 ○受領 國司。  
 ○善法寺云々 善法寺を宿所として。  
 ○北山の入道 義満

閑さなれど、よろづかはりはてたる宮の中には、絲竹のしらべに通ひし鶯の聲を聞かせ給ひても、上はむかしを忍ぶつまとのみ思召されて、  
 長閑さを春のしるべに鶯のたがこゝろより初音なくらむ  
 近くさぶらふ女房などは、衣どものなえほみたるも、いとづかしげに思ひつゝ、折にふれてはしたなく、心細き事多くて、おのがどち侘びあへり。又關白もかはり給ひて、近衛殿ならせ給ひし。夏の頃父大臣も諸共に、春日に詣で給へり。昔の世なりせば、關白の御物語とて、こちたき世のひまきなるべきに、今は御勢ひもはつかなりければ、處せき様ならで、君達など多くも參り給はず、こよなうやつしておはします。七日ばかりこもり給ひ、御神樂をも奏せさせ給ふ。神寶もいかめしうさ、け給はず。けしきばかりなり。かへさには、處々逍遙もありぬべう、兼ては思おきてけれど、あつき頃ほひにて、柳陰より外に御心のとまるわたりもなく、さうくしげにて歸らせ給ふ。又の年室町の義晴は、臨時の祭の頃、石清水に詣で給ふ。こしやうに廣橋の守光の大納言、日野の内光の中納言參り給ひ、武士は、高國を初め數多從へり。近き國の受領どもは、處々に守り聞えたり。御馬より武士の具どもこゝら捧げ奉り、善法寺を坊にて、事ども聞えつけ給ふ。古の北山の入道の例を思ひて、何事をも定めつれど、今は其の世の有様には、なすらふべくもあらざりき。上は御齡も六十に餘らせ給へば、此の日頃は御年のしるしにや、はれくしうもお



○事きれさせ 崩御をいふ。  
○うへなき御身 天子。

○泉涌寺 眞言宗。洛外今熊野。

○土殿 喪に籠る土間。倚處。

○鈍色 濃黒い染色で喪服に用ひたもの。すゝなご云々 數珠を手に引っかけなす。

はしまさざりけるが、卯月の初めには、御氣色かはるとて、人々騒ぎの、しりつるに、七日には事きれさせ給へり。宮々も御かた／＼もいみじう思召されたり。御心おきてもおほどかにて、民を惠ませ給ふことも普かりつれば、世の中こぞりて惱み奉れり。さるはうへなき御身といへど騒がしき事のみなる世に、憂き事の限り御覽じ盡して、親王など聞えし古より、花やかにはえぐ／＼しき世にも逢はせ給はで、過させおはしまししをぞ、哀れにたじけなき事と、誰も／＼聞えあへり。五月三日に泉涌寺に送り奉る。宮々君達武家の人まで残りなく仕うまつれり。宮達の御車のしりへに、あゆみつゞけさせ給へる、例の事なれど、いと哀れにて、心をさめ難く思へる人多かりき。さばかりの、しりしも、明方には歸らせ給ふ。親王達後の宮などは、土殿に坐す。かりなる御しつらひに、墨染の御調度どもにて、いと物悲しきことのみなるに、なえたる鈍色の御衣奉りて、すゝなど引きかけて、おはします御様どもは見奉る人々さへ涙のひまなけなり。一の宮はいととく御位の事あれば、此の御方の女房達などは、時待ちえたる思ひならむかし。

卷第十二

後奈良院

○御母女御 勳修寺教秀の女。樂門院藤子。  
○准后 三后に准じて年官年爵を賜はるこい。  
○世をしらせ云々 御登極になつても氣遣ひのない程の御年齢でもあり。  
○近衛の大臣 藤家  
○賢房の御女 榮子  
○御覺え云々 御寵愛もあつく其の上御懐妊さへあつて。  
○いみじき御思ひ 先帝崩御の御喪中の御悲しみで人々の喪服を著てゐる折。  
○御けしき 御産氣づかれて。  
○たひらかに 御安産をいふ。  
○おなじうは 同じくは男御子ならばこ

百六代の帝は、御諱知仁と申し奉る。御母女御も准后など聞え侍り。大永六年四月御位に即かせ給ふ。御年三十に一つもや餘らせ給へる。世をしらせ給はむにも、うしろめたからぬ御程に坐し、殊に御才も足らせたまひ、御容もめでたくて、先帝の御有様にも、をさ／＼劣らせ給はず。情深うおはしませば、侍ふ女房達なども先帝の御時にかはらず、まかでちるもなくてつかうまつり給ふ。關白は近衛の大臣、昔の儘にておはします。萬里小路の賢房の御女は、一の女御にて御覺えもやんごとなかりけるに、唯ならぬ御事さへそひて、いとあはれなる御思ひまされり。さしつぎに高倉の永家の大納言の御女、御容などもなまめきて、なつかしき御様し給へり。典侍などもとり／＼に、みやびやかなる多くさぶらひ給ふ。世の中改まりても、いみじき御思ひの程にて、人々の御衣の色もゆゑしきにて、萬つ、ましき折にて、内わたりもしめやかなり。女御は此の頃御けしきありて惱み給へば、人々もいかにと見奉るに、たひらかにせさせ給へり。姫君のうつくしげに玉光るといふばかりにておはしけり。「おなじうはいでや。」とうちさゝめく人もあれど、「一の宮の



○御せうと 御兄。  
 ○下らふ 官位の低いもの。  
 ○はかしくしき御後見 たよりになる確かな後援者。  
 ○上 主上。後奈良天皇。  
 ○又の年 大永七年  
 ○題を探り 詩歌の會で各人別々に題をきめて詩歌を作ること。  
 ○去年の歎き 先帝の御一周忌で崩御の時の悲歎が再び思ひ出される。  
 ○阿波國の軍 三好長基京に攻め上つたのをいふ。  
 ○享祿 大永八年八月改元。  
 ○司召 京官の除目毎年秋行はる。  
 ○あたましかりし 荒くあつた波の音。

やんごとなくておはしませば。」と聞えなぐさめたるに、内にも聞かせ給ひて、これも又珍らしと思召されつゝ、今よりいとこひしう、待遠にぞ思召されける。女御は御せうとの殿原も、まだ下らふにいましければ、はかしくしき御後見のなきぞ、苦しう思されて、父君の坐さぬ事をのみ、口惜しう思し歎きたり。内よりは、「参り給へ。」と、御使のひまなかりければ、いつしかと急ぎ参り給ひぬ。若君のうつくしけなるをぞ、上はいみじう思召されて、常にもてあそび聞え給ふ。今年はかく御心ゆくさまにて暮れぬ。又の年の春、内わたりもしめやかに、いとまある程なれば、若き人々の題を探りて、歌讀み給へるに、落花簾に入るといふ事を、公條、

惜しめども花ふきいる、玉すだれみどりを木々にかへす春風

夏の頃は先帝の御一廻りの御法事などあるにも、御かたは去年の歎きの立ちかへりて、御袖もほしやらせ給はず、哀れなる事多し。伏見の中務の宮は先帝の御子になし奉らせ給ひければ、今の御代にも睦まじう思召されき。此の程は都も静かなるやうなるに、津國などは猶騒がしかりけるが、七月には阿波國の軍ども、都に入りて、桂川のわたりは、波の音に戦ひの聲うち交ぜたり。年號もかはりて、次は享祿とぞ申し侍る。司召の頃、久我の通言の大臣右に遷り給へば、九條の種通の大納言は内大臣に成り給ふ。去年の桂川のあらましかりし波の音の猶残りて、室町の義晴は都を出でつゝ、近江なる植綱が許に給

○なめけなる事 無禮な事。  
 ○消息宣下 日宣案に消息を添へて宣下すること。  
 ○三好海雲 長脚の子長基剃髪して海雲といふ。  
 ○津國のわたり 堺浦で戦つた。  
 ○島村 島村貴則。  
 ○執のミヅマリ 執念が残つて。  
 ○三條の入道の大い 實香。  
 ○けふをははてこ 今日を中陰の四十九日と誰にいひ合はう  
 ○天文 享祿五年七月改元。  
 ○近衛殿 種家。  
 ○いみじき有職 非常な學者。

へり。かかれれば三好などいへる武士ども、都に入りぬるにぞ、なめけなる事多くて、内にも安からず思召されたり。義晴近江に下りて、三年ばかりの後、都よりは消息宣下にて、大納言になさせ給ふ。敕使には良雄参り給へり。此の秋にや九條の尙經の大臣も失せ給ひき。又の年三好海雲は、昔の澄元が子の晴元を大將軍にて、高國と津國のわたり、處々にて戦ひをなしけるに、高國うち負けて終に討たれ侍り。これに従ひける島村とかやいへるいみじき兵は人を左右にはさみて、水に入り失せたり。後までも猶そこに執のとまりて蟹になりぬるなどきこえしは、いと淺ましうこそ覺え侍れ。高國は優なる心もありけるにや、歌をも讀みつゝ、三條の入道の大い許にも参り通ひければ、かう聞き給ひては、哀れに思ひ給ひて、細やかなるとぶらひも侍りとや。四十九日になりける日、入道大臣、

涙こそ限りなからめたれにかもけふをばはてといひもあはせむ

古も高國が子の童なる失せ侍りし折、とぶらはせ給ふとて、  
 たぐひとてふたつだになき袖の上の玉碎きけむ心をぞしる  
 漸う都も静まりしかば、天文の初めには、義晴も歸り給ふ。晴元は後見し侍る。又の年近衛殿は、鬮白を止められ給ひて籠り居給ふ。御かはりに九條の種通の大臣なり給へり。三條の公條は、大納言とぞ聞えし。父君の流れを認め給ひて、才などもたらひ給へば、世にも重く用ゐられ給へり。御子も實枝とて、いみじき有職におはします。年の暮に一の宮



○引入 元服の加冠の役。  
 ○御規式 定まった作法。  
 ○祿 當座の賞美として賜はるもの。  
 ○事そがせ給へり 簡畧にされた。  
 ○女宮の限り云々 皇女ばかりおはしまして、  
 ○山の座主 延暦寺の座主。  
 ○伏見殿 後崇光院の御孫貞敦親王。  
 ○参り給ひ 公朝の御女が妃なられ。  
 ○物のさとし 神佛のお告げ、前兆。  
 ○博士 陰陽博士。  
 ○おのがじ、云々 各自武道にたづさはつて。  
 ○内の御領 皇室の御領地。  
 ○君達なご云々 公卿なごの領地である莊園。

の御元服あり。引入には二條の尹房の大臣参り給ふ。西園寺の公朝の中將をも召したり。御規式などもあるべかしう、今めかしかるべき折なれど、世の中治まりあへぬ程にて、上の御心に任せてもてなさせ給はず。大臣の祿より始め人々のかづけものどももけしき許りにて、よろづ事そがせ給へり。内にはつぎ／＼皇子達も數そひ給ひて、高倉の女御も女宮うみ奉り給へり。此の御代にはすべて女宮の限り坐して、男皇子は一の宮のみ坐せば、中務の宮の御子をも養ひ奉らせ給ひし、後には山の座主に成らせ給ひて、應胤法親王とぞ申し侍る。伏見殿には、若君も今はかうぶりせさせ給ひて、親王の宣旨ありしかば、邦輔親王と申しし、今年は式部卿になし奉らせ給へり。西園寺の公朝の御女参り給ひて、末には御子達も數多くおはしけりとぞ。父宮も御子達數そひ給ひて、女御子達も、後にはあなたこなたにて御子産み給ひなどして、あらまほしう榮え給へり。此の頃は又物のさとしなど打續きて、公私しづ心なき様なれば、内には博士ども召して御占行はせ給ふに、重き御慎みのよし申す。また兵の亂れあるべしなど奏しければ、内にも室町にも安からず思し歎きたり。國々の武士どもは、おのがじ、弓箭の道にたづさへて、ともすれば他の國を伺ひて、劣れるは國をも失ひ、まされるは合はせて、荒き夷などの處えたる様、いふ限りなくて内の御領なる處をさへおし掠め奉りつれば、君達などの知らせ給ふ御莊どもは、跡かたなくなり果てて、公の御掟にも隨ひ奉らず、武家の制するを聞き入れぬ處々のみなれば、普き御政を施させ給はむやうなく、貧しき民の愁へを救はせ給ふべうもなきをそいたく思召し歎かせ給ひつ、いかにもして世の治まらむ事をとのみ思召されて、常に御祈りどもありけるに、此の頃はまた／＼事加へて、處々に奉幣の御使御修法の捧物さま／＼に思しよりぬれば、社々には禰宜がすしめの聲絶えず。山々寺々の僧達は、いみじき法ども行ひたり。京にはこの御いとなみに今年も暮れて、次の年はいやましに世の中わびしうなり行きつ、關白殿も致仕の表奉りて、津國の方に下りたまひしが、其處にも住み給はず、後には播磨に移ろひ給へり。正月に聞ありけるに雪の降りける日、内によりて奉り給ふ、三條の入道、

○御修法 密教でする加持祈禱。  
 ○すしめの聲 神慮を清め鎮める聲。  
 ○山々寺々 諸の佛寺。  
 ○次の年 享祿五年  
 ○關白殿 二條尹房  
 ○三條の入道 實香

初春のくははる名のみ世にふりて花待遠の木々の雪かな  
 御かへし、内の上、

雪にけさ花をおもへば初春のくははる色ぞ枝にこもれる

きさらぎのなかばまで互えかへりつ、時々雪のふりけるに、ある朝雪の積りけるを見て、資宣の許より、入道に聞え給ふ、

さりととも今朝はた勻ふ梢かな花まつころの四方のしら雪  
 入道かへし、

さかば世にふるかひあらじとばかりに花をいそがぬ木々の白雪



○都の手ぶり 都の  
ならはし。  
○北の方君達 徳大  
寺實通の妻子たち。  
○たはやすき云々  
容易な事でもない。  
○うしろめたく 氣  
遣はしく不安で。  
○念じ過し給へ 辛  
抱して時を過し給へ  
○女院 豐樂門院勸  
修寺藤子。  
○御行ひ 佛道の勤  
行。  
○三條の入道 實香  
○其の儘に京に云々  
義隆が將軍在職の  
儘京都で薨じたので  
あつたら先例によ  
つて早く贈太政大臣  
があつたらうに。  
○住み給ひて 通じ  
給ひて。  
○九條殿 關白實通

此の頃徳大寺の實通の大納言ぞ、越中國に下りたまひしに、其處なる民どもなつき聞え  
て、大將軍になし奉りしかば、いみじき勢ひに成り給ひて、物うかりし都の手ぶりも、忘  
られ給ふやうなり。京に住み侘びぬる殿上人などは、したひ參るも數多あるに、北の方君  
達などは都に残り給ひければ、風の便りに心細けなる事を聞え給ふ折々は、大納言もいと  
心苦しう思ひて、忍びて爰に迎へやせましと思しよれど、たはやすき道にもあらず、殊に  
いづくもみだりがはしき程なれば、うしろめたくて、「猶今暫し念じ過し給へ。」とのみいひ  
おこせ給ふとかや。又の年の睦月には、女院はかなくならせ給へり。七十に二つも餘らせ  
給ひし。先帝の隠れさせ給ひしこなたは、常に御行ひをのみせさせ給へば、明らかなる道  
にこそ赴かせ給はめと、いとたふとし。三條の入道此の御事を聞き給ひて、

花もしれ春のなかばの日數さへ夢の夢なるけふの名残を

四月には故義隆に、太政大臣を贈らせ給へり。其の儘に京にて失せ給はましかば、先々  
のためしにて、いとく有るべき事なりけれど、田舎にいましければ内にもさて過させ給  
ひしに、室町よりせちに奏しけるによりてなむ、こたび此の事侍りとぞ。秋の頃三條の實  
香の大臣は、太政大臣になり給ひ、西園寺の實宣の大納言は、内の大臣と申し侍る。此の  
大臣は正親町の實望の大臣の御女に住み給ひて、公朝實源とて、御子も坐しけれど、程な  
く御中絶え給ひけり。まこと九條殿かはり給ひし後は、二條の尹房の大臣、再び關白に成

○御位讓のことなき  
御即位大禮の慶賀  
○いたう畏まり聞え  
て 甚だ恐懼感佩し  
て。  
○こちたき様 仰山  
な様子。  
○そのかみより 昔  
から。  
○田舎さいふべくも  
なき 田舎さも言は  
れぬ位の様子である  
○あてなる心づかひ  
高貴な事の心配り  
をして。  
○物の師 何やかか  
道の師。  
○いなるわが 優  
美で品のよいわが。  
○救使にいましし中  
納言 中納言廣橋兼  
秀。  
○土佐の一條殿 一  
條兼良の長子致房應  
仁の亂を避けて土佐  
に居て其の家を土佐  
家といふ。  
○おほけなし 身の  
分に過ぎたのをいふ

り給へり。此の御代にもまた御位讓のことなきなども、心もとなくて過ぎつるに、次の年  
大内介義隆とて故義興が子なる者、周防國を治めて、勢ひもいみじかりければ、此の度こ  
の御料を奉りけるにより、二月二十六日に行はせ給へり。其の水無月には、廣橋の兼秀の  
中納言を救使にて、周防に遣はさせ給ひ、義隆を太宰大貳になさせ給ふ。義隆はいたう畏  
まり聞えて、御使の中納言をも、心ことにもてなし奉りつ、贈物どもいと清けにて、こ  
ちたき様なりき。この大内はそのかみより勢ひ猛にて、従ふ兵も多く家とみ榮えければ、  
今の世にもたらはぬ事なく、家の内きらくしうみがき調へはて、住める處は、都のおも  
かけを移して、處々の名をも都にあるを付けつ、いかめしき寺をも數多たてて、田舎と  
いふべくもなきけはひなり。殊に義隆は、あてなる心づかひをのみして、武士のわざをば  
従者どもにおきてさせて、我が身は都なる物の師どもを集へて、歌讀み詩作り、琴笛の聲  
をも聞きしり、すべていなるわざをのみ心よせたり。此の度救使にいましし中納言の御  
女は、はやう義隆の北の方に成り給へりしかば、うちくも心安きに、この北の方の妹の  
君をも、子になし聞えて爰に坐させたり。又土佐の一條殿の御子をも、一方申し賜はり  
て、はぐ、みつ、新介など聞えしも、おほけなしや。此の大内の北の方の母君は、勸修  
寺の政顯の中納言の御女ぞかし。されば此の御ゆかりに、爰もかしこも、周防より細やか  
にとぶらひ聞えけるにぞ、おのづからわびしき事をもてかくされて、都にもたづきある



○近衛殿御かはりに云々 關白二條尹房 辭任して近衛種家これに代り太政大臣を兼ねた。  
 ○貞敦の親王 伏見宮貞敦親王。  
 ○三條の入道 實香  
 ○御孫の殿原云々 御孫の君たちが官位高く貴くお出でになるから。  
 ○後の御わざ 葬送や申陰の御佛事。  
 ○公條の大納言 三條の分家三條西實隆の子。

○ゆふつけざり 鶏の異稱。

心地し給へり。天文もいつしか六つばかりにや。春の頃二條殿關白をかへし給へば、近衛殿御かはりに居させ給ふに、太政大臣にさへならせ給へり。鷹司の兼輔の大臣は、正親町の公治の大納言の御女をえ給ひて、君達男女數多坐しけり。御太郎なるは、冬忠とて、大納言なりけるも、今は右の大臣になり給ひ、伏見の貞敦の親王の姫君を賜はり給へり。三條の入道は神無月に失せ給ひき。八十三になり給ふとぞ聞えし。處々に御孫の殿原やんごとなくて坐せば、後の御わざどもいかめしうし給ひぬ。公條の大納言も、御忌の程籠り居給へり。夕風の音も何となく哀れに聞き渡し給ひて、

山川も冬は氷に音たえて松風ばかりうきものはなし  
 又時雨の遠山にかゝるを見給ひて、

たが里の袖をたづねてしぐるらむ木の葉の末の遠の村雲

つれづれにおほえ給へば、はかなき手習ひにふる事など書き付け給ふとて、竹を師とすといへる事を、

植ゑ置きて色かへぬ窓の吳竹やまなぶべき世のつねと頼まむ

霜いとふかき曉がた起きいで給ひて、

里やいづくゆふつけどりも霜の下に結び果てたる聲の寒けさ

ふかからぬ霜もやうづむ冬草のあるにもあらぬ庭の寒けさ

○八年 天文八年。  
 ○次の年 天文九年  
 ○表奉りて 辭表を奉つて。  
 ○八瀬の里 洛外愛宕郡。  
 ○次の春 天文十年  
 ○鷹司殿 忠冬。  
 ○一條殿 房通。  
 ○大貳は元の儘 義隆位三位に陞り大率大貳の官は元の儘。  
 ○坂本 近江滋賀郡比叡山東麓。  
 ○定頼 佐々木高頼の第二子。  
 ○尼子 尼子晴久父經久の後を嗣いで出雲に居て山陰の勢力を握つてゐた。  
 ○大貳 大内義隆。  
 ○廣忠 清康の長子 徳川廣忠。  
 ○若君 徳川家康。

又八年と申しし頃、一條の房通の大納言内の大臣になりたまへり。西園寺の實宣の大臣は、をとゞしばかりより左の大臣にていましし、次の年は表奉りて、こもりおはすめり。此の頃都には又事ありて、室町の義晴は、去年より八瀬の里に居給へば、いとゞみだりがはしきのみにて、今年も過ぎ侍り。次の春は鷹司殿左に移り給ひ、一條殿は右に、三條の公條ぞ内の大臣にあら給ふ。されど三月には、又かはりて、三條の公頼の大納言、内の大臣になり給へり。年の末には周防の義隆も三位し侍る。大貳は元の儘とぞ聞えし。八瀬なる義晴は、坂本に移り給ふ。近江の兵なる定頼といへる者、よろづの掟ども定めけり。今は後見と定まれるもなく、うちあはぬ様なり。又の年近衛關白辭し申し給へば、鷹司殿に宣旨もて参れり。左の大臣もかはりて、一條殿なり給ふ。公條の大臣右になり給ひぬ。此の頃義隆は尼子といへる武士を亡ぼさむとて、國々の兵を催しつゝ、出雲國にうち出でけるに、口惜しううち負けて、兵どもちりづくに成りつゝ、大貳も辛うじて、周防に歸りける。土佐より迎へし新介と聞えしも、此のまぎれにあへなくなり給へる、いとほしき事なりき。かう處々の亂れ限りなき様なりけれど、終に治まるべきしるしは、今年ぞ顯はれ侍る。十二月二十六日に、三河國岡崎といふ處に坐しける廣忠と聞えしに、若君生まれ給へり。これは清和の帝の御流れにて源なりし義重と申しし其の御末の、昔の持氏の頃鎌倉にいましけるが、持氏も滅びにしかば、鎌倉にも住み給はで、爰かしこに忍びておはしけ



- しる由して領地があつて。
- 神にあがめ 東照大権現。
- いみじうさびて、甚しく荒れて。
- かきくらし 空も暗闇になつて。
- いりもみつる風 激しく揉む風。
- 雲の八重たつ云々 大鏡に村上天皇御製「都より雲の八重たつ奥山の横川の軒は住みよかるらむ。」
- そこらの 數多の
- あやしの下す 賤しい身分の卑いもの
- 上 主上、後奈良天皇。
- 又の年 天文十四年。
- 廣司の大臣 忠冬
- 一條の大臣 房通

る。其の御後ぞ、三河國にしろ由して代々弓箭の道にたづさひ給ひつゝ、やんごとなくて住ませ給へり。此の生まれ給へる若君なむ、後には、日本の國の中皆治め給ひて、君安く民豊かなる御代にかへし給ひき。末の世には神にあがめいたゞきまつれるも、ことわりにこそ侍れ。天文も十年餘り三とせと申しし七月雨風いみじうさび出でて、日の光も見えず、空の色は墨をすりたらむやうにて、夜晝をもわき難き程なり。二日三日ばかり同じ様に、何のあやめも見えず、かきくらし降るに、いりもみつる風さへ小止みなかりしかば、雲の八重たつ事は、横川の岸のみにもあらず、遠近の山はみな雲に埋れたり。いふ限りなう物すさまじきはひなるに、又加茂川をはじめ、そこらの池川など、俄に水かさまさりて、隙なくよせ返る白浪の聲は、大宮の中まで聞えけるが、やがて岸をも越えつゝ、處々の堤など崩れて、橋どもはいつしか水底に沈み、都の大路は河とひとしう、漲りたる水の流に、道のゆききは跡かたなくて、適あやしの下すなどの通ふを見れば、蓑打著けつゝ、舟に棹さしたる、いと珍らかなり。唯今底の水屑となるべきにやと、人々あきれ惑へり。さは此の都をしも、龍神の得まほしとて、かくはするにやと思ふも、いとむくつけうなりぬ。上は御心の内にいみじき願ども立てさせ給ひ、住吉の神を念じ坐す。次の日より漸くはれまみえつゝ、雲のけしき直りて、ひに／＼水も落ちけるにぞ、誰も／＼生き出づる心地しけり。又の年鷹司の大臣、關白を返し奉り給へば、一條の大臣は土佐より上り

- 二條の時良 尹房の長子。
- 周防の義隆 山口の大内義隆。
- あくがれ出で 心落ちつかずさまよひ出る。
- 非参議 三位以上で参議にならない者又は辨中將などの参議の資格ある者。
- さならぬ末が末 そんなでない末輩。
- いふ由なく 形容も出来ぬほど。
- 徳大寺の大納言 實通、越中につた
- らう／＼しき事 物事に巧者な事。
- 心ゆるび 油断。
- むくつけき事 恐ろしい事。

て、かはりにるさせ給ふ。今出川の公蔭の大臣は右に移りて、二條の時良の大將ぞ内の大臣になり給へり。此の大將は尹房の御太郎なりき。關白殿は此の頃まで猶土佐に行き通ひて坐す。御弟の房冬と聞えしぞ、土佐の家を繼がせたまふ。二條の尹房の大臣も、京を出で給ひて備後に下り給ひしが、後には周防の義隆がもとにうつろひ給へり。かうやんごとなき人さへ、都に住み侘びつゝ、あくがれ出で給へば、我も／＼ときほひ顔に出でたつ人多し。三條の公頼の大臣、持明院の基規の中納言、良豊の中將、親世、此の外の殿上人樂人なども皆周防に下れり。飛鳥井の雅綱は越路に坐しけるが、時々都に通ひ給ふ。冷泉の爲和の大納言は、駿河國に赴きたまへり。四位、五位、非参議、藏人、さならぬ末が末の人も、或は伊勢の方、又は美濃、尾張、三河など、處々に行きちりつゝ、たま／＼都に落ちとまれる人々は、いふ由なく侘しき有様どもなり。内にはかく人々の出で行くを御覽じけるにも、いと心細く思召しけれど、とゞめ聞えさせ給はむやうもなく、御胸痛うのみ思召されたり。一年北の國に下り給ひし徳大寺の大納言は、をしく武士だちて坐しけるにより、らう／＼しき事こそなかりつれ、中々心安くて過し給ひけるが、さすがに田舎人どもの中に、心ゆるびなくむくつけき事のみなりければ、此の頃俄に事ありて討たれ給ひき。京よりしたひおはしつる殿上人なども、皆あひなき事なりとぞ聞え侍る。此の大納言の御子公雄の大臣と申ししは、久我の通言の大臣の御子なりけるを、大納言はやう養



○義鎮 豊後の大友義鑑の子。入道して宗麟と云ふ。  
 ○やすらはせ云々 驍踏し給ふべくもあらず。  
 ○胸あくさま 思ひの晴れて満足した様子。  
 ○日吉の宮人 日吉神社の神官。  
 ○引人 元服の時の加冠の役。  
 ○定頼 佐々木定頼  
 ○坂本 近江國比叡山の麓。  
 ○三好といへる者 四國の細川の三好長慶支族三好政長と權力を争つて戦つた  
 ○氏綱 右馬頭政賢の子、右京大夫細川高國の養子。氏綱細川晴元と争ひ、晴元の將三好政長の軍を破つた。

ひ給へるなり。今は内大臣ばかりにてぞいましき。又西の國なる義鎮といへる者は、都に上りけるに、三條の公條の大臣につきて、故義澄に、昔の例に任せて太政大臣の位を贈らせ給はむ事を、内に奏し申しければ、やすらはせ給ふべうもあらずとて、速かにゆるさせ給へり。義晴も胸あくさまにて、いたう悦び給ひぬ。義鎮は内にもさまんくの物奉りて、又國に歸り侍り。次の春一條殿の若君は、兼冬とて大納言なりしも、内大臣とぞ聞えし。此の頃坂本にいましける、義晴の御子義藤とて十一になり給へる、日吉の宮人の家にて、かうむりせさせ給ふ。引入なども定頼といへる武士ぞ仕うまつれる。内へも奏して、將軍をも譲りてむと、義晴望み給へば、頓て消息宣下にて、御使は廣僑の大納言兼秀参りたまふ。義晴をも右大將になさせたまへり。かしこには、人々いみじう悦びあひて、大納言にも、祿ども心ことにしなしたり。又の年は敵、都に攻め來るなりとて、義晴も義藤も、北白川の城に籠り給ふ。されど凌ぎ難くやありけむ、城を燒きて又坂本におもむき給ひき。晴元はいつよりか背きて、此の度もかやうになやまし聞えけるに、定頼さへ敵になりけるが、又罪赦されて、晴元も定頼も、坂本に参りければ、暫しは事なくて年もくれつ。次の春はうち連れて都に歸り給ひ、晴元をば又後見に定めたり。津國には三好といへる者、かたみに立別れて戦ひをなしけるに、昔の高國が子なる氏綱もうち出でたり。晴元も京を出でて、そなたに向ひけるが、打負けぬれば京にも堪へ難くて、義晴なども諸共に、又坂本

○久秀 松永久秀。  
 ○又の春 天文十九年。  
 ○如意が嶽 京都の東比叡山の支峯。  
 ○なやみも云々 義晴の病狀同じ様で快癒しない。  
 ○空しくなり 薨去したのをいふ。  
 ○陣の座 禁中で節會任官鼓位などの時諸卿の著座。  
 ○上卿 禁中の公事に其の日臨時に奉行と定められる者。  
 ○職事 藏人頭以下五位六位の藏人。  
 ○限りの折 義晴の臨終をいふ。  
 ○先々 先祖の足利代々の將軍をいふ。  
 ○後のわざ 死後の法事。  
 ○さまかへ 剃髪するをいふ。

へひき退きけり。京にては三好計らひにて、久秀といふ者を置きて守らせ侍る。坂本には冬の頃より、義晴例ならずし給ふとて、人々驚きつゝ、祈りどもせさせつれども、抄々しき事もなくて今年も過ぎぬ。又の春は定頼承りて、如意が嶽とかやに、城をいとなみければ、義晴はそこに移らむとて出でたち給ふに、猶なやみも同じさまにて、夢なども騒がしく、心細きやうにのみし給へば、とばかりためらひてこそとて、穴太といへる山邊に、とどまり給ひけるに、五月には終に空しくなり給へり。いと淺ましき事に思ひつゝ、誰も誰も感ひあへり。内にも奏しければ、陣の座の宣下ありて、左大臣を贈らせ給ふ。上卿は中山の孝親の大納言、職事は重保の中將なり。義藤はおもだ、しきにつけても、涙のつまにていとゞくれ感ひ給へり。其の始めより亂れたる世をのみ經給へば、都にだに安くも住み給はず、限りの折にだに、都をも見給はぬ事をぞ、人々も口惜しう思ひたり。先々の様に尊きまじらひをもし給はず。終に大臣にも成り給はで過ぎ給ひしを、内にもあかず思召されける。處々の僧達つどへて、後のわざどもこまやかなりし。北の方もさまかへ給ふ。これはやんごとなき人がらにて、近衛殿の御女にいましき。女房なども御弟子にしたひ聞えたり、さほふどもはてて後、北の方、

心のみおもひみだれて黒髪のおつる涙もむすほほれつ、

近衛殿よりも御とぶらひねもごろなり。尼上の御方へも御文あるに、種家の大臣、



空蟬の其のからをだに夕けぶりむなしき空の雲にみよとや  
御子の晴嗣の御かたよりも、

別れにし君はと問へばせきあへぬ涙ばかりぞ袖にこたふる

○さのみはにてさうばかりむやみには煩はしいから。  
○年かはりて 天文二十年。  
○義隆 大内義隆。  
○すさごも 従者ごもで、陶晴賢をいふ。  
○二條の大臣 尹房  
○聞きあさみて 聞いて驚きあされて。  
○三越路 越路さいふに同じ。北陸道。  
○受領 國司。  
○公をさへ云々 朝廷の御命令をさへ謹んで聽き入れる事なく。

佛の御名の文字などにて讀ませ給へる歌ども、處々の數多侍りつれど、おなじかなしみの筋なれば、さのみはにて申さず。義藤は比叡辻と云ふ處に移ろひ給ひしに、大津のわたりまで、敵ども到りければ、胸つぶれて覺え給ふ。年かはりても同じごと、都の中處々の戦ひたえずなむ。八月ばかり周防なる義隆はずさども背きて、いみじうなやまし聞えければ、京より下り居給ひし二條の大臣は、公ごとをかけて制し給へど、むくつけき我どもなれば、聞き入れ奉るべうもなく、終に義隆も自害して失せぬ。二條の大殿を初め奉り、日頃坐しつる上達部殿上人も、此の亂れに失はれ給へり。基規の中納言と親世ばかりは、頭おろしてまぬかれ出でつ、都に上り給へり。いと淺ましき騒ぎに侍りし。京にも二條殿、其の外の家々には、聞きあさみて、いみじう歎きあひつ、哀れなること多くなむ。此の頃の世は近き國々は更にもいはす、東は陸奥よりこなた、西は薩摩大隅などいふわたり、南の海のはて、三越路の末、その數にしもあらぬ國々までも、皆領じたる武士侍り。されど公より賜はせたるにもあらず、おのがじ、打從へつ、心に任せて振舞ひたるは、更に昔の受領などいへるたぐひにはあらず、公をさへ畏まり置く事もなく、私に兵を起し

○こごさ 常にいひ馴れてゐる口ぐせ  
○いとともしくいこ乏しく。  
○又の年 天文二十一年。  
○公朝 西園寺實宣の子。  
○關白殿 關白兼左大臣一條兼冬。  
○物なごも参らす 食物なごも参らす。  
○若う坐せば 御年も若くあるから悪い事もあるまいと養生をゆるめた。  
○近衛殿 晴嗣。  
○弘治 天文二十四年十月改元。  
○元就 毛利元就。  
○廣元 大江廣元。  
○過ぎつる亂れ 陶晴賢が大内義隆に叛いた時の亂。  
○繪旨 繪言。みここのり。  
○有るべき事 然るべき事。

ては、鄰の國を得むとのみはかりなどして、戦ひとて、いふ限りなう恐ろしけなる事を、常のごとぐさになしつれば、おほやけに仕うまつる人は、いとともしく、今は都の空も、昔のおもかけなくなりたる、いと淺ましき事なりき。又の年は義藤も都に歸り給ひければ、安き空なき有様なり。たゞ久秀などぞ、いかめしけにて事行ひ侍り。天文も二十年あまり二つと申しし春、一條の兼冬の大臣に關白の宣旨下りて、近衛の晴嗣の大臣は、右の大臣と聞えし。公朝もいつしか内大臣になり給へり。秋の頃義藤は又丹波路に下り給ひしが、こたみは程もなく歸り給へり。此の頃關白殿はなやましうし給ひつ、物なども参らずとて、御祈りなどせさせ給へり。若う坐せば、けしうはあらじとため聞えけるに、年歸りてはまめやかに苦しうし給ひて、二月に隠れ給へり。あたらしき御程をぞ、内にも思し歎かせ給ふ。近衛殿御かはりに居させ給ひ、左に轉り給へば、公朝右にあがり給ふ。正親町の公兄の大納言かはりに成り給ひしに、いと返し奉りたまへり。次の年は弘治に改まり侍る。此の頃安藝國を治めける元就といふ者は、古鎌倉の頼朝に仕へし廣元の後ぞかし。日頃は義隆に隨ふやうにて有りけるが、過ぎつる亂れの折は、己が國に居ければ、いと本意なく思ひつ、いかにもして、義隆が仇を討たむことを、思ひよりけるにぞ、都へ訴へ申して、繪旨を賜はらむ事を望み侍り。義隆は、上もしろしめしける者なれば、有るべき事なりとて賜はせたり。元就はかしこまり悦びて、其の儘に軍を起しつ、子供數



○めやすく 見ても  
 難なく見苦しからず  
 ○又の年 弘治二年  
 ○かしこ 唐土。  
 ○なめけなる 無作法な。  
 ○次の年 弘治三年  
 ○鱗 魚類。  
 ○ゆめしるしもなし  
 少しも御祈りの効  
 験がない。  
 ○さるけしきある風  
 雨を催しさうな風  
 ○野分たちて 晩秋  
 の野分の様になつて  
 吹き荒れて来る雨。  
 ○ひた、けばかり  
 緩かに気ばかりで様  
 子ばかりの意か。  
 ○高潮 津浪。海嘯。

多ひき具して、打出でけるが、爰かしこにて戦ひ、遂に嚴島といふ處の争ひに勝ちえければ、仇ども皆亡びぬ。うち續く周防國をも平らけ、己が國となしけるにより、勢ひもいかめしうなれり。京にも聞かせ給ひて、めやすくぞ思召されける。又の年は唐土の帝の御使とて、都に書を奉られたり。近き頃の亂れによりて、此の國の盗人などいへる者、かしこにさへ渡りて、なめけなる事多しとぞ告げたりける。やがて返り事遣はし給へば、使も急ぎ罷りぬ。次の年の秋は、廣橋の兼秀の大納言も、内の大臣に成り給ひ、花山院の家輔の大臣も、右に移り給へり。今年又いみじき事のみありて、五月の頃より八月まで雨降ることなくて、日の影くまなう晴れ渡りつ、けしきばかりの夕立さへ絶えければ、田面の稻葉は、枯れしほみて、色もなく、川邊の水は涸れはてて、鱗などはいと淺ましけになれり。公にも歎かせたまへば、雨の御祈りしきりなれど、ゆめしるしもなし。漸く八月の初め、さるけしきある風吹き出でたれば、民の戸には空を仰ぎてよろこびあへるに、野分だちてすさみ出づる雨のあし、いふばかりなう冷まじけなり。都には過ぎつる頃の、河水のひた、けばかりなりしも、忘れ給はねば、又いかならむと、内にも思し騒ぎけれど、程なくをやみ侍りしに、津國のわたりには、えもいはぬ大きな波立ち來て、高潮いみじうのほりつ、人の家ども數多とられたり。此の頃はしばし、戦ひの聲もひまありとおほゆるには、又かかる事に心を惑はすも、すべて堪ふべくもなき世なりとて、上下の人のわびし

○御寶 三種の神器  
 ○親王の御方 一の  
 皇子方仁親王。  
 ○いそぎ 準備。

うのみ思ひけり。内にもさまざまの事に、御心を惑はされ給へる餘りにや、有りつる野分の名残、御身に入りつ、御心地そこなはれさせ給ひけるが、長月には淺ましうならせ給へり。年頃なれつかうまつりし人々は、いと悲しうのみ思ひ入りたるも多かりき。頓て御寶などは、親王の御方に渡し奉りて、御踐祚のいそぎども侍り。



卷第十三

正親町院

- 先帝 後奈良天皇
- 御母女御 參議萬里小路賢房の女榮子 永祿元年皇太后を贈らる。
- 御位の事侍り 御踐祚あつた。
- 近衛殿 晴嗣。
- らうがはしき 亂れがはしき。
- 永祿 弘治四年二月改元。
- 元就 毛利元就。
- 此の御事 御即位の大禮。
- 古の廣元が例 元就を陸奥守に任ぜられたのは元就の祖先大江廣元が正四位下陸奥守に任ぜられた例によられた。
- 表 辭表。
- 一の人 攝政關白。
- むつからせ 憤らせ給ふ。
- 輝虎 上杉謙信。

百七代の帝は、御諱方仁と申し奉る。先帝の一の皇子にて、御母女御も後には皇后の宮贈らせ給へり。弘治三年十一月二十七日に、御年四十二にて、御位の事侍り。關白は近衛殿させ給ふ。此の御代にも同じ様なるらうがはしきにて、人々のあくがれ惑ひなどするにぞ、内わたたりもこよなくしめやかにて、女御更衣などあまたもさぶらはせたまはず、いと幽にておはします。次の年より永祿にぞ改めさせ給ふ。義藤も今は義輝と聞えけるが、又都を出でて近江に下り給ひし、霜月には歸り入り給ふ。此の度も御位に即かせ給ふ御儀式なども、心もとなくて程ふるにやと思召されつゝ、覺束なくてすぐさせ給ひけるに、安藝國なる元就、御料を調じて奉りければ、永祿三年正月にぞ此の御事侍り。其の賞とて、元就を陸奥守になさせ給ふ。古の廣元が例とぞ聞えき。關白殿は表をも奉り給はず、其の儘にて越後國に下り給へり。一の人の位をさへかへし給はで他の國に住み給ふ事、例なき事とて、上もむつからせたまへり。さらばかしこの靜かならばこそあらめ、輝虎とてえもいはず恐ろしき武士の入道侍りて、いみじき軍を隨へ給ひけるが、一年都に上りて、義輝

- 見參 拜謁。
- 三好 三好長慶。
- 越後の入道 上杉輝虎。出家して謙信といふ。
- 關白殿 近衛晴嗣。
- 義鎮 大友宗麟。
- いづち いづかた。
- 輝元 隆元の子。
- 尼子 永祿五年元就尼子晴久を出雲富田城に攻めた。後晴久卒し子義久の時永祿九年城陥つて義久降を乞ふ。
- 山の陰陽の國 山陰道山陽道の國々。
- 三好 三好義繼。
- 松永 松永久秀。
- 昔の赤松 嘉吉元年赤松満祐將軍義教を弑したごと。
- 鹿苑院 臨濟宗。洛外衣笠村。金關寺義輝の弟で鹿苑寺にゐるたのは周益といふ。

に見參せむとしける折も、さばかりの勢ひなりし三好をさへ、無禮なりととがめ物して、失はむとしければ、三好もいたうおぢ聞えけり。此の入道近き頃は、甲斐國に同じやうなる猛き武者の、不動尊ばかりの法師にて、信玄といふなる、これもいかめしき兵を帥て、越後の入道と、かたみにいどみかはせる事絶えずなむ。かかれば越後にも有り侘び給へるにや、二年ばかり後に、關白殿は都にかへり給ひぬ。又西の國には、義鎮と元就と戦ひをなすなりと聞えければ、義輝は聖護院の道澄を元就の許に、久我の通興の大納言を大友の方に遣はして、諸共に睦まじうなりつゝ、戦ひ止めむ事をいひ送り給ひければ、いづちも隨ひ聞えけり。元就の孫なる輝元を、義鎮の婿になさむとぞ語らひける。元就は又の年出雲なる尼子といひし者を亡ほして、その國をも平らげければ、日にそひて、勢ひいみじう成りつゝ、山の陰陽の國を初め、すべて十ばかりの國を治めけり。子孫までかひなくしうて數多あるにぞ、行末いと頼もしけなり。同じき八年の五月には、京なる三好松永などいへる者は、昔の赤松がたぐひにて、俄に義輝の館を攻め打ちければ、宿直の兵共、防ぎあへず皆討たれぬ。義輝も此のまぎれにはかなく成り給へば、母君も同じ様に失せ給ふ。義輝のはらから二人まで法師にていまし、一人は鹿苑院に坐しけるが、これをも失ひき。今一人は奈良の一條院に居給ひしに、此方にも人を遣はして守らせ聞えけるを、やをら寺を忍び出でつゝ、春日の山を越えて、近江の方に赴き給へるに、道にて子規を聞きて、



○髪をおぼして髪を生して俗人さなつて。  
 ○越路なる義景、越前の城主朝倉義景。  
 ○まめやか、忠誠。  
 ○いつきかしづき、大切に附添つて世話をした。  
 ○永祿も今は十二年、今は十一の誤りか。  
 ○宿世や云々、前世の因縁が運わるかつたらう。  
 ○近衛殿、晴嗣。  
 ○御かうぶり、御元服。  
 ○又の年、永祿十二年。  
 ○都に事あり、永祿十二年三好黨及び松永久秀京都を犯して將軍義昭を本國寺に圍んだ。

ほと、ぎす鳴くや五月の山中におのがふるすの名残をしみて

京には三好がはからひにて、古義種いにしへの阿波にゐて下り給ひし義澄の御子をば、義維とて故義晴の兄弟ぞかし、其の御子に義榮といふありけるを、此度阿波國より迎へて、京に居ゑむとぞしける。近江に隠るひ居ましし、禪師の君は髪をおぼして男に成りつゝ、義昭と申しし、兄弟の仇を討たむと思ひよりて、近江にも住まず、こゝかしこに行き廻りて、越路なる義景が許におはしけれど、すみやかに軍を起さむ事も、覺束なき様なれば、そこをも出でて美濃國に移り給へり。織田信長といへる者は、勢ひありてかひなくしき兵なりけるが、まめやかにいつきかしづきて最とく都にうち上らむとしけり。永祿も今は十二と申しし年、京なる義榮は、左馬頭にて將軍の宣下侍り。されど宿世すくぜやつたなかりけむ、同じ年の長月には、はかなくなり給ひき。此の頃美濃なる義昭は、信長隨ひ聞えて、近江の軍をも破りつゝ、きら／＼しくて都に入りたり。京にありける者どもは、皆罪を悔いて、隨はむとのみ侘びしかば、近き境はいつしか平らぎて、都の内も今は安けなり。神無月には、義昭に將軍の宣旨下りて、中將になさせ給へり。此の程いかなるにか、近衛殿は關白をとゞめられ給ひぬれば、二條の晴良の大臣再びなり給ふ。内には皇子の御かうぶりのこと、十二月にさせ給へり。關白殿經元など參り給へり。やがて親王になし奉らせ給ふ。又の年も都に事ありていみじう匍のしりけるに、信長美濃より上りぬれば、いととく靜まり侍

○まが／＼しき事、いまはしい事。不祥な事。  
 ○元龜、永祿十三年改元。  
 ○三河なる源の君、徳川家康。  
 ○越路をも云々、越前の朝倉氏を攻めようとしたが近江の淺井長政が朝倉氏に通じて信長成功せず。  
 ○本願寺云々、本願寺光佐無津石山城に據つて信長と戦ふ。  
 ○山も又云々、延暦寺の衆徒も信長に敵對した。  
 ○又の年、元龜二年九月信長比叡山延暦寺を焼いた。  
 ○世々おほやけの御守り、延暦寺は代々皇室の御守護で衆徒の要求は朝廷でも拒絶はなされなかつたのに。

る。此の後には二條なる處に殿作りして、義昭はうつろひ住み給ひけり。信長は秀吉といへる者して都を守らせつゝ、おのれは國に下りぬ。此の秀吉は賤しき田舎の民なりけるが、いふ限りなくゆゝしき心ありて、いみじき様さまになりほりつゝ、後にはまが／＼しき事侍り。次は元龜元年とぞ申しし。三河なる源の君も、處々にうち出で給ふ、信長とは睦まじう聞えかはし給ひて、諸共に伴ひて戦の場に臨み給ふ折も侍り。信長は去年伊勢國をも平らけて、今年に越路をも治めむとしけれど、近江の軍どもにそむかれて、かひなく國に歸りたり。津國なる本願寺も、隨はぬ様さまなりしかば、攻むるなりとて、信長はそなたに下りしに、山も又敵になりけりと聞えけるにぞ、やがて京に歸り上り侍る。越路近江の軍なども、都近くうち出でぬ。されどおほやけにそむき奉りて、かくふるまふにもあらず、信長が私事ひごとの様なりければ、義昭は都のわたり騒がしけならむはなめけなりとて、あなたこなたまめやかに制し給ひぬれば、みな隨ひ聞えて國々に歸り侍る。信長は恨みの心しふねくて、又の年は比えの山を滅ほしつゝ、あまたの僧坊、處々の御堂など、残りなく焼き失ひぬる、いと淺ましうなむ。世々おほやけの御守りとて動きなく、衆徒どもの奏し奉る事をば、君さへえそむかせ給はざりつるに、末世とてかう勢ひの衰へゆく事と、内にも御心苦しう思召されき。此の程は都の内も、戦ひの聲聞遠になりつれど、あやしの田舎人のみ多く立ちまじりぬれば、えもいはず見苦しき事の出でまうで來る折もあるを、内にもなめし



○なだらか云々 程かにほかり程よく取扱はれた。

○からきこゝ 苦し事。

○心あるは云々 物の道理がわかり思慮のある者は官を辭して籠つて居る。

○三條の實枝 三條西實隆の孫。公條の子。

○まじらひ 世間との交際。

と御覽するふしなきにはあらねど、むくつけき心どもにおぢ憚らせ給ひて、よろづ見知らぬやうに、なだらかにのみもてなして坐す。さぶらふ人々も、からきことなどのあるにぞ、世の中むつかしう覺えて、心あるは仕へを返して籠り居給ふも數多侍り。三條の實枝の大納言も、世の事聞かじとて、まじらひもし給はねば、つれづれに思ひて、歌をのみ友とし給へり。春の頃庭の櫻を見給ひて、

恨むなよ木がくれて住む陰にこそ花にまぎれぬ日をもくらさめ

千首歌讀み給ふとて、款冬散といふ事を、

山ぶきはかろく散るべきたぐひとや秋のくち葉の色にさくらむ

朝の子日、

年寒きのちあらはれむ千世の色を子日にこむる野邊の朝霜

曉更の春月、

まれにあふ花をや思ふ月だにもかたぶきやらぬ春のあけほの

釣夫月に棹さす、

釣の絲のをさまる風を澄む月に待ちいでけりなうたふ舟人

残る花、

ちる跡に雲たにうづめ目に近き一木ふた木を花にのこして

○家の風吹き傳へて 先祖からの家風を傳へて才學があつた實隆公條實枝三世歌人として有名であつた。

○天正 元龜四年七月改元。

○勤修寺の尹豊 尚顯の子。

○ねびぬる人 年長けた人。

○萬里小路の惟房 秀房の子。

○后の宮 萬里小路賢房の女榮子。惟房の父秀房は賢房の子だから后の宮の御甥に當る。

○うまご 孫。

○くねくしき事 ひがみ曲つた。

此の大納言は公條の御子にいましければ、家の風吹き傳へて、ごえもいみじう坐しき

北の方は正親町三條の公兄の御女よ。御子も今は公國などぞ聞えし。内にも聞召して、題

など賜はせければ、よみて奉るとて、年を追ひて花珍らしいといふ事を、

咲き残る枝もありきや春をへて花にかさなる花の色香は

次の年春忍びて春日に詣で給ひて、

わけて猶春にさかゆく春日山ほかにまだ見ぬ花や咲くらむ

かへさには逍遙などし給ひて、野遊びの心を、

植ゑ置きし垣ねの梅の花あれどけふもや野邊の春にくらさむ

麓めぐり花に分け入り給うて、

色なきやふもとの野べの眞萩原秋のにしきも花にくらさむ

又改まりて天正の初めになむ。去年勤修寺の尹豊の大納言は、内の大納言と成り給へど、

ねびぬる人なれば、いととく返し奉れ給ふによりて、此の頃は萬里小路の惟房の大納言を

なさせ給ひしに、其の日なむ失せ給へる、いとあわたしかりき。六十に一つあまり給へ

ば、ことわりにも侍り。后の宮の御甥にや坐すらむ。昔の賢房のうまごにて、秀房の大

臣の御子ぞかし。輔房とて後の御嗣も侍れば、頼もしくもなむ。義昭も今は大納言と聞え

し。春の頃より信長と中惡しうなりて、くねくしき事多く成り行けるを、世も人も見苦



○まめやかなる事云 實際の事件も  
 ならなかつたが。  
 ○實の心の色 實際  
 の心持があらはれ。  
 ○眞木の島 宇治川  
 にある。  
 ○尊氏がぞう 足利  
 尊氏の一族。  
 ○かしこき事にうや  
 まひ奉り 朝廷を畏  
 れ敬ひ奉つて。  
 ○義景 越前の朝倉  
 義景。  
 ○長政 浅井長政。  
 ○東大寺なる香 奈  
 良東大寺正倉院に藏  
 められてある黄熟香  
 一名蘭奢待といふ香  
 將軍義政之を裁つた  
 例によつて信長も朝  
 廷に願つて裁つた。  
 ○二條の關白殿 晴  
 良。  
 ○貞敦の親王 伏見  
 宮榮仁親王から第五  
 世。  
 ○邦輔親王 貞敦親  
 王の御子。

しくのみ思ひけれど、まめやかなる事にもあらざりけるに、文月ばかりには、實の心の色  
 あらはれつゝ、義昭は眞木の島に籠りたり。信長は兵を帥ゐて、時の間に責め破り、義昭  
 をもゐて行きて、河内國に置きけり。かかれば元弘の昔より、武家とてやんごとなき公の  
 かためなりし、尊氏がぞうは、此の時ぞ跡方なくなりはべる。内には世の中いかゞあらむ  
 と、いとゞあぢきなう思召しけれど、信長などもかしこき事にうやまひ奉りけるにぞ、見  
 馴れさせ給ひては、さのみむくつけうも思されずなむ。信長は越路なる義景、近江なる長  
 政を亡ぼして、國々平らかに成りければ、三好も従ひて河内の方も治まりぬ。又の年信長  
 内に參り、東大寺なる香を賜はらむと奏し申しければ、柳原の資定の大納言飛鳥井の雅教  
 の中納言を敕使にて遣はさせ給ふ。花山院の家輔の大臣もかはり給ひて、九條の兼孝の大  
 納言右大臣に成り給へり。此の大臣は二條の關白殿の御子に侍り。二條殿は御太郎をば昭  
 實と申す。次々御兄弟數多坐しければ、後には鷹司殿にも成らせ給ひて、信房とぞ聞え侍  
 る。何れも貞敦の親王の御女の腹にいましき。伏見殿には邦輔親王も、其の御子なりし貞  
 康の親王と申ししも、はやう隠れさせたまひしかば、貞康の親王の御弟なりし邦房の親王  
 ぞ、中務の宮とていまそかりき。大宮は長う坐して、一昨年ばかりに失せ給ひぬ。此の  
 大宮は歌の道に御心よせ給ひて、よませ給へる御歌も數多侍り。文安の頃の御百首にも、  
 子の日する松をためしと思ふにもいふにも君が千代ぞはるけき

○秋田城之介 秋田  
 城を管する職、秋田  
 城司で出羽介が掌る  
 ○近衛殿 晴嗣。  
 ○すまで 住まない  
 で。  
 ○安土 近江國蒲生  
 郡安土村。  
 ○しゅう 頻繁に。  
 ○九條殿 禮通の子  
 兼孝。  
 ○一條殿 房通の子  
 内基。  
 ○えさらぬかぎり  
 ごうしても離れられ  
 ぬだけの從者。  
 ○處せき歩行 將軍  
 として仰々しい窮屈  
 な外出。  
 ○紀路 紀伊國。  
 ○心まむべき云々  
 心を留め落著くや  
 うなたより所もなく  
 ○うまご 孫。

近き世にも内より歌めしけるに、奉り給ふとて、霞林にみつといふ事を、  
 春ふかくかこふ霞の一むらや柳さくらは垣ねなるらむ  
 次の春信長京に上りければ、權大納言秋田城之介になされたまふ。一條の内基の大納言  
 は、故兼冬の大納言の御兄弟なりけるが、大殿失せ給ひて後、御子の定めにていましし、今  
 年は内大臣になり給ふ。近衛殿には關白かはり給ひて後、こもりおはしけるに、俄に薩摩  
 國に下り給へる、二年ばかりありてぞ歸り給へる。さきには越後に赴き給ひなどして、あ  
 やしう御心のうき立ちぬるにやと人申しあへり。信長は都にはすまで安土といへる處に  
 つゝ、京にはしけう行きかよひて、公の御掟にもたがはず、まめくしうつかうまつりた  
 り。此の頃九條殿一條殿左右に皆あがり給ひければ、信長をば内大臣になされぬ。過ぎつ  
 る比、信長に打負け給ひし義昭は、日にそひて勢ひ衰へつゝ、仕うまつる人も纔かに成り  
 行きて、いとわびしき事の數まさりければ、忍びて住所もとめむとて立出で給へり。今は  
 えさらぬかぎり、三四人供に従ひけるも、中々昔の處せき歩行よりは、やうかはりて心安  
 き方はあれど、いでやとよろづあぢきなく思ひつゝ、紀路におはしたり。和歌浦にて、  
 たどり行くかたもいづくと和歌の浦や波の藻屑のおもひみだれて  
 そこにも心とゞむべきよすがもなく、すさまじと思ひ給へば、船にて淡路の方に渡りつ  
 つ、また播磨がたによりて、はては備後國にぞつき給ふ。爰はむかしの元就がうまごなる



○元春 吉川元春。  
 ○隆景 小早川隆景。  
 ○心ほへもこもなき者 心むても溫和な者。  
 ○頼浦 備後國。  
 ○父大臣 晴嗣。  
 ○去年より 天正五年より。  
 ○次の年 天正七年。  
 ○七十に一つや云々 七十歳に一つ足りなかつたらうか。六十九歳をいふ。  
 ○三代まで 三條西實隆公修實枝三代。  
 ○菊亭の晴季 今出川家又菊亭といふ藤原氏一支族。晴季は公彦の子。  
 ○烏丸の光康 烏丸家は日野家の支族で藤原氏。光康は冬光の子。  
 ○光佐 本願寺第十一世。顯如といふ。  
 ○石山城 攝津大阪

輝元が領しける處なりければ、そなたに人を遣はして、案内聞え給ふに、かしこには元春隆景などいへる、元就が子供もやんどなく、一ぞう皆榮えて、いかめしき有様なるに、心ばへもこともなき者どもにて、いたう驚きかしこまりつ、迎への人參らせなどして、頼浦といへる處に、清けなる家作りして奉りければ、そこにすみ給へり。安藝國よりは、私の主ともてかしづきける。さてなむ都よりは中々心とまりて、年月を送り給ひぬ。京には天正も五つの年文月の頃、近衛殿の若君かうふりせさせ給へるに、信長みけしき賜はりて参りつ、信の字をさへ奉りければ、信基とぞ申し侍る。又の年父大臣は准后の宣旨かうぶり給ひて、冬の頃はおほきおとと申しし、去年より信長は右大臣なりけるが、今年返し奉れり。二條の昭實の大納言は、内の大臣とぞ申し侍る。次の年は又右にあら給ふ。内の大臣のあきたるには、三條の實枝の大納言かはりに居給ひけるに、三日許りにて返し奉りつ、やがて失せ給へり。七十に一つやまだしかりけむ。珍らかに壽きなりき御ぞうなり。代々さへある人のみ、續きけるによりてなむ。さる御家の筋にはあらねど、思ひの外に三代まで高き位に昇り給へるも、いと本意あることなりし。内大臣のかかりには、菊亭の晴季の大納言なり給ふ。これは公彦の大臣の御子に坐す。烏丸の光康の大納言を、准大臣になさせ給ひしに、其の日にはかなく成り給ひき。其の頃二條の晴良の大臣も失せたまへりと聞えはべる。本願寺の光佐上人は、年頃石山城にありて、信長と争ひ絶

○武庫の浦波 攝津の海岸。  
 ○津國かひの駒津 國産の馬。  
 ○いはい いはえの誤り。嘶え。  
 ○際なき昆陽 昆陽は攝津伊丹近傍。後拾遺集和泉式部の歌「津の國のこやも人をいふべきにひまこそなけれ」の八重ぶき。によつていふ。  
 ○三津 大阪の海邊。  
 ○木綿云々 注連玉串などに木綿四手を掛け添へる神官。  
 ○且越 施主。  
 ○屈しいたく 鬱して心暗れず。  
 ○上人 顯如上人光佐。  
 ○あまねき誓ひ 弘誓。佛菩薩の衆生を濟はんとする弘い誓願。

間なかりければ、そのわたりはいとらうがはしくて、武庫の浦波は鼓の聲にきほひ、津國かひの駒は朝風にいばいつ、隙なき昆陽の蘆茨は兵の陣となり、三津の濱邊に焼く鹽の煙は消えて、烽火影のみ明らかなるにぞ、いつよりか難波男の綱引の聲も絶えつ、高津の宮には木綿かけそへむ神人もなく、淺ましき事のみなるを、内にも聞かせ給ひて、武士ならばこそあらめ、法師すらかかる事は、いとめざましと思召さるれど、かなたには、且越とて國々の民ども數多随ひつ、心を起して防ぎける程に、ともすれば信長の軍打負くる様にて、城の内は勢ひ劣るべうもなし。信長が兵といへど、あみだ佛に志ある者は、城の方をばふし拜みなどこそしつれ、弓引かむ事はいと心うくのみしければ、はかしくしき戦ひもなくて、日數の移り行くにぞ、信長も屈しいたくのみ思ひつ、みそかに内に奏して、仰言あるべく愁へ申したりければ、やがて重保の大納言と時豊の中納言を御使にて、石山城につかはさる。又近衛の前久の大臣は、上人にしたしうし給へば、これも下り給ひて、信長と睦まじうなりつ、戦ひを止め給はむ事を申させ給へり。救使も同じ様に聞え給へり。「聖だちたるさまにて、あまねき誓ひの大綱に浮世の人を救はむとはし給はで、みづからすら弓箭の道に下り立ちたまへるは、佛の御教へにもたがひて、いとあしき事なり。」と、せちに制せさせ給ふにぞ、あなたにも心解けて、いみじう畏まり聞えつ、救に従ひ奉りたり。さてなむ信長が軍どもあかれけるにぞ、上人も石山を出でて、紀路に移り給



○又の春 天正九年  
 ○處せきまで 場處も狭い位に。  
 ○白馬 白馬の節會正月七日天皇紫宸殿で白馬を天覽ある儀式が古來行はれた。  
 ○御かたぐ 女御や貴人の北の方達。  
 ○關白もかはり 九條兼孝かはつて一條内基がなつた。  
 ○年かへりて 天正十年。  
 ○信立 武田信玄。  
 ○惠林寺 甲斐國山松里村にある。臨濟宗。夢窗國師開基。  
 ○もどき聞えたり 非難した。  
 ○源の君 徳川家康  
 ○まらうござね 主たる客。正客。

ひぬ。やうく事靜まりしかば、今年も暮れはてつ。又の春は信長都に上りて、内裏の御前に馬場をしつらひ、馬ども揃へて上に御覽せさせむと用意しける。内には行幸なども絶えつ、常につれんにのみ坐せば、いと珍らかなる事に興せさせ給ふ。えもいはぬ馬の毛色も様々なるを、清けに繕ひつ、處せきまで立てなべたり。上も近き世には白馬など御覽する事も絶えければ、いみじき見物なりと思召さる。御かたぐもつどひ給ひ、御簾の内よりこほれ出でたる袖口どものいとなまめかしう、花の錦にまがへるに、櫻が枝に勻はさまほしき、梅が香にも立ちまさるばかりの薫には、あやしの武士どもさへ心づかひせらる、かし。君達も皆さぶらひ給ふ。近衛殿の若君も、今は内の大臣になり給へり。關白もかはり給ひて、一條殿ならせ給ふ。前の關白殿の上は、高倉の永家の大納言の御女にて、若君も坐しける、いとあらまほしうてすみ給へり。年かへりては、信長甲斐國を平らけむとて出で立ちたり。そこには信玄入道が子なる勝頼るけるを、信長はそこばくの軍して、爰かしこより攻め入りける程に、終に勝頼打負けて亡びき。此の折にも惠林寺といへる道場を焼きて、僧達あまた失ひけり。信長はさがなき心ありて、ひたぶるにむくつき事多かりしかば、國を治むべき誠の器にはあらずと、世の人もどき聞えたり。夏の頃三河なる源の君は、安土におはしまして、信長に御對面あり。いとやんごとなきまらうござねなりとて、あるじかたにもいたう心遣ひしつ、御まうけ二なうしけり。君はそこより

○捉せむとて 命令指圖しようど。  
 ○本能寺 日蓮宗、本門法華の本山、京都本能寺前町。  
 ○光秀 明智光秀。  
 ○丹波國 龜山。  
 ○吉備國に云々 秀吉備中高松城に毛利氏を攻め光秀更に備中に向ふべき命を受けた。  
 ○ゆくりなく 不意に。  
 ○信忠 信長の嫡子  
 ○妙覺寺 京都三條にあつた。日蓮宗。  
 ○内 正親町天皇。  
 ○宮若宮 後の宮ミ皇子。  
 ○ひめもす 終日。  
 ○好人 風流人。  
 ○さる心はへ「時は今天が下しるさ月かな。」の句をいふ。

都に上らせ給ひて、又堺の浦をも、御覽せむとておはしましぬ。信長も五月の末都に上りて、兵どもの西の國にいで立ちける捉せむとて、本能寺に居給ふ。従者なる光秀といふ者は、此の程丹波國に在りけるが、吉備國に向ふべき定めにて、つはもの多く従へつ、六月二日まだ夜をこめてうち出で、明けなば西の國に赴くなりと聞えける程、ゆくりなく本能寺に攻め來れり。心ことに思ひかまへぬる事を、誰もく思ひかけぬ筋にて、いかにとだにもいひやらず、あきれまどひたる事限りなし。信長のもとには、夢ばかりも知るべきならねば、宵の程まどるなどして、酒酌みそへつ、酔ひのまぎれに何心なく、人々うち臥しける折にしも、唐土陳の代に韓擒處が亂れの出で來りぬる有様にひとしく、いふかひなくうち負けて、いくばくならぬ戦ひに、従者もみな討たれ、信長も失せ給ひぬ。信忠は妙覺寺に在りて、此の事を聞きつけければ、やがて二條の館に入らむとしけるに、そこには内の宮若宮具し奉りて坐しけるを、急ぎ内裏に還し參らせて、二條にぞ籠り侍る。されど數限りなき敵どものきそひ來りしかば、叶ふべうもなく、爰なる者も残りなく滅びたり。いと淺ましう思ひの外なる事を、内にも聞召し驚かせ給ふ。此の光秀は日頃信長を恨むる事ありて、いかでと心の中に構ふる事も、更に人はしらず、一日丹波路に赴きける折、愛宕山にてひめもす好人どもをあつめ、連歌をものすとて、さる心ばへある句など聞え出でしを、後にぞ人も心得けるとかや。扱信長は子供あまたありければ、恨みの報いせ



○山崎 山城乙訓郡  
 ○大徳寺 山城愛宕郡紫野。臨濟宗。  
 ○又の年 天正十一年。  
 ○近江路の争ひ 近江路が嶽で柴田勝家等の軍を破つた。  
 ○信孝 織田信長の三男。  
 ○うらなく 二心なく。  
 ○頼もし人 頼みとするに足る人。  
 ○津國に云々 大坂城を築いたこと。  
 ○内の御政 天皇の御親政。  
 ○一の宮 誠仁親王  
 ○御息所 藤原房子  
 ○晴右 勸修寺尹豊の子。  
 ○御子達 晴右の御子達。

むとて、處々用意すめり。秀吉は備中國に居たりけるが、いつしかと上り來つ、山崎にて光秀と戦ひをなしけるに、光秀うち負けてしぞきたりしが、幾程なく栗栖野のあたりにて討たれ侍る。又光秀が類なる者も残りなくなりぬ。秀吉は都に入りて、信長に位を贈らむ事を、内に奏し申したりければ、太政大臣を贈らせたまへり。やがて大徳寺にて、はうむりの事いとかめしうしけり。いつしか内より秀吉をも少將になさせ給ひぬ。又の年秀吉は、近江路の争ひに打勝ちしより、勢ひ猛になりて、信長が子なる信孝をも亡ほしければ、おのづから公の御固めとなりて、君にもうらなく仕うまつりけるにぞ、又參議になされて、内にも頼もし人に思召されき。津國にいかめしき城を築きこめて、移り住みつ、都の事をもした、めけり。武士どものさまぐの争ひに、人々の移りかはるをぞ、内にもしづ心なく思召し歎かせ給へり。さるはおほやけのしらせ給ふ事にはあらねど、亂れの折ごとに、なめけなる事多く、内の御政の衰へ行くやうなるをぞ、侘しう思召されしに、此の頃はすこし心長閑にならせ給へば、かくてもあらばやと思しよらせ給ふも、いとかたじけなく哀れなる御事に侍り。内には一の宮一所<sup>おはし</sup>坐すのみなりければ、此の親王ぞ疑ひなき儲の君なりとて、人々もやんごとなくかしづき奉れり。御息所は勸修寺の晴右の大納言の御女にて、御子達も數そひ給ふめれば、大納言はいちじるき御榮えなるに、思ふ様なる御代をも待ちつけ給はで、いち早く世を去り給ふを、宮も本意なく思召されけり。内にも

○源の君 徳川家康  
 ○尾張國にて戦ひ 天正十二年尾張小牧及び長久手の戦ひ。  
 ○かたみに云々 互に執念深い争ひもな  
 ○同じやうにミ 家康にも上京を勧め申したが。  
 ○一條殿 内基。  
 ○二條殿 晴良の子昭實。  
 ○菊亭の晴季 公産の子。菊亭家は今出川ともいふ。西園寺の一支族。  
 ○もこの根ざし 氏素性の卑しきをいふ  
 ○さり持てなさむ 秀吉を藤原氏の養子にしようこ。  
 ○春日の神 藤原氏の氏神。  
 ○かつく ぼつぼつ。

哀れなる事におほいて、内大臣をぞ贈らせ給ひき。いつしか年も暮れて、又の春は信雄とて信長が次郎なりし者は、秀吉と中よからずなりて、源の君を頼もし人になし聞えつ、兵どもを集め侍り、秀吉もうち出でぬれば、尾張國にて戦ひありしに、こたびは秀吉打負けて、従者ども討たれなどしければ、又都に上りたり。かたみにしふねき争ひもなくて、其の後は睦まじうなりつ、信雄も京にぞ上り侍る。源の君をも同じやうにと催し聞ゆれど、随はせ給はず、心づよくおはします。此のひしめきも過ぎて、世の中も靜かなりければ、冬の頃秀吉を大納言になさせ給ひ、三位をもし侍り。一條殿は關白をも左大臣をも返し奉れ給へるにぞ、次の年二條殿に關白の宣旨侍り。菊亭の晴季の大臣、右に移り給ひしかば、秀吉内の大臣になりたり。此の人は先にも申しし様に、もとの根ざし怪しき様なりければ、信長に仕へしこなたは、平氏なりといひけるが、此の頃將軍にならまほしう思ひて、備後なる義昭の子になし給へといひつれど、人がらの卑しきをおとしめつ、聞き入れ給はねば、いかはせむにと、藤原ならむ事をおもほしけり。近衛の大將は常に睦まじうし給へば、とり持てなさむとし給ふるに、九條殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事なり。春日の神もいか御覽せむ」と、しひてさまたけ聞え給へば、秀吉もむつかしけなるにしわびて、はては豊臣とて、あらたなる氏にぞなり侍る。又晴季の大臣は親しう聞えかはし給へば、おほやけの御政にも、かつくたづさひけるが、此の大臣の取り申し給へ



○めざましき 事の意外で驚きあきれられる様な。  
 ○さるべき さうなるべき前世の因縁。  
 ○内参 参内。  
 ○關白殿 秀吉。  
 ○おももち 頼つき  
 ○しうさく 宿徳の音便。沈著で威望あること。  
 ○そこらつぎひぬる 者やも 數多く羣集した者ども。  
 ○心ほせある處 心の赴き向ふ處、有望な處。  
 ○昭宣公 藤原基經  
 ○いかにぞや 如何はしい點もある。  
 ○なみさぶらひ 竝んで居られる。

るによりて、二條の關白殿かはり給へば、關白の宣旨かうぶりたり。大臣と聞ゆるだに、世にゆるしなき事なるを、いとめざましき様なりと、もどき聞ゆる人もありつれど、さるべき宿世にてや侍りけむ、終に關白にはなれり。此の時よりぞ内わたりもはえんしく、勻ひ多かる心地して、上も折にふれて、琴笛の音にも御耳とゞめさせ給ふ事も侍り。此の程關白の内参とて、世のすりて匂りたり。こしよの武士どもは、花を折りつくしたる直垂、さまざまに出でたちたり。いみじき見物にて、田舎人などまで髪まこめつゝ、處せうすだけけり。關白殿も今日は一しほ心つかひして、うるはしき粧ひなれば、おももちなども物々しう、日頃の武士姿に引きかへて、しうとくなる様に、ひなびたるけはひも、おのづからもてかくされて、思ひなしこよなかりき。そこらつどひぬる者どもは、手をつくりひたひにあてて、「いみじき幸おはしける人にて、かうしも尊き雲の上に、思ひ上り給へる事。」と、かへすくさゞめきつ、「尾張國は心ばせある處にや。」などいひあへり。昭宣公よりこなたは、藤氏ならで關白と聞ゆるは、例なき事なれば、君達は皆かたはらいたくめざましう思召さるべし。人がらなどのめやすくもあらましかば、さるかたに罪ゆるされてもありつべきに、怪しういかにぞやもあるを見給ひては、若き殿原などはほと／＼笑ひ給へぬべきを、鬼一口の恐ろしさに念じて、さらぬ顔になみさぶらひ給ふ。かくて後はひたすら君達に打交りて、事どもした、めあへり。上も始めこそあれ、御覽じ馴れさせ給ひて

○心づきなうも 氣にくはなく憎くも思召されず。  
 ○うちあはず 萬事不揃ひで。  
 ○築地 ついぢ。壁を塗り瓦を葺いた垣  
 ○すりし 修理し。  
 ○君達 公卿殿上人など。  
 ○おはやけ人 公卿  
 ○關白殿 秀吉。  
 ○くちさく 口疾く容易に口に出る。  
 ○にゆなからず 似つかはしく、相應して。  
 ○又の年 天正十四年。  
 ○源の君云々 家康も上京されて。  
 ○内の一の宮 誠仁親王。陽光院。  
 ○若宮 陽光院の御子周仁親王を正親町天皇の皇子にして。  
 ○おりる 御讓位。

は、さのみ心づきなうも思召されず、なつかしげに語らばせ給へば、こなたもいたうもてあがめ奉りつゝ、うちあはず寂しきことなどあらむは、忝きことに思ひて、よろづ御心の儘にて坐すべく用意して、築地などの崩れて見苦しげなるをもすりし、清けにしなしたり。君達なども仕うまつりにくわびしき目をも見給ふ事はあるまじき事なりとて、其の程々につけ物奉りなどして、心ゆく様にあるべかしうおきてければ、内を始め奉り、おほやけ人共も、皆安き世にあひ給へり。此の年頃は、「三井の古寺鐘はあれど。」と、常のこどぐさにし給へし人々も、いつしか花見る春に逢ふ心地して、物思ひもなけなり。關白殿も後には歌をもくちとくいひなれつゝ、雲の上人といはむにも、にけなからず見え給へり。又の年は源の君も上らせ給ひて、参議にて三の位にあがらせ給ふ。今は關白殿の妹の君をえ給ひて、親しうならせ給へば、何方も隔てなく聞えかはし給ひぬ。文月には内の一の宮隠れさせ給へり。いとあへなき御事を人々も思ひ惑ひたり、上もけふあす譲らせ給ひぬべきを、あかすのみ思召されたり。近き代には、春宮の御定めもなかりければ、親王にて坐しけるを、此度は太上天皇の尊號贈らせ給ひて、陽光院と申し奉れり。若宮を一所内の皇子になし奉らせ給ひて、親王になし聞えさせ給へり。霜月には此の宮に御讓りの事侍りて、上はおりのさせ給へり、世をしらせ給ふ事二十九年とぞ聞えし。六十の坂をも遙かに越え過させ給ひしかば、今は御心のどかにて坐すべう思召しよらせ給へるとかや。



卷第十四

後陽成院

○御母准后 勳修寺  
 晴秀の女秀子。誠仁  
 親王妃。  
 ○先帝 正親町天皇  
 ○院の上 正親町院  
 ○信尹 近衛前久の  
 子。  
 ○内に參らせ 入内  
 させられた。  
 ○ゐたちて 事に關  
 係して。  
 ○さうじみ 正身。  
 其の本人。  
 ○髪のか、りは 髪  
 が背に垂れてゐる様  
 子。  
 ○紅梅 經絲を紫、  
 緯絲を紅で織った織  
 物の色。  
 ○御所あらはし 平  
 安朝時代の結婚で舅  
 婿對面して披露する  
 式。  
 ○關白殿 秀吉。

百八代の帝は、御諱周仁と申し奉る。陽光院のみこにて、御母准后も末には新上東門院など聞えし。天正十四年十一月七日、先帝御寶を渡し奉らせ給ふ。こたみは世の中靜かなるほどなりければ、御儀式あらまほしうと、のへさせ給へり。上は今年なむ十六にならせ給ふ。まだわかうおはしませば、よろづ院の上御口入れさせ給へり。近衛の信尹の君も、左大臣にていましけるが、又なくかしづき給ふ。御妹の君を内に參らせ給へり。父大殿のたちて仕うまつり給ひしかば、何事もあかぬことなく、女房なども若う容よきをえらせ給へり。さうじみはさ、やかにあいぎやうづきて、見まほしき御様なるに、いみじうひきつくるはれたるかんざし髪のか、りば、おもやうなど類なく見え給へり。紅梅にや、いろあひなつかしき御衣おんぎの限り奉りたれば、いと勻なひおほく、めでたき御けはひなりかし。參り給ひし程の御有様思ひやるべし。御所あらはしまでいみじうきよらに、おもしろきことのみなりき。關白殿も去年御即位の後、太政大臣に成り給ひし、此の御ぞうの人々も次々になり出で侍り。今は南の海なる四つの國も、北の方なる處々も、みなたひらかに成りつ

○筑紫の方云々 天  
 正十五年鹿兒島の島  
 津義久を攻めた。  
 ○藤孝 細川藤孝。  
 入道して玄旨といひ  
 幽齋と號す。  
 ○あてはか 貴く上  
 品なこころ。  
 ○豊樂の宮 長門國  
 長府村に仲哀天皇の  
 宮址がある。歌枕で  
 ある。  
 ○染川 筑前國寶田  
 川の上流をいふ。別  
 に澄初川ともいふ。  
 歌枕。  
 ○關白殿のさた 秀  
 吉の命令で。  
 ○盧遮那佛 毗盧遮  
 那の尊。光明遍照と  
 譯す。佛の名。密教  
 では大日如來とする  
 ○こたび 此のたび  
 方廣寺を建て大佛を  
 作つたのをいふ。  
 ○此の國 日本の國

つ、都に貢物捧ぐるばかりになりぬれば、ことし又西の國を治めむとて、兵あまた筑紫の方に出でたちしが、三月には秀吉も下り給ふ。御よそひいかめしうて、こゝらの人したがひ參りたり。藤孝といへるは、むかしの頼之などの一つ流れにて、其の始めは清和の帝より出でたる源なりしかば、武士といへど、人がらもあてはかなるに、まして此の人は高き心つかひて、又なき歌の聖にいましき。古は義昭に隨ひるたりしかど、今は關白殿に仕うまつるやうにて、丹後國を賜はりつゝ、住み侍りしに、此の度子供などは、秀吉の御供にて下りければ、筑紫のわたりもなつかしう、みづからも程へてしたひ參るとて、道すがら唐倭の言の葉の色々をつゝりたりし、いと面白き事のみ侍れど、ながくしうて申さず、其の中に豊樂の宮を過ぐるとて、  
 水もらぬ池のこゝろの深さをもとよらの宮のつゝみにぞしる  
 染川にて、  
 老いの波むかしに歸れ染川の色になるてふ心ばかりも  
 京には此の頃關白殿のさたにて、大佛つくらるなりと聞え侍る。これは東大寺と同じやうなる、盧舍那佛ろしゃなにて坐す。あらたにこたび作り奉れるになむ。筑紫の陣は國々皆なびき隨ひたりければ、文月には歸り上り給ふ。藤孝は難波につきて後、此の國の中なからばかりもめぐり來れりとて、



- 山の陰陽 山陰道 山陽道。
- 輝元 毛利輝元。
- あづまの方云々 關東地方こそ氣遣はしい事もあるが。
- 上 後陽成天皇。
- 御心ゆかせ給ふ 御満足に思召される様な事。
- 木の道のたくみ 大工。
- なき手を出し 秘術を盡して。
- 博士云々 陰陽博士を召して行幸の吉日を定められた。
- 朔日 新年のをいふ。
- 年歸りて 天正十六年になつた。
- おほやけしう 公らしく。
- 出でがて 出で難くためらふ。

難波江の道にひかれて遙かなる豊あしはらもめぐり來にけり

又山の陰陽を治めける輝元ははや従ひたりければ、此の折も兵ども筑紫に遣はしなどしつれば、今は日の本の國の中にて、あづまの方などこそうしろめたき事もあれ、其の外は何國も皆治まりはてけるにぞ、都の御方々も、思ふ事なくて坐しき。關白殿もかう豊かなる御代と成りぬるを嬉しう思ひて、此の折上の御心ゆかせ給ふばかりの事をもしなして、御覽せさせむと思ひより給ひ、都の中に大きな殿を作らせて、えならぬ様にみぎきと、のへられたり。木の道のたくみども、なき手を出していみじけに仕うまつりたり。いたう急がせ給ひし程に、此の頃ぞ事なり侍る。さらばとて、明けむ年は行幸を催し奉らむと思ひよりつゝ、内にもかつゝ奏し給ひ、君達にも語らひ給へば、まだきに物縫ひいとなむ處々も侍り。博士召して日など定め給ふに、彌生ばかりと聞えければ、年の暮より人急ぎ立ちて、朔日の御料よりも、此の行幸の御粧ひをのみ、心に懸けて用意し給へり。年歸りては、都の内いと時めかしうなりつゝ、らうがはしかりし昔の俵は、つゆ残りなくなりて、雲の上にも絶えたる御儀式なども、かつゝおこさせ給ふに、關白殿はた花やかににぎはしきかたにより給へば、とりもちてせさせ給ふ事も、萬おほやけしう心ひろくおきて給へるによりて、末が末までもうるほひわたり、宮の中こよなう今めかしうなれり。今年春の寒さの、例よりも堪へ難くて、花待遠に雪なほうちちりて、谷の鶯も古巢を出

- 祭の御使 賀茂祭の御使。
- 殿 關白殿秀吉。
- つこめて 早朝。
- 奉行の職事 行幸の事務を取扱ふ藏人
- 衛府 近衛府衛門府兵衛府。
- 南殿 紫宸殿。
- 長階 清涼殿から紫宸殿までわたした廊。
- 筵道 貴人の通路に臨時に筵又は布密などを敷くこと。
- はしの間 階際の間。階の前の車寄。
- 奉るまで 鳳輦に召されるまで秀吉が候ひ居た。
- 慶親 頭中將中山親。
- 充房 頭辨萬里小路充房。
- 伏見殿 伏見宮。

でがてにやすらへる程なりしかば、彌生にいたりて俄に行幸も延びつゝ、卯月にぞなり侍る。内には心もとながらせ給へど、關白殿は、「日影もうら、かにて、鳥の音もくだけたらむ折にこそ。」と申させ給ひき。いつしかと春も過ぎて、衣がへの御粧ひ涼しけにて 御簾の追風も、花の香残らぬ頃ほひしも、内には祭の御使何くれといそがはしき程なるに、とりまぜて行幸は十四日とぞ聞えし。關白殿の御許には、いとゞしき玉の臺を、光るばかりに磨きそへ給へり。其の日になれば、殿つとめて内に参り給ひて、奉行の職事召して有るべき事ども仰せらる。宮の中の御守りの事まで、ことごとくおきて給ふ。上達部殿上人皆つどひ給ひ、衛府のともがらは、弓箭かきおひなどして参りたり。職事事ども具しぬる由奏し奉りければ、上南殿に出でさせ給ふ。御装束うるはしうと、のへさせ給へり。長階の御うしろまで筵道まるる。御鳳輦は御はしの間によせたるに、奉るまで殿さぶらひ給ふ。御劔は慶親の中將、御草鞋は充房の辨なり。左右の大將、御綱のすけなど例のごとくつとむ。行幸は四足の御門を北へ、正親町を西へならせたまふ。御母准后、女御殿は御輿に奉る。内侍、典侍、勾當、御乳母達を始め、御方々の女房まで、御こし五十ばかりにて、御供の人々童姿まで、花やかに出でたちたり。宮達は六のみこ、伏見殿なり。公卿には九條殿二條殿一條殿晴季の大臣公維の大臣雅春の大臣雅春の大臣言公遠の大臣言晴豐の大臣言經頼の大臣言親綱の大納言伯の三位、大將には鷹司の信房西園寺の實益なり。此の外中納言中將少將



○源の君 家康。  
 ○殿 關白殿秀吉。  
 ○まへしりへ 前後  
 ○芳野立田云々 芳野の花立田の紅葉。  
 ○むべしも 宜なるかな。  
 ○まねびやらむ云々 形容するもをこがましいほどである。  
 ○みつは四つ葉 催馬樂「此の殿はむべも富みけりさき草の三つはよつほに殿作りせり。」によつて殿舎の幾棟も立派なこと。  
 ○よせて 風聲を。  
 ○おほみき 御酒。  
 ○御かはらけ 素焼の杯。  
 ○さうの琴 雅樂に用ひる十三絃の笛。

宰相侍從辨官藏人残りなく仕うまつる。近衛の信輔は左大臣なり。織田の信雄は内大臣にいましき。源の君も今は大納言になり給へる。今日も供奉つかうまつり給ふ。殿は少し引きさけて渡り給へる。これも御輿に奉る。例の武士ども、えもいはずさうぞきて、まへしりへに従ひたり。行幸に仕うまつり給ふ人々は、今日を晴れとまうけたまへる御装束なれば、中々言の葉にも盡し難く、唯芳野立田の春秋を一時に見るばかりにて、おなじ色あひも今日はことさらにめづらしく、いづれがいづれと、勝り劣れるけぢめなきは、むべしも去年より心ことに思ひいとなみ給へる程もしるくて、更に目を驚かしつ、まねびやらむもかたはらいたきばかりなり。樂人は道の程、安城樂を奏したる、いと珍らかなり。おはしましつかせ給へば、みつば四つ葉の中によせておりさせ給ふ。おほみき供御などの御まうけまで、世になき清らを盡し給へり。御前の奉り物はさらにもいはす、宮達准后女御殿女房達公卿殿上人まで、残りなく物奉り給ふ。御かはらけあまたたび廻りて、夜に入りぬれば、御まへの遊びはじまり、御琴どもまるりわたす。さうの琴は、一條殿四辻大納言庭田の中納言四辻中將飛鳥井中將、琵琶は伏見の宮菊亭の大臣御子の中將、笙は大炊御門大納言伯の三位五辻左馬頭、拍子は持明院の中納言など聲加へ給ふ。更け行くまゝに松風も通ひ来て、月の光も一しほすみまさりければ、上も御琴などあそばす。いふ限りなくおもしろき夜の御遊びなり。やうく更け過ぎて、もる白玉の聲もしばく聞えければ、人々

○おほまのこもれり 御座になつた。  
 ○殿はた云々 秀吉もまた強ひておこめ申したので其の儘御滞在になつた。  
 ○披講 詩歌の會で詩歌を讀み上げる式  
 ○奉行 命を奉じて事を取扱ふ役。  
 ○飛鳥井の大納言 飛鳥井雅春。  
 ○讀師 詩歌の會に懷紙短冊を整理し順序によつて讀師に渡す役。  
 ○菊亭 右大臣晴季  
 ○講師 披講の時詩歌をよみ上げる役。  
 ○關白殿 秀吉。  
 ○勸修寺の大納言 晴豐。  
 ○六の宮 陽光院の御子、後陽成天皇の皇弟知仁親王。  
 ○藤孝 細川幽齋。

もまかで給ひ、上もおほとのこともれり。夜の御座のまうけなど、いとこまやかにしなされたり。又の日君達急ぎ参り給へば、朝政行はせ給ふ。十六日には曙程より、曇らはしう見えけるに、やがて雨そ、ぎ出でたり。今日は還らせたまはむ事もいかゞなど人々申し給ふに、殿はたしひてとゞめ奉らせ給へば、さておはしまししに、しめやかなればとて、和歌の披講あり。中山の大納言奉行なり。題は飛鳥井の大納言奉れ給ふ。讀師は菊亭の大臣、講師は飛鳥井の大納言つかうまつり給へり。御製の讀師は關白殿、講師は勸修寺の大納言なり。題は松によする祝ひとぞ聞えし。

御製、

わきてけふ待つかひあれや松がえのよ、の契りをかけて見せつ、  
 六の宮、

ちぎりあれや君まちえたる時つ風千代をならせる庭の松がえ  
 伏見の宮、

治まれる時とはしるし松風の木すゑによばふよろづ世の聲  
 關白殿、

よろづ代の君が行幸に馴れなれむみどり木だかき軒の玉松  
 藤孝は此の折も人にかはりて、あまたつかうまつり給ふ、



○樂所 樂屋。

○採桑老 舞樂の盤  
渉調の曲。

○こりてかづけ給ふ  
主上から賜はつた

のを受取つて舞樂の  
人に賞賜された。

○おほまなぶら 燈  
明。

○院 正親町上皇。

○殿 關白殿秀吉。

○おごろきかしこま  
り 恐懼して。

○渡らせ給ひし折  
行幸の折。

○夕づけて 夕方に  
なつて。

○まかづまかうざま  
ま やかく色々。

○こよなく胸あきた  
るやう 此の上なく  
満足して氣もせいせ  
いしたやう。

○院のうへ 正親町  
上皇。

○めいほく 面目。

○内 主上。

○院々宮々 上皇や  
后の宮皇子女の方々

○東の方云々 北條  
氏政を小田原に攻め  
たこをいふ。

年に猶正木のかづら長き代をかけてぞちぎる宿のまつがえ

かけてみゆ行幸をまつ藤浪のゆかり嬉しき花の色かな

治まれる御代ぞとよばふ松風に民の草葉もまつなびくなり

けふよりは君にひかれて葵草ふた葉の松の千代に八千代に

仰ぐぞよ人の心の種とてや千年をちぎる松のこの葉

樂所にはいみじき物の音をしらべたり。舞どもなまめかしうおもしろし。採桑老舞ひた

るほど、上も殊に興ぜさせ給ひて、白き御衣賜はせけり。大臣とりてかづけ給ふ。暮れ果

てておほとなぶら参る程、院より關白殿に御使あり、

萬代に又八百萬を重ねてもなほかぎりなき時は此のとき

殿おどろきかしこまり給ひて、

言の葉の濱の眞砂は盡くるとも限りあらじな君が齡は

十八日には還御の儀になる。道の程の事は渡らせ給ひし折の御さだめのまゝになり、か

ねては三日が程と聞えしに、上のいみじうめづらしがらせ給ひて、御けしきうるはしかり

ければ、殿もとゞめ奉らせ給ひつゝ、五日まで坐しけり。殿御送り仕うまつり給へば、

内にて又御かはらせ賜はり給ひて、夕づけてまかで給ふ。次の日は雨いたうすさみけるに

ぞ、殿は此の程うちつゞきたりし晴れをうれしき事におほえたり。年頃心にかけて、とざ

まかうざまに思ひわたり給ふ事の、何の恙もなくしてはて給へりければ、こよなく胸あき  
たるやうに覚え給ふに、天津御神の御恵みにや、雨さへ程よかりけりと、よろこびにたへ  
す思ひ給ひて、内に奏し給ふ、

時をえし玉の光の顯はれて御ゆきぞ今日のもろ人の袖

空までも君が行幸をかけて思ひ雨ふりすさむ庭の外かな

みゆき猶思ひし事のあまりあれば歸るさをしき雲の上人

上はさばかりの心にて、思ひより給ふらむ程も淺からず思召されて、御返しあり。

玉をなほみかくにつけて世に廣く仰ぐ光をうつす言の葉

かきくらし降りぬる雨も心あれや晴れてつらなる雲のうへ人

あかさざりし心をとむるやどりのゆるなほ歸るさの惜しまるゝかな

院のうへ、

埋もれし道もたゞしき折に逢ひて玉の光の世にくもりなき

此の行幸をぞ、殿はひたすらにめいほくありておほえ給へば、今よりは内を初め奉り

院々宮々まで御勢ひくははらせ給ふばかり、御領などを参らせ給ひければ、何方もむか

しに立歸る世を、うれしう思召されけり。かうめでたくて過ぎもて行きつゝ、天正も十八

とぞ數へ侍る。今年は東の方静められむとて、二月の末關白殿雲霞の軍どもを従へて、都



○うつつ山 宇津の山。駿河國。

○東の敵 北條氏政 降服した事。

○奥の夷 仙臺の伊 達政宗降服した事。

○源の君 徳川家康

○又の年 天正十九 年。

○四方拜 元且天皇 天地四方山陵を拜し

て親祭せられる儀式

○ほしをさなる 四方拜の儀式に天皇

が其の年に當る屬屋

を拜して唱へ給ふを

いふ。

○他の國 外國。

○文祿 天正二十年 十二月改元。

を出で給へり。藤孝も又参り給ふ。ゆく／＼言の葉の數々書き集め給ひける中に、うつつ山にて、

夢ならで思ひかけきやうつつ山うつつに見ゆる葛の細道

秋の頃は關の東の敵も平らぎて、奥の夷までことごとくしく従ひ聞えければ、いさましうて皆歸りのほりたり。關白殿は源の君に關の東國八つまで奉り給へば、やがて武藏なる江戸といふ處に移らせ給ひぬ。此の後よりぞ江戸大納言殿など申ししに、程なく内の大臣にさへならせ給へり。今ぞ京にも萬代とのみ壽きあへり。又の年の正月朔日、藤孝は内に参りて、四方拜をかみ侍りつゝ、かへりて後筆の試みに、

ともし火の光をそへて雲の上にはしをとなふるあかつきの庭

秋の頃關白殿は、御子とてやしなひおき給ひし秀次の中納言を都の館にすゑて、おほやけの御かためとなしつゝ、關白をも譲りたまへり。みづからは他の國を治めむと思ひ立ち給ひき。いにしへ新羅、高麗、百濟など聞えし處も、今は朝鮮とぞ申し侍る。其處をも従へむとて、兵ども遣はずべき定めなどあり。明けむ年出でたつなりと聞え侍る程、いつしか年も暮れて、次は年の名も文祿にぞ改まりぬ。春の初めよりもろこしに入るとて、人々急ぎあへるを聞きて、例の藤孝、

日の本の光を見せて遙かなるもろこしまでも春やたつらむ

○こたみ 此のたじ  
○内に参り 参内し  
○處せけなり 處も  
狭い位に見物の人が  
集まつた。  
○肥前國 肥前東松  
浦郡名護屋。  
○事どもおきて 萬  
事を指令した。  
○水主 船頭。  
○月をしるべ 新葉  
集一夜な／＼の月を  
しるべに漕ぐ舟は明  
けゆく涙や泊りなる  
らむ。  
○ふりはへ わざわ  
ざ。  
○後のわざ 葬送。  
○忌の程過ぎ 服喪  
の期が過ぎて。  
○又の年 文祿二年  
○こちたく 事々し  
く甚しく。  
○近衛殿の女御 近  
衛前久の女前子。後  
水尾天皇の御生母。

二月十日秀次の館に行幸あり。御儀式など先の折の儘とぞ聞き侍る。こたみも、いみじうめでたくおもしろき事おほかりき。歌などもありぬべけれど、聞きおき侍らずなむ。彌生の末には、秀吉の大臣内に参り給ひて、御いとま聞えつゝ、筑紫に赴き給へり。二十六日都を出で給ふ。殊更に引きつくりはれたるよそほひのきら／＼しく、御供の兵もたけくを、しき様なれば、都人どもは、立ちつどひて物見はべる。いと處せけなり。肥前國に館をしつらひ、爰に住みて事どもおきて給ふ。武士どもは己がさま／＼に舟よそひして、西の海に漕ぎいでつゝ、追風にきほへる水主の聲々も、うら珍らしく、唐土までと月をしるべに急ぐめり。筑紫には、秋風の物悲しき折しも、京なる母君の惱ましうし給ふと告げたりければ、秀吉の大臣はふりはへ上り給ひしに、待ちつけ給はで失せ給ひしかば、大臣も口をしう思ひ給ひ、都に入りて後のわざいとなみ給へり。忌の程過ぎては、又下りなむとし給ふるに、内より御使ありて、唐土に渡り給はむ事は、あるまじき事にとゞめ聞えさせ給へり。おとゞもいとかたじけなき事に思ひて、袖もうるほひつゝ、御返りこまやかに啓し給ふ。又の年は春の初めに院隠れさせ給ひぬ。今は世の中豊かなる程なれば、後の御わざどももこちたくて、いみじうたふとき事の限りせさせ給へり。内には近衛殿の女御をはじめ、御方々やんごとなくて、あまたさぶらひたまへど、いづこにも皇子の坐さぬを、心もとなく誰も／＼おほいたるに、文祿五年と申しし頃、近衛殿の女御たゞならぬ御様な



○高やかに云々 産  
 聲高く擧げられた。  
 ○後の御事 後産。  
 ○御はかし 御佩刀  
 を賜はる儀式。  
 ○御産養 御出産後  
 の御祝賀。  
 ○御湯殿 御出生の  
 皇子に沐浴し奉る儀  
 式。  
 ○ねび人 年三つて  
 物事に経験ある人。  
 ○垣下 饗宴の時正  
 客以外の相伴。  
 ○文よむ博士 御湯  
 殿の儀に讀書の式に  
 關する博士。  
 ○うちまき 魔除け  
 に米をまき散らすこ  
 と。  
 ○酔ひさまたれ 醉  
 ひ亂れ。  
 ○五日 五日目の御  
 産養。  
 ○子もちの御前 産  
 婦の御方。女御をさ  
 す。  
 ○祿の唐櫃 饗頭に  
 賜はる品を入れた唐  
 櫃。  
 ○かたは 不揃ひな

りと聞えければ、御祈りかすを盡し給ひける。水無月ばかりに、御けしきありて、惱ませ給へば、白き御帳に遷らせ給ふ。僧達加持参りさわぐほど、高やかにない給へるにぞ、皆人心おちるたり。後の御事もたひらかにて、皇子誕生と華やかに聞えたるは、今一きははえばえしくて、人々のけしきまされり。上にもいつしかと奏しつれば、限りなくいみじと思召されき、御はかし例の事なり。めづらしうさし出で給へる光に、そこの人皆世の物思ひ忘れ、いといたうほこりかなり。御産養など、處せきまで集へり。三日は御湯殿の事あり。内よりも上の御乳母をはじめ、ねび人どもうちつれて参りたり。垣下のみこたち上達部殿上人みな渡り給ふ。護身の僧参り給へば、文よむ博士は庭にさぶらふ。女御の御せうと達は、事どもとり持ちてつかうまつり給へり。若き殿原はうちまきちらし給ふるも、らうがはしきまでなり。其の夜は内の御さたにて、よろづいかめしき様なれば、御遊びなどもいともしろし。若き君達はみだりがはしう酔ひさまたれつ、家路も忘れぬべう思したり。五日は後の宮の御方よりせさせ給ふ。事をぎたるやうにしなさせたまひつれど、これはたおほやけ様にて、宮の亮など事行ひたり。ちこの御衣、子もちの御前の御料、人々の御前の物、女房の中にもことさびたる檜破子ども清らなり。祿の唐櫃などまで思しいたらぬ事なく、こまやかにてうせさせ給へり、七夜は、秀吉の大臣よりなれば、さきの夜に劣るけぢめなく、さばかりの勢ひにて心こまうけ給へる事なれば、かたほな

○さるいみじき云々 産後の御疲勞。  
 ○つくろはせ 養生されることをいふ。  
 ○うちつゞき 引續いて御懐妊あつた。  
 ○慶長 文祿五年十一月改元。  
 ○八重の沙路云々 遙かな海を隔てた彼方。  
 ○こころは いつも變らず常に。  
 ○秀次云々 秀次行ひ願修墨原秀吉の怒りに觸れ高野に幽せられ文祿四年自殺したのをいふ。  
 ○又の年 慶長三年  
 ○うしろめたけ 後のこころの氣遣はしさをいふ。  
 ○こちたき遺言 事  
 事しく仰山な遺言。  
 ○武藏の大臣 家康  
 ○御はうむり 葬。

る事なく珍らしき様に、用意し給ひき。うちつゞきめでたき事のみ多くなむ。内の女房達の歸り参れる程、さまざまの御送物、めなれぬさまにしなされたり。内には、今より御心いられさせ給ひて、御使ひまなうかよへど、女御はいとまの有り難きに思しこりて、しばしはかくてと思召さる。御乳母達なども、さるいみじき御なごりなれば、御心やすき處にて、つくろはせ給ひぬべう聞えたり。此の後しもうちつゞきけしきばみ給ひて、するにはあまた坐す。またこと御腹にも男宮女宮かすそひ給へり。今年より年號も改まりて、慶長とぞ聞え侍る。唐土に居たりける兵も、なかばは軍を收めて歸りけるが、次の年は、再び出でたち侍り。朝鮮にては數多度えもいはずいかめしき戦ひのありと聞きつれど、八重の沙路のあなたに、思ひやりたる程は、いと心やすくなむ、秀吉の大臣のみぞ、とことは心にかけて思ひ居給へり。關白なりし秀次は、をとゞしばかり、思ひかけぬ筋にて、淺ましようなり給ひしかば、立ちかへり秀吉の大臣何事をもした、め給へるに、又の年の八月には身まかり給ひぬ。六十にも三つばかりあまり給へば、ことわりの程なれど、此の人出で給ひて後ぞ、世の治まりぬるを思召せば、内にも今しはとも、かけとゞめまほしう思召されたり。秀頼の稚きを見捨て給へば、よろづうしろめたけにて、こちたき遺言どもはべり。武藏の大臣を始めまるらせ、武家の人々心かはして公にも仕うまつり、秀頼をも後見て、世を治むべく定め置き給へり。御はうむりの事もいかめしうて、こゝらの人送りつか



○幸人 幸福な人。  
 ○悲しさの極み。  
 ○神に崇め 救して豊國大明神と諡されたのをいふ。  
 ○又の年 慶長五年  
 ○陸奥に事あり 會津の上杉景勝石田三成と謀をあはせて兵を挙げたこと。  
 ○伏見の大臣 内大臣徳川家康。  
 ○難波わたり 景勝と相應じて石田三成等大阪に兵を挙げたことをいふ。  
 ○子ごも 細川忠興  
 ○此の人も方人 藤孝も家康の味方たご  
 ○古今に秘めたる云 古今傳授を三條の前大臣實隆から幽齋に傳へたこと。  
 ○さうでて 取出して。

うまつる。天が下の幸人の光失ふ折なれば、月さへかこちがほにかき曇りて、蟲の聲にも涙のふり出づるばかりなり。そこら廣き野に、處もなく立ちこみたる人も、煙を雲に見まがへつ、曉の鐘の音に袖を絞りて歸り参れるほど、悲しさのとぢめと見えたり。内よりは次の年の卯月に救ありて、神に崇め聞えさせたり。此の後は、武藏の大臣、伏見に住み給へば、時々内にも参り給ひて、うらなく仕うまつり給ふにぞ、上もうしろやすく、ゆるぎなき固めとうれしう思召されたり。されど武士どもの中には、あやしうくねくしき事絶えやらで、靜かならぬ様なり。又の年は陸奥に事ありと聞えしかば、伏見の大臣は、みづから大將軍にて、兵を具しつ、關の東に向ひ給へりしに、いつしか難波わたりもらうがはしうなりて、此の大臣にそむきぬる者多くなりしかば、伏見にとめ給ひし御武者も、難波の軍どもに亡ほされ侍る。此の頃藤孝は丹後に在りけるが、子どもはおとに隨ひて東に下りしかば、此の人も方人なりとて、兵どもきそひ到りつ、城を攻めければ、いとたへがたけに見えける程、京より三條の實條の大納言、光廣の辨救使にて坐したり。そこらつどへる敵どもは、物の心もえず、いかなる事にやと思ひけるに、おほやけ事なりければ、わづらはしくて、内に入れ奉れたり。これは古今に秘めたる事のあるるを、三條の前の大臣の傳へにて、此の藤孝のみ知り給へれば、其の事によりてとぞ聞えし。藤孝はいたう畏まり申して、救使を迎へ奉りつ、やがて古今證明の状など、とうでて傳へ奉り給ふ。又此の序に日頃親しかりければ、式部卿智仁親王の御方にも、申し送り奉り給ふ、いにしへも今もかはらぬ世の中にこゝろのたねを残す言の葉

○智仁親王 六の宮後陽成天皇の皇弟。

○あさみあへり 互に驚き歎いた。  
 ○城 丹後田邊城。  
 ○難波風云々 大阪軍の勢ひ鋭きをいふ  
 ○美濃國云々 大阪軍が關が原に出た。  
 ○上り給ひし大臣 上杉景勝征討から引つかへした家康。  
 ○こたみの亂れ この度の亂。關が原の戦ひ。  
 ○物しと思したる 物々しい生意氣な奴たと思はれたかさもなく。  
 ○うらなき 二心なき様子。

烏丸光廣の辨には、年頃書き置き給へる草紙の箱を、あづけ参らせ給へるに、藻汐草かきあつめたる跡とめて昔にかへせ和歌のうら波

いとくおもだたしき事をぞ城の中にも外にもあさみあへり。圍みるける兵どもも、公の御けしきに萬はかり聞えて、城を渡し給へとのみいせければ、さはとてそこを退きつ、異方に忍びるけるに、光廣の辨は、さきの箱を返し給ふとて、明けて見ぬかひもありけり玉手箱ふた、びかへるうら島の波

かへし藤孝、浦島や光を添へて玉手箱あけてだに見すかへす波かな

其の儘に丹後國は靜まりぬ。奥に下り給ひし人々は、難波風のあらましくて蘆間の波のさわぐなりと聞き給へるより、奥の戦ひをとめて、皆うち上り給ふに、津國の軍も、又美濃國にうち出でたる程なれば、其處にていみじき争ひ侍りし。奥より上り給ひし大臣の御方勝ちえたりければ、敵どもは爰かしこにて失はれ侍り。大臣はやがて都に上り給ひ、難波にも坐したりけるが、こたみの亂れは、幼き秀頼のしり給ふべきならずとて、物しと思したるふしもなく、うらなき様にもてなし給ひて、昔のまゝにする置きつ、かしづき



○奥の亂れ云々 景勝の降服したことをいふ。  
 ○はなやぎ給へる 花々しくさかえられた。  
 ○商山云々 秦の時東園公綺里季夏黃公角里先生の四人亂を避けて商山に隠れたが、漢高祖の時出て仕へた。  
 ○宮のすけ 東宮坊の次官、東宮亮。  
 ○御母女御 中和門院近衛前久の女前子式部卿の宮、和仁親王。  
 ○伏見殿 伏見宮貞房親王。  
 ○御すり 御修理。  
 ○牛車兵仗 牛車に乗り隨身を従へて宮門に入るのを許された。  
 ○二らせ云々 慶長十年徳川秀忠將軍になった。  
 ○駿河國 駿府。  
 ○門ひろがり 一門繁昌して。  
 ○後の將軍の姫君 秀忠の女和子徳水尼天皇の中宮となる。

給へり。猶處々のおきてせさせ給ふに、何國も皆治まり行きければ、奥の亂れも音なくなり侍り。今なむ誠に動きなき國となりて、民の戸までも萬代をぞとなへける。大臣は内に參り給ひて、關白をも定めさせ給ふべく奏し給へりければ、やがて九條の兼孝の大臣に再び宣旨下りたり。久しうこもり坐しけるに、立ちかへりはなやぎ給へるは、治まれる御世とて、商山を出でて仕へし古き例にもかよへる許りなりき。其の後は、近衛の信尹の大臣鷹司の信房の大臣などなりかはらせ給へり。内の一の宮は、五つにならせ給へる。年の暮にはいつしかと春宮に立たせ給ひぬ。宮のすけ何くれの人々、皆定めさせ給ふ。御母女御も後の宮とぞ申し侍る。上の御兄弟の式部卿の宮は、京極殿とて、伏見殿とおなじ御様に坐す。武藏の大臣は、いづ方をもうるはしうやんごとなくもてなし奉れ給ひて、内裏の御すりなどを、こまやかに思しよりつ、おきてさせ給へば、事うちあひ、めやすき世にぞ侍る。應長も八とせといへる二月に、武藏の大臣右に轉り給ひ、征夷將軍の宣下ありて、牛車兵仗をも賜はり給ひ、氏の長者にさへなさせ給ふ。同じ時にしも、かくいみじき御よろこびし給へる事を、世にも思ふやうなる御事にぞいひあへり。さてなむ二とせばかりありて、御子の右大將に、將軍をも氏の長者をもゆづり聞えさせ給ひて、江戸にする奉り給ひつ、御みづからは、駿河國に住ませ給へり。御子達さへあまたおはしませば、門ひろがりてめでたき御榮えなるに、後の將軍の姫君は、今の春宮の御位の頃に參らせ給ひ

○近衛殿 信尹。  
 ○一條殿 内基の養子なられた。  
 ○鷹司殿 信尚。  
 ○二條殿 康通。  
 ○浦安の國 日本古稱、安泰な心安い國の義。  
 ○藤孝 細川幽齋。  
 ○八隅しる 天下をしらしめす。  
 ○もうでて云々 取出してほつゝ讀む。  
 ○さがなきこゝろ わるい心。  
 ○鳥の跡 文字。  
 ○をこがましう 差出がましく愚かに。  
 ○ひがもの 變りもの。ねぢけもの。

て、末には宮達かすそはせ給へりしかば、のちくは限りなき御さいはひ多く侍りき。内にも春宮の御兄弟の宮達おとなび給ひしかば、法親王尼宮などにも、數多おはしまし、又近衛殿の御子にならせ給ひて、信尋の大臣と申す。一所は、一條殿にて昭良のおとと聞えし。何れも關白などにならせ給ふも、いとかたじけなくなむ。内親王一かたは、鷹司殿賜はらせ給ひて、教平の大臣をうみ奉り給へり。二條殿も同じごと賜はり給ふ。光平の大臣の母宮にておはします。かく都も東も、いや年のはに榮ゆる色見えつ、むべ浦安の國なりとて、すむ民くさもけしきことなり。かやうのをりにや、藤孝の言の葉に、  
 八隅しる君がめぐみを世にうけてのこるくまなき春は來にけり  
 唐倭の書の卷々は、みるとしもなきまどの中にも、やぶしわかぬ春の光の、うらくとさし入りたるより、おのづから心ものびらかにて、告げわたるうぐひすの聲、ほころびそむる梅の勻ひなどのもよほしがほなるに、三十一文字をだに心もとなくして、何のやさしきふしあるべうもなければ、いひしらす心動きておほゆれば、はかなき物語などをとうでて、かつゝ見はべるに、れいのさがなきこゝろの癖とて、今もあやしき鳥の跡ばかりの事、かきつけてみまほしうおほゆるしも、いとをこがましう、けしからぬ心なりと、我ながら思ひしられき。さるは、片田舎にすみなれつる中にも、殊さらに世のひがものにて、人にもいはるゝばかり、まじらひをもせて籠り居つれば、國の中の有様をさへ知る事なき



○おりたちぬる 親しく事をなしはじめた。

○處せけなれど 煩はしいやうだが。

○かたはらいたく 傍から見て氣の毒。

○むかしのかゞみ云 池の名稱が池の鏡といふやうに古の大鏡など四鏡に擬したやうにもあるが。

○このくに云々 著者麗女は伊勢の人で、堀河次郎百首の歌に「伊勢ならはひがご

ごごもおもはまし大和なるてふ美作の池。」といふ池によつて池の藻屑とつけたのである。

に、まいてはるかなる雲の上の御かたぐいのもてあつかはせ給ふことなどは、ゆめ聞き知るとしもなければ、はつかにさし出づる手つきもこよなうたどくしう、ひなびたることのみにて、いとかたはらいたきやうなれど、かたはしだに世におちちらむことはあるまじう、たゞ物の底におきて、しみのすみやかにさむものを、あながちに心いれて、明和八といふ年のむつきの朔日よりおりたちぬるに、きさらぎ望の日こと終へはべる。十あまり四まきとかぞふるも處せけなれど、いとかたくなしき事のかぎりなるに、其の名をさへ池の藻屑などつけたるも、かへすくかたはらいたく、むかしのかゞみのおもかけめきて、ことごとくしけれど、さやうのすぢにはかけても思ひより侍らず、たゞいにしへよりいひな

らすめる、このくにのそらごとを、そこはかたなくいひつゞくるによりてとぞ。

正四位下 荒木田武遇女

題ニ池藻屑篇後

絳幔之制、彤管之裁、媿ニ美ヲ前賢ニ、流ニ芳ヲ後世ニ。紀載廣博、事迹確實、自非錦心繡腸、天縱之才、何ヲ以テ爲ニ斯ノ盛舉ニ乎。所謂天地精靈之氣、鍾ニ於婦人ニ者。予於荒木

田氏ニ乎觀レ之ヲ。北海江邨先生序ニ其首ニ、論文ニ有ニ實虛、具ニ擧ニ我邦ノ史乘ニ、併セテ及ニ諸名媛述作ニ、其言盡セリ矣。若夫西土固ニ稱ニ右文之域ニ、而閨閣史才、曹大家之外、復々誰人ナラニ哉。於戲荒木田氏ナル者。謂ニ之ヲ女中ノ董狐ト、不ニ亦可ナラ乎。

安永甲午秋九月

平安 長門介三善彦明撰

池の藻屑終



豐

鑑



豐鑑目次

卷一

長濱真砂……………三四一

高松……………三五〇

卷二

袖露……………三五九

吹上濱……………三七二

卷三

内野行幸……………三八二

卷四

清見瀉……………四〇九

目

次

三三七



高麗之亂……………三三八  
……………四一七

目次終

豊鑑

○端近く云々 家の端近くに居て外を眺めてゐたに。  
 ○破瓜の年 十六歳  
 ○僻聞るやも 僻聞なむもの誤りならう僻聞は聞誤り。  
 ○しどけなげに 亂雜にしまりなく。  
 ○太郎信忠 信長の長子織田信忠。  
 ○まつりごら 政治をする。  
 ○中納言秀次 秀吉の養子。父は三好武藏守吉房母は秀吉の異父妹。  
 ○太閤 關白が辭職して其の子が關白になつた時父の前關白の尊稱。  
 ○あやしの民 賤しい民。  
 ○傳説云々 豊の高宗武丁位に即いて聖人を夢みた。時に説が利徒として、傳説を築いてゐる王の夢の聖人として擧げられて相となり國大に治まつて、名づけて傳説云々。史記殷紀参照。

窓の前の草拂はず、おのがじ、生ひゆくさまもしるく、おきあまりたる露は玉と欺くにや、端近く見出したるに、破瓜の年にも餘れるわらはの寄り来て、「徒然にこそ侍らめ。ふること語りたまへ。」といふに、遠き世のことはおほつかなき節々も、僻聞るどもあるにこそ、近き頃には織田上總守信長主こそ斯波兵衛のながしの從者にて尾張國に成り出で、後にはかの國を從へ、美濃國を併せてやがて都に上り、國々を掌に握り、右大臣まで成り昇り、帝の後見し給ふ。其の頃は後奈良院の御宇にや、かの主の一生をば信長記とかやとて、しどけなげに書きとゞめぬるものあれども、實ともおほえぬ節も交はれるにや、信長主、太郎信忠、共に明和日向守光秀が爲に討たれ給ひし後、羽柴氏秀吉たち代りて、日本を殘る隈なく、心にまかせてまつりごち給へり。關白まで成り昇り、三韓に軍を渡し勢を唐までに及ぼせし事、後いふべし。甥なりし中納言秀次に關白を譲りて後には、太閤とかや申せし。其の初めを聞けば、尾張國に生まれ、あやしの民の子にてありしが、かくまで成り出で給ふ、もろこしにも日本にも例なかるべし。傳説が野に築き、高宗の後見なりし